
光の巨人 ～時空侵略戦争～

宇宙色の種

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光の巨人 ～時空侵略戦争～

【Nコード】

N3693M

【作者名】

宇宙色の種

【あらすじ】

ウルトラマンティガが邪神ガタノゾアを倒してから2年。隊員養成機関ZEROの訓練生である、辻野雄弥^{つじの ゆうや}は訓練中、時空の亀裂に吸い込まれてしまう。そしてそこで消えたはずの光と遭遇する。

** 感想設定を制限無しに設定していますのでユーザー以外の方の感想もお待ちしております**

プロローグ1（前書き）

どうも、宇宙色の種です。

初投稿ですので文章が下手かと思いますがよろしくお願いします。

プロローグ1

パラレルワールド・・・

それは、異なる歴史を辿った世界。

その存在は未だ確認されてはいないが、
あるとすればその数は限りなく無限に近いであろうと言われている。
彼はその無数にある世界の内の一つからやってきた。

その世界は他の多くの世界と違い、人々の強い意志と不断の努力、
そして“光の巨人”ウルトラマンティガによって闇から未来と平和
を勝ち取った世界。

世界を闇に塗りつぶそうとした邪神ガタノゾアをティガが倒して
から2年が経とうとしていた。

プロローグ1（後書き）

いつもと変わらぬ夜明け（前書き）

感想、まっています！！

いつもと変わらぬ夜明け

TPC 地球平和連合は旧国連の事務総長であったサワイ・ソウイチロウ（現TPC総監）の呼びかけによって世界で多発する怪現象や自然災害から人類を守るために創設された組織であり、その隊員を養成するために作られたのが隊員養成機関ZEROなのだ。

2012年春

午前6時

ジリリリリッー！！とけたたましい目覚まし時計の音とともに

「ああああっ！もう少して女の子とイチャイチャできたのにー！！」

とまるで世界が滅ぶ瞬間に立ち会ったかのような叫び声をあげながら起き上がったこの青年こそこの話の主人公

ZERO訓練生 辻野^{つじの}雄弥^{ゆうや}18歳 性別：男 である。

「僕ってそんなに女の子と縁がないのかなあ？」

とブツブツ呟き、ため息をつきながらTPCのエンブレムの入った隊服に袖を通す。

いつものように身支度を整え、仏壇に向かって

「いつてきます、お父さん、お母さん」

と頭を下げる。

そして何故か窓に向かう。

ベランダに出るときつちり戸締りをし近くに生えている木に飛び移る。

「これならあいつも気が付かないだろう」

と満足げに眩き隊舎の裏口に向かうがそこには黒服の男が2人立っていた。

辻野はまさかと思いつつもその男たちを無視して通り過ぎようとしたその瞬間、いきなり腕を掴まれ、

「あなたが辻野 雄弥訓練生ですね。」

と有無を言わせぬ口調で訊かれた。

あまりの迫力に思わず、

「ハッ、ハイ。そうですけど何か？」

とちびりそうになりながら答える。

するとその黒服は、

「市原と申します。ユイお嬢様がお車でお待ちになっています。」

と言った。

その名前を聞いた瞬間、辻野のロケットなみの速さで逃げ出そうとするも

ガツチリと腕を掴まれているため逃げることができず、そのまま止

まっているリムジンの方に引きずられていく。
辻野は思わず叫んでしまった

「不幸だあああああああ~~~~~!!!!!!」

いつもと変わらぬ夜明け（後書き）

裏設定を少し・・・

辻野 雄弥の父、辻野 隆一はTPC警務局に所属していた隊員で怪獣との戦闘の際、怪我をした隊員たちを救助中に殉職。危険を顧みず7人の命を救った彼は勲章と賞状が死後授与された。

ウルトラマンティガ第28話「うたかたの・・・」の裏で起きていた悲劇だった。

しつこいお嬢様と殿方

＼辻野side＼

無理やり車の中に連れ込まれました。

なぜ殴つても逃げなかったかつて？

黒服のおっさんがあまりにも怖かったもんで・・・

絶対に元YAKUZAに違いない。マジで怖かったんだ。

チキンですみません。

そして今、僕はこのナルシストでバトルジャンキーな自己中女と対面するはめになったのだ。

「この私から逃げようだなんて100年早いわ」

と笑いながらで僕の顔を見ている。

この女の名前は サワイ・ユイ 俺と同じZEROの訓練生で、悔しいが（本当に悔しいのだが）見た目も頭も抜群な完璧超人だ。しかもTPCの総監であるサワイ・ソウイチロウの孫なのだ。だからみんなからチャホヤされていつも偉そうにしている。

「ちょっとアンタ聞いてんの！？」

ドスッ

グオオオオおおー！！ ミ、ミゾウチにパンチはダメでしょう・

「話を聞いてないあんたが悪い！」

僕、口に出してませんよ・・・

「顔を見ればわかるわ、バカめが」

さすがに力チーンと来た僕は相手がTPCのトップの孫であるというのを忘れて彼女が一番気にしていることを言ってしまった。

「航空戦闘訓練で負けたのがそこまで悔しいのか、このオトコンナが！」

彼女は自分の男勝りで負けず嫌いな性格でそもそも、こんなお嬢様が僕に付きまとうのも

10日前に行われたガッツウイング訓練機を用いた戦闘訓練で僕が彼女を撃墜したからだ。

以来、彼女は事あるごとに勝負を挑んでくるのだ。

正直、迷惑だ。

彼女は何か言い返そうとしているようだったが校舎前に着いたのでさっさと降りた。

そのせいで僕は気が付かなかった。

彼女が今にも泣きそうな顔をしていたことに。

教室に入るといきなり部屋中の男が僕を取り囲んだ。

「何か？」

と聞くとこのクラスの男グループのリーダーである イソノ・ジュン が出てきた。

僕はこいつが嫌いだ。事あるごとに喧嘩を売ってくる。

しかもあのお嬢様サワイ・ユイの彼氏でもある。

相手にするのもめんどくさい。

すると

「お前が何で唯ちゃんと一緒に登校してんだよ、調子に乗ってんじやネエぞ」

誰が好き好んであんな奴と・・・と叫びたくなるのを必死に堪えていると、イソノは

「唯ちゃんに手エ出したら殺すからな」

と言って取り巻きを引き連れて教室を出て行こうとする。

だが、イソノはふと立ち止まりニヤニヤと笑いながら耳元で囁いた。

「今日の航空戦闘訓練でお前を潰してやるよ。」

僕も一言だけ言った。

「やれるもんならやってみろ」

この訓練が最後の訓練になることを僕はまだ知らなかった

しつこいお嬢様と殿方（後書き）

やっと戦闘シーンに入ります。

運命のフライト

発進準備を終え、待機していると管制塔から通信が入る。

「Control to Tsujino. (管制塔から辻野へ。)

「This is Tsujino. Stand by for take off. (こちら辻野。発進準備よし。)

「Tsujino, you are now authorized to enter the runway. (辻野へ。滑走路への進入を許可します。)

「Understood. Entering the runway. . . . Initiating launch sequence! (了解。滑走路に進入します. . . . 発進シーケンスを起動します!)

「Good luck. Control out. (幸運を。管制塔より以上。)

銀色に輝くガッツウイングは轟音を響かせながら飛び立っていった。青く輝く地球を横目に7機のガッツウイングは今まさに演習を開始しようとしていた。

今日の教官はセリザワ教官だ。

その教官の声がヘルメットに響く。

「機体に異常がないか確認しろ」

― 異常なし。

「武器が演習モードになっているか確認しろ」

― 確認。

そして教官は宣言した。

「訓練開始」

全機が一斉に散開し・・・僕を狙ってきた。

最初に撃墜された奴は腕立て伏せ100回だ！という教官の言葉を
思い出し慌てて機体をロールさせ回避する。

無線から怨嗟の声が聞こえてきた。

「サワイ様と仲良くしようなんて許さん。腕立て伏せ100回にな
りやがれ！！」↑ミズノ・コウ訓練生

「俺の女に手を出そうとした罪は重いぞおおおお！！！」↑
イソノ・ジュン訓練生

「ユイちゃんを誑かすなんて！この、変態！！」↑アライ・マキ訓
練生

「キサマアアアアあああ！！ユイちゃんに手を出すなああああ
あ！」↑セリザワ・マモル教官

オイ、セリザワ教官・・・それじゃあただの変態だぞ。
そう思いつつ逃げ回るもしつこく追いかけてくる。
だんだんイライラしてきて、とうとうキレてしまった

無線に向かって吠える。

「お前らアアアアアアアア！いい加減にしろ才おおおおお
おおおお！！！」

垂直離着陸時用のエンジンに点火して、追尾してきたミズノ機の後
ろにジャンプしたような軌道を描き回り込む。

ロックオン！

カチツと操縦桿についているボタンを押し、ミズノ機を撃墜。

今度はアライ機が後ろに回り込んできた。そこで、航空ショーなど
で曲芸飛行する際に使われる窒素ガスをタンクから放出する。

視界を奪われたアライ機は慌てて煙から出るも辻野のことを見失う。
実は視界が奪われている間に宙返りし、後ろに回り込んでいたのだ。

アライ機も撃墜。

そしてイソノ機の後ろに回り込む。

意外と簡単にいったので驚いたが、そんなことを気にしている暇は
ない。

ロックオン

カチッ

演習用ビームがイソノ機に当たり・・・

なぜかイソノ機は大爆発を起こした。

ソナバカナ！！！！

と心の中で叫びつつも反転しようとするが動かない。

後方警戒装置で後ろを見ると、ブラックホールのような穴ができていた。

ガッツウイングが爆発した影響で空間に亀裂が入ってしまい、その亀裂の重力場にとらわれてしまったのだ。

「負けてエエエえ、堪るかあアアアああ！！！」

エンジンにスラスタなどありったけの推力を出すもどんどん引きずり込まれていく。

そして真っ暗な闇の空間に引きずり込まれた。

だが次の瞬間、彼の機体に強烈な光が差し込み彼の意識を消していった。

運命のフライト（後書き）

どーも！！宇宙色の種です。

戦闘シーンを描くのが大変ということを知られました（笑）

意見や感想をお待ちしています。

また、クロスオーバーを今後しようかと思っているのですが何かリクエストがあれば言ってください！

巨人の残光（前書き）

説明ばかりでグダグダですが、よろしくお願いします。

巨人の残光

どれほどの間、気を失っていたのだろうか。
辻野は気が付くとあたり一面真っ白な空間にいた。

「ここは・・・どこだ？」

すると後ろから返事が返ってきた。

「ここは時空の狭間だよ」

あわてて後ろを振り返るとそこには死んだはずの父さんが微笑みながら立っていた。

「父さん・・・」

黒いヘルメットに赤いTPCのユニフォーム。
どこからどう見ても2年前に死んだ父さんだった。
だが父さんは悲しげな微笑みを浮かべながら言った。

「残念だが私はあなたのお父さんではない」

「なら何者だ!？」

久しぶりに見た父さんの姿に動揺してしまった辻野はそのことを隠そうとし、必要以上に語気を強めた。

すると父さんそっくりの男はあっさり自分の正体を暴露した。

「私は時空の狭間で生きている、特定の姿を持たないエネルギー生命体だ。今は君の心に一番強く刻まれて者の姿に変身している。」

「心に刻まれている者・・・」

「この姿が気に入らないのであれば他の姿にもなれるぞ」

そう言っつてその生命体は光を放った。すると父さんがいた場所には父さんの代わりにサワイ・ユイが立っていた。

「こんな風にね」

と微笑む。

あまりの凄さ（彼女の微笑みが見とれるほど可愛かったからではない）に呆然としていて、いつの間にか父さんの姿に戻っていたその生命体とやらが急に頭を下げて、

「本当に申し訳ない！！」

と言った。

何で謝っているのかわからず、あたふたしていると

「君の仲間であるイソノ・ジュン君は私達の同胞が引き起こした戦争の犠牲になってしまった」

「どういふことですか？」

イソノのことはどうでもいいとして、戦争という単語に驚愕した。そして、武器を捨て、平和な社会を実現したTPCの隊員としての使命感に突き動かされ訊ねた。

すると彼は事情を説明しだした。

「時空の狭間にすみ、普通の生命体では持つことができない力を持つ我々は時空の守護者として君たち人間が生まれるはるか昔からずっと、全てのタイムラインが正しく流れているかを見守り続けてきた。

しかしある時、我々の同胞の一人が自分の力を用いてすべての時空を乗っ取るうとしたのだ。」

あまりにも壮大な話なので聞いたことを少し後悔し始めていた。ＴＰＣだけではどうしようもできないような問題だった。しかし彼は説明を続ける。

「我々の同胞は自分の力で怪獣を作り出しありとあらゆるタイムラインに送り込んだのだ。世界を征服するために・・・。」

確かにさもありそうな話ではあったが、ふと単純な疑問が辻野の頭をよぎる。

「そこまでの力があるのに何故、わざわざ怪獣を送り込むんですか？」

すると彼は

「我々はあまりにも強力な力を持っていて、もし通常の世界に入り込もうとしたらその世界が力のせいで崩壊してしまうんだ」

と当然のように答えた。

どれだけ強力な力なんだよと突っ込みを入れそうになるのを堪える辻野。

そのあと彼は僕にとんでもないことを言った。

「だから君をここへ呼んだんだ。我々の代わりに君に各タイムラインを回って怪獣を倒してほしいんだ。」

突然そんなことを言われたので一瞬唖然としたがすぐに立ち直り冷静に質問する。

「人間一人がバカでかい怪獣を倒すことなんてできません。それに僕はまだ正規の隊員ですらないんですよ？」

僕はうまく反論できたと思い、心の中でガッツポーズをきめていたが彼は、

「君にならできる。いや、君じゃないとだめなんだ。」

などと真剣な顔をして言う。

僕がその意味を問いただそうと口を開きかけたが、彼はそれを手で制し、パチンと指を鳴らした。

するといつの間にか目の前には高さ50メートルほどの石像が立っていた。

― ありえない

「これに見覚えはあるかな？」という彼の言葉を聞いて叫びそうになった。

知らない人間なんているはずがない。それは3年前ティガの地で発見され、2年前ガタノゾーア消滅と共に消え去った“光の巨人”ウルトラマンティガの石像だったのだ。

「これがなぜここに！」

思わずまだ父さんの姿をとっている生命体に訊ねる。
すると彼は懐かしそうに語り始めた。

「君たちの世界でいう3000万年前、この時空の狭間に怪獣が逃げ込んできてティガはそれを追いかけてここに来た。彼は怪獣を倒しこの空間からもといた世界に帰ろうとしたのだがその際、時空エネルギーフィールドのせいで彼の複製……いや、もう一人の彼が偶然できてしまったんだよ。」

胡散臭いが一応、納得した。

ここで新たな疑問が湧いてきた。

「僕にどうしろというんですか？ ティガになれとでも？」

彼はあっさり認めた。

「その通りだ」

僕は訳がわからなくなってきた。

「でもGUTSの資料にはティガは『人間を導く、最も純粹で崇高な光』って……」

すると彼はうなずきながら

「たしかにGUTSの資料にはそう記載されている。しかしそれは故意に改ざんされたためだ。本当はティガというのは超古代文明時

代の地球警備団の戦士であり、その正体は戦士の遺伝子を受け継いだGUTS隊員であるマドカ・ダイゴだ。」

そんな訳がない。誇大妄想なのではないかと思うと笑いがこみあげてくる。

「そして君もその遺伝子を受け継いでいる」

その一言で笑いがサツと引いた。

「戦ってくれるね？」

そういつて彼は右手を差し出した。そこには金色の線が入ったクリスタル製の器具が握られていた。

この人が本気であるというのはわかったが、正直、自分が救世主ディガに相応しい人間なのか迷っていた。

そんな彼の気持ちを察したのか生命体は辻野に

「君以外に適合者はいない。君が拒否したら君の世界も含めてすべてが闇に閉ざされるだろう」

と静かに言った。

この言葉を聞いて辻野は覚悟を決めた。

「わかりました。やりましょう。」

そういつて彼が差し出しているクリスタル製の器具“スパークレンス”を受け取り、握りしめた。

こうして辻野雄弥の時空を超えた戦いが幕を開けたのであった・・・

巨人の残光（後書き）

感想、クロスオーバーの要望など待ってマース！

破滅の預言（前書き）

ドラえもん編に突入します!!。

感想やクロスオーバーの要望、待ってマース！

破滅の預言

「まさか本当に用意するなんて．．．」

僕は父親もどきに戦う条件として基地にもなる豪邸とガッツウイング1号を2機、ガッツウイング2号を1機、GUTS及びTPCの各種装備、そして機体の整備もできる住みこみのお手伝いさん2人を要求した。そして彼はそれをちゃんと用意したのだ。

家の中に入ると2人の女性がソファアに座っていた。自己紹介しようと口を開こうとしたが女性たちの方が早かった。

緑色の髪の毛の高校生のようなかawaii女子が笑顔で自己紹介した。

「レイっていいいます。長から辻野さんの身の回りの世話をしろと言われて来ました。よろしくね!」

辻野も精一杯の笑顔で

「辻野雄弥です。よろしく!」

と答える。

レイさんの隣には青色の髪の毛の20代くらいの美女が口を開く。

「ルイと申します。このたびは長より辻野さんの身の回りのお世話をしろと命じられ来ました。よろしく願います。」

年上のようなので、

「こちらこそよろしくお願いします」

と丁寧な返事をした。

するとレイさんが怒ったような顔をして

「なんでルイのときだけ敬語なのよー！」

と両肩を掴んで揺らしてくる。あまりの剣幕に思わず、

「いやっ、だって・・・ルイさんの方が年上に見えたから・・・」

と言ってしまふと拗ねたように

「バカ・・・私の方がルイより4000歳も年上よ・・・」

と呟く。その予想外のセリフに呆然としているとルイさんがさらに平然と

「こら！サバをよまない。レイは私より7000歳年上でしょ」

信じられないような会話を聞いてあいた口がふさがらなかった。

あとで聞いた話なのだが2人とも人類誕生の瞬間を目撃しているらしい。

人は見かけによらないことを思い知らされた辻野であった。

そのころ、そこからそう遠くない場所で眼鏡をかけた少年が青いタヌキ型・・・じゃなかった耳のないネコ型ロボットに泣きついていた。

「ドラえもんーん!!!」

ドラえもんはため息をつきながら、

「今度はどうしたんだいのび太くん？」

と訊ねる。するとその泣いている少年、のび太は泣きながら答える。

「明日、静香ちゃんが出来杉君とこの前落ちた隕石を見に科学研究所に行くんだ~~~~!!」

どうやら出来杉君のお父さんの知り合いが科学研究所に勤めている

らしく、その知り合いに2人が誘われたらしい。

長年、のび太と人間と生活しているドラえもんはのび太がどうしてほしいかすぐにわかった。自慢の四次元ポケットを探り、薄型のテレビを取り出す。

「タイムテレビー！」

タイムテレビは、過去や未来を見ることが出来るドラえもんの秘密道具である。

ダイヤルを調節してのび太がちゃんと静香ちゃんと結婚しているのを見せようとするがなぜか映像が出てこない。故障でもしたのかと思いつつもダイヤルを調節しているとそこには・・・

無残にも破壊された町、燃える家々、ズタズタに引き裂かれた死体、逃げ惑う人々が映っていた。

そして何故かタイムテレビが火花を散らしてショートしてしまった。

「そんな・・・。いったい何が起こったんだ。」

とドラえもんが呟く。のび太も阿鼻叫喚の映像に絶句していた。

しかし、のび太はショックを受けつつもドラえもんにすぎるように訊ねる。

「でもドラえもんは22世紀から来たんでしょう。それなら・・・」

そんなのび太の気持ちを理解しつつもドラえもんは過酷な現実をのび太に突き付ける。

「でも未来は変わってしまう事もあるから・・・」

「そつ、そんな〜！」

とのび太は叫ぶ。2週間後にセットされているダイヤルを見てドラえもんが厳かに宣言する。

「つまり2週間以内にあの破滅が起きてしまう。それを防げるのは僕たちだけなんだ。」

のび太もその一言を聞いて決意する。

「そうだよ。僕たちが原因を見つけて、あの悲劇を食い止めればいいんだよ。」

今まで何度も人類とその未来を救ってきた彼らにとって人類滅亡の危機は特に特別なことではない。

こうして地球と人類を救う決意を固めたのび太とドラえもんであったが、彼らの想像を絶するような敵と戦うことになるのはこのときは知る余地もなかった。

TO BE CONTINUE . . .

破滅の預言（後書き）

次回予告

未来に起こる破滅について調べ始めたドラえもんのび太。
そして彼らは辻野と出会う。

そのころ科学研究所で異変が・・・

次回、『旅人との邂逅』

乞う、ご期待下さい！

旅人との邂逅（前書き）

感想や要望、待ってます！

旅人との邂逅

次の日

く辻野Sideく

戦争、公害、核兵器・・・。

この世界は科学的な面、精神的な面の両面において遅れていた。もしこの世界に怪獣が現れたらすぐに乗っ取られてしまうだろう。ふと心配になった辻野は気分転換も兼ねて父親もどきが用意してくれたジープでパトロールをすることにした。

くのび太sideく

朝、いつもと違い遅刻することなく学校に着いたのび太は昨日あったことを数々の冒険を共に繰り広げてきたジャイアンとスネ夫に話す。すると。

「のび太、地球が2週間以内に滅びるってホントなのか!!」

とジャイアンが両肩を揺さぶる。

そのあまりの激しさに目を回しつつも答える。

「本当だよ!」

スネ夫は横で

「死にたくないよー！！ママアアああああー！！！！」

と泣きわめいていた。

少し落ち着いたジャイアンがそんなヘタレなスネ夫に喝を入れる。

「泣くな！！俺たちは何度も修羅場を潜りぬけてきたんだから。しっかりしろ！！」

スネ夫もそれを聞いて落ち着いたらしく、

「じゃあ僕たちはどうすればいいの？」

と聞くとこのび太はかばんの中から次々と秘密道具を取り出していく。

「ドラえもんが準備した武器を使って戦うんだ！」

かばんから出てきたものは・・・

熱線銃、光線銃、ハッタリバズーカ、見せかけミサイル、こけおどし手投げ弾、ジャンボガン、ふわふわ銃、空気砲などといった兵器の数々であった。

自分が使いたい武器を選んでいると

ドラえもんが連絡用に持たせてくれた糸なし糸電話のベルが鳴り始める。

「こちら、のび太」

すると向こう側からドラえものの慌てた声が聞こえてきた。

「昨日打ち上げた人工衛星が地球に落下しつつある隕石を見つけたんだ！」

のび太は、確かにすごいがそんなに騒ぐことなのかと思っていた。しかし、ドラえものの言葉を聞いてのび太は言葉を失った。

「その隕石から強力な生命反応が出たんだ！それだけじゃない！！そいつはあと20分で新宿を直撃するんだ！！！」

そのころ航空自衛隊のレーダー基地は大変なことになっていた。レーダー監視員達が叫ぶ。

「日本上空に未確認飛行物体を確認！！」

「目標は大気圏外から飛来した模様！」

「目標速度、およそマッハ20！」

レーダー基地の司令官である大野三佐が監視員に尋ねる。

「大気圏外からだとお．．、隕石なのか？」

レーダー監視員は半ばパニックになりながら、

「隕石ならもつと前にわかっていたはずです！でも、航空機にしては速すぎる！！」

と叫ぶように答える。

司令官は顔を上げ、未確認飛行物体に必死に呼びかけている通信要員の方を見る。

通信要員はそれに気づき、首を横に振る。

司令官は戦闘機部隊に緊急発進の要請を出す。

その時、コンピューターの前で隕石の弾道計算をしていた隊員が

「大野三佐！！」

とショックを受けたような表情で走ってきて、計算結果の書かれた紙を渡しながら結果を伝える。

「このままの針路で落下し続ければ隕石はあと10分で新宿を直撃します・・・」

避難命令を出しても到底間に合わないし、迎撃用のミサイルで撃ち落とそうにも相手の速度が速すぎてロックオンできない。

レーダー観測室を無力感と静寂が覆いつくした。

隕石落下まであと5分。

百里基地から緊急発進した305航空隊のF-15イーグル戦闘機2機は限界高度まで上昇する。

すると巨大な火の玉といつてもいいようなものを目でとらえる。
報告のために中部航空方面隊作戦指揮所《soc》との通信回線を
開く。

「Control, this is ASTER-01. Visual contact with target. Request order. (司令部、こちらはアスター01。目標を目
視領域で発見。指示を乞う。)」

すると管制官からの指示が入る。

「Clear fire. Destroy the target. (射撃を許可する。目標を破壊せよ。)」

自衛隊で自分は一生聞くことはないであろうと思っていた射撃命令
に緊張しつつも

「Roger that. (了解。)」

と了解して、ミサイルをロックオンしようとするが、できない。
こんなことは今までで一度もなかった。
急いで本部に報告を入れる

「control, this is ASTER-01. Missile, unacquirable! (司令部、こちらは
アスター01。ミサイルをロックできない!)」

すると僚機であるASTER-02が叫ぶ。

「相手が速すぎてロックできない!-!」

そして隕石はロック範囲外に去ってしまう。
迎撃に失敗した。ただその動かしがたい事実を目の前に自分の無力さを呪った。

テレビやラジオで避難命令についての報道を聞いて辻野は急いでジープを方向転換させた。

そしてしばらくすると3人の小学生と青いタヌキがみんなが逃げるのとは逆方向に走っていくのを見かけた。
思わず声をかけてしまう。

「君たち。危ないからそっちに行っちゃだめだ！」

すると黄色い服を着た眼鏡の少年がこっちを見て、

「あの隕石はただの隕石じゃないんです！あの中には生き物が・・・」

「

するとオレンジ色の服を着た体の大きな少年が、

「のび太！そんなこと言っても誰も信じねえよ！」

と言い、キツネ顔の少年も

「そうだよ、のび太。大人は信じてくれないよ・・・」

と言う。

こう言うっては何なのだが僕は人を見る目には自信がある。その僕が見る限り彼らは信用できそうだった。そこで僕は、

「君たち、早く乗って！新宿に行きたいんだろ！」

と訊ねる。少年たちは喜んで乗ってきた。

一応、自己紹介をしておく。

「僕の名前は辻野雄弥です。よろしく。」

すると一人一人、自己紹介をしていく。

「僕の名前は野比のび太です！よろしくお願いします。」

「僕の名前は骨川スネ夫です。よろしくお願いします。」

「俺の名前は剛田武です。よろしくお願いします。」

「ぼく、ドラえもんです！！」

眼鏡を掛けた子のがのび太君。キツネみたいな顔をした子がスネ夫君。ガキ大将みたいなのが武君。

そしてこの青い得体のしれないロボットがドラえもん。

思わずドラえもんに聞いてしまう。

「君はタヌキ型ロボットですか？」

すると顔を真っ赤にして怒ってきた。

「ネコ型だよ！！もう！」

あまりの剣幕にビビってしまい謝る。

そんなこんなしていると、

ゴゴゴゴゴゴと耳を圧する音とともに巨大な火の玉が空から落ちてくるのが見えた。

その大きさに圧倒されている間に火の玉はビルの陰に隠れてしまう。

そして

午前10時27分、マツハ20で地面に衝突した際に発生した爆発は最新型の核爆弾数発分相当の破壊力を持ち、新宿とそこにいた多くの人々を灰一つ残さずに消し去った。

旅人との邂逅（後書き）

次回予告

新宿を消し去った隕石から時空侵略獣が出現する！

自衛隊は壊滅し、のび太達も絶体絶命の危機に追い込まれる。
その時、辻野のスパークレンスが輝く！！

次回、『隕石の落ちた地で』

乞う、ご期待下さい。

隕石の落ちた地で

(時空侵略尖兵怪獣グラビリス登場) (前書き)

怪獣の見た目は『ウルトラマンダイナ』に出てくる彗星怪獣ガイ
ガレードに近いです。

感想、要望待ってます!!

隕石の落ちた地で

（時空侵略尖兵怪獣グラビリス登場）

隕石が新宿に落ちてから3時間が経過した。

隕石が見える場所にまで行くことはできたのだが、隕石を包囲、調査するためにやってきた自衛隊と警察の合同部隊に追い返されてしまった。

帰るふりをして近くで自衛隊の無線を傍受しているとこの隕石が何やらおかしいことがわかってきた。

隕石はマツハ20で地面に激突し核爆弾数発分の爆発を引き起こしておきながら傷一つ付かず、しかもクレーターの奥深くで光ったり暗くなったりと点滅しているらしい。

「ドラえもん、どういうことかな？」

とのび太が隣で分析装置の画面とにらめっこしているドラえもんに質問する。

ドラえもんは画面を見据えたまま、

「わからない。こんなこと初めてだから……。ただ中に何か生き物がいるのは確かだ。」

と答える。するとジャイアンが

「よし、じゃあその生き物とやらを見に行こうぜ！」

と提案する。するとスネ夫が今にも泣きそうな顔で

「ジャイアン、どんな生き物がいるかわからないのに見に行くなんていくらなんでも危険すぎるよ!!！」

と主張する。しかしジャイアンの

「俺様の命令が聞けないのかぁ!!」

の一言でスネ夫は気を変えた（変えさせられた）ようだ。

そしてドラえもんがあまり気乗りしない様子でポケットの中を探りカセットコンロのボンベのようなものを取り出す。

「片づけラッカー!!」

そしてそのボンベに入っているガスを全員に吹き付ける。
すると驚いたことに全員の姿が見えなくなったのだ！
思わずドラえもんを見て呟く。

「何者なんだ・・・」

するとのび太が（見えないのでわからないが笑って）

「言ってなかったけ？ドラえもんは22世紀から来たロボットなんだ!!」

ソナナノアリエナィ！と心の中で叫ばずにはいらなかった。

そのころ科学研究所では・・・

隕石が落ちたことでパニックになっていた。

出来杉の父親の知り合いである研究主任の久保田さんが見学に来ていた出来杉と静香に、

「今日はもう遅いし外もあちこちで混乱が発生しているから今日は研究所の宿舎に泊まっていった方がいい」

と言う。

出来杉と静香は親の許可をもらえれば泊まると言い、親に電話するすると両方の親が今日は泊まってもいいと言ったので久保田さんにそのことを伝え、宿舎の方へ向かった。

そのころ誰もいない研究室では、先日落ちた隕石がさっき落ちた隕石と同じように点滅していた・・・

そのころ隕石の墜落現場では・・・

自衛隊の現場責任者である松井一佐は部下の報告を聞き困惑していた。

「つまり特殊超音波スキャナーで調べたら、体長推定50メートルほどの生物が隕石の中にいるのを発見したと・・・」

部下もかなり困惑した顔で、

「その通りであります」

と答える。

松井一佐は

「で、そいつは生きているのか？」

と訊ねると部下は

「生きています。そしてもし出てきて歩き回れたら甚大な被害が出ると思えます。」

と眉間に皺をよせ、苦しそうに答える。

松井一佐は総理大臣へのホットラインの受話器を取り、戦闘部隊の出勤を求めようとしたその時、外からものすごい悲鳴が聞こえてきた。

そして、

パン、パン、パパパパパン

と乾いた銃声が響きわたる。

隕石の墜落現場を警備していた自衛官や警察官がいきなり発砲したらしい。

無線機に

「打ち方やめ！打ち方やめ！」

と叫びながら近くにいた部下の自衛官を問いただす。

「バカ野郎！！何があった！？」

すると震えながら

「け、警備中だった、い、井上一士と近藤巡查部長がクレーターの中から出てきた、し、触手のようなものにクレーターに引きずり込まれそうになっていたため、そ、その触手に向かって発砲しました」

と答える。

周りを見渡すが井上と近藤は見当たらない。

「井上一士と近藤巡査部長はどうした!!」

するととうとう泣き出して、

「た、た、た、助けようと、し、しし、したんですが、じゅ、銃が効かなくて・・・」

そういつてクレーターの方を指さす。

松井一佐は戦闘部隊を何としても出動させると決意した。

その一部始終を聞いていた辻野達は今後どうすべきかみんな協議していた。

「ネエ、危ないから家に帰ろうよう・・・」

とスネ夫がおずおずと主張する。

それに対し、僕、ジャイアン、のび太、ドラえもんはここに留まって様子を見るべきだと主張し、多数決でここに残ることになった。

夜中になると次々と戦車や装甲車が現場に到着し始めた。

ドラえもんが用意して来た携帯テレビのニュースによると有害鳥獣駆除の名目で自衛隊の戦闘部隊を出動させたらしい。

次々と戦闘車両が集まり、クレーターを包囲していく。

午前3時14分、急に地面が揺れ始めた。

その揺れで仮眠をとっていたのび太達も飛び起きる。

それぞれ怪獣と戦いに行こうとするがそれを辻野とドラえもんが止める。

のび太が叫ぶ。

「助けに行かないと!!」

すると辻野が

「作戦も立てずに行っ たって無駄死にするだけですよ!」

と即座に言い返す。

返す言葉がなく黙り込むのび太達。

しかし助けを必要としている人達がいるのも事実だ。

そこで辻野が作戦を全員に伝える。

「いいか、僕が囫になって怪獣の注意をひきつけている間にけが人を君たちが救出する。それで、いいね!」

僕の有無を言わさぬ口調にみんな頷く。

一般普及型の黒いガッツハイパーガンをホルスターから抜き、カートリッジを装填し始める。

実戦で使うのは初めてだが、どうにかなるだろう。

ハイパーガンを見てドラえもんが呟く。

「辻野さん、あなたは一体・・・」

しかし、今はそんなことを話している暇はない。

「その話は後だ!　いくぞ!」

パシュン、パシュン、パシュン

とハイパーガンを連射しながら辻野は走り始める。

怪獣の体に着弾して火花を出すもダメージはそんなに受けていないようだ。

怪獣はレーザーによる攻撃に驚いたがすぐに、

「キシヤアアアアアアアアアア——！」

と咆哮し、辻野に向かって口から光球を放ちだす。

怪獣の注意は完全に逸れている。

ドラえもんたちも突撃し始めた。

秘密道具を使い次々と人が助け出していく。

よし、作戦が成功だと思った瞬間、怪獣の光球によって吹き飛ばされ、意識を失った。

と慌てて叫ぶ。

戦車の残骸から恐る恐る見ると辻野はけがこそしていないものの気を失っているようだった。

怪獣は辻野にとどめを刺さずに池袋方面へ進み始める。

その事に気づいたのび太達は怪獣の進攻を阻止しようとそれぞれ熱線銃や光線銃を手にタケコプターで飛び立っていく。

しかし怪獣相手に苦しい戦いを強いられる。

「ク、クソッ！なんて強いんだ！！」

とのび太とドラえもんは叫び、

「勝てっこない（よ）！！」

とスネ夫とジャイアンは喚く。

絶望的なほど勝ち目のない戦いを続けるドラえもん達。

ミサイルを打ち切っても機関砲で怪獣を攻撃する戦闘機。

避難誘導をする自衛官。

必死に逃げる人々。

母親とはぐれたらしく逃げ行く人々の中で泣いている少女。

辻野はやつと意識を取り戻した。

頭を地面にかなり強く打ち付けたらしくひどい頭痛がする。

しかしそんなことを気にしている場合ではない。

よろけながらも立ち上がり、ポケットからスパークレンスを取り出す。

――自分がウルトラマンティガになるのにふさわしい人間なのかど

うかはわからない。でも．．

「理由なんてもうどうでもいい！みんなを守りたいんだ！！だから．．僕にも、ヒカリをオオオオオオーーーー！！！」

そう叫び、スパークレンスを掲げるとカバーが2つに開き、強烈な光が放たれた。

くドラえもん side く

ひらりマントを使って怪獣の攻撃をはじき返し続けているがマントは度重なる攻撃でボロボロになっていていつまでもつかわからない状態で、光線銃は予備のバッテリーまで撃ち尽くしてしまっていた。もはやこれまでかと諦めかけたその時、夜明け前なのに強烈な光があたり一面を覆い尽くす。

光が弱まり、消えるとそこには怪獣と同じくらいの大きさの巨人が立っていた。

銀、赤、青紫の三色で色取られた体に、胸には金色の線が2本入った銀色のプロテクター。

そのプロテクターの間には青く光る半球。そして優しげな光を放つ二つの白い瞳。

テレビの中でしか存在しないはずのヒーロー。

「ウルトラマン．．．そんなバカな．．．」

さすがにあれだけの光を夜に出したら怪獣も気づいたようでは振り返り、

「キシヤアアアアアアアアアア——！」

と吼え威嚇してくる。

こちらもそれに応え、右手を平手にして前に出し左手でこぶしを作り胸に添え、ファイティングポーズを取る。

「テアツ」

こうしてドラえもんの世界に光の巨人、ウルトラマンティガが降り立ったのであった。

隕石の落ちた地で

（時空侵略尖兵怪獣グラビリス登場）（後書き）

次回予告

ティガとなり戦う辻野。

しかしその裏で別の侵略計画が静かに進行していた。
負けるなウルトラマンティガ！

次回、『孤独な戦士たち』

乞う、ご期待下さい！

孤独な戦士たち

（時空侵略尖兵怪獣ゲラピリス登場）（前書き）

感想、意見など待ってます！！

バシッ、バスッ、ドスッ

とパンチやチョップを叩きこむが口から放たれた光球の直撃を受けて吹き飛ばされる。

「テユアアアアー!!!」

グラビリスは立ち上がると両腕の鎌を構え、立ち上がろうともがいているティガに近づいていく。

両腕の鎌でティガの首を絞め、無理やり引き起こすとその鎌に電気を流し始める。

バチ、バチッという音と共に放たれるグラビリスの放電攻撃に苦しみ、

「テユアアアアアアアアあー!!!!!!」

と叫び声をあげるティガ。

鎌に手をかけ、引きはがそうとするがビクともしないので諦めグラビリスの腹にパンチを入れるが効き目がない。

すると青く輝いていたカラータイマーが赤くなり警告音と共に点滅し始める。

ピコン・・・ピコン・・・ピコン・・・

するとティガの頭にあるクリスタルが赤く輝き体の色が赤、青紫、銀の三色から赤と銀の二色に変化する。マルチタイプからパワータイプにタイプチェンジしたのだ。

パワータイプになったティガは放電攻撃を受けながらも

「シューーーーー・・・」

と唸りながらグラビリスの両脇を掴み、持ち上げ

「ハッ！！！」

と体を反らしてバックドロップきめる。

地面に頭から叩きつけられたグラビリスは思わず両腕の鎌から力が抜けてしまう。

ティガは鎌を振りほどき立ち上がると、ふらつきながら立ち上がったグラビリスに当たれば火花が散るほど強力なパンチやキックを連続で見舞う。

グラビリスは

「キシヤアアアああー！！！！！」

と叫びながら必死に両腕の鎌を振り回すも全部受け止められ、逆に強烈な蹴りを打ち込まれ吹き飛ばされる。グラビリスが立ち上がるうともがいている間に、両腕を左右から上にあげ、胸の前に高密度の光エネルギーの球を構える。
そしてグラビリスが立ち上がった瞬間、

「テユアッ！」

と叫び、そのエネルギーの球を投げるように相手に向かって放つ。
パワータイプの必殺技であるデラシウム光流を受け、グラビリスは木端微塵になった。

光の粒子となって消えていくティガを朝焼けが優しく照らしていた。

その少し前、ちょうど自衛隊による総攻撃が行われ始めた頃、科学研究所は・・・

残業をしている研究者の一部以外のほとんどの職員が家と同じ敷地内にある宿舎に帰ってしまい、静まり返っていた。

「ああ、分析も終わったことだしコーヒーでも淹れよう」

と残業をしていた一人の研究者が給湯室に向かって歩いていくと力サカサと音がする。

最初は虫かななどと思っていたが彼を大きな黒い影が覆った時、はつきりと確信した。

底知れぬ悪意を持った何かが背後にいる。

ゆっくり振り返るとソレは恐ろしい速さで襲いかかってきた。彼には逃げる事も、戦う事も、叫ぶ事も、考える事も出来なかった・・・

自衛隊や警察の人達に見つからない様に現場を後にしたドラえもん達はウルトラマンのことについて議論していた。

「あれってウルトラマンだね・・・？」

とのび太はドラえもんに訊ねるとドラえもんは

「ウルトラマンは空想上の存在何なただけだなあ・・・」

と呟く。するとジャイアンが

「じゃあ俺たちが見たのは全部、空想の産物だって言いたいのか！」

とドラえもんに言い返す。ドラえもんは答える事が出来なかった。たしかに目の前にウルトラマンが現れた以上、存在しているに違いない。

でもそんなことはまずあり得ない。

スネ夫は辻野に

「辻野さんはどう思う?」

と聞いたが肩をすくめて、

「さあな」

としか答えなかった。

その後、電話番号を交換して別れた。

（辻野 side）

家に帰ると早速、この世界のウルトラマンについて調べてみる。

すると非常に面白いことがわかった。なんとこの世界ではウルトラマンは特撮ヒーローだったのだ。

ウルトラマン、ウルトラセブン、帰ってきたウルトラマン、ウルトラマンタロウ、ウルトラマンエース、ウルトラマンレオ、ウルトラマン80の全6作品があるという。

さすがに眠くなったので、着替えて寝ると、そこは真っ白な空間だった。

「またかよ・・・」

と呟く。すると後ろから

「ユウヤ」

と呼びかけられた。慌てて振り返るとそこにはベージュ色のフード付きのローブを着た白髪の女性が立っていた。

「誰だ」

と訊ねると彼女は

「私は地球警備団団長、ユザレ。」

と答えた。

「何の用だ!」

と聞くと彼女は

「この世界は闇に包まれようとしている。あなたの助けを必要としている者がたくさんいる。」

そう言いながら彼女の姿が徐々に消えていく。それと同時に真っ白の世界がどんどん黒くなっていく。

「どういうことだ! 怪獣はもう倒したんだぞ!! ユザレ!!! ユザレエエエーーーー!!!」

そこで目が覚めた。

ただの夢だったのだろうか。それとも・・・

くのび太 side

次の日、学校もテレビも昨日の怪獣とウルトラマンの事で持ちきりだった。

みんな、ウルトラマンがかっこよかったとか、強かったとか言っている。

昨日の戦いを直に見た者としては素直に勝利を喜べなかった。多くの人々が死んだり怪我をしたりしたのを知っているからだ。ふとみると静香ちゃんが登校してきたので話しかける。

「おはよう、静香ちゃん！」

しかし、静香ちゃんは

「馬鹿な男は私に話しかけてこないで！吐き気がするわ！！」

といきなり面と向かって悪口を言ってきたのだ。

怒るよりも啞然としてしまったのび太だが静香ちゃんがおかしいという事に気が付き様子を見ることにした。すると出来杉君が登校してきた。昨日、科学研究所で何かあったのか聞こうと思い、話しかけようとする

「馬鹿がうつるから近づかないでくれ。目障りだ！」

と言われてしまった。科学研究所で何かがあったに違いないと確信したのび太は帰宅してすぐにその事をドラえもんに話す。するとド

ラえもんは

「そうかぁ．．．やっぱり。」

と呟き、小さな声で

「今日、ママが静香ちゃんの家であつたお茶会から帰ってきて以来、様子がおかしいんだ。いきなり『殺すぞ、コラ!』とか言ってきて．．．」

と打ち明ける。のび太はショックのあまり呆然としていたが、すぐに我にかえって

「どうする？ドラえもん！」

と相談する。ドラえもんは言った。

「ジャイアンとスネ夫に注意を呼び掛けてくれ！僕は科学研究所を調査してくる！」

ドラえもんはタケコプターをつけて窓から飛び立ち、のび太は急いで一階に下りて、ジャイアンとスネ夫に電話する。
幸いにもママは不在のようだ。

プルルルルル、プルルルルル

「スネ夫、僕だけどさ．．．」

「うっさいんだよ、薄らバカ、死ね！」

ブチっ、ツー、ツー

プルルルルル、プルルルルル

「ジャイアン、僕だけど．．．」

「うざい、消えろ！」

ブチっ、ツー、ツー

「スネ夫もジャイアンもだめだったか．．．」

その後、一階の扉や窓を封鎖し緊急事態に備える。
そして待った。ドラえもんが帰ってくるのを。

一日、二日、三日と待ったが帰って来なかった。

のび太はとうとう一人になってしまったのだ．．．

孤独な戦士たち

(時空侵略尖兵怪獣グラビリス登場) (後書き)

次回予告

のび太の周りだけでなく今度は町の人達の性格まで豹変し始め、ほかの人々を襲い始める。
その背後に潜む敵を追い詰めた時、辻野とのび太が科学研究所で見
るものとは。

次回、『奪還』

乞う、ご期待下さい！

奪還（前書き）

感想、意見等お待ちしております！

奪還

＼辻野side＼

怪獣を倒してから四日が過ぎた。

毎日、ジープでパトロールしているが特に異常は見当たらない。

強いて言えばお手伝いのレイが、僕がお風呂に入っているにも関わらず風呂場に乱入してきたぐらいだ。

半端なく年上だと言えども見た目が高校生なのだ。そんな女性の裸を見せられたりしたら・・・健全な男としては黙っておくわけにはいかないでしょう？

冗談です。ヘタレな僕はそんな勇氣と根性を持ち合わせていませんでした。ゴメンナサイ・・・

今日もジープに乗って所定のルートをパトロールする。

パトロール中、人っ子一人見かけなかったが、まあ、そういう日もあろう。

特に異常は見当たらないので早めに切り上げようか考えていると、四歳ぐらいの女の子がこっちに向って泣きながら走ってくる。

車を止めて話を聞くとお母さんの性格が急に豹変してしまったらしい。

ジープのトランクに入っている装置でこの子が人間であるか調べ、次に周りに敵がいらないか調べる。

特に異常はなかった。なので、

「お母さんもきつと疲れてるんだよ」

と子供を落ち着かせる。すべて解決だと思った瞬間、繁華街方から

ズドオオオオオー

という爆発音が聞こえ、煙が上がっているのが見えた。

僕はこの女の子を後部座席に乗せ、急いで発進した。

辻野はこの街に広がりつつある“何か”について知ることとなる。

くのび太 side

ドラえもんが調査に出かけてから三日が経った。

のび太は追い詰められていた。冷蔵庫が空っぽになり、カップ麺も底をついた。

おなかが減って仕方がないのだ。買い物に行きたいのだが外にはでなければ出たくない。

買い物に行くべきか、我慢すべきかと悩んでいたのだが空腹には勝てず買い物に出かけることにした。

一階は扉、窓が共に閉鎖されているため二階からスเปアポケットを持ってタケコプターで出かける。

百貨店の屋上に着き、中を恐る恐る覗き込む。そこは恐ろしいほど静かだった。

誰もいないのだ。

店員にお客さんに警備員、誰一人いないのだ。

なんかおかしい。人を間違って撃つたら大変なことになるのでポケットの中から光線銃の代わりにショックガンを出し、構えながら進む。

すると店員と思われる女性が

「死ねええええええー！！！！！」

と言いながらいきなり鉄パイプを持って襲いかかってきた。

ショックガンを撃ちこむもよろけるだけでそのまま突っ込んでくる。のび太はショックガンを連射しこれでもかというほど撃ちこむ。

すると女性は急に苦しみはじめ、床に倒れこみもがく。

そしてドロドロとした緑色の液体になったのだ。

ショックガンの威力のダイヤルは恐竜を一撃で倒すことができる最大にセットされていた。

「一体、何が起こっているんだ……」

とのび太は戦慄した。すると

ズドオオオオオオー

と耳を圧するような轟音が外から聞こえてくる。窓から外を見るとバスが車に突っ込んで多重衝突事故が起こったらしい。しかし、それよりも衝撃的だったのは外で街中の人たちが他の人を襲っているのだ。

のび太はショックガンを四次元ポケットに戻し、今度は光線銃を出す。さっきの戦いから相手は人ではないとわかったからだ。光線銃を構え、ゆっくりと下の階に下りて行く。

各階に人間もどきがいたが光線銃で難なく倒す事が出来た。

そして二階にたどりつく。中を覗きこむとたくさん人がいる。

陳列棚の陰に隠れて様子を窺う。

たくさん人間が人間もどきに取囲まれていた。

なぜわかるかというと、取囲まれている人間は恐怖で顔が歪んでいるが取り囲んでいる人間は武器を持ち、邪悪な笑みを浮かべてい

るからだ。

そして人間もどきが一人ずつ人間を立たせ、紫色のビームを照射する。

するとその人間は消え、かわりにその人そっくりの人間もどきが現れる。

のび太はそれを見た瞬間すべてを悟った。

性格が豹変した人々は皆、あの人間もどきに殺され、すり替わっていたのだ。ママも学校の友達も．．．

「よくもみんなを．．．」

怒りに駆られたのび太は人間もどきに向かって光線銃を連射し、全員を緑色の液体にした。

のび太に助けられた人々は慌てて、百貨店から逃げていく。

のび太も外に出るとそこには大量の人間もどきがいて、そいつらは道路に泊まっているジープに襲いかかっていた。

ジープの前には白いヘルメットをかぶり、TPCと書かれた黒いベスト男が、

パシュン、パシュン、パシュン、パシュン、

とレーザー銃を連射し、必死に応戦していた。

しかしバッテリー切れになったらしく慌ててバッテリーを交換し、射撃を再開しようとするが敵が目の前にまで迫る。

「危ない！！」

そう思わず叫び、光線銃を人間もどきに向かって撃ちこんだ。

〈辻野side〉

爆発音を聞きつけ街の中心部に來たのだが大変なことになっていた。なぜこんな暴動が起きたのだろうか。

周りを調べようと車を止め、降りるとそろそろと不気味な笑顔をした人たちが鉄パイプや包丁を持ってこっちに向かってくる。

身の危険を感じた辻野はガッツハイパーガンに麻醉弾カートリッジを装填し構える。

「止まれ！さもないと撃つぞ！！」

叫ぶがお構いなしに進んでくる。仕方なく麻醉弾を撃ち込む。しかし驚いたことに平然と進んでくる。さらに何発も撃ちこむが効果がない。普通の生物なら一撃で眠ってしまうはずなのに・・・

辻野は麻醉弾カートリッジを抜き取り、通常のレーザー弾カートリッジを装填し、発砲する。

パシュン

すると不気味な顔で近付いてきていた男は緑色の液体になり、ベチヤという音をたてて地面に落ちる。

次々と人間じゃない何かが近づいてくるのでレーザーを撃ちこむ。

パシュン、パシュン、パシュン、パシュン・・・

いくら撃つても次々に出てくるのできりが無い。

カチッ

カートリッジがエネルギー切れになったので取り換えようとするがその間にもどんどん近付いてくる。もうだめかと思ったその時、

「危ない!!」

後ろで誰かが叫びレーザー銃を撃ち、僕に近づいていた敵を倒してくれる。振り返るとそこにはのび太君がいた。のび太君がレーザー銃で敵を倒している間にジープの運転席に乗り、エンジンをかける。のび太君も助手席に乗り込んでくる。

ギアをバックに入れ、命からがら逃げ出したのだった。

本物ののび太が確認した後、家で今後について話し合った結果、科学研究所に潜入することになった。

のび太が何者だと聞いてきたのでTPCや時空侵略戦争についてすべて話す。

のび太もタイムテレビに映った映像について話す。

「そんなことがあったのか・・・」

とお互いに感心しあった。

そして会話はどうやって科学研究所に行くかという事になった。するとのび太が

「どこでもドアで一発だよ」

と言ってポケットの中からピンク色の扉を出す。

「なんだこれは・・・」

という辻野の呟きを聞いて、のび太が説明する。

「文字通り、十光年以内ならどこにでも行ける装置だよ」

辻野は思わず叫ぶ、

「チ、チートだ・・・」

のび太に通信機を渡し、どこでもドアを通って科学研究所に直接行くこととするがなぜかドアが開かない。

科学研究所の内部から強力なエネルギーが発せられておりそれがどこでもドアの機能を妨げているようなのだ。仕方なく科学研究所の近くに出る。

常に銃を構え進んでいく。

十五分ぐらい歩くと研究所の前に着いた。

鉄の門は南京錠で固く閉ざされていて中からは人の気配がしない。

ガッツハイパーガンで南京錠を破壊し、中に侵入する。

研究所内部は暗く、静まり返っていた。

唯一の光源である緑色の非常灯が不気味な影を壁や廊下に映しだす。一部屋ずつ確認していく。

研究室の一つに入るとそこには研究者と思われる白衣を着た首のない死体があった。

思わず口を押さえるのび太。辻野も顔をそむける。

その死体は何かを握っていた。それはUSBスティックだった。

部屋にあるコンピューターに差し込んで内容をチェックするとそこには恐るべき内容が記されていた。

私、橋本敬雄は研究所内に持ち込まれた隕石から出現した謎の生物について記したいと思う。

隕石から出現した5体の生命体はこの研究所内にいる人間ほぼ全員を襲った。

この生物の特筆すべき点は襲った人間をほかの場所に瞬間移動させ、替わりに複製人間を作り上げるという点と日光（強力な光）を浴びると死んでしまうという点である。

この生物の内の一体を倒すことに成功した私は解剖し、DNAを調べた。

その結果、私は1つの結論に達した。

それは、この生命体は我々よりはるかに進んだ科学技術を持つ何者かが侵略という意図を持って作り上げたということだ。

またDNA解析の結果、見た事もない遺伝子を発見した。

これはあくまで推論なのだが、巨大化する可能性があるという事を記しておく。

1体は太陽光を浴びて死に、もう1体は私が倒した。

残りは後、3体。

残された者たちがこの生物を倒すことを切に願うものである。

追記 外に出て調べた結果、この生物は大量の卵を産み、すり替え

た人間のオリジナルを卵から孵化した幼体の餌にすると思われる。
卵はコンピューターの計算によると、あと48時間で孵化すると思
われる。

辻野はこの日誌が書き込まれた日時を確認し、絶句する。

「あと、三十分・・・」

のび太もそれを聞いて顔が真っ青になった。

カサカサ

ドアの向こうで素早く何かが動く音がした。
のび太と辻野は顔を見合わせる。

ドン

誰かが、いや、何かがドアを破ろうとしている・・・

奪還（後書き）

次回予告

複製人間と謎の生物との全面戦争が始まる。

迫るタイムリミット！

果たして辻野とのび太は捕らわれた人々を無事助け出すことができるのだろうか？

次回、『決戦！科学研究所』

乞う、ご期待下さい！

決戦！科学研究所

（悪質高速怪獣ウエイロン登場）（前書き）

意見、感想等お待ちしております！

決戦！科学研究所

（悪質高速怪獣ウェイロン登場）

ドン、ドン

メリッ．．．ガキッ．．．

と何かがドアを激しく叩き、ドアがきしむ音が室内に響き渡る。のび太と辻野は机やソファを倒し、その後ろで銃を構える。そしてついにドアが

メキヤメキヤッ

という音と共に破壊され、緑色のゴリラと蜘蛛を足して二で割ったようなグロテスクな化け物が無数の複製人間を引き連れて部屋に入ってくる。辻野とのび太は銃の引き金を引く。

襲いかかってくる複製人間たちを次々と倒していく。すると化け物が複製人間たちの陰から飛び出して辻野に襲いかかる。

「しまった．．．！」

殺られる．．．と思つて反射的に目を閉じた．．．が何も起こらない。目を開けると目の前の床に煙を上げている化け物の残骸があった。横を見るとのび太が光線銃を構え、立っていた。のび太の恐ろしいほど正確で素早い射撃の腕前を目の当たりにした辻野だった。

「あ、ありがとう、のび太君」

と礼を言つて部屋を出る。のび太は

「どついたしまして！」

と言って辻野の後を追った。

事前にダウンロードした地図から捕まった人々は地下二階の巨大倉庫に捕らわれていると判断し、地下へとつながる階段に向かう。

廊下のあちこちに抵抗したため殺されたと思われる研究員の血まみれの死体が転がっていた。地下へとつながる階段は非常灯も機能していないようで真っ暗だった。

銃を右手に、ライトを左手に持ち階段をゆっくり下りていく辻野とのび太。

B2Fと書かれた鉄製の扉の前に立つ。のび太はドアから数歩下がって光線銃とライトを構える。

辻野は片手で扉を開けると中から複製人間たちが一斉に襲い掛かってくる、のび太はライトを脇に挟み、ポケットから熱線銃を取り出し、二丁拳銃で敵を捌いていく。辻野もハイパーガンを連射し、敵を倒していく。

百人弱の複製人間を倒し終え、中へ突入する。のび太と辻野は互いに死角をカバーしながら倉庫に向かって進んでいく。時折、物陰から飛び出して襲い掛かってくる複製人間たちを排除し、何とか倉庫の扉の前に着く。スライド式の鉄製のドアを横に引っ張る。

ゴロゴロゴロゴロと重々しい音と共にドアが開くと真っ暗な空間が広がっていた。

壁についている非常灯のスイッチをつけるとライトが青白い弱々しい光を放ち始める。

そこにはたくさんの人たちが茶色の蔓のようなものに絡みつかれ捕らわれていた。捕まっている人たちはみな眠らされているされているようだ。

そして倉庫の真ん中には人間の何十倍の大きさの植物のつぼみの様なものがそびえたち、倉庫の四隅にはどこでもドアを妨害していたエネルギー波を出す小さなつぼみの様なものが設置されていた。

「まさか、あれが化け物の卵！」

と叫ぶのび太。辻野はハイパーガンで蔓のようなものを切断し

「起きろー！！」

と気を失っている人を起こそうと肩を揺さぶるが反応はない。

のび太は四次元ポケットを探り、白いニワトリの形をした時計を取り出す。

「遠くの人おこし用目覚ましー！！」

のび太はそのタイマーをセットし鳴らす。時計は

「コケーッコッコーーーーー！！！！！！！！！！」

と耳が潰れるんじゃないかと思うほどのけたたましい音を上げた。捕まっている人たちが一斉に眠りから覚め始める。

のび太はドラえもんや静香ちゃんといったドラえもんの道具に詳しい人たちを先に助け出し、知っていることをすべて説明し、救出作業を手伝わせる。

辻野は四隅にあるつぼみの様なものをハイパーガンで破壊する。

「のび太！これでどこでもドアが使えるぞー！！」

のび太は頷き、どこでもドアで助け出した人々を複製人間の勢力範

囲外に避難させていく。

救助作業に集中していたのび太は後ろから迫りつつあった緑色の化け物に気づいていなかった。

カサカサという音に気づき振り返ると化け物が目の前にいて今にも襲いかかるうとしていた。

「う、うわああああアアアアーーーー！！！！！！！！」

とのび太が絶叫する。その瞬間、

パシュン

という音と共に化け物は倒れ、動かなくなる。後ろを振り返ると辻野が立っていた。

「ありがとう！」

と半分泣きながら言う辻野は短く頷き、救助活動を続ける。
するとスネ夫が

「ドッ、ドラえもん！卵が震え始めたよ！！」

と大声で報告する。

スネ夫の言うとおり卵が震えていて、震えはどんどん大きくなる。

「生まれてくるんじゃないネエだろな・・・！！」

ジャイアンが熱線銃を卵に向けながら呟く。静香ちゃんが

「あと二十人残っているわ！！」

と伝える。するとドラえもんがのび太に

「あの生物は強力な光に弱いんだよね？」

と訊ねる。のび太は

「そうだけど、どうかしたの？」

とドラえもんに聞き返す。するとドラえもんは

「えーと、あれをどこにやったっけなア．．．えーと．．．」

と言いながらポケットの中にあるはずの何かを探す。

「ドラえもん早く!!」

とのび太が急かしていると

パキッ、パキパキッ

という音と共に卵の中から次々と化け物の幼体が出てきて、こっち
に向かって歩いてくる。

するとどこからか声が聞こえてきた。

「貴様ら！よくも私の子供の餌をー！！まあ、いい。代わりに貴様
らが餌になつてもらおう！！！」

静香ちゃんとスネ夫が蔓を切断し人たちを助け出す間、ジャイアン
とのび太と辻野は敵を倒し、時間を稼ぐ。ドラえもんは未だに

「どこだったっけ!!! え〜と、え〜と!!!」

と必死になつて四次元ポケットの中を探すが出てくるのは薬缶やお皿といったガラクタばかり。

「肝心な時に限ってだめなんだから……」

とのび太は思わず呟いてしまう。

「あつたアアアあー！！！」

というドラえもんの声が響きわたる。ドラえもんが取り出したものそれは

「ラジコン太陽!!!!!!」

小型の太陽はドラえもんのように操作に従って化け物の周りを飛ぶ。その光を浴びて化け物の幼体達は次々に灰になっていく。

「貴様らあああ——！！よくも私の子供たちを——！！！！！！」

と化け物の最後の一体が吼える。そして化け物は生き残っていた幼体を吸収し巨大な、羽をもった怪獣に変化した。

「逃げろっ！！！」

と言つて全員がどこでもドアに向かつて走り始める。

まずジャイアン、スネ夫、ドラえもん、静香の順にドアを潜ってい

く。辻野がどこでもドアを潜ろうとして振り返ると、のび太が逃げ遅れていた女の子をおんぶして走ってくる。

それを踏みつぶそうと上げた足を下ろし始める怪獣。

「クツ．．．！」

パシユン、パシユン、パシユン、パシユン．．．

辻野はハイパーガンを連射するも全く効果がない。
ドラえもんが

「のび太くううううー！ーん！！！」

ジャイアンとスネ夫が

「のび太ああああーん！！！」

静香ちゃんが

「のび太さああああーん！！！」

と絶叫する。

辻野はポケットからスパークレンスを出し、のび太に向かって走り始める。

そして走りながらスパークレンスを掲げた。

くのび太 side

真っ白な世界の中に自分と女の子はいた。

ここは一体どこなのだろうか。

女の子をおんぶしてどこでもドアに向かって走っていたら辻野さんが何かを掲げながら走ってきていたのが最後の記憶だった。

「ここ、どこ？」

と女の子が訊いてくるが答えようがない。すると段々、光が弱まってきた。そしてショックを受けた。

なんせ僕はウルトラマンの掌の上に乗っていたんだから・・・

「テヤッ！」

この世界を闇から救うべくウルトラマンティガはこうして現れたのであった。

決戦！科学研究所

（悪質高速怪獣ヴェイロン登場）（後書き）

次回予告

怪獣ヴェイロンに戦いを挑むティガとドラえもん達。

しかし、空中を飛びまわり攻撃してくるヴェイロンに苦戦する。

果たしてティガは闇に包まれようとしているこの世界に光をもたらすことができるのだろうか？

次回、『諦めない心』

乞う、ご期待下さい！

諦めない心

(悪質高速怪獣ウェイロン登場)(前書き)

更新が遅れてしまいました。
申し訳ございませんでした！

「ハッ、ハッ、ハッ!!!」

そしてティガは強烈なパンチを食らいふらつくヴェイロンを担ぎ上げ、ありったけの力で投げ飛ばすウルトラ・ホイッパで追い打ちをかける。

「トヤッ！！」

「クウウウオオオオオオー！！！！ん！！！！」

「テュアアアアーッ！！」

あまりにも強力な風圧にティガも吹き飛ばされてしまう。

「クワアアアアーン!!!!!!」

「シュアツ！！」

ズ
バ
バ
バ
バ
バ
バ
バ
バ
バ
ツ

ティガは咄嗟に両腕を前に広げシールドを張り、防御する。

ヴェイロンの光線をすべて防いだティガは、すかさずハンドスラッシュを連射するがすべて避けられてしまう。

「チュアアアア——！！！！！」

と体から火花を散らしながら吹き飛ばされる。

「クウオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

体当たりを受け、体から火花を出しつつ倒れるティガ。もう一度立

ち上がろうとするも、立ち上った瞬間、またしても体当たり攻撃を受け倒れてしまう。

するとティガのカラータイマーが赤く点滅し始める。

ピコン．．．ピコン．．．ピコン．．．

倒れたままでタイプチェンジをしようと試みるがヴェイロンは光線を放ち邪魔をしてくるため失敗してしまう。ヴェイロンの光線を受けたためかカラータイマーの点滅が激しくなり始める。

ピコン．．．ピコン．．．ピコン．．．

くのび太side

ウルトラマンの不思議な光に包まれドラえもん達の前に瞬間移動させられたのび太は辻野から聞いた時空侵略戦争について話す。

「そうだったのか．．．」

とドラえもんは呟き、遠くで戦うウルトラマンに目を向ける。

ジャイアンやスネ夫達も驚いた表情でウルトラマンの戦いを見つめる。

ウルトラマンは途中まで優勢であったが今は徐々に劣勢に追い込まれていた。

苦戦するウルトラマンを見てのび太はいても立つてもいられなくなりドラえもんに詰め寄る。

「何か使える武器はないの!？」

のび太の問いかけにドラえもんは

「光線銃と熱線銃はバッテリー切れ！ビッグライトとスモールライ
トは故障中！空気砲やショックガンじゃ効かないだろうし．．．」

と悔しげに答える。

「僕らには何もできないというのか．．．!?」

と出来杉は近くのコンクリートの壁を叩きながら叫び、

「世界は滅んでしまうというの．．．」

と静香が囁くような声で呟く。

「どうせみんな死んじゃうんだ！死にたくないよ～～！！ママア
アアあ～～！！！」

とスネ夫は泣き喚く。

無力感がドラえもん達の心を覆っていく。

そのときかわいらしい女の子の声が聞こえた。

「負けないで、ウルトラマン！」

声の主を探すのび太達。声の主はすぐに見つかった。

それは先ほどのび太と一緒にウルトラマンによって救出された女の
子だった。

ウルトラマンと怪獣の戦いを食い入るように見つめながら必死にウ
ルトラマンを応援していた。

「がんばれ！ウルトラマン！！」

その姿を見ていたのび太がみんなに向き直って言う。

「こんな小さな子供だって諦めていないんだ。それなのに僕たちが諦めていいはずがない！」

するとジャイアンも

「そうだな。俺たちの世界なんだ。この世界に住んでる俺たちが諦めてどうするんだ！」

と言う。

スネ夫は

「こういう特別編の時に限ってのび太は勇ましくなるなあ・・・」

と小さい声でばやくが誰も聞いていない。

するとバッテリー切れの光線銃を見てのび太がドラえもんを探ねる。

「昔、鬼退治に行ったとき大型のレーザー砲を出さなかったっけ？」

するとドラえもんが手を叩き、慌ててポケットの中を探し始める。

そして、バズーカのようなレーザー砲を二丁取り出しながら紹介する。

「あつた！原子核破壊砲！！！」

出来杉君もあまりにも物騒な兵器の登場にショックを受けている。
スネ夫が

辻野 sides

הַחֶמֶץ הַחֶמֶץ הַחֶמֶץ

カラータイマーの点滅は先ほどよりも激しくなっていた。
しかし

ここで負けるわけにはいかない！僕は絶対に諦めない！！

と辻野は傷だらけで、力の限界が近づきつつあるにもかかわらず立ち上がる。

そんなティガに猛スピードで突っ込んでくるヴェイロン。

しかしティガに当たる前に、

チュイイイイイイイイイイイイイイイイ

という音と共に後ろから照射されたビームを受け、進路が逸れてしまふ。

かなりのダメージを受けたようで動きが鈍くなり始めるヴェイロン。空中で旋回してもう一度体当たりをしようとするが、ティガはそれを紙一重で避け、スラップショット（敵とのすれ違いざまに切断ビームを放つ技）をすれ違いざまに放ち、ヴェイロンの角を折った。

「クオオオオオオオオオオオ——ン!!!」

と悲鳴を上げながらビル街に突っ込む。その間にティガは両腕を顔

の前で交差させ振り下ろし、赤、青紫、銀の三色のマルチタイプから青紫と銀の二色のスカイタイプに変身する。

飛んで逃げようとするヴェイロンを阻止すべくティガも空に舞い上がり、体当たり技であるウルトラ・ボディーアタックを炸裂させる。

「クオオオオオオー！！！！！！」

ドオオオオオオオオオオオ

と苦痛の悲鳴を上げながら地面に墜落するヴェイロン。

ティガも地面に着地し、両腕を胸の前で交差させたあと瞬時に左右に伸ばして上にあげ、両手を左腰においてエネルギーを集約する。

そしてヴェイロンが立ち上がった瞬間、右腕を胸の前で水平に伸ばし、爆発力の高い光の矢をヴェイロンに向かって放つ。

スカイタイプの必殺技であるランバルト光弾を受け、ヴェイロンは大爆発を起こし消え去った。

この世界での時空侵略はこうして終わりを遂げたのであった。

諦めない心

（悪質高速怪獣ヴェイロン登場）（後書き）

全編にわたり戦闘シーンでしたがどうだったでしょうか？

意見、感想、アドバイスなどありましたら、ぜひください！

さよなら、ドラえもん

アンケート在中（前書き）

ドラえもん編の最終話です。

さよなら、ドラえもん

アンケート在中

「お帰りなさい」

家に帰るとお手伝いのレイとルイが待っていた。

ルイが長から連絡があり、この時空における侵略を阻止できたから次の時空に送るとのこと。

朝食を食べ、この世界に何か忘れ物をしていないか確認をしていると

ピンポーン

と呼び鈴が鳴る。

外に出てみるとそこにはドラえもん達が立っていた。

今までのお礼に來たのだとドラえもんが説明する。

ジャイアンがお礼だと言ってCDを渡してくる。

辻野が

「これ何のCD」

と訊ねるとジャイアンは自慢げに

「俺のヒットソングBEST100が入ってるんです！非売品なんです！！ぜひ聞いて下さい！！」

と説明し始める。ドラえもん達はそれを聞いて真つ青になる。

ドラえもんやのび太といった周りの人の表情を見て即座にハザードレベルMAXの危険物だと察知する辻野。

それを感じさせないような笑顔で

「ありがとう！」

と言いながら受け取る。

全員と握手していると後ろからレイに声をかけられる。

「そろそろ時間ですよ！」

「はい!!」

と返事すると辻野は全員に向き直りお礼を言う。

「お世話になりました」

ドラえもん達も

「「「「「こちらこそ、お世話になりました!!」」」」」

と礼をいう。

のび太とドラえもんが

「「この世界は僕たちが守り抜きます!!」」

と笑顔で決意を告げる。

その一言を聞いてこの世界はもう大丈夫だと確信する。

頷き、家の中に入ろうとする辻野にのび太が

「また、会えますよね！」

と訊ねる。辻野は

「ああ。いつか、必ず！」

振り返りそう答え、家の中に入って行った。

すると家が急に光を発し始め、思わず目をつぶるドラえもん達。光が収まり目を開けるとそこは空き地になっていた。

ウルトラマンはもういない。

だからこそ僕たちがしっかりしなくては、という思いを改めて誓ったのび太達であった・・・

さよなら、ドラえもん

アンケート在中（後書き）

どうも、宇宙色の種です！！
いつもご愛読ありがとうございます。

先日PV5000突破を達成することができました。これも読者の皆様のおかげです。

さて、現在作者は大変困っております。

各世界での脚本は大体、決まったのですが次の世界をどの世界にするべきか迷っているのです。ですので読者の皆様にアンケートを取りたいと思います。

次の世界の候補、

A ・バカとテストと召喚獣の世界

B ・ウルトラマンガイアの世界

C ・ウルトラセブンの世界

D ・仮面ライダークウガ&アギトの世界

E ・とある魔術の禁書目録の世界

F ・ゴジラの世界

です。皆様からのアンケートをお待ちしています！

プロローグ2

バカ登場（前書き）

アンケートの結果、次の世界は『バカとテストと召喚獣』の世界になりました。

他の世界に投票された方には申し訳ありません。
ただ、他の世界には後ほど必ず行きます。

プロローグ2

バカ登場

文月学園の新学年最初の行事である『清涼祭』（文化祭の様なものは盗撮、盗聴、誘拐に爆発といった些細（？）な問題が発生したものの無事に終えることができた。

そして翌朝。

吉井明久は今日もカロリー不足だったが、大好きな姫路瑞希さんの前でそのことをバラスわけにはいかない。決して格好をつけているのではない。彼女の料理を食べさせられるのが怖いのだ。

「そう言えば、今朝は職員室に呼ばれていたんでした。すいませんけど、先に行きますね？」

という姫路に

「あ、うん。いつてらっしやい」

と答える吉井。

何事もなく会話を終えることができた吉井は満足感に包まれながら2年F組の教室に入る。

何やら騒がしいので近くにいた美少女 木下秀吉（性別 ♂）に話しかける。

「おはよう、秀吉。何かあったの？」

秀吉は振り返ると

「明久か。おはよう。須川が職員室で転校生のことを聞いたらしい

の
じ
ゃ
・
・
・
「

と吉井に教える。すると吉井は目にも留まらぬ速さで須川に詰め寄る。

「須川君！！転校生のこと、詳しく聞かせて！！！」

須川はニヤリとして答える。

「明日からこのFクラスに転校生が来るんだ。しかも女の子らしい！」

吉井は他の生徒たちと一緒に、なつて歡喜の叫び声をあげる。

「ヤッホオオオオオオオー……ウ!!!!!!」

そうこうしていると我々がFクラスの代表、坂本雄二が教室に入ってくる。

須川は坂本に近づき転校生のことを伝える。しかし坂本は

「そいつは珍しいな」

とあまり反応しない。それを見ていた吉井は思わず、

「雄一、もっと喜ばないの？」

と訊ねる。すると坂本が怯えるような口調で

「女子の転校生が来るって言って喜んでたことが翔子にバレてみる・

」

と答えてきた。坂本にアイアンクローをきめる霧島の姿が目に見え、さすがの吉井も同情せずにはいられなかった。

不憫な坂本を慰めようと吉井が口を開きかけたそのとき、スッパーーーンという音と共にドアが開かれ秀吉そっくりの女の子、秀吉の姉である木下優子が背筋が凍るような笑顔で教室に入ってくる。

「どうしたのじゃ、姉上！??」

秀吉は慌てて聞くが優子はそんなことお構いなしに秀吉を廊下へと連れ出す。廊下から声が漏れてくる。

「何でウチのクラスの男子全員がアンタのチャイナドレス姿の写真を持っているのかなあ？」

「あつ、姉上っ！！その関節はそっちには曲がらっ・・・・・・・・」

バキッ、ゴキッ、メキヤッ

吉井は秀吉の冥福を心から祈った。

その日の夜。

木下優子は同じクラスの友達である工藤愛子と一緒に自習して、家に帰るところだった。

「まったく！なんであんな恰好をするんだか！そう思わない、愛子

？」

優子は怒りながら工藤に同意を求める。だが肝心の工藤は

「ははは。でも面白いからいいんじゃないかな」

と笑い、真剣に答えようとしない。そんなやりとりをしながら帰っている、いきなり後ろから黒づくめの男たちに襲われた。麻酔薬を嗅がされ、倒れる二人。

黒づくめの男たちは人間ぐらいの大きさのハエに変身し、二人を連れ去った。

〈辻野 side〉

新たにやってきた世界。本来ならもつと浮かれていてもいいはずなのだが、辻野は不機嫌だった。

何故なら明日から高校二年生として文月学園なる高校に入ることになったからだ。

嫌がったもののレイとルイに

「「長からの指示です！」」

と言われてはどうしようもなかった。

そのことについて考えながらパトロールを続けていると、ルイから通信が入る。

「辻野さん。B-4地区にて異常なエネルギー反応が検知されました。急行してください。」

辻野は車に備え付けられた通信機の画面に映るルイに向かって訊ねた。

「了解！と、言うよりこんなビーム砲を積んだ車でパトロールしていて大丈夫なんですか？」

辻野は今、屋根の上に高出力レーザー砲であるデグナーを積んだ特殊自動車 デ・ラ・ム に乗っているのだ。誰もが持つであろう疑問にルイは

「この世界の警察はかなりアバウトだから大丈夫よ」

と平然と答える。辻野はそんな答えを聞いて呆然としつつもB - 4地区へと向かった。

プロローグ2

バカ登場（後書き）

次回予告

人知れず進む時空侵略。

臨海地区の廃病院で進む悪魔の計画とは。

それに巻き込まれた木下優子と工藤愛子の運命やいかに!?

次回、『出会い』

乞う、ご期待下さい！

出会い

(時空侵略尖兵怪獣グラビリス?登場)(前書き)

ご意見、ご感想等お待ちしております!

出会い

（時空侵略尖兵怪獣グラピリス？登場）

B - 4 地区に到着した辻野はルイと通信する。

「B - 4 地区のどこを搜索したらいいんですか？」

と辻野が訊ねるとルイは

「エネルギーの発生源を特定できません。ですのでB - 4 地区全域を搜索してください。」

と無理難題を突き付ける。辻野は

「一人じゃ無理なんでルイさんとレイさんもジープで手伝いに来てもらえませんか」

とお願いする。ルイとレイはめんどくさいなあ〜などと言っていたが最後には了解と言ってくれた。

二十分後、ルイとレイがジープで到着したのでエリアを分担して搜索する。

B - 4 地区は再開発が遅れているため廃工場や廃屋だらけで夜にこうしてパトロールしたい場所ではない。

所々に設置された街灯以外、光源がなくあたりは真っ暗だった。

辻野はある建物の三階の窓から光が漏れているのに気づき、デ・ラムを停める。

コンピューターで確認するとそこは十五年前に廃病院となった藪川医科大学であることがわかった。

ルイに廃病院に誰かがいる事を伝える。数分後、駆けつけたルイと

レイに裏から入るように指示し、辻野は表から入る。

パリン、カチャ、バキッ

床に散乱するガラスなどの破片を踏む音しか聞こえない。二階に上がると三階の方から女性の声が聞こえてきた。

「……完璧。お前たちは………のだから」

後から上がってきたレイとルイに二階の搜索を任せ、階段を上っていく。

三階の奥の方の部屋から光と共に声が漏れている。

「人間の………ことで、………にすることができ
る」

万が一に備え、ハイパーガンを太もみに巻きつけてあるレッグホルスターから抜き、構えながら進む。

近づくにつれて声はつきり聞こえるようになっていく。

「怖がることはない。お前たちはこの私の下僕になるのだ。光栄に
思うがよい」

辻野はそれを聞いて確信した。

こいつらは時空侵略者に間違いないと。

優子 side

気がつくとも体を縛られ、猿轡を噛まされて床に転がされていた。声を出そうとしたがまだ麻酔が効いているようで声が出ない。

― たしか私は愛子と帰っていて・・・

と思いだしたところで慌てて工藤を捜す。

自分の斜め前で同じように縛られている工藤を見つけ、大丈夫？とアイコンタクトを取ると工藤は小さく頷く。

周りを見ると自分と工藤以外にも6人ほど同じように捕らえられていた。

工藤が無事で少し安心した優子は考えをめぐらす。

― それにしてもここはどこなのだろう？

視界の片隅に手術台の様な物が見える事からどこかの病院だろうと見当をつける。

― なぜ誘拐されたのだろう？

そんなことを考えていると女性の声が聞こえた。

「こんにちは、皆さん！準備は整った。すべて完璧。まあ、これから何が起こるのか言っても無駄だろう。なんせお前たちの科学力ではわからないのだから。」

スーツ姿の女性が視界に入ってくる。だがその女性は明らかにおかしかった。昆虫の複眼の様な眼をしていた。その巨大な目が顔の半分を占めているのだ。

― なっ、何なのよアレ！？

と恐怖で動けなくなってしまう優子。しかしそんな優子に構わず話を続ける

「人間の脳に私の因子を植え付けることで、その人間を下僕にすることが出来る」

優子はこれは夢なんだと必死に目をつぶったが化け物の声が耳に入ってくる。

「怖がることはない。お前たちはこの私の下僕になるのだ。光栄に思うがよい」

屈強な男が何人か出てきて、優子無理やり立たせ、女の前に跪かせる。

女の口から一メートルほどの舌が出てくる。優子は心の中で叫んだ。

― 誰かつ、助けて！！！

パシユン、パシユン、パシユン、パシユン・・・

という音と共に女の化け物やその配下の男たちが倒れる。

すると部屋の入口から白いヘルメットにメタリックレッド色の服、その上に黒いタクティカルベストを着た男が銃を持って入ってきた。ヘルメットとベストの左胸にはTPCと書かれた白いエンブレムが描かれている。その男は

「大丈夫ですか！？」

と言いながら近づいてくる。遠くからではヘルメットのバイザーが邪魔で顔が見えなかったが近くで見ると、優しそうな顔をした同い年のような感じの青年だった。それが辻野と優子の出会いだった。

辻野 side

二階を搜索しているレイとルイに三階で行われていることを伝える辻野。

辻野はレイとルイの到着を待つつもりでいたが、あの化け物の部下だと思われる男たちが捕まっていた人々の内の一人である女の子を無理やり立たせ、化け物の前まで連れて行き無理やり跪かせる。

時間がないと判断した辻野は仕方がなく一人で突入した。

ハイパーガンで敵を全員倒し、女の子の縄を解こうと思い近づくがその顔を見た時、一瞬動揺してしまった。その女の子は自分の天敵であるサワイ・ユイにそっくりだったのだ。動揺が顔に出ていないことを祈りながら

「大丈夫ですか？」

と声をかけると小さく頷いたのでホッとす。

足音がしたので振り返り、ハイパーガンを構えるが、レイとルイだったので銃を下ろす。

捕まっていた他の人達の縄も解いていく。

ガタン

振り返ると死んでいたはずの化け物の女がよろめきながら立ち上が

い
叫
ぶ。

「わが主の計画を台無しにしたその罪、命で払ってもらおう！」

迷わずハイパーガンを撃ちこむ辻野。

化け物は今度こそ死んだ。しかし今度は地面が揺れ始める。

「まさか……」

辻野が忌々しげにつぶやく。

辻野たちのいるD - 4地区の隣のD - 5地区の地面を突き破って怪獣が現れる。

「キシヤアアアアアア——！！！！！」

ドラえもんの世界で最初に戦った奴とほとんど同じだった。そいつがこっちに向かって来る。

「ルイさん、レイさん！僕が囹になっっている間にこの人たちをジープとデ・ラムに分乗させて、ここから避難して！」

ルイとレイは頷き、捕まっていた人たちを車の方に誘導し始める。窓から怪獣の姿を見たサワイ・ユイそっくりの女の子が大声で

「あんた、正気？あんな怪獣相手に何ができるっていうの！？」

と顔をしかめながら訊ねてくる。

性格までそっくりだなと内心、苦笑しながら答える。

「人として、自分ができる事をするんだ。」

という言葉からなぜか彼なら大丈夫。そんな気がするのだ。

そんなことを考えていると急に辺りが明るくなる。

何事かと思いい外を見るとそこには赤と青紫と銀色の巨人が立っていた。

「テヤッ！」

こうして邪悪な時空侵略者を倒すべくウルトラマンティガがこの世界に降り立ったのだった。

出会い

（時空侵略尖兵怪獣グラビリス？登場）（後書き）

次回予告

Fクラスに編入されることとなった辻野はそこで個性豊かな仲間たちと出会う。

そして始まる学校生活。いったい何が辻野を待ち受けているのだろうか？

次回、『バカと辻野とFクラス』

乞う、ご期待下さい！

バカと辻野とFクラス

(時空侵略尖兵怪獣ゲラピリス?登場)(前

ご意見、ご感想お待ちしております!

慌てて今日からお世話になる文月学園の制服を着て鞆を持ち、格納庫に行く。

「これでいくか．．．」

目の前にはGUTS及びTPCの隊員が愛用している「バイク便」こと、高性能オートバイ スタッグだ。黒い車体には白い文字でGUTSと書かれているバイクに跨る辻野。

「スタッグ2号、出動します！」

格納庫から飛び出して、一路、学校に向かう辻野。

「初日から遅刻なんてヤダアアアアー！！」

バイクの爆音と辻野の叫び声が響き渡った。

（工藤side）

昨日の一件のせいではなかなか寝付けず寝坊してしまった工藤は走っていた。

昨日の夜、車から降ろしてもらった被害者一同は一晚中、警察で事情を説明していたのだが相手にしてもらえなかったのだ。

「親には怒られるし、先生にも注意されるし、寝坊するし．．．」

思わず溜息をつく工藤。

それにしても昨日のあの青年は何者だったんだろうか？

「また会えないかなあ」

などと考えているとすると後ろから

ブオオオオオオオオ

という音が聞こえてくる。振り向くと文月学園の制服を着た男がバイクで爆走しているのだ。

しかもその男は自分たちを助けてくれたあの青年だったのだ。

工藤はヒッチハイカーのように親指を突き立てる。

すると工藤の横でバイクが止まり、青年は

「どうかしましたか？」

と訊ねてくる。

顔が赤くなるのを必死に隠しながら

「遅刻しそうなんで一緒に乗せてくれないかな？」

とお願いする。するとあっさり

「いいですよ！」

と言ってくれた。

「あっ、ボクは2年A組の工藤愛子です。よろしくねっ」
とバイクに跨りながら自己紹介する。
すると青年の方も自己紹介をする。

「今日から文月学園でお世話になります辻野雄弥です。よろしくお願います！」

バイクで文月学園に向かう二人。
辻野に工藤が質問する。

「辻野君、昨日私たちを助けてくれたよね？」

その問いに対し辻野は

「さあ、何のことですか？」

ととぼける。が工藤は

「白いヘルメットにレーザー銃ってどんな仕事してるの？」

と辻野の答えを無視して質問してくる。

「警備員の仕事をバイトでやってるんです・・・」

と苦し紛れに答える以外なかった。

間違いなく嘘だと見破られると覚悟していたが工藤は

「へえ。そうなんだ。」

と言って納得してくれた。

――納得したらだめだろ！

と心の中でツツコム辻野だった。

自転車置き場にバイクを置き、工藤と別れ、職員室に向かう辻野。職員室の場所が分からず探し回っていると優しい顔付きの男子が

「ぼくのカロリーがー!!!」

と地面に落ちているパンを見つめながら泣いていた。

なんだか可哀想に思えたのでポケットからカロリーメ。トを出して男子の手に握らせる。

するとその男子はありがとうと言って手を握ってきた。
一応初対面なので

「辻野雄弥です」

と挨拶するとその男子も自己紹介した。

「吉井明久です」

吉井君に職員室の場所を教えてもらい、やっとのことで職員室に辿り着く辻野。

職員室に入ると学年主任である高橋洋子先生に会いに行く。

高橋先生から試験召喚システムや試験召喚戦争に関する説明を受けた後、ゴツイもみあげを持つ筋肉ムキムキのゴリラの様な人の前に連れて行かれる。

「この人が君が編入されることになる2年Fクラスの担任、西村宗一教諭です」

いくら見た目が人間離れしているとはいえ、一応担任なのできつちりと挨拶する。

「本日付で2年Fクラスに転入することになりました辻野雄弥と申します。よろしく願います。」

「担任の西村だ。よろしく頼む。」

なかなか人柄はよさそうなので一安し・・・

「今、ゴリラの様な見た目の割にはいい人そうだとか考えなかったか？」

「そんな訳ないじゃないですか！」

西村先生の追及を慌てて否定する辻野。

辻野は西村先生の勘の良さに衝撃を受けていた。

コノヒト、ニンゲンジャナイ・・・

そんな人間離れした西村先生に先導されFクラスに入る辻野。

かび臭い澱んだ空気

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

本当にここは学校なのだろうかと思わずにはいられない。しかし今はクラスメートの前だと自分に言い聞かせさわやかな笑顔で挨拶した。

「今日からFクラスでお世話になります辻野雄弥です。よろしくお願ひします！」

——あれ？女の子以外誰も拍手してない。どういうことだ・・・？

辻野の疑問はすぐに解決した。

『須川！！！転校生は女子じゃなかったのか！？』

『須川アアアああー！！！！貴様、騙しやがったなアアアアー！！！！！！！！！！』

ダッ（須川が逃走する音）

『奴が逃げたぞおおおー！！！！』

『逃すなあっ！！追撃部隊を編成しろ！！』

『サーチ&デース！！』

辻野は思った。こんな学校で生きていけるのだろうか・・・

バカと辻野とFクラス

(時空侵略尖兵怪獣グラビリス?登場)

(後

次回予告

そして始まる想像を絶する学園生活。木下優子と工藤愛子に目をつけられた辻野はFFF団との全面戦争に突入する。果たして辻野は生き残ることができるのか?

次回、『男はつらいよ』

乞う、ご期待下さい!

男はつらいよ

(巨大異形獣サタンビソー登場) (前書き)

ご意見、ご感想お待ちしております！

男はつらいよ

（巨大異形獣サタンビソー登場）

（辻野side）

『諸君。ここはどこだ？』

『『最期の審判を下す法廷だ！』』

『異端者には？』

『『死の鉄槌を！』』

『男とは？』

『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』

『宜しい。これより——2・F異端審問会を開催する！』

覆面をつけた男たちが鞭や蠟燭を手に縄で縛られ床の上に転がされた須川を取り囲み唱和している。

それは中世の魔女狩りを思わせる光景だった。

この後、須川に降りかかった悲劇は説明の必要がないだろう。

拷問、尋問、拷問、尋問、拷問、拷問、拷問、拷問、処刑…

須川への肅清が済み、元のFクラスに戻ると二人組の男子が話しかけてくる。

「このクラスの代表の坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「吉井明久です。よろしく」

坂本と吉井にもう一度自己紹介する。

「辻野雄弥です。よろしく！」
すると坂本が吉井を指して

「こいつの肩書は《観察処分者》だ」

と吉井さんの汚点を暴露する。

「それってバカの代名詞なんじゃ……」

と思わず訊き返すと吉井さんは慌てて反論する。

「ち、違つよっ！ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

そんな荒唐無稽な言い訳を

「明久よ。その言い分には無理があると思つのじゃが」

と後ろから発せられた言葉に遮られる。振り返るとそこには男子用制服に身を包んだサワイ・ユイそっくりの美少女が立っていた。思わずドッキリしてしまう辻野。

「木下秀吉じゃ。よろしくなのじゃ」

自己紹介をする秀吉に

「辻野雄弥です。よろしく」

と自己紹介しながら、この人は男子なのだろうか？それとも女子なのだろうか？

昨日は女子用制服を着ていたから女子？でも今は男子用制服を着てるし…

と必死に考える辻野。

辻野が何を考えているか察した秀吉が

「わしはれっきとした男じゃからな」

と期待していたのとは正反対の性別が自分の性別だと言い放つ。少し残念に思いつつもサワイ・ユイそっくりの男って、と辻野が爆笑しそつなのを堪えていると秀吉の横に寡黙そうな男子がスッと現れ自己紹介する。

「……………土屋康太」

吉井が土屋康太について補足説明する。

「彼はみんなから寡黙^{ムツリ}なる性識者^二って呼ばれているんだ」

「……………（ブンブン）」

とんでもない補足説明を顔と手を左右に振ることで必死に否定する土屋。

だがその顔には女子のスカートを覗いていた際についたと思われる畳の痕がついていた。

するとこのクラスの子二人がやってくる。
背の高いスレンダーな体系の女子がまず自己紹介する。

「島田美波です。趣味はアキを殴ることです　よろしくね！」

あまりにも斬新な自己紹介に本気でツツコミを入れるべきか悩みつつ、それを感じさせないような笑顔でこちらも自己紹介する。

「辻野雄弥です。よろしく！」

横で吉井が騒いでいるが無視する。もちろん、命が惜しいからだ。
すると今度は小柄だが大きい胸を持つかわいらしい女子が自己紹介してくる。

「姫路瑞希です。よろしくお願いします！」

何たる眼福と内心呟きながらそれを感じさせないとびっきりの笑顔で

「辻野雄弥です。こちらこそよろしく！」

と答える。すると須川や近藤、内田といったFクラスの人々が次々と自己紹介してくる。

それに応え、Fクラスの人々と親交を深めていると教室の扉が開かれる。

そこの立っていたのは…

（優子 side）

昨日の出来事のせいでいま一つ授業に集中できない優子。休み時間になってもぼんやりと窓から外の景色を眺めていた。そんな優子に工藤が話しかける。

「昨日のこと考えてるの？」

「まあね…」

と答えながらも実は別のことを考えていた。すると工藤はいたずらっ子のような笑みを浮かべて優子の耳元で囁く。

「昨日の白馬の騎士のことを考えてたのかな？」

図星を衝かれ、優子は顔を真っ赤にしながら

「そ、そんなわけないでしょー！」

と怒る。見え見えなのに隠そうとする優子の態度に苦笑しながら今朝、辻野に会ったことを話す。すると優子は

「何でそんな重要なことを話してくれなかったのよ！」

と言いながら教室を出ようとする。

「どこ行くの？」

と質問する工藤に

「振り分けテストを病気で受けられなかった転校生が今日からFク

ラスに来るって秀吉が言ってたのよ!」

と答えながらFクラスを目指して走る優子。それを追う工藤。Fクラスのドアを開け中に入るとFクラスの生徒たちと談笑している辻野がいた。

「辻野side」

男子用制服を着た秀吉が横にいて、教室の出入り口には女子用制服を着た秀吉が立っている現状に困惑する辻野。思わず

「クローンなのか!?!いや、ドッペルゲンガー!?!まさか、メ
ンジユラ!?!」

と呟く。そんなつぶやきを聞いて秀吉が

「まず双子という風に考えるのが普通だと思うのじゃが…」

と辻野の呟きにツッコミを入れ、優子に向き直り

「どうしたのじゃ、姉上?」

と話しかける。それに対して

「転校生が来たって聞いたから挨拶しに来たのよ!」

そう言って辻野に向き直りなぜか顔を赤くしながら

「2年A組の木下優子よ。そこにいる秀吉の姉です。よろしく」

と挨拶する。優子の後ろに隠れていて見えなかった工藤も出てきて挨拶する。

「辻野君、また会ったね。それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。優子と同じくAクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」

想像をはるかに絶する自己紹介にポーカーフェイスが得意な辻野も哑然とした表情を隠せずにいた。

顔を真っ赤にして辻野をチラリと見ては目を背ける優子を見て秀吉が

「まさか昨日、姉上が一目惚れした相手は…っ！…！」

と目を丸くして呟く。その呟きを聞き逃すほどFクラスの生徒は甘くない。

『『『何だとおおおお！！！！！！！！！！』』』

さらに工藤が

「今日はバイクに乗せてくれてありがとう！すっごくカッコよかったよ？」

とFクラスの男たちの心（嫉妬心）に火をつける。

『辻野おおおお。転入早々、やってくれるじゃねえか！！！！！！！！！！』

『覚悟はできてるんだろっな!』

ダッ (辻野が鞆を持って逃走する音)

『逃すなあああ!』

『全部隊を出動!』

『『『応っ!!!』』』

校舎内を逃げ回るが徐々に追い詰められ始める辻野。

スタンガンに金属バットと情け容赦のないFFF団に対して反撃を決意する辻野。

隊員養成機関ZEROで学んだ格闘術を駆使し、一人、また一人と地面に沈めていく。

ミゾウチへの強力なパンチと脳天を確実に捉える痛烈なキック。

島田と姫路に取り押さえられ動けない吉井と黒い髪の毛の美少女に「・・・・・・浮気は許さない」とアイアンクローをきめられている坂本、ため息をつきながら演劇の台本を読んでいる秀吉、写真機の手入れをしているムツツリー二、教室で仁王立ちして不気味な笑みを浮かべている内田以外の全員を撃破する。
内田が余裕そうに話しかけてくる。

「さすがだね、辻野君。でも私にかてるかな?」

後ろで倒れている須川が苦しげに

「異端者殲滅指導員、後を頼む!」

と言う。

内田はその言葉を聞きニヤリと笑い叫ぶ。

「嫉妬、怒り、悲しみ…負の心の力、いや、闇が私に集まってくる
……！」

内田は辻野を指さし叫ぶ。

「君のように光が満ち溢れている人間が嫌いなんだよおおおおー
……！！！」

そして内田は強烈な光と共に巨大な怪獣へと進化した。
黒い体に鋭い爪を持つ手。頭から腰にかけて黄色い筋が一本通っている。

「フウオン、フウオン、フウオン、フウオン」

パトロール中だったレイは慌ててシャーロックを停車させる。

「あれは…サタンビゾー…」

男はつらいよ

（巨大異形獣サタンビゾー登場）（後書き）

次回予告

この世界に存在するはずのない敵、サタンビゾーと戦う辻野。
そんな辻野にユザレは真実を告げる。

辻野は重大な決断を迫られる。

次回、『闇への鎮魂歌』

乞う、ご期待下さい！

闇への鎮魂歌

（巨大異形獣サタンビソー登場）（前書き）

ご意見、ご感想お待ちしております！

闇への鎮魂歌

（巨大異形獣サタンビゾー登場）

今までに見た事もない異形の怪獣サタンビゾーを目にし

「あの化け物は一体、何なんだ!？」

と辻野は叫ぶ。すると通信機がレイからの通信を受信する。

「辻野さん、あれは他の世界の怪獣サタンビゾーです!」

「一体どういった怪獣なんだ!？」

「精神寄生体に同化された人間が変身した怪獣です!顔面からの破壊光線と両腕から放つ破壊光弾、接近戦では両腕の甲に付いた伸縮自在の鋭い爪を使って攻撃してきます!」

サタンビゾーは顔面の黄色い部分からビームを放ちビルを破壊する。さらに両腕の爪を伸ばしビルを真つ二つに切り裂く。

辻野はレイに街の人の避難誘導を指示し、自身も文月学園の生徒たちの避難誘導を行う。

優子や坂本、FFF団の人達も悲鳴を上げながら逃げていく。

「フウオン、フウオン、フウオン、フウオン」

と咆哮し街を破壊するサタンビゾー。

学校の鞆からハイパーガンを取り出し、レーザー弾カートリッジを装填する。

運動場に出て辻野はサタンビゾーに向けてハイパーガンを構える。引き金を引こうとしたその瞬間、辻野は光に包まれた。

光が弱まるとそこは誰かの家の中だった。

「ここはどこなんだ？」

そう辻野が戸惑っていると後ろからいきなり男の声が聞こえてくる。

「お前みたいな奴は目障りなんだよっ！！」

振り返るとビール瓶を持った四十代くらいの男が汚い言葉で罵倒しながら、正座している内田を殴りつけている。

急に場面が変わる。内田は三十代半ばに見える女に頭を下げている。

「この高校に行きたいんだ！お願いだから行かせてください、お母さん！！」

そんな内田の必死の懇願に対してお母さんと言われた女は

「あんたみたいなクズじゃ無理だね！」

と内田を嘲る。そんな母親に

「もし受かったら行かせてもらえますか」

と嘲られながらも頼み込む。すると女は

「受かったらね」

とまるで受かることを期待してないように言う。

また場面が変わる。合格通知を握りしめた内田が母親に対して泣きながら怒鳴り散らしている。

「受かったのにどうして行かせてくれないんだ！」

母親は素っ気なく答える。

「あんたみたいな人間のカスにそんな高い金出す訳ないだろ。あんたみたいな奴は学費の安い学校に行きゃいいんだよ。」

怒りのあまり震える内田。またしても場面が変わる。文月学園の体育館裏のようだ。

Bクラスのマークのついた制服姿の内田は同じく制服姿の女子と向き合っていた。

「私と別れてくれない」

「友香、俺のことが好きって言ってたのにどうして・・・」

「ハッ、バカじゃないの！あんたみたいなグズで鈍間な奴、好きになるわけないじゃない！！」

と嘲笑しながら答える女子。その女子はさらに続ける。

「あんたの親が医者であんたがお金を持ってたから遊んであげただけよ。私、これからは根本君と付き合うことにしたから、もう話しかけてこないでね。」

そう一方的に言う立ち去る女子。そこには涙を流す内田だけが残

っていた。

「これは一体・・・」

そう辻野が呟き考えていると後ろからその問いの答えを告げられる。

「ここはあの少年の記憶の中・・・」

振り返るとそこにはユザレが立っていた。

「内田さんの記憶の中なのか!？」

そう辻野が問いかけるとユザレは悲しげな顔で頷く。

二人が会話している間にも次々と内田の記憶が展開されていく。

家庭教師に罵られる内田。クラス全員からいじめられる小学生時代の内田。暴走族にリンチされるも暴走族の仲間に警察上層部の人間の娘がいたため警察に訴え出たにもかかわらず泣き寝入りするしかなかった内田。文月学園の船越先生に単位を得るには十分な点数を取っているにもかかわらず単位を盾に関係を持つよう迫られる内田。ユザレは語る。

「あの怪獣は精神寄生体が少年と一体化し少年の心の中の怨念を具体化した存在・・・」

その言葉を聞いて辻野はまさかと思いつつ

「つまりあの怪獣は内田さんそのものだということのか?もしそうなら僕はどうしたらいいんだ!？」

とユザレに訊ねるがユザレは

「あなたは光であり、人である。答えは自分で出さなければならぬい．．．」

と謎めいた言葉を発し、消えていく。

「ユザレエー!!」

辻野はそう叫びユザレ近づこうと一歩踏み出すがその瞬間、辺りが強烈な光に包まれる。

思わず目をつぶってしまう辻野。目を開き辺りを見回すとそこは先ほどまでいた学校の運動場だった。サタンビゾーは

「フウォン、フウォン、フウォン、フウォン」

と吠えながら街を破壊していく。辻野は体育館の裏手へと走り、周りに誰もいないか確認した後、ポケットからスパークレンスを取り出す。内田の記憶を思い出し、少し迷うがユザレの

「あなたは光であり、人である。」

という言葉进行思い出し、迷いを断ち切る。

「人として自分ができる事をすればいいんだ!」

と自分に言い聞かせ、辻野はスパークレンスを掲げた。

く明久sideく

姫路と島田に関節技を掛けられていた吉井は気を失っていて気がついたらみんな避難した後だった。

「姫路さんも美波も僕を置いていくなんてひどいなあ」

誰かいないか探していると赤い文字でGUTSと書かれた黄色いスポーツカーが目の前で停まり、窓から美人な女の人が顔を出し

「こんな所で何してるの！？早く乗って！」

ときつい口調で言われて仕方なく助手席に乗る。吉井はバックミラーに映る怪獣を見て

「それにしても内田君はどうしてあんな姿に・・・」

と思わず呟いてしまう。そんな呟きが聞こえていたらしく運転席の女の人が話しかけてくる。

「あなたの知り合いがサタンビゾーになったの？」

吉井は怪獣の名前を知っているこの女の人があの怪獣について何か知っているのではないかと思い

「なんで内田君はあんな怪獣になってしまったか知ってるんですか
！！」

と訊ねる。すると女の人は前を向いたまま答える。

「精神に寄生する生命体が人間と一体化し、その人間の負の感情を

用いて怪獣化したものです」

吉井は頭は悪いがこういうテレビゲームとかに出てきそうな話にはついていくことができた。

「エエエええ！！そんな事って・・・」

そこまで言って吉井は今朝のニュースでやっていた昨夜の巨人のことを思い出し反論できなくなる。するとバックミラーが輝く。何事かと後ろを見るとそこには赤、青紫、銀の三色で構成された巨人が立っていた。

〈辻野 side〉

「シュアッ！」

「フウオン、フウオン、フウオン、フウオン」

サタンビゾーに対してファイティングポーズをとるティガ。同じようにティガに対して構えるサタンビゾー。

サタンビゾーはティガに近づき両腕の長い爪を振り回す。それを避け続けるティガ。

ティガが本気でないと見抜いたサタンビゾーがさらに攻撃を加える。両腕の爪でティガの体を切り裂く。

体の切り裂かれた部分から血のように光が飛び散る

「テュアアアアア！！！」

苦しみながら倒れるティガ。サタンビゾーはそんなティガを踏みつけた後、街を破壊し始める。ティガは立ち上がるとそんなサタンビゾーを止めようと後ろから羽交い絞めにする。そんなティガを振りほどき蹴り倒す。

「フウオン、フウオン、フウオン、フウオン」

転がって距離をとったティガにレーザーを連射するサタンビゾー。ティガは両手の平でシールドを作り、防御しようと試みるもシールドを突破され体中にレーザーを浴びる。

「シエアアアアッ!!」

ピコン・・・ピコン・・・ピコン・・・

とカラータイマーが警告音を発しながら点滅し始める。

ティガはもがきながらも立ち上がり頭部のクリスタルに手を添えて金色の光線、セルチェンジビームを発するがサタンビゾーはそれを吸収してしまう。

カラータイマーがさらに激しく点滅し始める。

ピコンピコンピコンピコンピコン・・・

サタンビゾーがレーザー光線でさらに追い打ちをかける。転がり、必死に避けるティガ。サタンビゾーはレーザーが地面に命中したことによる土埃のせいでティガを見失う。ティガはその間に、両腕を交差して必殺技のゼペリオン光線を放とうとするが内田のことを思い出し躊躇してしまう。その時、

「内田君！もういいだろ!!!!」

そんな声が聞こえてきた。サタンビゾーもティガもその声の主を捜す。そしてその声を発した人物を見て驚くティガ。その人物は吉井明久だった。

女の人から怪獣の正体を聞いた吉井はいても立ってもいられず、女の人の制止を無視して車を飛び降りてサタンビゾーと巨人の近くまで来たのだった。吉井は必死にサタンビゾーに語りかける。

「君が今までどんなに辛い思いをしてきたのか僕にはわからない。でも…だからと言ってこんなことをしてどうするんだ！内田君が試召戦争の時に言ってたじゃないか！！」何があっても暴力はいけない』って！！だからもうこんなことはやめようよ！！！！」

吉井の言葉を聞いて我に返ったらしく、両腕の爪を縮め、辺りを見回し呆然としているサタンビゾー。自分のしてしまったことに今更ながら後悔しているようだった。そして何かを決意したサタンビゾーはティガの方を向く。

サタンビゾーは両手からレーザーを連射しながらティガに向かって突っ込んでいく。

ティガは仕方がなく素早く両腕を交差し、左右に大きく広げてエネルギーを集約して、L字型に腕を組み、ゼペリオン光線を放った。

ゼペリオン光線を受け消滅するサタンビゾー。
辻野は素早く変身を解き、廃墟の中倒れている内田を抱きかかえ、話しかける。

「内田さん！しっかりしてください！！」

吉井も内田のそばに駆け寄り内田に呼びかける。

「内田君！！」

すると内田はうつすらと目を開き、辻野と吉井に向かって弱々しく微笑みながら

「・・・ありがとう」

と呟き、目を閉じた。徐々に温もりが消えていく体を抱きしめ辻野は

「もう誰からも酷い目に遭わされずに済むんだ。だから安心して眠れよ・・・」

そう呟き、吉井と二人で泣いた。

二人の泣き声がいつまでも廃墟の中から聞こえ続けた。

闇への鎮魂歌

(巨大異形獣サタンビソー登場) (後書き)

次回予告

Fクラスの騒がしい日常にうまく溶け込む辻野に合宿という危機が迫る。

そのころ優子は辻野にどう告白しようかと策を練っていた。

次回、『悪夢の合宿 パート1』

乞う、ご期待下さい！

悪夢の合宿 パート1（前書き）

更新が遅くなっていました。申し訳ありません。

悪夢の合宿 パート1

〔坂本 side〕

坂本は黒髪的美少女と登校していた。

「翔子」

「……………隠し事なんてしていない」

「まだ何も言っていないぞ？」

「……………誘導尋問は卑怯」

「今度誘導尋問の意味を辞書で調べて来い。んで、今背中に隠したものはなんだ？」

「……………別に何も」

「翔子、手をつなごう」

「うん」

「よつとーふむ、MP3プレーヤーか」

「……………雄二、酷い……………」

「機械オンチのお前がどうしてこんなものを……………何が入っているんだ？」

「……………普通の音楽」

ーピッ 《優勝したら結婚しよう。愛している、翔子》

「…………………………」

「……………普通の音楽」

「これは削除して明日返すからな」

「……………まだお父さんに聞かせてないのに酷い……………手もつないでくれない……………」

「お父さんってキサマーこれをネタに俺を脅迫する気か!？」

「……そうじゃない。お父さんに聞かせて結婚の話を進めてもらうだけ」

「翔子、病院に行こう。今ならまだ2、3発シバいてもらえば治るかもしれない」

「……子供はまだできていないと思う」

「行くのは精神科だ！ーん？ポケットにも何か隠していないか？」

「……これは別に大したものじゃない」

「えゝ、なにになに？『私と雄二の子供の名前リスト』か。……・ちよつと待てやコラ」

「……お勧めは、最後に書いてある私たちの名前を組み合わせたやつ」

「『しょうこ』と『ゆうじ』で『しょうゆ』か。……なぜそこを組み合わせるんだ」

「……きつと味のある子に育つと思う」

「俺には捻くれ者に育つ未来しか見えない」

「……ちなみに、男の子だったら『こしょう』が良い」
「『しょうゆ』って女の名前だったのか……」

坂本にとって悪夢の一週間の幕開けだった。

〈優子side〉

木下優子は最近新しく出た乙女小説の事について……ではなく片思い相手である辻野雄弥について悩んでいた。

「はぁ……」

「どうしたのじゃ、姉上？溜息なぞついて」

溜息を聞いて心配そうに話しかける秀吉。優子は他に相談する相手がいないので仕方なく秀吉に

「秀吉。アタシ、どうすればいいんだろう・・・？」

と訊ねる。何の話かわからない秀吉は困惑してしまう。

「な、何のことを言っておるのじゃ、姉上？」

説明不足だった事に気がついた優子が辻野のことを話す。秀吉は困ったような顔をして優子に助言する。

「姉上、悩んでおっても仕方がないと思うぞい。好きなら好きと本人に直接言ったらどうなのじゃ？」

すると優子が珍しく弱気な発言をする。

「でも辻野君がアタシのことどう思っているかわからないし・・・。秀吉、辻野君がアタシのことどう思ってるかそれとなく聞いてくれないかしら？断られたらアタシの沽券にかかわるし・・・。」

そんな優子に秀吉は思わず

「そうじゃのう。姉上が美少年同士が絡み合う小説を読むのが好きと知ったら・・・あ、姉上っ！ちがつ・・・！その関節はそっちには曲がらなっ・・・！！！」

木下秀吉、姉である優子からの教育的指導を受け、逝く。享年十六歳

「わしはまだ死んではおらぬぞ！！！！」

＼明久side＼

「もしかすると、僕にもいよいよ春が．．．!!」

吉井はロッカーの中から出てきた《吉井明久様へ》と書かれた封筒を持って、高揚感に包まれながら屋上に向かって走る。屋上へと続く鉄製のドアを開け、青空の下に出る。

誰もいないことを確認し、緊張で手間取りながらも封筒を開ける。

高鳴る胸の鼓動。

暖かい日差し。

雲ひとつない青空。

穏やかな微風

そして…

『あなたの秘密を握っています』

恋文からは程遠い脅迫状。

「最悪じゃああああっー!!!!」

吉井の絶叫が学校中に響き渡った。

＼辻野side＼

サタンビゾーの出現から三日たち、街は元の静けさを取り戻しつつ

あつた。

「最悪じゃああああっー！！！！」

とどこからか吉井の悲鳴が聞こえてきたが辻野はどうせ坂本か島田にいらぬことをされたのだろぅと思いつつ挨拶をしながら教室に入る。

「おはよう」

すると近くにいた秀吉、島田が挨拶を返してくる。

「おはようじゃ、辻野」

「おはよう辻野」

辻野が自分にあてがわれた卓袱台に荷物を置いていると見るからに落胆した様子の吉井が教室に入ってくる。秀吉が心配そうに声をかける。

「明久。一体何があつたのじゃ？」

そんな問いに無理やり笑顔をひねり出し

「べ、別になんでもないよ。あははっ」

と答える吉井。そんな吉井の顔を見て辻野が

「目が死んだ魚みたいになってますよ？」

と心配そうに顔を覗き込む。

「そ、そんなことな．．．」

と誤魔化そうとするが島田に遮られる。

「ウソばかり。さっき窓から奇妙な叫び声が聞こえてきたし、何か隠してるでしょう?」

「あ、美波おはよう。ところでさ．．．」

話の矛先を吉井は必死に逸らそうとするが島田は追及をやめない。

「何を隠しているのかしら? まさか．．．」

クラスをカオスな状況にするその先の一言を阻止するべく辻野が口をはさむ。

「それって短歌・俳句同好会の勧誘文ですか?」

ホツとしたような吉井の顔を見て、惨劇は回避されたかのように見えたが

「なんだ、そうだったの。まあ、どう考えてもアキがラブレターなんてもらえるわけないわよね」

そんな島田のきつい物言いに吉井が

「ふふん! そのまさかさ!! 今朝僕の靴箱にラブレターが」

と思わず答えてしまい．．．

ザッ （辻野が吉井を床に押し倒す音）

ヒュンヒュン！！ （カッターが二人の上を通り過ぎる音）

「「「チッ！！！」」」 （クラスメート達の舌打ち）

とクラスが戦場が変わる。吉井が手紙はラブレターではなく脅迫状だった事を説明し何とか場を収める。

「あ、なんだ。よかったあ」

と胸を撫で下ろす島田の態度に辻野は疑問を抱きながら脅迫状を見せてもらう。

「『あなたの傍にいる異性にこれ以上近付かないこと』か。脅迫理由は嫉妬と見てまず間違いなさそうですね」

と辻野が冷静に分析する。秀吉は

「何をネタに脅迫を受けておるのじゃ？」

と吉井に訊ねる。それに対して吉井は

「あ、そういえばまだ知らないや。なにに、『この忠告を聞き入れない場合、同封されている写真を公表します』か」

といかにも能天気なことを言う。辻野が同封されていたもう一つの封筒の中身を改める。中から出てきた三枚の写真を見て辻野は吉井と顔を合わすことができなくなった。

「趣味は人それぞれですから・・・」

と言いつつ吉井と秀吉に写真を渡す。その写真を見て吉井が

「つ、辻野君！こ、これは誤解なんだ！！そ、その・・・」

と必死に誤解を解こうとするもうまくいかない。

メイド服姿の吉井の写真を見てしまった辻野からしたら当然の反応だろう。

どんどん立場が悪くなる吉井は

「もういやああああー！！！！！！！！！！」

と叫ばずにはいらなかった。すると後ろから、

「大丈夫ですか、明久君」

と可愛らしい声が聞こえてきた。

吉井は慌てて振り返り、

「おはよう、姫路さん。何でもないよ」

と答える。辻野と秀吉も

「姫路さん、おはよう」

「姫路か。おはよう。今朝は遅かったんじゃない」

と挨拶する。姫路は男なら誰でも見とれるような笑顔で

「はい。途中で忘れものに気がついて一度家に帰ったので、ギリギリになっちゃいました」

と答える。すると秀吉が急に

「丁度良い。先ほどの写真が騒ぐほどの物ではないと姫路に証明してもらおうとしようかの。姫路、少々良いか？」

などと言い出す。ここ数日間で姫路さんは常識の斜め上に行く人物であることを学んでいた辻野は念のために吉井の後ろに回り込む。そうしている間にも秀吉は姫路に吉井のメイド服姿の写真があったらどう思っかなどと訊ねる。そんな秀吉に対する姫路の回答は想像を絶するものだった。

「もしそんな写真があったら——とりあえず、スキャナーを買います」

そんな姫路の答えに

「へ？スキャナー？なんで？」

と訊ねる吉井。そんな問いに姫路は恥ずかしそうに頬を染めて答えた。

「だって、そうしないと、明久君の魅力を全世界にWEBで発信できないじゃないですか・・・」

音楽室から聞こえてくる合唱曲『翼をください』をBGMに窓から青い大空に向かって

「アイキャンフライ！」

と言いながら飛び立とうとする吉井を辻野が押さえつける。

「吉井さん、落ち着いて！羽ばたくにはまだ早い！！」

「明久、早まるでないぞ！」

「飛び降りる前に専門家に相談したらどうなんです！？」

「そうじゃ！あやつなら脅迫犯を見つけ出してくれるはずじゃ！」

辻野の提案もあり、落ち着く吉井。

「ナイスアドバイスだよ秀吉！流石は僕のお嫁さんだ！」

訂正。まだ落ち着いていないようだ。

「婿の間違いじゃろう！？」

一番の常識人である秀吉の発言に衝撃を受けつつ辻野は土屋に相談しに行く吉井を追いかける。しかし土屋は坂本と真剣そうな顔で何やら話している。

坂本は恋人であるＡクラス代表の霧島翔子がなぜかプロポーズの音声データを持っていたことを問題視し、土屋にその入手経路の調査を依頼していたのだった。

吉井も土屋に事情を説明し、脅迫犯の調査を依頼した。同じ惨めな者同士、気持ちを分かち合う吉井と坂本を横目に土屋からMP3プレーヤーと脅迫状を分析のために預かる。

西村先生が大きな箱を抱えながら教室に入ってくる。

「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。HRを始めるから席についてくれ」

「……………とにかく、調べておく」

と快く引き受ける土屋に

「すまん。報酬に今度お前の気に入りそうな本を持ってくる」

「僕も最近仕入れた秘蔵コレクションその二を持ってくる」

と席に戻りながら坂本と吉井が約束する。僕には報酬はないのかと心の中で愚痴りながら席へと戻る辻野だった。

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、大体のことは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように」

西村先生がドスの利いた声でしおりについて説明している中、前から回ってきたしおりを受け取る辻野。

「集合の時間と場所だけはくれぐれも間違えないように」

普通に学校に集合するものだと思っていた辻野は意外に思う。

西村先生の説明は続く。

「特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとでそれぞれ違うからな」

文月学園のことだからクラスごとに違う扱いをするのも当然かと思

うも、嫌な予感が辻野を襲う。辻野の予感は見事的中した。

「いいか、ほかのクラスと違って我々Fクラスは―現地集合だからな」

『『案内すらないのかよっ!?!?』』

あまりにも理不尽な扱いに辻野は級友達と共に涙を流した。

く????sideく

「チクシヨオオオオオオオオオ!!!!」

精神寄生体が死んだとの報告を部下から受け、部屋の中で吼える。
しかしすぐに落ち着き

「まあ、いい。もう一体の寄生獣を投入しな!」

と部下に命じる。

「楽しい合宿になりそうだね・・・クッククッ・・・ハァーハッハッハッハッ!!!」

悪夢の合宿 パート1（後書き）

次回予告

精神寄生獣の気配を察知するも、優子による辻野への告白作戦と男子による女子風呂覗き作戦のため思うように動けない辻野。果たして辻野は第二の犠牲者を助ける事が出来るのだろうか？

次回、『悪夢の合宿 パート2』

乞う、ご期待下さい。

悪夢の合宿 パート2（前書き）

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であつて、（ ）である』

姫路瑞希の答え
『粒子』

教師のコメント
よくできました。

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
先生もRPGは好きです。

辻野雄弥の解答

『人』

教師のコメント

何故かバツをつけるのを躊躇ってしまいます。

悪夢の合宿 パート2

辻野side

辻野はルイとレイに留守にしている間、ガッツウイング1号とデ・ラムによるパトロールを行うよう指示し格納庫へと向かう。

着替えや教材が入った鞆、GUTSメット、GUTSCOM（PDI）、高感度スキャナー、野戦応急処置医療セット、ハイパーガン、GUTSライフルのパーツが入っている特殊アタッシュケースなどを最高時速800キロメートル以上の超高速特殊自動車シャーロットの助手席に放り込む。

少し軽装備な気もしないのだが西村先生に没収されるわけにはいかないので我慢する。

ルイとレイが見送りに来ている。顔を綻ばせる辻野だったが

「卯月高原って高級な卯月プリンで有名なんですよ！」

「お土産期待してますよ！」

という二人に失望した辻野は、心の中で呪詛の言葉を吐きつつ出発した。

高速道路でネズミ捕りに引っかからないよう気をつけながら運転した結果、四十分で着くはずが予定よりも二十分遅れて合宿所に到着してしまった。

だが誰もまだ到着していないようなので合宿所から少し離れた駐車場にシャーロットを止めて音楽を聴いたり、ご飯を食べたりして時間を過ごしていると何台ものストレッチ・リムジン（胴長の高級車）が駐車場の前を通る。

辻野はたぶんAクラスの人たちだろうと思い、荷物を持って合宿所に歩いて向かった。

（優子 side）

四時間に及ぶリズムジンの快適なひと時も終わり、一緒に乗っていた霧島や工藤、佐藤美穂に続いてリズムジンを降りる。

「・・・・・・・・雄二はまだ来てないの？」

という霧島の呟きに

「Fクラスのバカ達は現地集合だから遅・・・・・・・・」

と優子が答えようとしたその時、目の端に辻野を捉え驚く。自分がFクラスのことをバカにしたことが聞こえていたのではと焦ってしまう優子。

そんな優子に辻野は笑顔で挨拶する。

「こんにちは、木下さん！」

「あつ、こんにちは、つつ、辻野君」

と顔を赤くして答える優子。

「リズムジンで来たんですか!？」

と訊ねる辻野に優子は

「そうよ。辻野君はどうやってここに来たの？」

と逆に質問する。

「親戚の車で近くまで送ってもらったんですよ。それにしてもAクラスってやっぱりすごいなあー！リムジンを使わしてくれるなんて」

と質問に答えつつ素直に驚く辻野を見て優子と一緒に乗らないかと誘えばよかった今更ながら後悔した。

バスで来ることになっていたB、C、Dの各クラスの生徒たちが到着し始めたので、駐車場から移動する辻野と優子。

「辻野君は誰と一緒に部屋なの？」

「吉井さんと木下さん、坂本さん、土屋さんと一緒に部屋です」

「木下さんはどんな本をよく読みますか？」

「（ビクッ）えーと、川端康成とか夏目漱石みたいな文豪の本かな
・
」（汗）」

「へーえ、木下さんって凄いなあ」

などと他愛のない会話をしつつ合宿所に入る。
元々が旅館であつたため当然なのだが、設備や内装を見て思わず

「へー！」

と感嘆の声を上げる辻野だった。

辻野は優子と別れて自分の部屋に荷物を置き、装備の点検をしていると坂本と秀吉、土屋が意識を失っている吉井を抱えて部屋に入ってくる。

「こんにちは．．．一体、吉井さんに何が．．．！」

と挨拶しようとして絶句している辻野に坂本が

「辻野。説明している時間がない！こいつの蘇生が先だ！！」

普通の人間ならパニックに陥るのが当然なのだが、TPCの隊員である辻野は冷静に対処し始める。野戦応急処置医療セットを取り出し、機具を吉井の体に取り付け治療を開始する。

吉井は、「お代官様．．．お許しを．．．」などとうわ言で前世の罪を懺悔し始める。

絶望的な顔をする秀吉。「．．．．．君のことは忘れない」と泣き始める土屋。

吉井に忍び寄る死神と懸命に闘う辻野と坂本は2時間に及ぶ戦いの末に死神を追い返すことに成功した。どうしてこんなことになったのか不思議に思う辻野。

「ん、ここは合宿所？」

と起き上がった吉井が訊ねる。

「ああ、そうだ。全く贅沢な学校だよな。この旅館、文月学園が買い取って合宿所に作り変えたらしいぞ」

と坂本が答えていると部屋に帰ってきた秀吉が

「む。明久、無事じゃったか！よかったのう……。お主がうわ言で前世の罪を懺悔し始めた時には、正直もうダメじゃと……」

と吉井に駆け寄りながら話しかける。

そんな風に吉井が生きていることを祝っていると土屋が部屋に帰ってくる。

「……………ただいま」

吉井が笑顔で土屋をむかえる。

「おかえりムッツリーニ」

そんな吉井を見て土屋の目元が若干緩む。

「……………無事で何より」

吉井がうれしそうに

「あ、心配してくれてたんだ。ありがとう」

と言っのに対し土屋は

「……………情報も無駄にならずに済んだ」

と答える。そんなセリフを耳にした坂本が

「情報？昨日俺と明久が頼んだ例の奴か。随分早いな」

と感心したような素振りをみせる。土屋が自分の発見について説明し始める。

「・・・・・・・・昨日、犯人が使ったと思われる道具の痕跡を見つけた」

そんな土屋を吉井が

「おおつ。さすがはムツツリー二だね」

と褒めるが土屋はそれくらい当然といった態度で説明を続ける。

「・・・・・・・・手口や使用機器から、明久と雄二の件は同一人物の犯行と断定できる」

「そうなのか。まあ、そんなことをするヤツなんて何人もいないだろうし、断定しても間違いはなさそうだな」

と坂本が独り言を言う。辻野は土屋一人がいるだけで十分おかしいと思いつつも、今は非常時だと無理やり自分を納得させる。
吉井が

「それで、その犯人は誰だったの？」

と訊ねるが土屋は申し訳なさそうに首を横に振る。それを見た吉井が

「あ、やっぱり犯人はまだわからないの？」

とガツカリしながら土屋に訊ねる。

「すまない・・・・ただ『犯人は女生徒でお尻にやけどの跡がある』ということしかわからなかった」

と土屋はとんでもないセリフをサラッと言う。

「君は一体何を調べたんだ」

と呆れる吉井。

すると土屋は学校中に盗聴器を仕掛けたことを説明し、その音声データを再生する。

ノイズが混じっており極めて音質の低い声が聞こえてくる。

一つ目は犯人と霧島の坂本のプロポーズの音声データをめぐる会話。そして問題の二つ目。

《―相変わらず凄い写真ですね。こんな写真を撮っているのがバレたら酷い目に遭うんじゃないですか？》

《ここだけの話、前に一度母親にバレてね》

《大丈夫だったんですか？》

《文字通り尻にお灸を据えられたよ。全く、いつに時代の罰なんだか》

《それはまた・・・》

《おかげで未だに火傷の痕が残ってるよ。乙女に対して酷いと思わないかい？》

スイッチを切る土屋。その後を辻野が引き継ぐ。

「使用された機器から犯人に繋がるような皮膚片や毛髪、指紋は採

取できませんでしたが、先ほどの音声データのノイズを可能な限り除去し、音声を解析したところ容疑者を三十人にまで絞り込むことに成功しました」

と報告しながら容疑者をリストアップしたファイルを見せる。

「すごいなあ！」

「マジかよ．．．」

と吉井と坂本が驚愕の表情を浮かべながらファイルを読む。

「うーん、でもこれじゃ足りないなあ」

と吉井が唸る。絞り込めたとはいえども不十分であることは誰から見てもあきらかだった。

「お尻の火傷か．．．。仮にスカートを捲ってまわったとしてもわからない可能性があるし、うーん．．．」

と吉井は悩み、

「赤外線カメラでも火傷の痕なんて映らないだろうしなあ．．．」

と横で坂本も真剣に女子のお尻を見る方法を考えていた。

事情を知らない秀吉がそんな三人を訝しげに見ていたので辻野が事情を説明する。

そんな辻野と秀吉のやり取りを見ていた吉井が使い物にならないアイディアを思いつく。

「そうだ！もうすぐお風呂の時間だし、秀吉に見てきてもらえばいいのか！」

それに対し秀吉がもつともな疑問を吉井に訊ねる。

「明久。なぜワシが女子風呂に入ることが前提になっておるのじゃ？」

そんな秀吉を無視して目を輝かせる吉井に坂本が

「それは無理だ、明久」

と言つて合宿のしおりを見せる。そこには…

合宿所での入浴について

・男子A B Cクラス	・20:00	〽	21:00	大浴場(男)
・男子D E Fクラス	・21:00	〽	22:00	大浴場(男)
・女子A B Cクラス	・20:00	〽	21:00	大浴場(女)
・女子D E Fクラス	・21:00	〽	22:00	大浴場(女)
・Fクラス木下秀吉	・20:00	〽	21:00	個室風呂？

と書かれていた。

「……………くそっ！これじゃ秀吉に見てきてもらつ事が出来ない！」

と悔しそつに床を叩く吉井。

どうすれば犯人を特定できるか五人で唸っていると

—ドバン！

と言う音と共に部屋のドアが開かれ女子がぞろぞろと入ってくる。

「全員手を頭の後ろに．．．」

と先頭の島田が凍りつく。

窓から逃げようとする吉井、坂本、土屋の三人。
何が起ったのか理解できず呆然とする秀吉。
それは別にいいのだが問題は

辻野が片膝を立てた状態で拳銃を女子に向かって構えていることだ。
後続の女子たちも辻野を見て同じように凍りつく。

「辻野、あんた一体．．．」

と啞然としながら呟く島田。そんな島田の様子から辻野は大丈夫だと判断し銃を下ろす。

辻野はいかにも申し訳ないといった顔で銃をしまいながら島田に

「ごめんなさい。ごめんなさい。急に入ってこられたからびっくりしちゃって」

と話しかける。島田は気を取り直し

「木下はこっちへ！そっちのバカ三人は抵抗をやめなさい！」

と木下と窓から逃走を図ろうとしていた三人に命令する。

「デートの誘い方にしてはやけに強引ですね？」

と島田が吉井に気があることを知った上で訊ねる。島田は顔を真っ赤にして反論しようとするがそれに気が付いていない坂本が

「仰々しくそろそろと、一体何の真似だ？」

と鬱陶しげに女子たちと向き合いながら訊ねる。するとどこかで見ただことのある女子が出てきて

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。あなたたちが犯人だつてことくらいすぐにわかるというのに」

と高圧的に言い放つ。辻野は坂本に

「この方はどなたなんですか？」

と質問する。するとそれを聞いていた本人が返事を返してきた。

「Cクラス代表、小山友香よ」

その言葉で辻野は思い出す。内田の記憶の中で内田とお金目的で付き合っていた性悪女がこいつだったと。

「犯人？犯人って何のことさ？」

とまったくもな疑問を口にする吉井に

「コレのことよ」

と小山さんがCCDカメラと小型集音マイクを突き付ける。

「女子風呂の脱衣所に設置されていたの」

それらは吉井達によって設置されたものと主張する女子たち。そんな女子達に吉井らは必死に反論するも却下される。

そして吉井の島田に対するペチャパイ発言で部屋は地獄と化す。

「……………浮気は許さない」 （霧島）

「翔子待て！落ち着ぎゃああああっ！！」 （坂本）

パキユッ！

「姫路さん、美波、拷問なんてダメ！！ストオオオプ！！！！！！」
（吉井）

「真実を認めるまでたつぷりと可愛がつてあげるからね？」 （島田）

「明久君。盗撮は犯罪なんですよ？」 （姫路）

ズシッ！ズシッ！

「辻野君、少しばかりオシオキが必要みたいね」 （優子）

「きつ、木下さん！？僕は関係な……。ヒビキ教官のより強力な関節技って！？！？ダメ！関節はそっちに曲がらな……」 （辻野）

ゴキツ、メキヤツ！

「あ、姉上。そんなことをしたら嫌われてしまうと思うのじゃが・
」 （秀吉）

三十分後。

凄惨な拷問を潜りぬけた吉井達が女子風呂覗きを決意した頃、辻野は合宿所の庭園でPDIが探知した奇妙なエネルギー反応について調査していた。

「エネルギーが微量すぎて発生源を探知できないなあ」

と呟きながら高感度スキャナーで合宿所一帯をスキャンする辻野。するとレイから通信が入る。

「その奇妙なエネルギーの波長を分析したらサタンビゾーの出していたエネルギーの波長と一致したよ」

とレイは告げる。通信を終えて、新たな精神寄生獣への対処方法を考えながら捜査を続けていると後ろから

「辻野君」

と優子が話かけてくる。若干の恐怖心を覚えながらも笑顔で

「どうかしましたか？」

と答える辻野。優子は先ほど秀吉に助言された通りに謝る。

「さっきは少し殺^やりすぎちゃったから謝ろうと思って。ごめんなさい」

『少し』の部分や『やりすぎた』の字の間違いなど突っ込みたくなる気持ちを抑えて

「いえいえ。誤解されるような僕が悪いんですから気にしないでください」

と笑顔でこたえる。自分の気持ちを告白しようと優子が口を開いた瞬間、女子風呂の方から

「君たち、止まりなさい！」

「構わん！ブチのめせ！」

「了解！一撃でケリをつける！」

などと物騒なセリフが聞こえてくる。何があったのか気になり様子を見に行くとそこには無残な姿で捕えられた坂本、吉井、秀吉、土屋がいた。

「????side」

『お姉様、オネエサマ……。ヒイ……。フウー。オネエサマ……。コス……。ウバウ……。コロ……。ス……。コロコ

□□□□□□□□□□ . . 。 ケタケタケタケタケタケタケ
タケタ . . ♪

悪夢の合宿 パート2（後書き）

次回予告

嚴重警備下の女子風呂に突入する男達は風車に挑む愚かな騎士か？
精神寄生体の正体に気づいた時、辻野も女子風呂に走り出す。

次回、『悪夢の合宿 パート3』

乞う、ご期待下さい！

悪夢の合宿 パート3（前書き）

以下の問いに答えなさい。

『PKOとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希の答え

『Peace - Keeping Operations（平和維持活動）の略。

国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動のこと』

教師のコメント

そうですね。豆知識ですが、United Nations Peacekeeping Operationsとも呼ばれたりします。余裕があれば覚えておくと良いでしょう。

土屋康太の答え

『Pants Koshi-tsuki Oppai の略。
世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体のこと』

教師のコメント

君は世界の平和を何だと思っているのですか。

吉井明久の答え

『パウエル・金本・岡田 の略』

教師のコメント

それは世界の平和を守る人達です。

辻野雄弥の答え

『United Nation Peacekeeping Operation』の略。

旧国連において行われていた紛争の平和的解決の基盤を築くことにより、紛争解決を促す国連平和維持活動の略称。現在は地球上での紛争が終結しているため行われていないがTPCが計画された当初は警務局がこの任を負う予定だった』

悪夢の合宿 パート3

強化合宿二日目。Aクラスとの合同学習中。

「・・・・・・・・雄二。一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当然のように俺の膝の上に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

膝の上に座ろうとする霧島とそれを押しのけようとする坂本の攻防が続く。その横では、

「ネエ、辻野君。この問題わかる？」

「木下さん、そんな体を密着させなくても・・・」

と優子と辻野が勉強（？）を教え合っている。しかしFクラスの男子は坂本をどのようにして処刑するべきかについて会議しているため二人が体を密着していることに気が付かない。吉井は霧島を排除した坂本と合同授業の意味について議論している。すると隣の机から

「あ、代表と優子、ここにいたんだ。それに辻野君も。それならボクもここにしようかな？」

と工藤がやってくる。

「工藤さん、だっけ？」

Aクラスの人とあまり面識のない吉井が自信なさげに訊ねる。そんな吉井にさわやかに挨拶する。

「そうだよ。キミは吉井君だったよね？久しぶり」

この前の自己紹介を思い出し、顔を赤くする吉井。そんな吉井に笑顔で訊ねる。

「ん？どうしたの吉井君？」

吉井は失礼を承知で

「この前自己紹介してくれた時、工藤さんが言ってた特技って冗談だよね・・・？」

と訊ねると工藤は

「あ、さては疑ってるね？なんなら、ここで披露してみせよっか？」

なんて危険なことを言い始める。さらに辻野に向かって

「僕の得意科目は保健体育の実技なんだけど、辻野君さえ良かったら一緒に勉強しない？」

などと特大の爆弾を放つ。パンチラに保健体育の実技を誘われた辻野は、隣で笑顔でいながら殺気を放つ優子をチラッと見た後、心の中で号泣しながら笑顔で

「いや、僕は遠慮しとくよ」

と答え辺りを見回すと

坂本は霧島から目つぶしを喰らい、

吉井は顔を輝かせ、

Fクラスの男子達がいつの間にか工藤の周りウェーブをしている。

「・・・・・・・・明久。工藤愛子に騙されないように」

しかし肝心の土屋はそう言っムツリーニて、いたって冷静に工藤を見据えている。何か裏があると感じる辻野。土屋のらしくない反応に気がついた吉井が

「あれ？ムツツリーニ、ずいぶん冷静だね。僕ですらこんなにドキドキしているんだから、てつきり鼻血の海に沈んでいると思ったのに」

と土屋に訊ねる。すると土屋は

「・・・・・・・・ヤツは、スパッツを穿いている・・・！」

ととんでもないことを言う。辻野はどうやってたらそんなことがわかるんだと詰問したくなる気持ちを抑える。悔しがる吉井に工藤は小型録音機を出して

ーピッ 《工藤さん》 《僕》 《こんなにドキドキしているんだ》 《やらない？》

と言葉をつなぎ合わせて言ってもいないセリフを合成して再生する。辻野は標的にならないためにも即座に勉強に戻る。

「木下さん、この問題だったよね？」

工藤の餌食にされないよう優子との会話に集中する辻野。
優子はくっつくチャンスとばかりに積極的に接近する。

「こ、この問題が・・・（ピトッ）」

「あ、ああ。この問題は・・・（汗）」

女子と体を密着するという事が今までなかった辻野は顔が真っ赤になっってしまう。

辻野は優子に勉強を教えながら吉井の方を見ると戦いは土屋の参戦によって新たなステージへと突入していた。

「姫路さん。美波。よく聞いて。さっきのは誤解で、僕は《お尻が好き》って言いたかったんだ。《特に雄二》《の》《が好き》ってムツリニイーツ！後半はキサマの仕業だな！？うまくやるって、工藤さんよりも上手に僕を追い込むってことなの！？」

と吉井が吼え、

「・・・・・・・・工藤愛子。お前はまだ甘い」

「くっ！さすがはムツリニ君・・・！」

と土屋と工藤は火花を散らす。

「・・・・・・・・吉井。雄二は渡さない」

「アキ……。そんなに坂本のお尻がいいの・・・？ウチじゃダメなの・・・？」

「前からわかっていたことですけど、そうはつきり言われるとショックです・・・」

と霧島、島田、姫路の三名がとんでもない勘違いをする。

そんな非常識な三人に対し、吉井が自分は同性愛者ではないと叫ぶ。するとドアが開き髪の毛を縦にロールさせた女の子が

「同性愛を馬鹿にしないで下さいっ!」

大声で喚きながら入ってくる。その後はAクラスの次席である久保も参戦し、西村先生が来るまで滅茶苦茶な状態は続いた。

「性別なんて関係ない、か・・・」

と思いつめた表情で呟いていた久保を見てなぜか嫌な予感にとらわれる辻野だった。

夕食の時間が終わり吉井達が第二次女子風呂覗き計画を開始しようとしていた頃、辻野は精神寄生獣の居場所を特定しようと高感度スキャナーを片手に卯月高原全体を調査していた。するとスキャナーが精神寄生獣のエネルギー反応を探知する。場所は…合宿所。

「そんな・・・!!!」

そう辻野は叫び合宿所に向かって駆け出した。反応は合宿所の地下一階付近から発せられているとスキャナーが示す。だが辻野が到着する直前に反応が消えてしまう。

「き、消えたあ!？」

あと一步というところで敵を逃してしまった辻野は思わず叫んでしまふ。正面出入り口から入り、地下一階に降りるとそこはFクラス男子の墓場だった。

『こいつら最低っ!』

『私達の裸を覗こうったって、そうはいかないわよ!』

『お姉様の裸を見ようとする奴は殺します。コロシマス!コロコロコロコロ!』

すると

「辻野君も覗きに参加しに来たの？」

と大浴場から出てきた優子に殺意を込めた笑顔で質問される。

「今、散歩から帰ってきたばかりなんだけど・・・」

と冷や汗を垂らしながら答える辻野。教官よりも強力なサブミッシヨンを喰らい続けたらいくらZERO訓練生の辻野と言えども無事ではられない。しかし世の中はそこまで甘くない。西村先生に生徒指導室に連れて行かれる須川が

「辻野おおお!後を頼むうううー!!」

と叫ぶ。何のことだろうと思った次の瞬間、右腕に鋭い痛みが走る。

「責任とってもらわよ」

優子のセリフが辻野が覚えている最後の記憶だった。

次の日、

「死ね雄二！死んで詫びるんだ！あるいは法廷に出頭するんだ！」

という吉井の怒鳴り声で目を覚ました辻野は思わずにはいられなかった。

——この人達はバカだ・・・！

「辻野、作戦に参加してくれないか！？頼む！！」

授業中、坂本から懇願される辻野。しかし辻野は

「召喚獣での戦闘経験は全くないし、この前のテストは出来があまり良くなかったから逆に迷惑になるだけだと思う」

と冷静に主張する。坂本は仕方がないと言えなかった。

合宿所内に精神寄生獣がいるのが確実なので部屋で待機していると

吉井達が出撃前ブリーフィングを行い始める。秀吉が残念そうに報告する。

「結局、手を貸してくれたのはD・Eクラスだけじゃったな」

そんな秀吉に坂本や吉井が

「仕方ないだろう。Bクラスは代表が代表だけにまとまりがないし、Cクラスは代表が小山だからな。男子連中がしり込みするのも無理はない」

「けど、D・Eクラスが協力してくれるだけでも昨日よりずっと状況が良くなったよ」

などと言って元気づける。そして作戦開始時刻を待っていると須川が部屋に飛び込んでくる。辻野はその様子を見て、覗き作戦が見抜かれていたことを即座に理解する。

「吉井っ、大変だ！」

ただならぬ様子の須川君に吉井が訊ねる。

「須川君、どうしたの？作戦開始まではあと少し時間があるはずだけど」

「やられた！大食堂で敵が待ち伏せをしていたんだ！今は戦力が分断されて各階に散り散りになっている！」

気がついてはいるようだが、辻野は坂本の肩を叩き

「霧島さんにしてやられたみたいですね」

と声をかける。

「クツ．．．」

返す言葉もない坂本。すると土屋と吉井が

「．．．．．迷っている時間はない」

「雄二どうする！？」

と坂本に指示を求める。

「どうするもこうするも、こうなつては作戦なんて殆どないようなものだ。分断された戦力を一旦編成し直すしかない！とにかく出るぞおお！！」

的確に指示を出す坂本に

「『了解！』」

と吉井達は答え、部屋の外に飛び出していく。辻野は外に出るつもりはなかったが、高感度スキャナーが精神寄生獣のエネルギー反応を感知する。しかたなく部屋の外に一步出るとそこは紛れもない戦場だった。

『このスケベども！おとなしくお縄につきなさい！』

『覗きなんてさせないんだからね！！』

『あなたたちには戦死してもらっわよ!』

『この美春が薄汚い豚どもを始末します。ケタケタケタケタ・・・』

『くそおっ! どうしてこんなところに女子が!?!』

『知るか!?!とにかく応戦しろ!?!!』

『だっ、ダメだああああ!?!?!?!!』

怒号と断末魔が響きわたる廊下をエネルギーの発信源を目指し身を屈めながら進んでいると

「覗きの共犯者め!」

という声と共に女子が行く手を阻む。

「覗きに行くんじゃないんだっ!」

と辻野は説得を試みるが通用するはずもなく、

「ナニ訳のわからないことほざいてんの! 試験召喚!」

西洋の鎧と剣を装備している中林の召喚獣といつものメタリックレツドTPC隊員服に黒いタクティカルベストを着てガッツハイパーガンを構える辻野の召喚獣が現れる。

『Eクラス	中林宏美	VS	Fクラス	辻野雄弥
化学	94点	VS	597点	』

あまりの点数差に呆然としている中林に

「覗きに加担するつもりはないんだ！ただどうしてもここを通らないといけないんだ！！お願いだからどいてくれ！！！」

とお辻野はお願いするが中林は近くでFクラス狩りをしていたEクラスやDクラスの女子を呼んでくる。

『Eクラス 中林宏美&横田美咲 & Dクラス 豊田舞
化学 94点&101点 & 203点 』

辻野は溜息をついてお辞儀をしてから女子の召喚獣をガッツハイパーガンで射殺する。

エネルギーの発生源に近づく辻野だったが次から次へと現れる女子のせいでまたしても取り逃がしてしまう。仕方がないので部屋に戻りハイパーガンの整備をしていると優子が笑顔で部屋に入ってくる。

「辻野君。なんで来たかはわかってるわよねっ？」

その日、辻野は保健室で寝る事になったとだけ言っておこう。

辻野が保健室から直接、朝食会場に行くと

「おふあーよう、辻野君」

と吉井が大きな大きな欠伸をしながら迎える。坂本も真っ赤な目を擦りながら

「おはよう、辻野」

と挨拶する。あまりにも眠たそうなので昨夜、何があったのか訊ねると吉井と坂本が島田と霧島の夜這いと清水の乱入、そのせいで西村先生と熱い夜を過ごしたことについて話す。

夜這いつて男がするものなのではと首をかしげていると土屋が坂本に写真を見せる。

「俺もダメだ．．．全然気合いが入らーふおおおっ!？」

気合いが突然入る坂本。土屋はその写真を手渡してくる。

それは姫路と秀吉の浴衣姿のツーショットと浴衣姿で迫る霧島とハーフパンツ姿の島田のツーショットだった。

「魔法の写真だって？何を言っているんだか。僕らもう高校生なんだし、たかだか写真程度で気合いなんかが入るわけがふおおおっ!」

「ほう。これはまた．．．」

「ぐあああああっ!!! 煩惱に負けちゃダメだあああ、辻野おおお!!!」

気合いが入る吉井、感心する秀吉、自分と戦う辻野と三者三様の反応を示す。

辻野は理性を蝕む煩惱と戦うために三枚目を見るのを避けたがそれが正しい選択だったと吉井の

「僕の写真はきちんと抜いておいてくれた？」

というセリフを聞いて知った。運が良かったなあと心から思っ辻野だった。

午後八時。時報と共に坂本が全員に気合を入れる。

「……………よし。てめえら、気合いは入っているか！」

「「「おうっ！」「」」

「女子も教師も、ＡクラスもＦクラスも関係ねえ！男の底力、とくと見せてやろうじゃないか！」

「「「おうっ！」「」」

「これがラストチャンスだ！俺たち四人から始まったこの騒ぎ、勝利で幕を閉じる以外の結果はありえねえ！」

「「「当然だっ！」「」」

「強化合宿第四夜・最終決戦、出陣^でるぞっ！」

「「「よっしゃあ——っ！……！」」「」」

最後の戦いが始まった。

男子勢が女子風呂を覗きに最後の出撃を行っていた頃、辻野は部屋で精神寄生獣のエネルギー波のデータをチェックしていた。ふと鞆の中を見ると高感度スキャナーがつけっ放しになっていることに気づき、バッテリー節約のためにも慌てて止める。自分が保健室で治療を受けている間のデータをダメもとでチェックするとそこには驚くべき数値が記されていた。今朝の吉井との会話や合宿での出来事を思い返し、確信する。

― 寄生されているのはあの人だッ！

寄生されている人物を拘束すべく、ガッツハイパーガンをホルスタ―に入れ、さらにアタッシュケースを開き、中に入っているパーツを予備として持ってきたガッツハイパーガンに取り付け、ガッツライフルを組み立てる。文月学園の制服を脱ぎ、TPCの隊服を着て、ヘルメットを身につける。

準備を整えるとスキャナーが精神寄生獣が放つエネルギー波を感知したことを知らせる。

その場所は女子風呂だった。

今こうして男達の名誉と欲望、そして世界の平和をめぐる戦いが幕を開けようとしていた。

悪夢の合宿 パート3（後書き）

次回予告

ついに正体を現す精神寄生獣。しかしその強大な力の前に苦戦するティガ。果たしてティガは闇を光で照らすことができるのだろうか？

次回、『悪夢の合宿 パート4』

乞う、ご期待下さい！

悪夢の合宿 パート4

(精神寄生獣ビゾーム登場) (前書き)

以下の文章の()に入る正しい物質を答えなさい。

『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと()である』

姫路瑞希の答え

『水酸化ナトリウム』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

土屋康太の答え

『塩化吸収剤』

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように。

辻野雄弥の答え

『塩化吸収剤』

教師のコメント

まさか塩化吸収剤が実在しているとは・・・

悪夢の合宿 パート4

(精神寄生獣ビゾーム登場)

吉井 side

「吉井、坂本！ここは任せて先に行け！試験召喚っ！」^{サモン}

「翔子たん！翔子たん！はあはあはああつ！！！」

「島田のぺったんこおーっ！」

「姫路さん結婚しましょおーっ！」

「俺達の覗きの邪魔はさせない！試験召喚！」^{サモン}

C・D・Eクラスの男子の協力によって三階と二階の制圧に成功する。

残る問題は一階と風呂場のある地下一階。戦闘が行われているようなので突入するとそこには教師女子連合軍によって虐殺されているBクラスの男子達の姿があった。

『Aクラス	霧島翔子	&	Fクラス	姫路瑞希	V	S	B
クラス	加西真一						

総合科目	4762点	&	4422点		V	S	1
692点							

『くっそおおっ！！！！』

『むっ、無理だあああつ！！！！』

圧倒的な戦力差を前になすすべもなく蹂躪されていくBクラスの男子達。

「……………雄二。悪戯はそこまで」

「明久君。ここは通しませんよ」

「翔子かつ！」

「姫路さん……っ！」

霧島と姫路という最強コンビが坂本達の前に立ちふさがる。彼女たちの周りには惨殺された召喚獣の死体が山のように積み上げられている。なんとか突破できる方法がないか思案するが後ろには高橋先生や他のAクラスの女子が何人が控えていて、突破は事実上不可能だった。

「……………雄二。お仕置き」

「明久君。おとなしく降参して下さい」

霧島と姫路が召喚獣を従えてゆつくりと吉井と坂本に歩み寄る。もはやここまでかと覚悟を決め召喚獣を喚び、迎え撃つ構えをとる吉井と坂本。

その時、誰かがその間に割って入る。それは辻野だった。

「辻野君、どうして！？」

いきなりライフルを持って現れた辻野に戸惑いを隠せない姫路。

「辻野、やっと来てくれたのか！」

「ありがとう、辻野君！！」

と喜ぶ坂本と吉井。

そんな二人を一瞬見遣った後、辻野は

「勘違いしないで下さい。僕は覗きに行くんじゃないんです」

と答える。

吉井は、では何をするのかと聞こうとするもその真剣な顔を見て、言葉を失う。坂本もその表情を見て何か重大な事が起こっていると理解する。辻野の今までに見たことのないほどの厳しい表情にハッと息をのむ姫路。さすがの霧島も何かを感じているのかその顔をジッと見つめている。

そんな四人の横を通り過ぎて、ライフルの銃口を女子風呂の入口に向けながら女子風呂の方へ向かう辻野。Aクラス的女子生徒も思わず道をあけてしまう。

「誰であろうとここは通しません。試験召喚！！」
サモン

軍服を着て、鞭を持った召喚獣を召喚し辻野の行く手を阻む高橋先生。

そんな高橋先生に対して辻野は

「試験召喚！！」
サモン

と召喚獣を召喚する。

『学年主任 高橋洋子 VS Fクラス 辻野雄弥』

総合科目 7791点 VS 7109点

『

「高橋女史並の点数だなんて．．．そんなばかなっ！！」

「辻野君ってそんなに頭良かったっけ！？」

高橋先生に迫る辻野の点数を見て思わず叫ぶ坂本と吉井。

辻野の召喚獣はハイパーガンを構え、高橋先生の召喚獣は鞭を構える。

パシュン、パシュン、パシュン

ヒュンツ、ピシッ、ピシッ

辻野の召喚獣は高橋先生の召喚獣の鞭による攻撃を紙一重で避けながらハイパーガンを連射する。高橋先生の召喚獣も銃撃を回避しながら必死に反撃する。

パシュン、パシュン

「クッ．．．！！2年生でしかも新入生だというのに、どうして．．．！！」

ピシッ、ピシッ

「流石は学年主任．．．！！」

二人の点数がどんどん削られていく。

『学年主任 高橋洋子 VS Fクラス 辻野雄弥

縦横無尽に召喚フィールド内を飛び回りながら戦う二体の召喚獣に全員が釘付けになる。

高橋先生の召喚獣がハイパーガンの銃撃によって鞭を落としてしまう。そして

パシユン！

ハイパーガンによる攻撃を受け消滅する高橋先生の召喚獣。それを見てざわめく女子達。

「辻野の奴、高橋女史に勝ちやがった・・・」

と坂本も呟く。吉井にいたってはショックのあまりに口がきけなくなっていた。

そんな周りには目もくれずガッツライフルを構えなおし女子風呂へと歩き始める辻野。廊下から辻野を見ていた工藤は何が起きているのか薄々気付いているようで辻野を止めようとした保健体育の大島先生を引き留める。

「なぜ吉井ではなくお前なんだ、辻野？」

女子風呂の出入り口の前に立っていたのは、人間兵器『TETSUJIN』こと西村宗一先生。

しかし今はそんな質問に答えている暇はない。

「西村先生。緊急事態なんです。どうかそこをどいてくれませんか？」

と辻野はお願いするが西村先生は

「何を今更．．．」

と言つて襲い掛かってくる。強烈なパンチを防ぎつつ、ローキックやエルボーで反撃する辻野。久々に互角で殴り合う事が出来る相手を見つけニヤリと笑い喜ぶ西村先生。

「ほう．．．なかなかやるな」

「くっ．．．!!」

一進一退の戦いは続く。お互いにパンチ、キック、チョップと次々と技を繰り出してはそれを防ぐ。そうして戦いを続けていると

「きゃあああああっ!!!!」

と女子風呂の中から悲鳴が聞こえてくる。西村先生は戦うのを止め、お風呂の出入り口のドアに手をかけるが辻野がそれを止める。

「先生、危険ですから下がっててください!」

辻野は西村先生をドアから遠ざけ、右手でガッツライフルを構えながら左手でドアを開ける。そこには

『お姉様、オネエサマ．．．オネエエエサマアアアア!!!!!!
スベテ、ワタシノモノオオオッ!!!!!!』

と太い声で叫ぶ暗黒面に落ち、人間離れたおぞましい姿で黒いオ―ラを発している清水と下着姿であまりの恐怖に震えている島田と

辻野。

「きゃあああああ！！！！」

「何なんだよ、あれ！！」

「ヒッ、ヒイイイイッ！！！！」

「助けてエエエエエ！」

空飛ぶ化け物を見て、廊下はパニック状態になっている。清水に向かってガツツライフルを連射しながら追跡する辻野。清水はそのま

ま合宿所の外に出るとよりおぞましい姿になって巨大化する。サタンビゾーをより人型に近付けたような姿をした怪獣の出現に辻野は

「やはり怪獣化したか・・・」

合宿所からみんなが避難できるよう時間を稼ぐために少し離れた駐車場にまでガツツライフルを怪獣に向かって撃ちながら走る。

「フォン、フォン、フォン、フォン・・・」

と叫びながら辻野のことを追い始める怪獣。シャーロックに乗り込み、スクロール砲を起動させる。道路をバックで走りながらスクロール砲を怪獣に向かって連射する辻野。

ピシイイイイン

とスクロール砲が体に命中し火花を散らす怪獣。

「フォン、フォン、フォン、フォン．．．」

と吼えた後、怪獣はシャーロックに対して顔面からの破壊光線で攻撃する。

一発目を右に、そして二発目を左に回避することに成功したが三発目は回避できないと察知しバリアーを展開する。バリアーのおかげで破壊されずに済んだがエンジンが損傷し動かなくなってしまふ。シャーロックから慌てて退避する辻野。シャーロックが戦闘不能になったことに気づいたらしく、シャーロックを追うのをやめ、街を破壊しはじめる。

するとキーンと言う音と共に黄色い戦闘機が飛んでくる。ガッツウイング1号だ。

「辻野さん、私があゝの怪獣、ビゾームを足止めします」

とガッツウイングを操縦しているレイから通信が入る

高性能ミサイルを下部ハッチから発射した後、緑色のニードルレーザ砲を連射し、怪獣の動きを止めるガッツウイング1号。

しかしビゾームの攻撃でダメージを受け、撤退を余儀なくされる。周りに人がいないか確認し、ポケットからスパークレンスを取り出し、掲げる。

ピカアアン、キュイイイイイン

という音と強烈な光と共にウルトラマンティガに変身する。

「シェアッ！」

ビゾームもティガに気づき

「フォン、フォン、フォン．．．」

と鳴き声を上げながら構える。
距離を詰め、パンチやキックをお互いの体に浴びせる。

「ハッ、タアアアッ！！」

ドスッ、ガスッ、バシッ

「フォン、フォオオオン！！」

ズガッ、ズドッ、ゲシッ

序盤までは互角だったがビゾームの素早い動きの前に段々と劣勢になるティガ。次々と放たれるビゾームの攻撃を防ぎきることができずその攻撃を受け始める。

ティガは必死に反撃を試みるもビゾームの素早い動きの前にすべて避けられてしまう。ビゾームの顔面から放たれた破壊光線の直撃を受け、吹き飛ばされてしまうティガ。

「テユアアアアア！！！！」

苦しみながらも起き上がるティガに追い打ちをかけようと右手から光の剣を出し、ティガに襲いかかる。ティガは両腕を顔の前でクロスし、青紫色のスカイタイプにタイプチェンジして自分を切り裂こうとする刃を回避する。空振りしている隙にキックやチョップをきめ、的確にダメージを与えていく。

ビゾームはこのままでは不利だと判断し、光の剣を収め、素手で殴りかってくる。

カラータイマーが警告音を発しながら赤く点滅し始める。しかしティガはうつぶせに倒れたままピクリとも動かない。

「巨人が負けつちまった．．．」

「もうおしまいだあ．．．」

「死にたくないよおおおお！！」

そんなティガを見て絶望する人々。ビゾーム達はそれを見てティガが死んだと思い、

『オネエサマアア』

と島田の事を探し始めた。

（優子 side）

気を失った島田と廊下で倒れていた小山と霧島と姫路を西村先生と坂本と吉井の四人で助けて卯月高原から逃げようとしていると三度巨人が現れて清水さんだったものと戦い始めた。怪獣を凍らせてビームを撃ちこんだところまでは良かったのだが怪獣が分裂して多方向から一気に攻撃されて巨人はピコン、ピコンと音を発したまま動かなくなってしまった。

ズシン．．．ズシン．．．

という足音と

『オネエエサマアアアア』

という声と共に怪獣の内の一体がこちらに向かってくる。
目を覚ました小山が怪獣を見て

「嫌あああああつ！！！」

と悲鳴を上げる。もはやこれまでかと死を覚悟して目をつぶる。

が、何も起きない。

恐る恐る目を開けるとそこには前に倒されたはずの怪獣が清水さんが化した怪獣を必死に押し戻している姿が飛び込んでくる。
隣で同じように呆然としていた吉井が

「内田君・・・どうして・・・？」

と呟いているのを耳にする。

すると前に倒された怪獣の声が聞こえてくる。

「・・・諦めちゃダメだ・・・」

その声を聞いて吉井が

「内田君・・・」

と呟く。

それを聞いていた小山が

「内田、なの・・・」

と愕然とした様子で呟く。

段々、押され始めた内田を見て吉井が倒れた巨人に向かって

「あなたが何者で、どうして僕達のために戦うかわからない！でも、この星のことが好きなら！人間のことが嫌いじゃないなら！もう一度立ち上がって！！」

とあらん限りの声で叫ぶ。そんな吉井に触発され優子は思わず自分の本音を叫んでしまう。

「アタシは信じてるわ！あなたが私達を守り、導いてくれることを！お願い！！立って！！！！」

すると二人の願いが通じたのか、巨人の手がピクリと動く。そして巨人はゆっくりと傷だらけの体で立ち上がった。

ティガはふらつきながら立ち上がり、サタンビゾーがいる事に驚きながらも

「ハッ！」

吉井達に近づこうとしてサタンビゾーに阻まれているビゾームをハ

ンドスラッシュで撃破する。

顔の前で両腕をクロスさせ、スカイタイプからマルチタイプに戻る
と小型のビZoom全員にハンドスラッシュを撃ちこみ消滅させる。
すると小型ビZoomが一体化し再び、ビZoomが現れる。

「フォン、フォン、フォン、フォン」

「シュアッ！」

構えるティガとビZoom。

ティガはビZoomに向かって一直線に走り出す。

ビZoomは顔面から破壊光線を放つ。ティガは光線が体に当たり火花を散らそうとも、地面に当たり土煙を上げようともそのままビZoomに向かっていき、真正面から光を纏わせたパンチを撃ちこむ。

「ティガアアアアッ！！！！」

あまりにも強力な威力のパンチを受け

「フォオオオン、フォオオオオオオオオン！！！」

と叫びながら体をくの字にして苦しむビZoom。ティガはその隙に
ビZoomの頭を掴み、投げ飛ばす。ビZoomは立ち上がりティガに
パンチをいれようとするがすべて避けられ、ティガに何発ものパン
チやキックを浴びせられる。

倒れたビZoomはもはや戦闘不能だったが執念の力で立ち上がる。

ティガは両腕を前方でクロスさせ、左右に大きく広げ、両手を胸の
プロテクターに一旦添えてからL字型に腕を組み粒子状の光線を放
つ。

「シュアッ!!!」

ゼペリオン・セルチェンジビーム複合光線を受け、消滅するビゾーム。ビゾームのいた場所には清水が気を失って横たわっていた。

優子 side

その様子を見てその場にいる全員がは巨人に向かって同時に礼を言う。

「「「ありがとう・・・」」」

巨人は静かに頷くとそこに佇んでいる前に現れた怪獣の方に向き直る。

そして巨人と怪獣はお互いに頷き合う。そして怪獣と巨人は光に包まれ消え去る。

吉井からサタンビゾーの真実について聞かされていた坂本が

「内田の奴、どんな酷い目にあわされてもこいつのことが忘れられなかったんだな・・・」

と小山を見遣って呟く。

そんな坂本の呟きを聞いた小山が涙を流し泣き始める。

「ゴメンナサイ、ゴ・・・ゴメン・・・ナサイ・・・うわああああん!!!」

静寂に包まれた卯月高原に懺悔の泣き声だけが響きわたった。

悪夢の合宿 パート4

(精神寄生獣ビゾーム登場) (後書き)

次回予告

つかの間の平穏を取り戻し、高校生としての生活を楽しむ辻野。しかし、その平穏の陰で時空侵略計画は静かに進められていた。

次回、『尖兵達の暗躍』

乞う、ご期待下さい！

尖兵達の暗躍

(超古代怪獣ゴルザ登場) (前書き)

学業の方が忙しく更新が遅れてしまいました。
申し訳ございません。

尖兵達の暗躍

（超古代怪獣ゴルザ登場）

合宿が終わって一週間が過ぎた。精神寄生体に体に乗っ取られていた清水も無事、病院を退院した。そしてそんなある日の朝の事、辻野は吉井にせがまれて、朝昼晩三食付で吉井を家に住まわすことになった。吉井が今月発売のゲームを買いすぎて食事代が不足し、さらに水道、ガス、電気も止められてしまったからだ。そんな吉井に坂本が

「今更だが本当にバカだな」

と言うと吉井はむきになって

「違う！毎月、欲しいゲームが出るのが悪いんだ！！」

と無茶苦茶なことを言い出す。そんな吉井に呆れてしまう辻野。すると秀吉が暗い顔をして登校してくる。

辻野は掴み合いをしている吉井と坂本に向かって溜め息をついてから秀吉に向き直り

「おはよう、木下さん」

明るく挨拶する。しかし辻野を見て秀吉は

「う、うむ・・・」

と顔を逸らしながら返事する。そんな秀吉に不信感を抱いた辻野は秀吉に

「何かあったんですか、木下さん？」

と質問するが秀吉は

「な、何でもないぞよ!!」

と慌てて答える。秀吉にさらに不信感を募らせる辻野。そんな二人の様子をいつの間にか喧嘩をやめていた坂本が秀吉に

「辻野がどうかしたのか？」

と訊ねるとよほど動揺していたと思われる演劇部のホープは思わず

「あつ、姉上が辻野の靴箱にラブレターを入れていたのなんか見てはおらぬぞ・・・」

と口を滑らしてしまう。

ダッ（辻野が教室から鞆を持って逃げ出す音）

鉄の結束を誇るFFF団、始動。

『『『殺せええええつ!!!!!!!!!!』』』

『逃げられたぞつ!!』

『逃すなつ!!!!』

『A D班は辻野を追え! E班は秀吉姉妹に事情聴取! F、G班はラブレターを確保せよ!!! H班は異端審問会の準備!!!』

『『『応っ！！！！！！！』』』

「わしは女子ではないぞ！！」

秀吉の叫びは毎度のことながら無視された。

十分後、Fクラス。

『おのれ、辻野・・・FFF団の血の盟約に背いたその罪、命で償
つて・・・』

「エイッ！！」

ドスッ

最後の生存者、須川が倒されたことによりFFF団はその任務をど
れ一つ完遂することなく沈黙した。

自分の卓袱台に座ると真っ先に回収したラブレターを読み始める辻
野。

「辻野雄弥様

いきなりこんな手紙を書いてごめんなさい。ただどうしても伝えたい
ことがあります。」

幼馴染の幼稚園の時の告白以来、初めての恋の告白を嬉しくなると同時に悲しくなる辻野。決して叶うことのない想いが綴られた恋文にもう一度目を通す。

「ハア……」

明日の放課後、パトロールよりも気分が滅入る仕事ができてしまいうえず溜め息をついてしまう辻野だった。そんな辻野を見て坂本と吉井が

「断るのか？」

「断るの！？」

と詰め寄る。そんな坂本と吉井に辻野は

「ええ……」

と悲しげに答える。そんな辻野に坂本が

「辻野っ！！頼むから木下と付き合ってくれ！！でないと俺は翔子に……」

と土下座して哀願する。木下さんから相談を受けていた霧島が坂本にいかなる手段を用いても二人の仲を取り持つよう命令したらしい。失敗の代償は婚姻届けへの直筆サインだとか。しかしいつかは他の時空に移ることになっている辻野には無理な相談だった。

「??? side」

とある薄暗い部屋で男と女がひそひそ声で話し合っている。

「準備はすべて完了しました」

男の報告を聞いて顔を綻ばせ、男にさらに質問する女。

「陽動作戦の方は？」

「いつでも実行できます」

男のよどみない答えに女は邪悪な笑みを浮かべ宣言した。

「作戦開始」

「辻野 side」

学校が終わり、吉井と共に家に帰ってくる。二人を出迎えるレイとルイ。

「お帰り〜!」

「お帰りなさい」

そんな二人を見て吉井が

「お邪魔し・・・辻野君、この美人なお二人との関係について詳し

く聞かせてもらおうか」

とムツツリ商会から購入したと思われる40万ボルトを誇る違法スタンガンを靴から取り出しながら迫ってくる。ただのお手伝いさんだと答えようとするが悪乗りしたレイが

「雄クンは私の彼氏で同棲してるの？」

とメガトン級の破壊力を持つ爆弾発言を投下する。

「辻野おおおおっ！！！」

キレル吉井。

「ちょっと待って！僕の事、今まで一度も雄クンなんて呼んだことないでしょ！！というか僕らは付き合ってすらいないのにつ！！！」

誤解を解こうとする辻野。

「そんなあ！昨日の夜もベッドで【閲覧削除】や【閲覧削除】をしたのにい」

さらに誤解を深めるレイ。

「死ねえええええい！！！！！」

吉井明久、暴走モード突入。

「追い出すぞ……」

辻野の一言を聞き、慌てて謝る吉井とルイ。
そんな調子のいい二人に

「ハア……」

とため息をついてしまふ辻野だった。

すべての部屋や設備についての説明をし終え、部屋のカードキーを
吉井に渡す。

「吉井君の部屋のカギだから失くさないくださいね」

と念を押す辻野に吉井は

「わかってるよ。ところでさ、ゲームかなんかない？」

と全く関係ない質問をしてくる。本当にわかっているのだろうか
と不安になりながら辻野は

「フライトシミュレーターならあるよ」

と答える。

「フライトシミュレーター!？」

と素っ頓狂な声を上げる吉井だった。

一時間後。

― ロックオン！

「くっそおおー！！」

吉井の声が無線から聞こえてくる。シミュレーターを用いてガッツウイング1号同士の空中戦を演じる辻野と吉井。五回連続で勝利したが辻野は焦っていた。

― なんて学習速度だっ！！

たった五回で、離着陸と簡単な空中戦法をマスターした吉井に舌を巻く。先ほども翼を折りたたむことで急速反転し逆襲してきた吉井機に危うく撃墜されかけたのだ。ゲームなどの勉強以外のことになると普段のバカさ加減からは想像できないほどの頭脳を発揮する吉井に畏敬の念を持たずにはられない辻野だった。

結局、辻野が撃墜されることはなかったが吉井はガッツウイング1号、2号の操縦方法をマスターしたのだった。

〈須川 side〉

須川はクラスメイトの近藤とどうやって辻野と優子の仲が親密になるのを阻止するか話しながら帰っていた。

「あいつの目に硫酸を流し込んで・・・」

「鼻の穴にも流し込んだ方が・・・」

すると目の前に黒ずくめの二人組の男が立ち塞がる。須川と近藤は最近不審者（なんでも噂によると「ディア・マイ・ドクター!!」ホームルームと叫びながら女子生徒に襲い掛かるらしい）が出没しているとHRで鉄人こと西村先生に注意されていたため逃げようとするが後ろにも黒ずくめの男が二人が立っていた。抵抗するも人間離れた力にあっけなく取り押さえられ薬品を嗅がされてしまう。そして二人の意識は闇に包まれた。

（優子side）

学校の図書室で自習していたものの明日のことで頭がいつぱいで勉強に今一つ集中できずボーンと明日のことを考えながら帰っていると

ゴ、ゴゴゴゴゴ

いきなり地面が揺れ始める。

「一体、何なのっ!!!」

近くの電柱にしがみつく優子。すると高層ビルが立ち並ぶ中心地の地面を突き破って怪獣が出てくる。

「キヤアアアアッ!!!!!!」

すると黄色の飛行機が飛んできて怪獣を攻撃し始めた。レーザービームとミサイルを受けて倒れる怪獣。しかし、倒れる瞬間に怪獣の

額から放たれたビームを受けて翼から煙を出しながらビルの方こう側に落ちて行った。その瞬間、

ピカン、キュイイイイイン

強烈な光と共にまたあの巨人が現れた。

「辻野 side」

吉井との空中戦の後、部屋で宿題をやっていると

「F4地区から特殊な電磁パルスが放たれています」

とルイから連絡が入る。コンピューターを素早く立ち上げ確認する。F4地区は高層ビルが立ち並ぶ人口密集地区なので安全確認も兼ねてガッツウイングでパトロールすることにした。

格納庫

翼を後ろで折りたたみ待機していたガッツウイング1号に乗り込み、出撃に備える。

管制室で出撃のための作業をしているルイから通信が入る。

「GUTSwing1standbyfortakeoff f f . (ガッツウイング1号、発進準備)」

「This is wing1, standing by . (こちらウイング1号、準備完了)」

「GUTSwing 1, you are authorize
d to take off. (ガッツウィング1号、発進を許可し
ます)」

「Taking off! (発進します!)」

格納庫の屋根が二つに割れ、大空への道が開ける。そこから垂直離
陸し発進する辻野。

お隣さんが見たらさぞかし驚いただろう。庭が二つに割れて中から
戦闘機が出てきたのだから。

そしてガッツウィング1号が現場上空に差し掛かる寸前にレイから
通信が入る。

「急に地震が起きました! 発生源はF4地区の地下です!」

ガッツウィングに備え付けられているセンサーが地下から何かが地
表に向かって猛スピードで上がってくると警報音を鳴らしながら告
げる。

「なっ……」

その瞬間、地面を突き破り怪獣が現れた。周りに立ち並ぶビルを破
壊するその怪獣を見て戦慄を覚える。辻野がよく知っている怪獣だ
った。

「ゴッ……ゴルザ!」

辻野は即座にゴルザを攻撃し人々が避難する時間を稼ぐとするが

ゴルザの額から放たれた光線を避けきれず被弾してしまふ。

「クツ．．．！」

胸のポケットからスパークレンスを取り出し、辻野は操縦桿の横にあるエジエクトと書かれた黄色いレバーを引っ張り脱出すると同時にティガへと変身した。

尖兵達の暗躍

(超古代怪獣ゴルザ登場)(後書き)

次回予告

誘拐される生徒たち。着々と進む侵略計画。辻野の戦いは続く。

次回、『誘拐と暴露』

乞う、ご期待ください！

誘拐と暴露

(超古代怪獣ゴルザ登場)(前書き)

ご意見、ご感想、お待ちしております。

誘拐と暴露

（超古代怪獣ゴルザ登場）

「テアッ！」

立ち上がったゴルザの前にファイティングポーズを取り立ちはだかるティガ。そんなティガに対し

「ギヤアアアオオオオオオオン！！！」

と吼え、額からビームを放つ。ティガはそれを横飛びで回避し、体勢を崩したすきに突進しようとしていたゴルザにハンドスラッシュを放ち牽制する。

ハンドスラッシュを受け火花を散らすゴルザに近づき、接近戦を挑む。

「ギヤオオオオオオオン！！！」

「テアッ！テユアッ！ハッハッハッ！！！」

ドスッ、バシッ、バシッ、バシッ

ゴルザの足にローキックを入れ、体にパンチを打ち込むも強靱な皮膚と分厚い筋肉にはあまりにも威力不足だった。

「っ．．．」

攻撃が効かないことに困惑していると反撃を受けるティガ。

「ギヤオオオオオオオン！！！」

ズゴツ、ズゴツ、ズゴン、

「テュアアアアアアッ！！！！！！！！！！」

何発もパンチを受けた後投げ飛ばされてしまう。さらにティガは立ち上がったところにビームを受け、大爆発とともにまたしても吹き飛ばされてしまう。

ズドオオオオオオオン

「テアアアアアアッ！！！！！！！！！！」

立ち上がるうともがくティガを踏みつけ、頭をつかみ持ち上げては投げ飛ばす。頭からビルに突っ込むティガ。
立ち上がるうとする度に蹴られ、踏まれ、投げ飛ばされるティガ。

「ギャオオオオオオン！！！！」

「シュアアアアアッ！！！！！！！！！！」

ピコン．．．ピコン．．．ピコン．．．ピコン．．．

とうとうカラータイマーが点滅し始める。

ティガは立ち上がるうとするもゴルザからの猛攻を受け身動きが取れない。

ピコン．．．ピコン．．．ピコン．．．

カラータイマーの点滅の間隔が早くなっていく。

ティガはとどめを刺すべく近づいてきたゴルザの隙を突き、ゴルザを蹴り飛ばし立ち上がると両腕を顔の前で交差させパワータイプに変身する。

「トアッ！」

両手をグーにしてファイティングポーズをとる。

ゴルザはいきなり体の色が赤、青紫、銀の三色から赤と銀の二色に変わったことに少し戸惑うものの

「ギヤオオオオオオン！！！！！！！」

と吼えてティガに襲い掛かる。

「シエアアアアッ！！！」

ティガはゴルザのパンチをすべて避け、逆に両腕を掴み投げ飛ばす。さらに立ち上がるうともがくゴルザに馬乗りになりパンチを連続で決める。

「ハッ！ハッ！ハッ！」

「タアアアアッ！！！！トヤッ！！！」

のた打ち回るゴルザから振り落とされても果敢に攻めるティガ。パンチやキックを次々と叩き込んでいく。ゴルザも必死に反撃するもその差は歴然としていた。

「ギヤオオオオオオン！！！！！」

ゴルザは立ち上がるだけで精一杯なのだが威勢よく吼える。
そんなゴルザにティガは

「ハ——ッ、テアアッ！！！」

両腕を左右から上にあげ、胸の前に高密度の超高熱の光エネルギー粒子に集め、必殺技のデラシウム光流を放ち撃破する。

「テユアッ！！」

ゴルザが爆死したのを見届けてティガは夜空の向こうに飛び去っていった。

次の日

ガッツウイングが実在しているのはなぜかという吉井からのしつこい追及を避けつつ優子からの告白をどう断ろうかと考えながら吉井と一緒に教室に入ると坂本達が駆け寄ってきた。ただならぬ雰囲気
に辻野が

「どうかしたんですか？」

と訊ねると坂本が答えた。

「秀吉のお母さんが怪獣の攻撃に巻き込まれて重体らしい・・・」

言葉を失う辻野。

さらに文月学園の生徒の大半が休んでいるのを目の当たりにし罪悪

感で押しつぶされそうになる辻野だった。

放課後

辻野、吉井、坂本、土屋、島田、姫路、霧島、工藤の八人で木下姉弟の両親が入院している病院にお見舞いに行く。
病室のドアをノックすると

「どうぞ．．．」

と沈んだ声が聞こえる。

「．．．．．失礼します」

病室の中には体中を包帯でぐるぐる巻きにされ点滴チューブに繋がれながら横たわる女性とその横で目を真っ赤に腫らしてその女性に手を握る木下姉弟がいた。

「お主ら．．．」

友達達の突然の訪問に疲れ果てた声で応対する秀吉。

「愛子に代表、それに辻野君まで．．．？」

と生気のない目でこちらを見つめながら掠れた声で呟く優子。
普段からは想像できないほどの二人のあまりの無残な姿に言葉を失う一同。

給湯室にお茶を入れに行こうとする姫路を引き留め、島田と工藤に

全員分のお茶を入れてくるよう頼んだ後、坂本が二人に話を聞く。
木下姉弟のお母さんは高校生時代の友人達との飲み会に参加して
てゴルザの攻撃に巻き込まれたらしい。

「怪獣が巨人に向かって放った光線が偶然お母さんのいたところの
近くに着弾したらしいのじゃ・・・」

辻野は自分が変身直後にゴルザから放たれたビームを避けた時のこ
とを思い出す。

「あ、あのきよ、巨人が避けさえしつ、しなきゃよかったのよつ・
・！あの巨人さえ・・・！！」

と泣き叫ぶ優子の言葉を聞いてあの時、自分が攻撃を受け止めてい
たら…と下唇を噛みながら自己嫌悪に陥る辻野。そんな辻野をじっ
と見つめる坂本だった。

そのあと一時間くらい話し込んだ後、退散した。

（姫路・島田・霧島・工藤 side）

姫路達はは病院の前で男子達と別れて四人で家に帰っていた。
すると急に黒ずくめの男たちに囲まれてしまう。

「ちょっと！何なのよ、アンタ達！！」

島田が男達に向かって近づいてきた男の一人に関節技を決めながら
気味悪げに叫ぶ。

最近不審者が出没しているから気を付けるようにという西村先生の

言葉を思い出して姫路はあらん限りの声で絶叫した。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！」

＼辻野side＼

辻野は坂本達と一緒に帰宅の途についていた。すると

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！」

という姫路の悲鳴を耳にし慌ててハイパーガンを鞆から出し、坂本達が呼び止めるのも聞かず歩いてきた道を引き返し始める。

病院の前を通り過ぎ本能と勘を頼りに走っていると黒ずくめの男たちが姫路達が襲われていた。辻野は追いついてきた吉井達と吉井達を見て追いかけてきた秀吉が見ているにもかかわらずハイパーガンを男たちに向かって発砲する。何人かに命中し消滅させるが気を失った姫路達を抱えていた男は背中からハエのような翅をだし四人を連れ去ってしまう。連れ去れる瞬間、姫路の鞆の中にハイパーガンのカートリッジを投げ込む。

「文月学園の生徒四名がヒューマノイド型生物に誘拐された模様！モンスターキャッチャーの反応を至急、追跡してください！！」

「了解！」

GUTS COMでレイと連絡を取り合っていると辻野は坂本に胸

ぐらをつかまれる。

「テメエ。どういふことか説明しろ！合宿の時もレーザー銃をぶっ放してるし！辻野！お前は何者なんだ！？あいつらは何者で、翔子達をどこにつれていったんだ！！」

「辻野君！」

辻野は坂本と吉井を交互に見てからすべてを説明した。

「僕は別の時空から来たんだ」

TPC。時空侵略戦争。怪獣。そして光の巨人、ウルトラマンティガ。

それを聞いて一斉に思ったことを口にする吉井達。

「じゃあ、あの巨人は最も純粋で崇高な光……。つまり神様ってこと！？」（吉井）

「別の時空が存在するのか…」（坂本）

「……………高感度スキャナーが欲しい……」（土屋）

「そうじゃったのか」（秀吉）

すると辻野のGUTS COMがピピッ、ピピッと鳴りだす。レイがモンスターキャッチャーで姫路達の監禁場所を突き止めたのだ。そこは……

文月学園地下七階 試験召喚システム用倉庫。

さらにレイは文月学園が内側から物理的、そして電子的に封鎖されており、しかも文月学園内に文月学園の生徒達が多数捕まっている可能性があることを告げる。

その通信を聞いていた吉井達の辻野が何と言おうとも助けに行くと
いう表情を見て溜め息をついてしまう辻野だった

優子 side

秀吉が必死に走る吉井達を窓から発見し、追いかけて行ってから五分が過ぎた。

優子は空気を入れ替えようと窓を開けると急に窓からハエのような翅を生やした男が入ってきてハンカチを顔に押し付けてきた。

優子は抵抗しようとするも体から急速に力がなくなっていく、やがて意識を失った。

side

ここなら誰にもバレず邪魔されることなく計画を進めることができるという目論見に間違いはなかった。そう思いつつ白髪の女は部下たちに宣言した。

「投薬を開始せよ」

そして保育器のような装置に捕らわれている文月学園の生徒達を見て呟いた。

「なんて素晴らしい眺めなんさね」

誘拐と暴露

(超古代怪獣ゴルザ登場) (後書き)

次回予告

誘拐された生徒達を救出すべく文月学園に突入する辻野達。
そこで彼らは黒幕と対峙する。

次回、『文月学園の攻防』

乞う、ご期待ください！

文月学園の攻防

(複合思念獣マリシウス登場) (前書き)

更新が遅くなつてしまい大変申し訳ありません。

文月学園の攻防

（複合思念獣マリシウス登場）

辻野の家にて

「救出しに行くべきだよ！そうだよ、秀吉！雄二！」

「明久の言う通りじゃ！」

病院や親に確認をとった結果、優子を含め、生徒の大半が誘拐されていることが判明し、今すぐ文月学園に救出しに行くべきだと主張する吉井と秀吉。そんな彼らを辻野と坂本は

「武器、地の利、総員数。全てにおいて不利なのに真正面から突入なんて・・・」

「作戦なしで敵陣に乗り込むのは自殺行為以外の何物でもないぞ」

と諫める。隙のない正論を前に机に拳を叩きつける以外どうしようもない吉井。

辻野は文月学園の現状をリアルタイムで表示するモニターの前で溜め息をついた。

彼らの気持ちは痛いほどわかるが無暗な攻撃は誘拐された生徒達の命に関わる。

しかもすべてのセキュリティシステムを起動させている文月学園は学校ではなく難攻不落の要塞と化していた。校舎の構造。一つしかない地下階への入口。最新の防犯装置。全てが辻野達の救出作戦の阻害要因として立ち塞がる。

「地下に直接奇襲をかけれる方法はないのか・・・」

という坂本の言葉に辻野の頭の中にある作戦が思い浮かぶ。
それは道がないなら強引に作るというものだった。

そのころ優子は辻野と一緒にデートしていた。

「優子はどこにいきたい？」

辻野は優子と手を絡め、微笑みながら優しく訊ねる。優子は好きなお菓子を買ってもいいと言われた子供のような笑顔を浮かべながら

「雄弥の家にお泊りしたいんだけど、いいかな？」

と答える。そんな優子に嬉しそうな顔で

「いいよ」

と言つ辻野。

そんな辻野とのひと時を楽しむ優子だった。

優子は辻野とデートしているつもりなのだが実際は誘拐された他の生徒達と同じように休眠カプセルの中で無理矢理眠らされていた。

「クッククック。ジャリどもの精神エネルギーの状況は？」

という女の問いに対し部下である黒ずくめの男が

「さすがは思春期の人間と言っただけあって強力な精神エネルギーです。あと一時間でチャージが完了します」

と報告する。彼らは願望や欲望を掻き立てることにより増大した精神エネルギーを奪っていたのだ。

土屋とルイ、レイの三人の必死の努力により文月学園内のコンピューターシステム内に侵入することに成功した辻野達は時空侵略者の計画とその現状についてをディスプレイ画面に表示させる。精神エネルギーを一か所に集めようとしているようだ。精神エネルギーが臨界値に達するまで後一時間弱。

土屋がキーボードを叩くと全員が見ている夢が映し出される。

強化合宿の時に合宿所から避難する際に土屋に助けられ好意を抱いていた工藤は土屋と【閲覧削除】をする夢を見ていた。

「ムツツリ」二君。優しくしてね？」

それを見て

「・・・・・・・・（ブシャアアアッ）」

鼻血を噴水のように撒き散らしながら床に倒れこむ土屋。

「ムツツリ」二！！死んじゃだめだ！！」

輸血作業を開始する吉井に対し土屋はカッコよく（？）言い放った。

「・・・・・・・・こんな風に死ねるなら本望・・・」

しかし彼らは幸運だった。その後映し出された映像が

「優しくしてね、明久君？」

吉井明久と【閲覧削除】をする久保利光の夢だったからだ。

「「「「「・・・・・・・・（ゲポゲポツ）「「「「」

土屋とそれを看病する吉井以外の画面を見ていた全員が嘔吐した。

他にも

首輪と鎖を身に着けた半裸の坂本を調教する夢を見ている霧島の夢。
久保とデートする夢を見るEクラス代表の若林。

辻野と吉井、坂本を虐殺する夢を見る須川以下、大半のFクラスの生徒。

などがあつた。

準備が完了したためそれぞれの部屋で武器などを確認する。

TPCの隊員服に着替えコックピットに入っていく辻野。その後には続くルイ、坂本、吉井、秀吉、土屋。

「こちら辻野。発進します！」

彼らは闇の中へと進んでいった。

「チャージ完了まであと四十分！」

という部下の報告を聞き満足げに頷く女。すると女の前にあるモニターが赤く点滅し始める。

「侵入者を確認！場所は旧校舎一階付近！警備班は直ちに急行せよ！！」

と指示を飛ばす。しかしそんな指示をしてすぐにまた警報が鳴りはじめる。

「侵入者を確認！場所は新校舎一階付き・・・」

言い終わらないうちにまた警報が鳴りはじめる。

「侵入者を確認！新校舎二階・・・」

警報。

「侵入者を確認！旧校舎屋上！」

警報

「新校舎三階！」

警報

「新校舎屋上！」

次々と侵入者警報が発令される。警報で埋め尽くされるモニター。

電子的な攻撃を仕掛けられた女は部下に宣言する。

「敵がどこから侵入してくるかわからんさね！全ての緊急隔壁を封鎖せよ！！」

同士討ちや奇襲を避けるためにすべての区画が隔壁で閉鎖され、防御態勢を取る。それが辻野の目的だとも知らずに。

カタカタカタカタカタ...

隔壁による封鎖が完了した瞬間、床が震えはじめる。

「なっ、何なんさね！？」

ガタガタガタガタ...

どんどん振動が激しくなってくる。

ゴトゴトゴトゴトゴト...

しかもキーンという甲高い音まで鳴りはじめる。次の瞬間、爆音とともに文月学園全体が揺れる。

「なっ、何なんさね！！！！！！」

その数分前。

辻野は操縦席から家で待機しているレイに連絡を入れる。

「こちら辻野。所定の位置に到着。ただちに作戦を開始します」

「こちらレイ。了解！」

レイが文月学園のセキュリティシステムに電子的な攻撃を仕掛ける。これで文月学園内は混乱に包まれているだろう。レイから連絡が入る。

「第一段階、完了。皆さん、幸運を」

そんなレイに了解と返しレバーを前に倒しながら辻野が告げた。

「第二段階開始。ピーパー、前進します！！」

キュラキュラキュラキュラ

キユイイイイイイイイイイ

ズガアアアアアアアアアアン！！！！

固いコンクリートの壁をドリル（スピンドラー）が突き破り、ピーパーは文字通り文月学園地下七階の倉庫に突っ込んだ。

ピーパーの中から辻野、ルイ、吉井、坂本、秀吉、土屋がガッツライフルやハイパーガンを片手に降り、混乱している黒ずくめの男達を射殺していく。

敵は他の区画から援軍を送り込もうにも緊急隔壁により分断されているため戦力を補充できずあつという間に全滅した。

地下倉庫につながる扉を封鎖し、休眠ポッドを調べ始め電源を切ることに成功した辻野達。すると突然スピーカーから女の声が流れ始

める。

『この糞ジャリ共め！よくも私の計画を邪魔してくれたなっ！！』

吉井と坂本はその声を聴いて雷を受けたかのように体を硬直させ同時に叫ぶ

「この声は…ババア長っ！！！！！！！！！！」

学園長の呪うような声と共に休眠ポッドがバックアップ用の電源で再起動し始める。バックアップ用の電源は学園長がいると思われる隣の制御室からでないと切断できない。

制御室へとつながる扉をあけようとしていると反対側の壁だった部分が観音開きのドアのように開き、

ブーン、カシャン、ブーン、カシャン、ブーン、カシャン、ブーン、カシャン…

サーボモータの音と共に中から半分人間、半分機械でできたサイボーグゾンビが出てくる。

「何なのじゃ、アレはっ！！！！」

「………サイボーグ！？」

それは…

『行けっ！鉄人！あの糞ジャリ共を殺せええええっ！！！！！！』

西村宗一、通称TETSUJIN

の無残にも改造された姿だった。

顔や体のいたるところから黒い機械やチューブが突き出っていて、左目は眼球が抉り取られ代わりに機械の特殊スコープが埋め込まれている。

西村先生を見て、惨殺死体の方がましだと思っ辻野達。

熱血教師からただの殺戮マシンへと成り下がった鉄人が焦点の合わない目でこちらを見据え、サーボモーターと金属が当たる音を出しながら近づいてくる。

みんなを守ろうと前に出ようとする辻野を坂本が手で制し、坂本と吉井が代わりに前に出る。

「辻野君、このロボ鉄人は僕達に任せて！」

「辻野、お前は制御室にいるあの妖怪ババアをどうにかしろ！いくぞ明久っ！！！」

「了解、雄二っ！！！！！」

すべてのシステムが学園長の支配下にある以上召喚獣を召喚することとは……

そこで辻野はハッと気付く。

アウェイクン
「起動っ！！！！！」

ダブル
「二重召喚っ！！！！！」

坂本は白銀の腕輪の持ち主で、教員用の召喚フィールドとは別の独自のフィールドを展開できるのだ。そして吉井は物に触れることの

できる召喚獣を持つ《観察処分者》。

学ランに木刀を持った吉井をデフォルメしたような召喚獣が二体現れロボ鉄人に対し攻撃を仕掛ける。

『Fクラス 吉井明久 VS 文字通り鉄人

総合科目 1137点 VS NONE 』

「ヴオオ#@%‘&’¥\$!!!!ホシユウウウウー!!!」

と訳の分からない雄叫びを上げながら両腕と両足を振り回す鉄人。鉄人の当たればシャレにならない攻撃を躲しながら

バシッ、ガシッ、ボスッ、ガッ

腕、肩、膝、背中、頭・・・と鉄人の体に木刀で攻撃を加えていく吉井。

パシユン、パシユン、パシユン・・・

坂本、秀吉、土屋、ルイの四人もハイパーガンで鉄人を攻撃する。

「クソッ！何て頑丈なんだよ!!!」

毒づく坂本。

人間の数倍の力を持つ召喚獣と人間サイズの生命体なら即死するはずのハイパーガンの攻撃によって少しずつ追い詰められる鉄人。しかし

「グハッ!!!!」

中に入るとそこには銀色に輝く丸い金属製の容器を持った学園長がいた。

「その容器をゆつくりと床におけ」

と辻野は命令するが学園長はそんな辻野の言葉が聞こえなかったかのように話し出す。

「この校舎の周りにバリヤーを張った。この校舎からもはや誰も出ることはいないさね。クッククック・・・」

「何だと！」

「精神エネルギーは百パーセントではないが、まあいい。貴様らは人間が私の手によって滅んでいくのをじつくりと見ているがいい！
ハアーツ、ハツ、ハツ、ハツ・・・」

青白い煙のようなものが学園長の体の穴と言う穴から吹き出し銀色の球と一体化しバリヤーを突き抜け校舎の外へ出た後、巨大な怪獣となる。

体のあちこちに人間の顔が浮き出ているおぞましい姿。まるで人間の欲望を具体化したような姿に嫌悪感を抱く辻野。倉庫に設置されていた巨大スクリーンに怪獣が町を破壊していく光景が映し出される。

バックアップ用の電源を切って生徒達を休眠ポッドから起こしていた吉井達も言葉を失う。

休眠ポッドから起き上がった生徒達も画面にくぎ付けになっている。休眠ポッドから起き上がった優子は辻野を見つける辻野に抱きつい

てワンワン泣き出す。

「怖かったああアアー!!!!!!」

そんな優子を辻野は優しく抱きしめ頭を撫でる。

姫路と島田も吉井に、工藤も土屋に泣きついている。

霧島を助け起こした坂本が

「辻野」

と静かにしかし全員に聞こえるような声で言う。

辻野は悲しげな表情で頷き優子から離れ、ポケットからスパークレンスを取り出す。

全員が辻野を訝しむように見ている。

「辻野君…。どうしたの?」

急に離れた辻野を心配そうに見つめる優子。そんな優子に辻野は

「ごめん」

と一言謝り、誰もいない倉庫の端へ行き全員が見ている前でスパークレンスを持つ右腕と左手を十字に交差させ、右手を時計回りに回しスパークレンスを掲げる。

ピカアアン、キュイイイイイイン

強烈な光と共に辻野は消え、代わりに画面上に赤、青紫、銀色で構成された巨人が現れる。

「ウルトラマンティガ・・・」

文月学園の攻防

(複合思念獣マリシウス登場) (後書き)

次回予告

地球を滅ぼそうとする怪獣に敢然と立ち向かうティガ。
しかしあまりにも強大な敵の前に苦戦する。

そのとき吉井は？坂本は？優子は？そして辻野は？

次回、『君を守りたい』

乞う、ご期待ください！

君を守りたい

(複合思念獣マリシウス登場) (前書き)

ご意見、ご感想お待ちしております。

君を守りたい

（複合思念獣マリシウス登場）

世界を滅ぼそうとする怪獣マリシウスの行く手を阻むように出現するウルトラマンティガ。

「シュアッ！！！」

構えるティガ。

「ヴオオオオオン！！！！！」

吼えると同時にマリシウスの体のあちこちに浮かび上がっている人面の口の中からニョキニョキと触手が生えてくる。

「ッ．．．。ハッ！！」

嫌悪感を抱かせる光景に狼狽し、一瞬構えが緩んでしまっても構えなおす。

猛スピードで飛んでくる触手をハンドスラッシュを連射することによって空中で切断し、叩き落とす。落とせなかった触手を両手で掴んだ後、引きちぎる。

グシャッ

「ヴオオウウン！！！！ヴオオオオオオオオオン！！！！！！！！！！」

触手を引きちぎられ咆哮するマリシウス。

「ハッ、ハッ、ハッ！テユアッ！！テヤッ！！！！タアッ！！！！！！」

ティガはその隙に接近し体にパンチやキックを叩き込むが体勢を立て直したマリシウスの触手に薙ぎ払われ、辛うじて倒壊せず残っていたビルに突っ込んでしまう。

立ち上がって振り返った瞬間、首に触手を巻きつけられたティガは、引きずり倒そうとするマリシウスの触手を両手で掴み綱引きをする。が首だけでなく腰や手首にも触手を巻きつかれ投げ飛ばされてしまう。

「テアアアアアアッ！！！！！」

立ち上がるうとした瞬間、触手によってまた投げ飛ばされる。敵の攻撃の前にパワータイプに変身する余裕すらないティガ。

文月学園地下七階倉庫

苦戦するティガを援護すべくピーパーに乗り込もうとするルイを吉井が止めようとしていた。

「止めてください、ルイさん！危険すぎます！！」

吉井の制止を振り切りながらルイは叫ぶ。

「じゃあこのまま辻野さんが苦戦しているのを黙って見過ごせというのっ！！！！」

「で、でも……あまりにも無謀すぎですよ！！」

「私はこのまま大切な仲間が苦しんでいるのを見過ごすつもりはないわ。たしかに無謀かもしれない。でもこれが今、私ができる唯一のことだから…」

触手を振りほどこうともがくティガが映し出されたスクリーンを見つめながら紡がれたルイの言葉を噛み締める吉井。

「・・・辻野君も言ってた・・・」

振り返ると目を真っ赤に腫らした優子がいた。全員が注目する中、優子はスクリーンに映るティガを見つめながら続けた。

「人として、自分のできることをするって・・・」

その言葉を聞いて吉井があることを思いつく。

「ルイさん！ピーパーにバイクは積んでありますか！」

「一応、積んであるけど・・・」

吉井の目的の見えない問いを訝みながら答えるルイ。

「雄二！バイクの運転できる？」

「あ、ああ・・・」

悪鬼羅刹時代に何度か乗ることがあった坂本は吉井の意図を推し量りながら頷く。

「何をするつもりなんですか？」

と我慢できずに訊ねるルイに吉井ははつきりとした口調で答えた。

「人として自分ができることをするんです!」

「テユアアアアアッ!!!!!!」

首に巻きついていて触手を切断するのに成功するも腰に巻きついて
いる触手に振り回され、倒されてしまうティガ。

「ヴオオオオオオオン!!!!!!」

倒れたティガに追い打ちをかけるべく近づこうとして後ろからレー
ザーで攻撃を受けるマリシウス。ゆっくり振り返るとそこには学園
の地下から穴を掘って出てきたピーパーがいた。ドリル部分である
スピンドラーから熱線フューザーZを放ちさらに攻撃する。

「テアッ!!!!!!」

ブチブチブチッ

「ヴオオオオウウウウウン!!!!!!!!!!!!」

マリシウスの注意がピーパーに向いた隙に両腕を胸のプロテクター
の前で組んだ後、伸ばしティガスライサーを放つことで体中に巻き
ついている触手全てを一発で切断する。

触手を切断されたことに腹を立てたらしく残った触手を振り回し暴

れるマリシウスから距離をとり、構えるティガ。

「テヤッ！・・・ッ！！！」

電撃の直撃を受け戦闘不能になり後退するピーパーを完全に破壊すべく触手からの電撃で攻撃しているとしているマリシウスを邪魔すべくマリシウスの背中に

「タアアアアア——ッ！！！！！！！」

バシイイイイイイイン！！

火花が散るほど強力な飛び蹴りをきめ、さらに

「タアッ！トアッ！！ハアアッ！！！！！」

光を纏わせたパンチやキックをこれでもかというくらい浴びせる。ピーパーに逃げられたマリシウスは邪魔者^{ティガ}を排除すべく向き直る。マリシウスの攻撃に備え、構えるティガ。

「ヴオオオオオオオオオオン！！！！ヴオオオオオオオオン！！！！！！！！！」

「ハッ！！！」

ピーパーが攻撃を開始した頃、吉井と坂本は辻野の家の前にいた。

「ありがとう、雄二！！！」

バイクで家まで送ってくれたことに礼を言う吉井に

「俺は自分のできることをしたまでだからな、しくじるなよ、明久！」

フツと笑顔をこぼしながら答える坂本。そんな坂本に吉井はいつもの笑顔で言った。

「もちろん!!」

吉井は辻野の家に入ると、格納庫に向かって走り始めた。

電撃を左右に飛んで躲し襲い掛かってくる幾多の触手を振りほどきながら接近し、体にパンチやキックを打ち込むティガ。しかし触手から放たれた電撃を喰らい火花を散らしながら吹き飛ばされる。

「テヤアアアアッ!!!!」

ピコン・・・ピコン・・・ピコン・・・ピコン・・・

とうとうカラータイマーが警告音を発しながら赤く点滅し始める。立ち上がり必殺技のゼペリオン光線を放とうと両腕を体の前で交差させ、左右に広げようとしたところにマリシウスの触手が両手首に絡み付き身動きが取れなくなるティガ。

両手首に絡み付いた触手から逃れようと目がくティガ。

吉井 sides

「吉井君！無茶な真似はやめて直ちに帰投しなさい！！！！あなたに戦闘行動は無理よ！！！」

無線機からレイの叫び声が聞こえてくるが

「無茶かもしれないけど無理じゃないです！これが僕の人として今僕ができる最善のことなんです！」

と一方的に答え無線機をオフにする。

次々と友人達の顔が浮かび上がる。両親。姉さん。雄二。美波。秀吉。ムツツリー二。霧島さん。工藤さん。（常夏コンビを除いた）文月学園のみんな。みんなのため、世界のために今、命を懸けて戦っている辻野君。そして最愛の人、姫路さん．．．。

—みんなを守るために自分にできること。

ティガ、いや辻野が敵の触手攻撃に苦戦しているのがコックピットのガラスに映る。一ヘッドアップディスプレイ《HUD》を起動し、触手にロックオンし吉井は絶叫した。

—みんなを、そして君を守りたい！

「喰らええええええええー！！！！！」

カチツ

どこからともなく放たれたレーザー砲が触手を切断する。マリシウスから距離を取り、振り返ると超光子レーザー・スパル砲と通常のビーム砲・ニードルを連射しながらマリシウスに突入していくガッツウイング2号の姿が見える。

ガッツウイング2号は触手と触手から放たれる電撃をぎりぎりのところで躲しながら飛び回り攻撃する。

ゼペリオン光線を放つべく構えるティガ。しかしマリシウスはそうさせまいと文月学園に向かって歩き始める。文月学園が爆風範囲に入ってしまったため破壊力が強すぎるゼペリオン光線を封じられてしまったティガは空中で静止しているガッツウイング2号に向かって頷く。

ティガの意図を理解した吉井はシミュレーターでやった通りに両翼の付け根にあるギアを作動させ機体の中央部を左右に展開しハイパーレールガンを設定し、デキサスビームを発射した。

ズドオオオオオオオオオオオ

轟音と共にマリシウスは粉々に吹き飛ばされた。

はずだったのだが、土煙が収まるとそこには体の後ろ半分を完全に消滅させられたのにもかかわらず文月学園に向かって少しずつ前進するマリシウスの姿があった。ティガは急いでマリシウスの前に行き前進を食い止めようとする。お互いに一歩も譲らない。すると

マリシウスはティガの体中に触手を巻きつけ黒いエネルギーをティガに送り始めた。

先程までティガとしてマリシウスを押し合っていたのだがいつのまにか見覚えのある真っ白な世界にいた。

「あ、あのきよ、巨人が避けさえしつ、しなきゃよかったのよっ．．．
．！あの巨人さえ．．．！！」

と泣き叫ぶ木下優子が急に現れ、消える。今度は後ろから

「ハッ、バカじゃないの！あんたみたいなグズで鈍間な奴、好きになるわけないじゃない！！」

と言われ振り返るとそこには小山友香が立っていたがまた消えてしまっ

「死ね！辻野のクソ野郎が！！」

今度は須川亮が立っていた。次々と現れては消える人々から発せられる呪詛の声に困惑する辻野。

「これは．．．一体．．．」

「これはあの者が吸い取った感情．．．」

振り返るとそこにはユザレが立っていた。

『人間の欲望があるかぎり貴様は私には勝てん。これが貴様が守ろうとしている人々の正体だ!!』

学園長の声が空間中に響き渡ると同時に真っ白い空間が徐々に黒くなっていく。

「ユザレツ!!」

辻野は助けを求めて叫ぶがユザレは目を閉じ静かに告げる。

「人の心から闇が消え去ることはない・・・」

どんどん黒くなっていく空間。辻野は叫ぶ。

「ユザレ！僕はもういいんだ!!」

その問いにユザレは両手を辻野にかざしながら答えた。

「あなたは光であり、人である。答えは自分自身で出さなくてはならない・・・」

かざされた両手が金色に輝き辻野の脳に直接映像が届く。

「辻野！頑張れ!!」

「負けんじゃねえぞおお!!!!」

「ガンバレエエエー!!!!」

倉庫のスクリーンを見ながら必死に応援する文月学園の生徒達。

「早く避難してください!!」

ティガを見上げながら避難誘導を手伝うレイ。

「この周波数は．．．」

戦況が映されている画面を見ながら警察や消防の無線をより広範囲に伝えようと無線機と格闘するレイ。

「辻野！負けたら承知しねえぞ！！」

逃げ遅れそうになっていた少年を保護し、バイクで避難する坂本。

「負けちゃだめだ、辻野君！！」

スバル砲やニードル砲で怪獣を攻撃する吉井。

「辻野君．．．」

スクリーンに映し出されたティガを見つめながら祈る優子。

それを見て辻野はあらん限りの声で叫ぶ。

「たとえ人の心から闇が消えることがなくても、僕は信じる。人は自分自身で光になれるんだ！」

その瞬間、闇に包まれようとしていた世界が元通りの白さを取り戻していった。

気がつくとき辻野は未だにマリシウスと押し合っていた。

吉井。坂本。土屋。秀吉。工藤。霧島。Fクラスのみんな。文月学

園のみんな。そして僕のことを好きだと告白してくれた優子。決して完璧とはいえない人々。でも辻野にとって大切な仲間達。

—みんなを、そして君を守りたい！

全身を赤熱化しだすティガ。あまりの熱さにマリシウスはティガから離れようとするがティガがガツチリと掴んでいるため身動きが取れない。さらに体からエネルギーを発散しはじめるティガ。ウルトラヒートハッグによってマリシウスは

[illegible]

という断末魔をあげながら大爆発を起こし爆死した。

החנה החנה החנה

破壊された街に佇むティガ。

この世界の最後の敵がティガによって倒された。

君を守りたい

(複合思念獣マリシウス登場) (後書き)

次回予告

怪獣の脅威は消え、元の生活に戻る吉井達。

次の世界に向かうべく、一人文月学園に別れを告げる辻野。

次回、『旅立ちの時』

乞う、ご期待ください！

旅立ちの時（前書き）

バカとテストと召喚獣編の最終話です。
ご意見、ご感想お待ちしています！

旅立ちの時

ピコンピコンピコン・・・

廃墟の中でティガのカラータイマーの警告音が響き渡る。

マリシウスが倒されると同時に文月学園を覆っていたバリアーが消え、校舎から生徒たちが出てくる。スタッグに乗ったまま正門から校庭に入ってくる坂本。吉井も校庭にガッツウイング2号を着陸させ、コックピットから出てくる。

「やったあゝ!!」

「ありがとう!辻野おおおっ!!」

口々に歓声を上げる生徒達を見下ろしていたティガはみんなの目の前で光の粒子に包まれながら辻野の姿に戻る。みんなに揉みくちやにされる辻野。辻野や吉井達がお互いの生還を喜び、称えあっていると優子がやってきて、

パシィィィン

いきなり辻野の横っ面を平手で叩き、走り去る。

「姉上っ!!!」

秀吉の叱責が響く中、突然のことに啞然とする吉井達。後を追おうとする秀吉の腕を掴み、引き留める辻野。

「辻野よ、お主はこのままで良いのかっ！」

という秀吉の答えに寂しげな笑みを浮かべながら

「これでいいんです・・・」

と答える。そんな辻野を見ていた坂本が全てを悟ったような表情で

「もう行くのか・・・」

と呟く。静かに頷く辻野。土屋と吉井はそのやり取りを聞いて呆然とする。

辻野は優子を探すために走り出そうとしていた秀吉を呼び止め、二、三言優子への伝言を頼んだ後、木下さんに渡してほしいと言ってベストの左肩部分に縫い付けてあったTPCのパッチを剥ぎ取り手渡した。

（優子 side）

優子は自宅の自室の隅で泣きながら縮こまっていた。

優子は怒っていた。

辻野が母親を守れなかったことにでも秘密を自分に話してくれなかったことにでもない。

自分の命の恩人に対して素直になれない自分に対して、だ。

あれだけ理不尽で酷いことを言ったにもかかわらず自分に優しく接してくれた辻野に対して何てことをしてしまったのだらうと今更ながら申し訳なく思う優子。

コン、コン

というノックと共に秀吉が入ってくる。

「姉上……」

優子の隣に座り声をかけようとするが適当な言葉が見つからず顔を歪める秀吉。

「……辻野君、あたしの事、怒ってたでしょ……」

力なく発せられた優子の問いに秀吉が優しく答える。

「そのようなことはない。辻野は姉上の事をこれっぽっちも怒ってはおらぬ。逆に姉上に感謝してると言っておったのじゃ。また、母上の事は本当にすまなかったと言っておったのう。」

真つ赤に腫れた目を見開き秀吉を見つめる優子。そんな優子に秀吉は辻野から預かってきたTPCのパッチを渡すと優子はそれを見つめる。

「お守りとして持つという欲しいと言っておったのじゃ……」

それを聞いて優子はTPCのパッチを握りしめたまま辻野に会うべく部屋を飛び出る。辻野がこの世界を去ることに気づいたのだ。そんな優子を追いかける秀吉だった。

〈辻野side〉

貸与した武器や使用されたライドメカを回収し、吉井に割り当てられていた部屋から吉井の私物を運び終えた吉井達は辻野の家の前に立っていた。

「短い間でしたが、本当にお世話になりました」

深々と頭を下げる辻野に吉井達も口々にお別れの言葉を告げる。

土屋とイチヤイチヤしている工藤を見て優子のことが一瞬気になったが一通り会話も終わったので時空移転に備えるために家の中に入ろうとすると誰かが走ってくる音が聞こえたので振り返ると優子が抱きついてきた。

「行かないで・・・」

胸の中で呟かれた優子の言葉に首を横に振ることで答える。

そんな辻野を見て優子は

「アタシ何でもするから！今まで酷いこと言ったことも謝るし、料理だって練習するから！！何でもするから・・・お願い・・・！！！！！！」

と泣きながら言う。

しかし辻野は

「木下さん・・・ごめんなさい・・・」

と優しく優子を抱きながら囁くような声で告げる。姫路、島田、工藤、霧島から女の子にここまで言わせておきながら断るなんてという非難の目線で見られるが辻野の目から一筋の涙が零れ落ちるのを

見て理解する。辻野も決して別れたわけではないのだということに。

すると家や辻野が淡く光り始める。

「行かないで．．．！！！！」

優子が必死に懇願するが辻野は

「ごめんなさい．．．。さよなら．．．」

という言葉を発すると同時に強烈な光を放ち、消滅した。

「さよなら．．．」

辻野に告げることができなかった別れの挨拶は朝のそよ風の中に消えていった。

プロローグ3（前書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

プロローグ3

~~~~~side~~~~~

地球。

あの青き星で勇敢な戦友達と共に侵略者達と戦った日々を思い出しながら私は星雲の同僚に馬の首暗黒星雲へと護送されていた。

私は宇宙の正義に反する行動をとった。しかし私は、私の心になんら恥じるところはない。愛するものを守ろうとすることは、宇宙に普遍的な摂理だ。後悔はしていない。  
たとえあの女の

「覚悟するがいい。お前の居場所は、この宇宙にはもうない」

という言葉が正しくても…。

そんなことを考えていると私と私の同僚の前に黄金の円盤竜が現れ、告げる。

「君の仮釈放が決まった。至急、地球に向かってほしい」

突然の仮釈放命令に戸惑いつつ

「何があつたんですか」

と訊ねると円盤竜はこう答えた。

「地球が侵略される可能性が濃くなってきた。そこで地球についての専門家である君が選ばれたのだよ」

申し出を断るべく口を開く。

「しかし私は侵略者を庇いました…」

しかし円盤竜は

「あの事件に関する君の報告を聞いたが君は地球人が自らの手で真実を明らかにするために時間を稼いだだけだ。いくらでも解釈のしようがある」

と全く問題ないと言う。

「愛するものを守りたいのだろう」

と続けた円盤竜の言葉を聞いて覚悟を決める。

「わかりました！」

こうして地球に六度、赤き戦士が降り立つことになった。

その戦士の名は…ウルトラセブン



帰ってきたウルトラマン

(肉食地底怪獣ダイゲルン登場)

(前巻

ご意見、ご感想お待ちしております！

帰ってきたウルトラセブン

(肉食地底怪獣ダイゲルン登場)

〈辻野side〉

「ウルトラ警備隊！？ウルトラ警備隊って精鋭部隊の・・・」

辻野は自分が今日付けで配属されることとなった地球防衛軍の部隊名を聞いて驚く。

資料によると地球防衛軍の精鋭達が集められた、この世界のGUTSのようなものだ。

この世界では射撃検定、飛行機操縦検定共に準一級以上の資格を持つウルトラ警備隊員の仲間入りをしないといけない自分の状況に啞然とするがそういう組織について疎いレイとルイはまるで普通の事のように言うのだった。

ブルーグレーに白いラインの入った隊服を着て極東基地に向かうべくジープに乗っているとTDFと書かれた軍服を着た人達に車を止められる。なにやらこの地区全体が封鎖されているようだ。

「何かあつたんですか」

と近くにいた若い軍人に訊ねるとこの地区一帯に住む人達全員が数日前から行方不明になっているため立ち入り禁止になったと告げられる。警備隊員にもかかわらずなぜ知らないのか詰問されていると

「新人だからだよ」

と後ろから話しかけられる。振り向く辻野。そこには同じく警備隊の隊服に身を包んだ二十代前半ぐらいに見える真面目そうな男が立

っていた。

「カツ、カザモリ隊員！」

慌てて敬礼する軍人の横で冷静に

「本日付でウルトラ警備隊に着任することになりましたツジノ・ユウヤです」

と自己紹介する。するとカザモリと呼ばれた男が笑顔で答えた。

「カザモリ・マサキです。よろしく」

そこから少し離れた場所では二人組の小学生が

「将也！早く戻ろっぜ！！ここは立ち入り禁止なんだぜ・・・」

「良助！それぐらいで怖がんなよ！」

そんなやり取りをしながら立ち入り禁止区域を探検していた。すると

カタカタカタ・・・

地面が揺れ始める。どんどん大きくなっていく揺れ。

「何なんだよ・・・！！」

将也と呼ばれていた少年が叫ぶ。

それと同時に地面を突き破り怪獣が現れる。

「ウワアアアアアア——！！！！！！！！」

<sup>TDF</sup>  
地球防衛軍 極東基地

ウルトラ警備隊の本部のモニターにはカザモリからの通信が映し出されていた。

「K3地区の地下より怪獣が出現！」

モニターに映し出される怪獣。

通信、オペレーション担当のホンジョウ・ルミ隊員が

「過去に出現した怪獣のデータと一致しません。」

と過去に出現した怪獣のデータを別のモニターに出しながら答える。それを見てウルトラ警備隊隊長であるシラガネ・サンシロウが即座に指示を出す。

「私とシマ、ミズノの両隊員はホーク1号で出撃。ツジノ、カザモリ、ハヤカワの各隊員は付近の住民の避難を」

「……了解！」「」「」

怪獣は口から火炎を吐き、早速街を破壊し始める

指示された役割を果たすべく動き出す隊員達。住民の避難誘導をしようと走っていると胸ポケットに隠し持っていたPDIにレイからの通信が入ったので物陰に隠れてPDIを作動させる辻野。

「あれはあなたの世界にいるはずの肉食地底怪獣ダイゲルンです。」

「対処方法は？」

「口から火炎を吐いて攻撃してきます。また怪力の持ち主ですのでパワータイプでの戦闘が有効かと……」

「了解」

PDIを隠し、他の防衛軍隊員と共に避難誘導を手伝う辻野。すると彼らの真上を大型の航空機が銀翼を煌めかせながら通り過ぎる。ウルトラホーク1号だ。

機体を $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ の三機に分離し三方向からレーザー砲やミサイルで攻撃するウルトラホーク1号。圧倒的な火力で足止めをすることには成功したもののダメージを与えることができない。避難誘導中のため、ティガに変身することができず怪獣が街を壊していくの指をくわえて見ているしかない辻野。自分の無力さを呪っていると

「助けて〜！」

と微かに声が聞こえたような気がしたので辺りを見回すが誰もいない。幻聴と片づけるにはあまりにもはっきりとした声だったのでウルトラホーク1号に乗っているシラガネ隊長に腕時計型通信機であるビデオシーバーで呼びかける。

「隊長。付近に逃げ遅れた人がいないかスキャンしてただけませ

んか！」

「わかった」

と即座に返事をしスキャンを開始するシラガネ隊長達。すると同様に付近をスキャンしていたシマが

「怪獣の近く、ポイント14231にて子供二名を確認！」

と若干の焦りを声に含ませながら報告する。

「ポイントに一番近いのは誰だ？」

「カザモリ隊員です」

「カザモリ隊員！子供たちを何としても保護しろっ！！」

「了解！」

「ハヤカワとツジノの両隊員は引き続き怪獣の進路方向周辺の住民の避難誘導を」

「了解」

テキパキと指示を出すシラガネ隊長とそれに従う隊員達。避難誘導に行くふりをしてティガに変身すべく物陰に入ろうとするが後ろから『ポインター01』と書かれた車が猛スピードで走ってきて辻野の前で止まる。中からウルトラ警備隊の隊服を着た女性が

「早く乗って！」

と有無を言わさぬような口調で告げる。これがシラガネ隊長が言っていたハヤカワ隊員なのだろうと納得しつつ車に乗り込む辻野だった。

くカザモリsideく

シラガネ隊長からの指示を受けポイント14231に急行するカザモリ。  
すると

「「助けてー！！」」

という声が聞こえてくる。交差点の角を曲がると小学生らしき少年二人がこちらにむかって走ってくるのが見える。二人が無事であることに少しほっとしていると怪獣が急に進路を変え、少年たちの方へ向かい始める。

「クソッ」

悪態をついたあと自殺行為だと理解しつつ罔になるべくホルスターからウルトラガン抜き少年達が走るのとは逆方向に走り始める。

「早く逃げて！！」

ウルトラガンで怪獣に向けて発砲しながら少年達に向かって叫ぶ。ウルトラガンによる攻撃に気を取られカザモリの方へ一歩一歩進んでいたダイゲルンが何の前触れもなくカザモリに向かって口から火

炎を吐いた。

「うわああああああっ!!!!!!!!!!」

火炎に巻き込まれてしまうカザモリ。

次の瞬間、この地区全体が強烈な光に包まれる。何も見えなくなり混乱するダイゲルン。

光が収まるとそこには六角形の瞳に首から肩にかけて銀色のプロテクターで覆われそれ以外は真っ赤な体。額に輝く緑色のランプ。

「あれは・・・」

と真紅の巨人を見つめながら呟くハヤカワ隊員。辻野も真紅の巨人を見つめ、事前に目を通していた資料を思い出しながらも呟いた。

「あれがこの世界の人類の守護者・・・」

「デュアッ!」

ウルトラセブンが時空侵略の危機に晒された地球を守るべく大地に降り立ったのであった。

帰ってきたウルトラセブン

(肉食地底怪獣ダイゲルン登場)

(後書

次回予告

ダイゲルンと戦うウルトラセブン。しかしレイはこれは時空侵略の序章にすぎないと告げる。

次回、『嵐の予兆』

乞う、ご期待ください！

嵐の予兆

(肉食地底怪獣ダイゲルン登場) (前書き)

ご意見、ご感想お待ちしております！

## 嵐の予兆

（肉食地底怪獣ダイゲルン登場）

「デユアッ！」

地球を危機から救うべく現れた赤き巨人、ウルトラセブン。

「ギヤアアアアン！！！」

出現した敵に対し咆哮したダイゲルンは口から火炎を吐きセブンを攻撃する。

セブンは火炎を素早く避けてダイゲルンに接近したかと思うとパンチやチョップを連続で打ち込み、怯んだところにドロップキックで追い打ちをかけ、両腕を掴み投げ飛ばす。

「ダアアアアアッ！！！！！」

「ギヤアアアアン！！！！！！！」

頭からビルに突っ込むダイゲルン。セブンは立ち上がろうとするダイゲルンの足首を掴み、投げ飛ばす。フラフラにならながら立ち上がり火炎を吐きながら両腕を振り回すが歴戦の猛者にそんな攻撃が通じるわけもなくあっさり躲かれ、投げ飛ばされてしまう。距離をとられてどうしようもなくなるダイゲルン。

「デアッ！！！」

「エッ．．．」

戦いを見ていた辻野が驚きの声を漏らす。

セブンが両腕を頭部にかけていき頭部についているトサカをブーメランのように投げ、ダイゲルの両腕を切断したのだ。アイ・スラッガーを初めて目にした辻野からしたら当然の反応だった。

「ギヤアアアアアアアアアアアアン!!!!!!!!!!!!」

「デュアツ!!!」

両腕から血を垂れ流し絶叫するダイゲルンに対し、セブンは両手を額に当ててビームランプからエメリウム光線を放ちとどめを刺す。

ダイゲルンは大爆発を起こし粉々になった。

「デアッ」

ウルトラセブンは大空の彼方へと飛び去って行った。

「さすがはウルトラセブン……」

と嬉しそうに微笑むハヤカワ。そんなハヤカワを見て辻野は自分もこんな目で見られていたのだろうかと考え込んでしまった。考え込んでいると先程まで笑顔だったハヤカワが真剣な表情で無線機に

「カザモリ君！カザモリ君、応答して！！」

と呼びかけ始める。辻野もビデオレシーバーで

「カザモリ隊員！カザモリ隊員！！」

と呼びかけるが返答がない。沈黙しか返さない無線機にハヤカワが

「カザモリくん!!!!!!」

と半泣きで叫ぶ。すると

「おい!!!!」

と前から誰かが手を振りながらポインターに向かって走ってくる。  
カザモリだった。

「カザモリ隊員！」

「カザモリ君!!!!」

カザモリの生還を喜び合う辻野とハヤカワ。そんな二人を笑顔で見  
つめつつカザモリはポケットに入っているカプセルを取り出し見つ  
めながら呟いた。

「また世話になる。すまない、ミラクルマン・・・」

ウルトラ警備隊本部

ダイゲルンの出現で遅れてしまった新人隊員への歓迎会が行われて  
いた。

「彼が新しくウルトラ警備隊に配属されたツジノ・ユウヤ隊員だ」

「このたび、ウルトラ警備隊に配属されましたツジノ・ユウヤです。よろしく願いします！」

シラガネ隊長の紹介を受けて全員に自己紹介する辻野。そんな辻野にがっしりとした体格の男性隊員が

「シマ・ケイスケだ。よろしくな」

と、ひよろつとした優男の隊員が

「ミズノ・タクマです。よろしく」

と、そしてオペレーション担当と思われる小柄な女性隊員が

「ホンジョウ・ルミです。よろしくね」

と、それぞれ自己紹介する。

そのあと地球防衛軍極東基地をハヤカワの案内で見て回ったのだが TDF TPC 並み、いや、それ以上の科学力を誇る装備の数々に圧倒される辻野だった。

その日、自宅に帰った後、辻野は TDF のデータベースからダウンロードしたウルトラセブンに関する資料を眺めていた。

メトロン星人と戦うセブン。

エメリウム光線を跳ね返されながらもクレージーゴン戦うセブン。

キングジョーに何度もアイ・スラッガーを叩き込むセブン。

セブンそっくりのロボットと互角の戦いを繰り広げるセブン。

双頭怪獣パンドンの首を切断するセブン。

数多くの戦いを勝ち抜いてきたセブンとウルトラ警備隊。

この世界に果たして自分という存在が必要なのだろうかと思わず考え込んでしまう。

するとドアチャイムが鳴ったのでドアを開けるとレイが入ってくる。

「どうしたんですか、レイさん？」

「長から重要な伝言を預かってきました。」

いつもと違って深刻な顔をしているレイの告げた伝言は辻野の想像を絶するものだった。

「時空侵略者がこの世界の侵略宇宙人と手を組んだ可能性が高いそうです」

「そんなっ！！！」

事態がさらに複雑になったことを知って頭を抱える辻野だった。

side????

どこかの会議室のような場所で

「私達がウルトラセブンを倒せばいいってことね」

可愛らしい中学生か高校生くらいの女の子の双子の片割れが円卓に座る男達に傲岸不遜な態度で言い放つ。それに対し黒いサングラスをかけた黒ずくめの男がそんな態度に怒りを表すことなく

「その通りだ」

と超然とした笑みを浮かべながら答える。そんな男の反応が気に食わないのか

「フンッ！！！」

と言ってさつさと会議室から出ていってしまう。無礼な態度を取られても笑みを浮かべ続ける男。その男に隣に座っていた地球防衛軍の参謀が不安げに男に訊ねる。

「あの小娘どもは上手くやってくれるのかね？」

そんな問いに男は先ほどまでの笑みを消し、無表情な顔で答える。

「我々の作戦の準備のためにもあいつらには上手くやってもらわないといけない。いや、たとえ上手くいかなかったとしても困としての最低限の役割を果たしてもらう」

男の答えに満足したのか

「そうか」

とだけ呟き、静かに部屋を出る参謀。そんな参謀の背中を見送ってから男は呟いた。

「ウルトラセブン……。この星を貴様の墓場にしてくれる……」

T D F 極東基地

ダイゲルン出現から数日が経過し、ウルトラ警備隊の隊員達もゆつくりと平和なひと時を満喫していたが辻野とカザモリは内心焦っていた。おかしなことと言ったら最新鋭の発電所で原因不明の謎の故障が相次いでいるだけで侵略の兆候が全く見られないのだ。

「隊長は？」

とパトロールから帰ってきたミスノがホンジョウに尋ねる。食堂で買ってきたケーキを食べながら

「サイジョウ参謀に呼び出されてます」

ホンジョウもミスノやほかの隊員と同じように顔をしかめながら答えた。

「地球防衛軍内部に裏切り者がいる・・・」

サイジョウ参謀に呼び出されたシラガネ隊長はそのセリフを聞き茫然としていた。

「先日の怪獣出現時における通常部隊の足並みの乱れ。マスコミへの情報漏れ。そして最高機密であるオメガファイルへのハッキング未遂。どう考えても誰かが内部情報を漏らしているようにしか思えない」

「たしかに私も通常部隊の各部隊から不自然な命令が相次いでいると相談を受けてはいますがまさか．．．」

過去何回か行われた侵略行為の数々を思い出し慄然とするシラガネだった。

嵐の予兆

（肉食地底怪獣ダイゲルン登場）（後書き）

次回予告

不可解な故障が相次ぐ最新鋭の発電所の警備班が全滅。  
調査に向かった辻野とカザモリがそこで目にしたものとは？

次回、『狙われた発電所（前編）』

乞う、ご期待ください！

狙われた発電所（前編）

（宇宙怪獣エレキング登場）（前書き）

おかげさまでPV20000を突破しました。

ご愛読いただいている皆様に感謝の気持ちで一杯です！

これからもよろしく願います！！

また活動報告にも載せましたが現在、ファンタジー世界を舞台にしたウルトラマンを執筆中なのですが、主人公のウルトラマンの名前が思い浮かびません。

良い案をお持ちの方はぜひ感想に書いて送ってください。  
よろしく願います。

夜。とある発電所。

警報音と共に制御室が赤色灯の赤い光に包まれる。制御盤についていた技師が

「大沢さん！またあのエネルギー変動が発生しました！」

と叫ぶ。大沢と呼ばれた男が指示を出す。

「動力炉に異常はっ！！！？？？」

「見当たりません！！」

「ボルテージ・スタビライザーは！？」

「正常に機能しています！！」

大沢は思わず頭を抱えてしまった。機器には何の異常も見当たらない。このままではプラズマエネルギー発電計画そのものが頓挫しかない。

「センサーの故障か・・・？」

常に自己診断プログラムが作動していて、二重、三重のバックアップ機能があることから大沢はあり得ないと思いつつ呟く。そんな呟きを耳にした技師が

「そんな馬鹿な！センサー類は地球防衛軍<sup>TDF</sup>の科学技術局から送られ

てきた最新鋭のものなんですよ!!」

と驚いたような表情で答える。そんな技師に対し

「わかつているが念のためだ」

といって大沢はセンサーのあるエリアへ向かうべく制御室を出た。

薄暗い通路を小走りに走る大沢。問題の動力システムがある区画に足を踏み入れた瞬間、誰かが後ろにいるような気配がしたので振り返るが誰もいない。首をかしげながら前を向くと誰かの影が一瞬横切る。無線機をオンにし

「このエリアで作業中の人間はいたか？」

と制御室に連絡をいれるが空電音だけで応答がない。恐怖を覚えた大沢は

「そこにいるのは誰だっ!!」

と思わず大声で叫ぶがコンクリートでできた廊下に虚しく響くだけだった。そして真後ろに誰かの気配を感じた瞬間、彼の意識は暗黒に包まれた。

「制御室！応答をしてください!!」

制御室からの定時連絡がなく焦っていると警備隊長が命じた。

「警備班出動！」

小銃や拳銃を構えながら薄暗い廊下を進む警備隊員達。すると急に廊下の電気が消え警備隊員達が発砲した銃の銃声と警備隊員達の断末魔が響き渡る。

パン、パン、パパパン、パパン、パン、パパパン

「うわあああつ！！！！！」

「ぎゃあああつ！！！！！」

「ひひひひひひつ！！！！！！！！」

「助けてくれええええええ！！！！！！」

そして廊下は元の静寂を取り戻した。

最新の科学技術によって作られたプラズマエネルギー発電所からの連絡が途絶えて2日が経った。ウルトラホーク3号で上空から発電所を偵察するよう命じられたカザモリと辻野。

「一体何があつたんでしょうね・・・？」

と訊ねる辻野にカザモリが

「それを調べるのが俺たちの仕事・・・」

と答えているとガクツと急に機体の高度が下がり始める。コックピットを警告灯の放つ赤い光と甲高い警報音が包み込む。

「計器に異常です！強い電磁波です！！」

ディスプレイパネルにシステム異常の文字が点滅している。操縦席にいたカザモリが

「手動に切り替える！全部こっちに渡せっ！！」

と命令する。システムを切り替え

「放しました」

と言ってカザモリを見る辻野。操縦桿を握りしめ色々と操作していたカザモリがふと顔を上げ、

「おい、ツジノ！」

といきなり辻野を呼ぶ。いきなり呼ばれ戸惑いながらも

「ハイッ！！！！」

と答える辻野にカザモリが一言。

「やっぱだめだわ」

「エッ．．．」

とんでもない発言に一瞬戸惑う辻野。意味を理解した辻野と諦めの境地に達していたカザモリの悲鳴を載せてウルトラホーク3号は落ちていった。

「うわああああああああ——つ!!!!!!!!!!!!!!」

<sup>TDF</sup>  
地球防衛軍 極東基地

「カザモリ隊員！ツジノ隊員！応答しろ！！！！」

発電所だけでなく発電所の偵察に行かせたウルトラホーク3号からの連絡も途絶えてしまったことに頭を抱えるシラガネ。ウルトラホーク1号で出動しようとするシマ隊員とミズノ隊員、ハヤカワ隊員に戦闘機ではなくポインターで出動するよう命じるシラガネだった。

発電所の近くの樹海に不時着した辻野とカザモリは発電所に向かって歩き始めた。

発電所が見える位置までいき、双眼鏡で観察する二人。特に破壊や損傷を受けたような痕跡がないが、人気もなく不気味だった。発電所の前に到着し

「誰かいませんか！」

とカザモリが門のインターホンを鳴らし呼びかけるが返答はない。ウルトラガンで門の鍵を壊し中に入る二人。人っ子一人いない廊下を進むカザモリと辻野。あまりの静かさに辻野とカザモリはホルスターからウルトラガンを抜き前後左右をカバーしながら進んでいく。制御室の扉を開けると扉に背を向け、制御盤に向かって座っている技師らしき人間がいる。万一来に備え、辻野が距離を取ってウルトラガンを構え、カザモリに向かって頷く。了解の印に頷き返し技師に近付いていくカザモリ。肩を掴み振り返らせるとそれは人間の死体だった。

「これは．．．一体．．．」

啞然とする辻野と冷静に死体を見つめるカザモリ。すると制御盤が急に再起動し始める。

「プラズマ動力炉が再始動中。反応炉からエネルギー漏れを確認！どうなってるんだ！？」

エネルギーが漏れているにもかかわらず緊急システムが作動しないことに困惑する辻野。原因を探るべく制御用のコンピューターを調べ始める辻野にカザモリが

「動力炉の近くにある動力炉停止装置を作動させに行く」

と言って辻野の制止の言葉も聞かずに制御室を出ていってしまう。このままエネルギーが漏れ続ければ何か拍子に爆発などを起こし大災害に発展するかもしれないと考え、動力炉を停止させるべくコンピューターを必死に操作する辻野。しかし後ろに何かの気配を感じた辻野は操作を中断し机の影に飛び込む。その瞬間先程まで作業し

ていた制御盤に電撃が命中し火花が散る。ウルトラガン抜き

「誰だっ！！」

と誰何すると

「毎回、私たちの邪魔をする役立たずのウルトラ警備隊ね。」

と電撃を放ちながらあどけない少女が挑発してくる。人間だったら困るので麻酔設定のウルトラガンで応戦する辻野だった。

周囲を警戒しながら動力炉停止装置を作動させるべく廊下を進む力ザモリ。動力炉まであと少しのところまで制御室で辻野と戦っている少女そっくりの少女が行く手を阻む。

「ここから先は通さないわ、ウルトラセブン！！！」

その少女を見て力ザモリは普段とは異なる口調で

「お前は……。まさかピット星人か！？」

と驚くがそんな力ザモリを無視して少女は手から電撃を放ち攻撃する。それをウルトラ念力を用いて逸らされた少女は

「プラズマ電気エネルギーはもう十分溜まったみたいね」

と呟きポケットから装置を取り出しボタンを押した。  
揺れ始める地面。コンクリート製の壁や天井にもひびが入り始める。

「これは・・・、まさかつ!!!!!!!!!!」

地面を突き破り現れる怪獣。黄色地に黒模様の体色、長大な尾と本来の動物なら眼があるであろう場所にある回転する三日月形の角。

「キイイイイイイイ——ン」

そして甲高い独特の鳴き声。カザモリは逃走するピット星人を追わずポケットから取り出したウルトラアイを装着した。頭から順に変化していくカザモリ。

発電所まで後、数キロの地点までポインターで来ていたハヤカワ、シマ、ミズノの3人はポインターから降り出現した怪獣に言葉を失う。ミズノがかすれ声で

「あれは・・・エレキング・・・」

と呟く。ビデオレシーバーで基地と連絡を取り怪獣出現を告げた後、ウルトラガンを構える3人。すると眩い光と共に現れる赤き巨人。

「デュアアアッ!!!!」

「ウルトラセブンだ」

と呟くハヤカワにシマが

「ボヤッとしている暇はないぞ!はやくホーク3号とカザモリ達を

探すぞ！！」

と檄を飛ばす。3人はセブンがエレキングに掴みかかっているのを横目に辻野とカザモリを探すべくポインターに乗り込み、発進した。

狙われた発電所（前編）

（宇宙怪獣エレキング登場）（後書き）

次回予告

プラズマ電気エネルギーによって強化されたエレキング苦戦するゼブンの前にもう一体のエレキングが現れる。

絶体絶命のゼブンを救うべく辻野はスパークレンスをかざした。

次回、『狙われた発電所（後編）』

乞う、ご期待ください！

狙われた発電所（後編）

（宇宙怪獣エレキング登場）（前書き）

ご意見、ご感想お待ちしております！

セブン side

「デユアッ!!」

超重量級のエレキングの首を掴み、投げ飛ばすウルトラセブン。追いつきかけをかけるべく近づくと尻尾による薙ぎ払いを受け地面に倒されてしまう。立ち上がろうとするも尻尾によって地面に叩き付けられるセブン。しかしエレキングの一瞬の隙を突いて地面を転がり距離を取り直し、構える。

「デアッ!!」

「キイイ——ン!!!」

セブンは物凄い勢いで左右に振り回される尻尾をジャンプやステップで躲し、逆に尻尾を掴んでジャイアントスイングで投げ飛ばす。山の斜面に顔から突っ込んでいったエレキングはあまりの激痛に

「キイイイイイイイイイ——ン!!!!!!」

と咆哮する。もちろんセブンがそんな程度の低い威嚇に屈するはずもなく

「デアアアッ!!!!!!」

立ち上がったエレキングの胴体に素早く掌を合わせ、シェイクハンド光線を放ちダメージを与えパンチやキックを次々と叩き込む。しかしエレキングの口から放たれた光弾を至近距離で受けてしまい

「ドウアアアア！！！」

と叫びながら吹き飛ばされてしまうセブン。セブンが立ち上がろうともがいている間に体勢を立て直すエレキング。そんなエレキングに対し手裏剣光線を連射し確実にダメージを与え、形勢を徐々に有利にしていく。

〈辻野side〉

パスッ、パスッ

バチュ——ン！！！！

発電所の制御室では辻野と少女の死闘が続いていた。

「クッ！役立たずの割にはしぶといわね！！！！」

少女の悪態と共に電撃が先程まで辻野がいた場所に命中し火花を散らす。ウルトラガンを連射し応戦するが

カチッ、カチッ

と情けない音と共に麻酔弾が弾切れになってしまう。慌てて伏せる

辻野の頭上を電撃が走り抜ける。その隙に辻野に近付き

「死ねっ！！！！」

と言って電撃を放とうとする少女。もはやこれまでかと目を瞑り来るべき電撃による死の苦痛に身構える辻野。しかし、衝撃の代わりにウルトラガンの銃声と誰かの走り去る音が耳に飛び込んでくる。

「ツジノ隊員！！！」

目を開けるとそこにはウルトラガンを構えたハヤカワがいた。大丈夫？と手を貸しながら

心配そうに訊ねるハヤカワに無事であると伝えながら立ち上がる。

辻野はウルトラガンを再装填しながらハヤカワに動力炉が起動状態になっていることを伝え、

「僕は動力炉の近くにある動力炉停止装置を作動させに行きます。ハヤカワ隊員はあの少女を追ってください！」

辻野の指示に了解と返し薄暗い廊下へと駆け出すハヤカワ。そんなハヤカワの後姿を見送った後、逆方向の扉から制御室を出る辻野だった。

制御室から逃走した少女は自分の相方と合流すべく地上階へ出てガラス張りの廊下を走っていた。するとエレキングがセブンに負けかけている姿が目に入る。

「ウルトラセブン……！！！！お前の思うようにはさせないっ！！」

「！！！！」

そう叫びポケットから装置を取り出しボタンを押す。それと同時に地面がまたしても揺れ始め、地面を突き破りもう一体のエレキングが姿を現した。

「キィィィ——ン！！！！！！」

「デュワアアッ！！！！」

後ろから光弾を受けて吹っ飛ばされるセブン。立ち上がり新たに現れたエレキングに向かって走るが

「ダアアアアッ！！！！！！」

後ろにいたエレキングの尻尾で弾き飛ばされてしまう。二体のエレキングの尻尾がセブンの体に巻きつく。

「ハッ！！！！」

セブンは尻尾から逃れようともがくがガツチリと巻かれているため振りほどけない。尻尾に青いスパークが走り、高圧電流が流れ込む。

バリッ、バリッバリッ

「デュアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！」

電流攻撃を受けてのたうちまわるセブン。セブンの頭部にあるビームランプがエネルギー切れを知らせるために点滅し始めた。



と呟くハヤカワ。ハヤカワと合流したミズノとシマもウルトラマンティガの姿に呆然としている。

「何なのよアレ！」

「もう一人の巨人なんて聞いてないわよ！」

計画を狂わせるであろうウルトラマンティガの存在に悲鳴を上げる少女達。

「テアッ！！！！」

その巨人は空高くにジャンプし空中で両腕を胸のプロテクターに添えた後、ティガスライサーを放ちエレキングの尻尾を切断し、

「タアアアアッ！！！！！！」

そのままもう一体のエレキングの顔面に飛び蹴りを放つ。

「っぴきいひひひひ——ん」

エレキングがティガの攻撃を受け苦しんでいる間に体に巻きついていた尻尾を振り払い距離を取り直し構えるセブン。

「デュアッ！！！！！！」

ティガが一体のエレキングと戦っている間にセブンは尻尾を切断されたもう一体と対峙する。エレキングの光弾を左右に躲しながら接近し、

「デアッ！！！」

強烈なパンチを見舞う。よろけたところでエレキングの首を掴み投げ飛ばした。

エレキングの首を掴み、

「タアッ！ハッ、ハッ、ハアッ！！！！」

膝蹴りを何発か打ち込み巴投げであるウルトラレグホイップで投げ飛ばすティガ。立ち上がりざまに放たれたエレキングの光弾をハンドスラッシュで叩き落とし光を纏わせたパンチを胴体に叩き込みさらに追い打ちをかけようとするが

「テユアアアッ！！！！」

尻尾の薙ぎ払いを受けて山の斜面に突っ込んでしまう。ティガは顔を左右に振り、意識をはっきりさせエレキングにもう一度近づいていった。

セブンはエレキングの胴体に

パンチを連続して放ち、

「ダァ——ッ！——！！！」

強烈なアツパーをきめる。ふらつくエレキングに容赦なくパンチやキックを浴びせかける。

しかしエレキングも負けじとセブンに頭突きを喰らわす。多少よろけさせるもセブンはエレキングの頭に肘打ちをきめ、

「ドウアアアッ！——！！！！！」

あらん限りの力で投げ飛ばした。

「テアッ！ハッ！テユアッ！！！」

エレキングの首にチョップをきめ、両足にローキックをお見舞いする。エレキングが尻尾で攻撃してきたのでその尻尾をジャンプで回避し、バランスを崩したエレキングを

「ハ——ッ。トアアッ！！！」

ウルトラリフター（敵を両手で持ち上げて放り投げる技）で投げ飛ばす。

「デュワッ！——！！！」

「テユアッ！！！！」

一か所に集められたエレキングにセブンがワイドショットを、ティガがゼペリオン光線を放ち殲滅した。セブンとティガは夕日を背にお互いに敵意がないことを示し、頷き合う。そんな二人の頭上を通り過ぎ大気圏外に逃げようとする宇宙船。追跡しようとするセブンを制止するティガ。

宇宙船内

「チッ．．．！作戦は失敗ね．．．」

「せっかく情報も提供してもらってセブンも追い詰めれたのに．．．」

人間の少女の擬態を解いたピット星人達が悔しがっていると急に宇宙船が動かなくなってしまう。突然の事態に驚くピット星人達。

「一体、何が．．．」

ウルトラマンティガの左手から放たれた金色のウルトラフィックスを受けて宇宙船は動きを止められていたのだ。本来、生物（怪獣）にしか効かない光線を無理矢理使ったためカラータイマーが鳴りはじめる。

ピコン．．．ピコン．．．ピコン．．．

セブンとティガによって無理矢理地上に下ろされた宇宙船にハヤカワ、シマ、ミズノが侵入しピット星人二名を拘束する。

「デアッ！！！」

「シュワッ！！！」

それを見届けた後、ティガとセブンは茜色の太空へと飛び立っていた。

狙われた発電所（後編）

（宇宙怪獣エレキング登場）（後書き）

次回予告

世間を騒がせている謎のドッペルゲンガーを調査すべく出動するウルトラ警備隊。

自分が自分を殺すという不可解な犯罪。しかしそれはより大きな計画の布石にしか過ぎなかった。

次回、『嵐の始まり』

乞う、ご期待ください！

## 嵐の始まり（前書き）

ご意見、ご感想お待ちしております！

## 嵐の始まり

夜の街。

「なんで別部署のあたしまで残業しなきゃいけないのよ．．．!」

OLらしき女性がハイヒールの音を鳴らし、歩きながら一人愚痴っていた。

すると後ろから

カツ、カツ、カツ．．．

とハイヒールの足音が聞こえてくる。気味が悪いので歩調を早めると後ろから聞こえてくるハイヒールの音も早くなる。

耐えられず振り返るとそこには．．．

「キヤアアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!」

そこにはOLと瓜二つの女性が底知れぬ悪意を込めた不気味な笑顔を浮かべて立っていたのだ。

T D F  
地球防衛軍 極東基地

「『ドッペルゲンガー!?!』」

困惑する隊員達に頷きながらシラガネが状況を説明する。

「E1地区からG2地区にかけてもう一人の自分に遭遇した後、不可解な死を遂げるという事件が今月だけで17件発生している。警察は明らかに異常だとみて我々に出動を要請した」

オカルトのような話に困惑する部下達の気持ちを理解しつつ命じた。

「今夜から当該地区において防衛軍の警備班と合同で夜間パトロールを行う。出動！」

「了解！」

夜の街をポインターで念入りにパトロールをする辻野とハヤカワ。

「ドッペルゲンガーなんて現象が本当に起きるわけ……」

とポインターを運転しながらばやく辻野に対して助手席のハヤカワが

「宇宙人がこの騒ぎを起こしてる可能性だってあるんだから」

とたしなめるもののあまり納得しているようには見えない。周囲をスキャン装置で警戒しながら進んでいく。すると別のポインターに乗っているミズノとカザモリから定時連絡が入る。

「こちらE2地区、異常ありません。そちらはどうですか？」

「こちらG1地区、同じく異常ありません」

と辻野が報告する。しかしウルトラホーク1号で上空をパトロールしていたシラガネとシマから緊急連絡が入る。

「たった今F3地区で強力な生体反応を探知した！至急、現場に向かってくれ！！」

「了解！！！！」

Uターンし、現場へと向かう辻野達だった。

人気のないコンクリート製の無機質なオフィスビルが立ち並ぶF3地区。辻野とハヤカワはスキャン装置で付近をスキャンしウルトラホーク1号で上空からスキャンしているシラガネと連絡を取る。

「こっちのスキャン装置には何の反応もありません」

「こっちもたった今反応を見失った。しかし何らかの生命体がまだその近辺に潜んでる可能性が高い。警戒して付近を調査してくれ」

「了解！！」

ウルトラガンホルスターから抜きポインターから降りる。街灯や看板などの光以外光源のない薄暗い道路を警戒しながら進んでいく。人っ子一人いない街はかなり不気味だ。不安げな顔を隠すことができない辻野とハヤカワ。

「カザモリ隊員とミズノ隊員は来ないんですか？」

「カザモリ君達はこの地区の反対側を搜索しているはずよ」

不安を紛らわそうと質問する辻野と後輩に自分が恐怖を感じていることがばれないように必死に声を平静に保つハヤカワ。

カーン

金属音がしたので慌てて振り返りウルトラガンを構えると積み上げられていた空き缶の山に猫が突っ込んでいた。

「なんだ．．．猫か．．．」

安堵するハヤカワと辻野。そう思い前を向いた瞬間

「ウワアアア~~~~!!!!!!」

パン、パパパパパパン、パパン、パンパン、パパパパパン

「止めろおおお!!!!!!」

「くっ、来るなあああ——!!!!!!」

パン、パパパパン、パン、パパパン

と銃声と悲鳴が聞こえる。ウルトラガンを構えながら走る辻野とハヤカワ。建物の影から2人組の影が現れたのでウルトラガンを構えるがそれはミズノとカザモリだった。お互いに頷きあってから走り出す。そしてビルの角を曲がるとそこには防衛軍警備班の惨たらしい血まみれの死体が積み重なっていた。

「これは．．．一体．．．!!!!」

悲惨な現場に言葉を失う一同。犯人の姿が遠くにちらりと見える。

「待てっ!!!!!!!!!!」

現場をミズノとハヤカワに任せ犯人を追いかける辻野とカザモリ。しかし犯人らしき人物は忽然と姿を消してしまう。辺りを見回す辻野とカザモリ。ウルトラガンを構えながらゆっくりと進んでいく。前後左右を確認しながら一步一步踏み出す2人。しかし敵は思わぬ方向から襲ってきた。上から飛び降りてきたのだ。しかも複数。黒服の男達に取り囲まれる辻野とカザモリ。

「こいつら．．．」

「マスカレード M A S Q U E R A D E」

「

右首にUSBスティックを差し込み奇妙な人型生命体に変化し常人離れた怪力で襲い掛かってくる。そんな化け物にウルトラガンを発砲し倒すが数の多さに圧倒されてしまう辻野。カザモリもウルトラガンとウルトラ念力で奮闘するも捕まってしまう、麻酔薬を嗅がされ気を失ったところをそのまま連れ去られる。

「カザモリ隊員!!」

ポケットから万が一に備え隠し持っていたレディスミス（主に幹部クラスの女性隊員が使用する小型軽量化されたガッツハイパーガン）を左手に持ち二丁拳銃で敵の包囲網を突破し追いかけるがタッチの差でカザモリを乗せた車が逃走してしまう。車から銃撃しようとする

る男の腕を撃ち、銃を弾き飛ばす辻野。生き残っていた男達もいつの間にかいなくなっていた。男が落とした銃器を拾いながらビデオシーバーを起動しシラガネに

「正体不明の人型生命体に襲われ、カザモリ隊員が拉致されました！」

と事態の概要を報告した。言葉を失うシラガネに辻野はさらに続ける。

「あと通信では報告できませんがとんでもないものを見つけました」

「ここは・・・」

「ようこそウルトラセブン！」

カザモリが意識を取り戻すと同時にセブンに話しかける黒服の男。拘束されていて身動きの取れないカザモリはそんな男を睨み付け

「ここはどこだ！そしてお前は何者だ！！」

と問いただす。しかし男は不気味な笑みを浮かべ一方的に話し始める。

「恒点観測員であり人類の守護者であるウルトラセブン。その力はどうな宇宙人や怪獣よりも強力だ。」

そう言いながら男がポケットからカザモリが気を失っている間に奪

ったウルトラアイを取り出す。それを見て言葉を失うカザモリ。そんなカザモリを見て邪悪な笑みを浮かべる。

「もしウルトラセブンと地球人が戦ったら．．．」

「だが私以外がセブンになることはできない！」

男に対し言い返すカザモリ。そんなカザモリに対してバカにした笑いを上げながら

「そうだった．．．。お前は知らなかったんだっただ。この存在を」

とポケットからカザモリ達を襲った男達も使っていたUSBスティックのようなものを取り出す。ニヤつく男の真意がわからず戸惑うカザモリ。そんなカザモリに構わず男は続ける。

「これはガイアメモリっていうあらゆる『地球の記憶』を収めた、USBメモリ型の生体感応端末だ。使用者をドーパントっていう怪人に変身させることにより本体に収められた『地球の記憶』をその場で『再現』する。私が必要としていたのはこの『擬態<sup>タミ</sup>』の能力．．．」

全く聞いたこともないガイアメモリの存在に困惑を隠せずにいるカザモリ。しかし彼の困惑は男が発した言葉でさらに大きくなった。

「異世界のもので入手するのが困難だったが．．．」

「異世界だと．．．！！！！」

地球防衛軍<sup>TDF</sup> 極東本部 ポインター格納庫

「何なんだ。通信では言えないことっていうのは？」

とシラガネが訊ねる。辻野は無言でポインターのトランクを開ける。そこには辻野を襲い、カザモリを連れ去った男達が所持していた銃器が入っていた。その銃器を見て言葉を失うシラガネ、シマ、ハヤカワとミズノ。彼らの反応は当然のものだった。なぜならその銃器は地球防衛軍正式採用の銃だったからだ。

―やはりサイジヨウ参謀の考えは正しかったか……

と心の中で苦々しげに呟くシラガネだった。

「お前は何者だっ！！！！」

ともう一度問いただすカザモリ。すると男は

「私の本当の姿と新しい姿を見せてやろう」

と言って本当の姿を露わにする。

その正体は……反重力宇宙人ゴドラ星人。

ゴドラ星人は大声で笑いながら左腕にあるUSBポートのような穴にガイアメモリを差し込む。

「<sup>ダミー</sup>DUMMY」

そして電子音声と共に現れたのはもう一人のカザモリだった

「僕が新しいウルトラセブンになる…」

そんなゴドラカザモリの言葉を聞いて絶望するカザモリだった。

## 嵐の始まり（後書き）

### 次回予告

異星人達に襲撃される極東基地。必死の応戦を試みるウルトラ警備隊だったが敵の強大な力の前に基地からの撤退を余儀なくされる。その一方でゴドラ星人が変身したウルトラセブンが街を破壊し始めた。

地球防衛軍、ウルトラ警備隊史上、最悪の戦いが幕を開ける。

次回、『ウルトラ警備隊、壊滅！？』

乞う、ご期待ください。

**ウルトラ警備隊、壊滅！？（前書き）**

クロスしてほしい作品を随時募集しています！

ご希望のある方は感想に書いていただければ嬉しいです。  
お待ちしております！

## ウルトラ警備隊、壊滅！？

ウルトラ警備隊と地球防衛軍による必死の搜索が続くものの拉致されたカザモリの行方を掴むことはできなかった。そんな中、ウルトラ警備隊はサイジヨウ参謀や以前から同じように上層部に疑問を抱いていた部隊の隊長を集め万一の事態に備えていた。そしてシラガネ達の恐れていた日が遂にやってきたのだ。しかも最悪の形で。

非番だった辻野は自宅でレイ、ルイとドーパントという恐ろしい化け物への対抗策を練っていた。すると外からかなりの爆発音が聞こえてくる。窓から外を見るとそこには火に包まれる街。逃げ惑う人々。

「あれは．．．！！！！」

「そんな！！！！！！」

その中心に立っているのは．．．

ウルトラセブン。

人類の守護者が人類に牙をむいた瞬間だった。

鳴り響く警報の中、ホンジョウ隊員が

「ウルトラセブンがD1地区に出現！街を．．街を破壊し始めましたっ！！！！！」

と報告する。

「なにっ！？」

と想像を絶する事態に愕然とするシラガネだった。さらに基地内に爆発音が響き渡り地面を揺るがす。警報音と赤い警告灯に包まれる司令室。

「ウルトラ警備隊専用の武器庫が何者かによって爆破されましたっ！！！！！！」

監視カメラを見ると地球防衛軍の隊員が他の隊員達を躊躇なく射殺していく映像が映っている。シラガネは意を決して通信回線を開き、決められた符号を言う。

「アルファ・アクチュアル！繰り返す、アルファ・アクチュアル！」

それは基地内で侵略者による武力蜂起が発生したことを示す合図だった。

ビデオシーバーでウルトラ警備隊本部に連絡を入れるとホンジヨウが返答する。

「ツジノ隊員！警備隊専用の武器庫が爆破され、アルファ・アクチユアルが発動されました！！！！！」

「了解！」

通信を終え、基地に向かおうとするが武器庫が破壊されたため何一つ武器がないということに気づきTPCの隊服に着替えるべくロッカーへと向かった。

パパパパパパパン、パン、パパン、パン、パパパパパパパン、パン、パパパン

基地内のいたるところで激しい銃撃戦が繰り広げられている。基地内にいる防衛軍隊員の大半が敵である状況を鑑み、ウルトラ警備隊司令室に険しい表情で入ってきたサイジヨウ参謀は即座に命令する。

「もはや基地を奪還することは不可能だ。基地から退避し、敵諸共基地ごと爆破する」

「っ……。自爆システムを起動後、ミズノ隊員とシマ隊員はホーク1号と3号で、ホンジヨウ隊員はポインターで、ハヤカワは私とピット星人と共にマグマライザーで基地より退避せよ！」

そんなサイジヨウの発言に一瞬躊躇いを見せるも即座に指示を出し始めるシラガネ。基地を放棄するという事態に一瞬戸惑うもすぐに

「了解！」「了解！」

と行動に移る隊員達。そんな中、ホンジヨウとシラガネはサイジヨウが見守る中、万が一に備えて設置していた自爆システムを起動させた。

自爆まで30分。

「キヤアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！」

「ジヨワツ！！！！！！！！！！」

人々の悲鳴と轟音にも構わず次々と光線を放ち、街を焼き払うセブン。すでにC2とC7地区が攻撃で壊滅し、さらに周囲14地区が火の海と化していた。セブンを攻撃すべくガッツウイング1号で現場に向かっているとガッツウイング1号と2号で後から追いついてきたレイとルイが

「辻野さんは極東基地に向かってください！！」

「私達がセブンを食い止めます！！」

と告げる。ティガでないとセブンを倒すことは不可能なのだがウルトラ警備隊の隊員である辻野以外、極東基地に入ることができない

ので辻野は渋々承知し操縦桿を横に倒した。急旋回して極東基地に向かう辻野機を見送った後、ルイとレイはセブンに対して二ードルレーザー砲と機関砲から放たれる徹甲弾を浴びせる。

ズドオオオオオオオオ

「ドアアアアアアッ！！！！」

不意を突かれたセブンは火花を散らしながらビルの瓦礫に背中から倒れ込む。さらに土煙で覆われるセブンに向かって1号はH E A Tミサイルを、2号は超光子レーザービームであるスパル砲をこれでもかというほど撃ち込む。

「やった．．．！？」

喜びかけた次の瞬間、土煙の中からガッツウイングに向かって光線が放たれる。それを急上昇することで回避するレイとルイ。土煙が晴れるとそこには悠然とまるで何事もなかったかのように立っているセブンがいた。

ウルトラホークのある格納庫へとウルトラガンを構えながら急ぐシマとミズノ。そんな2人の前にライフルを構えた防衛軍隊員達が襲い掛かってくる。

パパパパン、パンパン、パパパパパパン、パン、パパパパパパ  
パパパパパパパン

物陰に飛び込み激しい銃撃戦を繰り広げる。シマが手榴弾を投げ込

み敵の大半を吹き飛ばした後、シマの援護射撃を受けつつミズノが呐喊し生き残りを射殺する。隊員達を倒し、格納庫へ向かうとするシマをミズノが呼び止める。

「シマ隊員！これを．．．！！」

振り返りミズノが指差している隊員の死体を見て凍りつく。隊員の体が崩れ、別の人型生命体になっていつている最中だった。黒と白の体に触覚のように突き出た目。かつて地球防衛軍によって故郷を滅ばされた放浪宇宙人、ペガッサ星人だった。

「そんな．．．！！」

「ペガッサ星人だと．．．！！」

基地内の隊員の大半が地球防衛軍に対して強い憎悪を抱くペガッサ星人にすり替えられているというシマからの報告に言葉を失うシラガネ。ハヤカワも周囲を警戒しながらも動揺を隠せない。すると4人の防衛軍隊員達が行く手を阻むがシラガネはその4人を目にも止まらぬ速さで射殺する。呆然とするハヤカワを見て苦笑した後、ピット星人達が拘束されている拘束室へと走り出した。

ガッツウイング1号と2号の火力を集中してもセブンに有効な打撃を加えることができないレイとルイ。セブンの指先から放たれたウルトラショットを機体を左右に振ることで避け、ニードルレーザー砲をセブンの顔面に命中させるレイ。そんなレイを撃ち落とそうと

するセブンの背後からスパル砲を浴びせるルイ。セブンの体から火花が散るがやはり目に見える効果がない。

「デュアアッ！！！！」

次々と放たれるセブンの攻撃によって灰になる街や人々。

地下にある格納庫からエレベーターで地上の滑走路へと運ばれるウルトラホーク1号。ミズノが発進に向けての最終確認を終えるのと同時に

『フォースゲートオープン！』

というアナウンスが響き、滑走路への扉が開かれる。死の運命に蝕まれつつある極東基地からミズノは飛び立つ。隣の滑走路からも少し遅れてシマの操縦するウルトラホーク3号が発進した。

ポインター格納庫に敵と遭遇することなく到着したホンジョウはポインターに乗り込もうとドアに手をかけた瞬間、銃声と共にポインターの車体が爆ぜる。防衛軍隊員がホンジョウに向かって発砲したのだ。慌てて柱の陰に隠れ、ウルトラガンで応戦する。しかし相手の銃弾がウルトラガンに命中し、ウルトラガンが破壊されてしまう。

「クッ・・・」

何とかポインターに乗りこもうとするがライフルを突きつけられ身

動きが取れなくなるホンジョウ。

「ペガッサシティの敵っ．．．！！！！」

と押し殺した声で呟きながら引き金を引こうとする防衛軍隊員。死を覚悟し目を瞑るホンジョウ。しかし

パシュン！

という聞き慣れない銃声が格納庫に響き渡ると同時に防衛軍隊員が崩れるように倒れる。振り返るとそこにはTPCの隊服を着てガッツライフルを構えている辻野がいた。

「ツジノ隊員！」

啞然としているホンジョウに辻野が

「ホンジョウ隊員！早くポインターで退避してください！！」

とホンジョウをポインターの運転席に押し込みながら叫ぶ。そんな辻野に

「あなたはどつするの！」

と聞き返すと辻野は辺りを見回しながら

「ピット星人達の安全確保に向かいます！」

と告げる。そんな辻野に

「基地内の防衛軍隊員の大半が宇宙人とすり替えられていて、隊長とハヤカワ隊員がピット星人の確保に向かつてるわ！」

と状況を説明するホンジヨウ。辻野は頷き、格納庫から走り去った。

外の様子がやけに騒がしいので

「何かあったのかしら？」

「銃声が聞こえたような気がするんだけど」

と話し合う人間体のピット星人達。すると分厚い特殊金属製の拘束室の扉がゆっくりと開きマスカレイド・ドーパントがライフルを持って入ってくる。ゴドラ星人や他の時空から来たと主張する黒服の男との会合の時に何回か目撃していたので特に驚きもせず

「ちょっと助けに来るのが遅かったんじゃないの」

と嫌味を言うとマスカレイドは二人に向かってライフルを構える。そんなマスカレイド・ドーパントを見て笑いながら

「もしかして怒っちゃった？」

と言った瞬間、ライフルから銃弾が吐き出される。普通の人間であれば死んでいただろう至近距離からの銃撃を紙一重で躲し、体術で反撃するピット星人達。しかし常人離れた怪力に苦戦を強いられる。パンチやキックを叩き込むもまるで効果がないのだ。

「キャッ！」

「グハッ！！」

2人とも首を絞められたまま壁に叩き付けられてしまう。どんどん首を絞められ、苦しみもがくが万力のように固定された手はびくともしない。徐々に意識が遠くなっていく2人。しかし、

パン！

と言う銃声と共にマスカレイドの手の握力がなくなる。慌てて振りほどき扉の方を見るとそこにはウルトラガンを構えたハヤカワがいた。

「急いで！」

と叫ぶハヤカワの表情を見てただ事ではないと悟った2人はおとなしく指示に従う。廊下に出るといたるところで倒れている防衛軍隊員の死体が目に映る。

「一体何が・・・」

と呟くピット星人の片割れに状況を説明し、口封じのために2人の命を狙われていることを伝えるハヤカワ。ピット星人達の顔が真っ青になる。緊急用の階段を確保していたシラガネが

「こつちだ！」

と声をかける。緊急用の階段を駆け下りようとすると別の階の扉から防衛軍隊員が突入してくる。

パパパパパン、パンパパン、パパパン、パパパパパン、パン、パン、パパパン

一瞬で戦場と化す階段。踊り場付近で足止めされてしまうシラガネ達。壁は穴だらけとなり、手すりが吹き飛ばされる。

「クソッ．．．!!!!」

悪態をつきながらウルトラガンの引き金を引く。ハヤカワもウルトラガンを連射する。ただ壁際で蹲るしかないピット星人。人数で圧倒的に不利なシラガネ達は徐々に追い詰められていく。一旦、ここは退くしかないとしらガネが考えていると急に銃撃が止み、不気味なほどの静けさがシラガネ達を包む。一体、何が起こったのかわからずお互いの顔を見あっていると

カン．．．カン．．．カン．．．

何者かの足音が下の階から近づいてくる。ウルトラガンを構えるシラガネとハヤカワ。そして踊り場に現れたのは辻野だった。TPCの隊服を着た辻野の姿を見て驚く2人とピット星人。そんな4人に構わず辻野は

「急いでください！あと15分で基地が自爆します!!」

と叫ぶ。

「その制服は一体．．．？」

と質問するシラガネに

「今説明している暇はありません！」

と言いながら防衛軍隊員を倒し、マグマライザーの格納庫への血路を切り開いていく。格納庫まで辿り着きマグマライザーが目前に迫ったその時、

「そこまでだ！」

と後ろから声を掛けられる。振り返るとそこには大量のマスカレイド・ドーパントと黒いスーツを着た男達を引き連れたイナガキ参謀と白いスーツ姿の青年が現れる。

「イナガキ参謀っ！！！」

と押し殺した声で叫ぶシラガネ。裏切り者が地球防衛軍次期長官と目されていたイナガキ参謀だと知って驚きと憤怒に満ちた表情を浮かべている。ハヤカワも目になっているものが信じられないらしく構えているウルトラガンが小刻みに震えていた。

「武装を解除し、ピット星人達をこちらに引き渡したまえ」

イナガキ参謀の声が格納庫の中に響き渡った。

## ウルトラ警備隊、壊滅！？（後書き）

### 次回予告

ウルトラセブンと対峙するウルトラマンティガ。

カザモリ隊員からのメッセー지를頼りに敵のアジトに突入するウルトラ警備隊。

はたして他の時空の悪の組織と手を組んだ時空侵略者の次なる攻撃を阻止できるのか！？

次回、『TIGAS VS SEVEN』（前編）

乞う、ご期待ください！

**T I G A   v s   S E V E N   (前編) (前書き)**

ご意見、ご感想をお待ちしています！

## TIG A V S SEVEN (前編)

「あれはっ・・・!!」

ミズノは思わず声を上げる。甚大な被害を引き起こしているウルトラセブンを攻撃すべく向かっていると見たこともない黄色い小型戦闘機と中型戦闘機がセブンに対して果敢に攻撃を仕掛けていたからだ。

「未確認戦闘機に告げる。こちらはウルトラ警備隊だ。所属を明らかにせよ!」

と通信を試みるシマ。すると女性の声で返事が届いた。

「そんなことよりまずウルトラセブンを止めるのが先でしょう!」

ビル街を両手から放たれるダブルビームで灰にするウルトラセブン。ウルトラホーク1号と3号もレーザーとブレイカーナックルミサイルを連射し、ウルトラセブンを吹き飛ばすことに成功する。多少よろけながら立ち上がり

「ハッ!!!」

ウルトラホークに向かってアイ・スラッガーを投擲するセブン。猛スピードで飛んでくるアイ・スラッガーをぎりぎりのところで躲し攻撃するもセブンは側転して避ける。レイとルイも必死にニードル

レーザー砲を撃ち込むもすべて躲かれてしまった。

「シラガネ隊長。命令が聞こえなかったのかね。武装を解除しピット星人達を引き渡したまえ」

イナガキ参謀の声が響き渡る中、ウルトラガンを構えたままゆくりとマグマライザーの方向へとあらずさる辻野達。

「イナガキ参謀！なぜ地球防衛軍を裏切るような真似をしたんですか！」

と問いかけるシラガネにイナガキは顔を顰めながら答える。

「時空をも超える技術を持った強大な組織相手に戦えるほど地球防衛軍は強くない。この世界を護るために他の時空を犠牲にするのも仕方あるまい。我々にはこの世界を護る義務があるのだよ」

そんな答えを聞いてシラガネは

「時空を超える・・・？」

と驚く。そんなシラガネにイナガキ参謀の横にいた白いスーツの男が微笑む。密かにGUTSメットのカメラアイを作動させた。するとガッツウィングでウルトラセブンと戦闘しているルイから通信が返ってくる。

「あれは・・・GOD秘密警察第一室長、アポロガイスト・・・、別の世界で日本や数多くの国を滅ぼすべく暗躍していた悪の組織、

GODの幹部です！！！」

アポロガイストの素性を愕然として聞いているとアポロガイストだと思われる白いスーツの男が平然と最後通告を宣言する。

「直ちにイナガキ参謀の言うとおりにしたまえ。さもなければ君達を殺す」

そんなアポロガイストを一瞥した後、シラガネはイナガキに視線を戻し

「まるで疑問を持ってないんですね」

と問いかける。すると稲垣は顔を背けながら言い放たれた

「苦渋の決断だ。この職について以来、私の命令でたくさんの命が失われてきた。多くの若い隊員達に死ねと命じるよりはマシだ」

という答えに

「言い訳ですね。その隊員達が命を犠牲にして守ろうとしたものを、あなたは踏みにじってるんですよ！何とも思わないんですか！」

と怒りを露にするシラガネ。何も答えないイナガキ。とうとう痺れを切らしたアポロガイストが部下達に

「殺せつ！！」

と命じる。命令と同時に辻野達に襲い掛かるマスカレイドドーパント。さらに黒いスーツの男達もベレー帽と黒い覆面、ゴーグルを付

け、黒い服で体を隠し、赤いマントを纏った奇妙な姿となって襲い掛かってくる。辻野から送られてくる映像を見ていたレイの

「GOD戦闘工作員です！」

という声を聞きつつ、ガッツライフルで敵を倒す辻野。辻野が時間を稼いでいる間にピット星人達とマグマライザーに乗り込み発信準備を整えるシラガネとハヤカワ。

「ツジノ隊員！早く乗って！！」

というハヤカワの叫び声がマグマライザーのハッチから聞こえてくるが敵の集中砲火で身動きが取れない辻野は

「早く行ってください！」

と叫び返す。さらに激しさが増す銃撃。このままでは全員がやられてしまうと判断したシラガネは

「発進用意……」

と静かに命じる。反論すべくシラガネに向き直るもののその苦しげな表情を見て言葉を失うハヤカワ。必死に時間を稼ぐ辻野の事をモニターから心配そうに見つめているピット星人達。

「早く……！！」

外から早く発進するよう催促する辻野の叫び声が聞こえてくる。ハヤカワは心の中で辻野に対する懺悔の言葉を念じながら操縦席に着きエンジンを始動させた。自爆まで後5分。

あらゆる火器による攻撃を行うもののウルトラセブンの前では歯が立たなかった。

「デュアアッ!!」

ウルトラセブンの放った両手指先から放たれたブレイク光線を右翼に受けて黒煙を上げながら墜落するウルトラホーク1号。

「力が違いすぎるのかっ!」

ミズノの絶叫が無線から聞こえてくる。

「こちらウィング2号!緊急着陸します!!」

さらに攻撃するべく接近していたガッツウィング2号も被弾し煙をあげながら墜落していく。

マグマライザーが辻野を置いて発進しようとしているのを察したアポロガイストはそれを阻止すべく

「アポロチェンジ!!」

という掛け声とともに赤い仮面に白いマントを羽織り、2連装式銃であるアポロショットとカッター付の円形型の楯、ガイストカッターを持った真の姿へと変化し辻野に襲い掛かる。ガッツライフルか

ら放たれるレーザーをガイストカッターで防ぎアポロショットを放つ。少しでも隙を見せれば即死するだろう正確無比なその射撃の前に逃げ回るしかない辻野。しかし辻野の驚異の粘りのおかげでマグマライザーは無事発進することに成功する。しかしそれと引き換えに逃げ場を失い壁際に追い詰められた辻野はアポロショットの着弾によってできたクレーターを見て身震いする。アポロショットを構えにじり寄ったアポロガイストは

「よくただの人間がここまで粘れたものだ」

と感心しながらアポロショットの引き金に指をかける。しかしその指が引き金を引く前に格納庫が、いや、基地全体が振動し始めた。自爆システムが遂に作動したのだ。

「チツ．．．。まあ、この世界で必要なものは手に入ったな」

小さく舌打ちしたアポロガイストは手から灰色のオーロラを発生させその中に消えていく。辻野はポケットからスパークレンスを取り出し、掲げた。

ガッツウィング1号とウルトラホーク3号が必死に攻撃を仕掛けるがまったく効果がない。

次々と焼かれていく街。シマとレイが諦めかけたその時、ガッツウィングとウルトラホークのリーダーが高速で接近する物体を感知する。

ウルトラマンティガだった。

「タアアアアアッ！！！！」

「デアアアアアッ！！！！」

背後からいきなり飛び蹴りを受け吹き飛ばされるセブン。一旦着地した後、もう1回ジャンプし起き上がったセブンにもう1発、飛び蹴りを見舞う。

「テアッ！！！」

「ドワッ！！！！！！」

ビルの残骸に突っ込んだセブンはゆっくりと立ち上がり胸部のプロテクターに太陽エネルギーを集中させ始める。それに気づいたティガも両腕を前方で交差させた後、左右に大きく広げてエネルギーを集約する。

「チュワッ！！！」

「デュワッ！！！！」

両腕を同時にL字型に組むセブンとティガ。ワイドショットとゼペリオン光線の威力はほぼ互角でお互い、光線に力を込めるが決着がつかず、高エネルギー同士のとつかり合いで発生した爆発を受け吹き飛ばされる。

「チュワアアアッ！！！！」

「ドウアアアッ！！！！」

お互いにふらつきながら立ち上がり構え、同時に走り出す。ティガはセブンに掴み掛かりセブンの暴走を止めようとするが逆に投げ飛ばされてしまう。

地表に出たシラガネ達はセブンとティガの戦いを目にする。脱出したミズノとポインターに乗ってきたホンジョウも合流する。攻撃を止めようとするティガを一方的に攻撃するセブン。ティガを援護すべくウルトラホーク3号に命令を出そうとした瞬間、ウルトラ警備隊員達の頭の中に誰かが語りかけてくる。

『あれは本物のウルトラセブンではない』

それはウルトラセブンの声だった。ティガも聞こえたみたいで戸惑っている。隊員達も何者かからのテレパシーに驚きを隠せない。

『カザモリ隊員は防衛軍の旧地球外生命体研究所の地下室に囚われている』

以前、ウルトラセブンがテレパシーで会話したという記録があるのでさほど驚かず旧地球外生命体研究所へと向かうよう命じるシラガネだった。

「ハッ！」

セブンのパンチやキックを紙一重で避けながら後退するティガ。しかし避けきれずパンチを受けて吹き飛ばされ崩落寸前のビルに突っ

込んでしまふ。ティガは立ち上がり

「ハアツ！！ハツ！！ハツ！！ハツ！！！！！！」

パンチやキックを見舞うが全て防がれ逆にパンチやキックを浴び、片膝を突いたところでアツパーを食らい地面に叩きつけられる。そんなティガの持ち上げ首を絞めるセブン。力ではかなわないと判断したティガは額のティガクリスタルを赤く輝かせマルチタイプからパワータイプへと変身し、セブンを逆に投げ飛ばす。

「タアアアアアアツ！！！！！！！！」

「ドアアアアアツ！！！！！！！！」

ビル街へ頭から突っ込んでいくセブン。そんなセブンを持ち上げさらに敵を逆さまにして持ち上げ、頭から地面に叩きつけるウルトラヘッドクラッシャーを見舞う。

「テアアアアアツ！！！！！！！！」

「デュアアアアアアツ！！！！！！！！」

急ブレーキの音と共にポインターからシラガネ、ハヤカワ、ミスノが降りる。そこは12年前に移転して以来半ば廃墟と化している旧地球外生命体研究所だった。割れた窓。錆だらけの門。立ち入り禁止と書かれているのがかるうじてわかるボロボロの看板。非常に不気味だ。

「本当にここにカザモリ隊員がいるんですか？」

と不安げに訊ねるハヤカワ。するとミズノ隊員が

「案外正しいかもしれませんよ。最近、誰かが使用した形跡があります」

と出入り口付近の残骸を調べながら返事をする。シラガネとハヤカワはウルトラガンホルスターから抜き、ミズノはポインターのトランクから持ってきたスパイダー（バーチカルショットガン）を構えてゆつくりと中へ入っていく。水の滴が垂れるポチャン…ポチャン…という音がコンクリート製の壁に反響する。不気味なほどの静けさ。しかしその静けさは即座に破られた。

パパパパパパパパン、パパパン、パパン

GOD戦闘作業員達が物陰から銃撃してきたのだ。人数的に不利でありながらもウルトラ警備隊はその精鋭の名に恥じない動きで敵を撃破していく。地下室の出入り口は目の前だ。シラガネ達は頷きあい、突入した。

セブンのパンチをブロックし、

「ハアアア——！！！！！！」

がら空きになったボディーに強力な頭突きであるウルトラダイナムパットを食らわす。

「グワッ！！！！」

苦しげなうめき声を上げあらずさるセブン。強力なパンチやキックでさらに攻め立て、追い討ちをかけるべく電撃パンチを放つ。

「ヘアッ！！！！」

しかしパワータイプは動きが少し鈍いことに気がついたセブンはテイガの繰り出した電撃パンチを後ろに回りこむように転がりながら避け、

「デュワッ！！！！」

リュウ弾ショットを放つ。

「トウアアアアアアッ！！！！！！」

至近距離から放たれた必殺技を受け体から火花を散らしながら吹っ飛ばされたテイガはそれでも肩で息をするかのように苦しげに肩を上下させながら立ち上がり、構える。ウルトラセブンもゆっくり構えた。

## T I G A   V S   S E V E N   (前編) (後書き)

### 次回予告

戦いは続く。異形と対峙するウルトラ警備隊。セブンに苦戦するティガ。そしてこの世界に混乱を持ち込んだ者が正体を現す。立ち上がれ、ウルトラマンティガ!!

次回、『T I G A   V S   S E V E N (後編)』

乞う、ご期待ください!

T I G A   v s   S E V E N   (後編)

(人工侵略生物フェイス)

ご意見、ご感想、クロスのご要望などお待ちしております！

「くっ！ いったいどれだけいるんだ！？」

旧地球外生命体研究所の広大な地下室には大量のGOD戦闘工作員が待ち構えていた。

「『ドイツ！』！」「」

という奇妙な掛け声というか鳴き声を発しながら襲い掛かる敵にある種の恐怖感を抱きながらウルトラガンで反撃するシラガネ達。しかしその圧倒的な数を前に接近戦を強いられ、異常なほどの腕力を持つ敵に苦戦しながらも一体ずつ仕留めていく。ウルトラガンで周りの敵を倒しながら近くの敵の首をへし折るシラガネ。回し蹴りで敵をノックアウトするハヤカワ。そしてミズノが最後の一人を殴り倒し奥へと進もうとした時、

「さすがはウルトラ警備隊。しかしあいつらは所詮雑魚にすぎません。この私に勝てますかな？」

という謎の声が響き渡る。部屋の暗がりを目を凝らすとそこから奇妙な人間が現れる。人間なのに人間じゃないような不思議な人物が姿を現す。そのちぐはぐというかロボットのような動きをする男にウルトラガンを構えるシラガネ達。

「何者だ！？」

誰何するシラガネに対し男は自分の服を掴みながら名前を名乗った。

「豪島<sup>いっしま</sup>と申します」

「ヂュアッ！！！」

「ハッ！！！」

お互い顔面にパンチを受け苦しむウルトラマンティガとウルトラセブン。火花を散らしながら距離をとり構えあう。セブンの跳び蹴りを転がりながら回避し、わき腹にパンチを叩き込むティガ。よろけながらもティガにキックを浴びせ、さらに投げ飛ばすセブン。立ち上がるティガにパンチを放つも避けられ

「テアッ！！」

逆にパンチを受け怯む。ティガが追い討ちをかけようとしていることに気づいたセブンは即座に間合いを取りなおす。戦況は確実にティガのほうに傾きつつある。肉弾戦で不利になりつつあることからセブンは

「ジョワッ！！！」

空中へと飛び上がり浮遊しながら手裏剣光線を連射する。ティガもそれをかわしながら

「ハッ、ハッ、ハッ！！！」

ハンドスラッシュを放つが楽々と避けられてしまう。猛スピードで

飛び回り攻撃してくるセブンに翻弄されるティガ。ボロボロになったティガにセブンは

「デュアアアッ！！！！！！」

と両手を額に当てる。もはやどうする事もできず戦いをガッツウイング1号とウルトラホーク3号から見つめているシマとレイ。必殺技であるエメリウム光線が放たれた瞬間、強烈な光と共に巨大な爆発がおき、土煙が舞い上がった。息を吞んで見つめる2人。セブンもティガがいたであろう場所を見つめ続ける。土煙が収まるとそこにティガはいなかった。

「そんなっ！！！！」

と叫んだレイが自棄になってセブンに特攻するべく機体の進路を変えようとしたそのとき

キュピイイイイ——ン！！！！！！

眩い光がセブンの頭上に輝く。

「ナッ！！！！」

「デュアアアアアアアアッ！！！！！！」

ミズノが慌ててセブンの頭上を見上げるとそこには目にも留まらぬ速さでセブンに体当たり攻撃であるウルトラボディーアタックを仕掛ける青紫色のティガスカイタイプの姿があった。地面に叩きつけられ大ダメージを受けつつも立ち上がり空中に舞い上がるセブン。そしてティガとセブンは同時に遙か上空まで飛び上がった。

「ヒッ!!」

「なにつ!!!」

そのあまりのグロテスクさに小さく悲鳴を上げるハヤカワと驚きの声を隠せないシラガネ。服と同時に皮膚をも剥ぎ取り不気味な金属製の体を露にさせる豪島。別の世界に存在する政財界や軍事産業などあらゆる分野で世界規模の影響力を持つ謎の組織、財団。その下部組織である生物学研究所ISSによって生み出された人体に機械の各種サポートユニットを埋め込んで、人体の機能が必要な状況に応じて強化させるレベル2改造兵士。サイボーグソルジャーその内の一人である豪島は右腕についているカッターで襲い掛かる。戦闘員達を遥かに凌駕するスピードと怪力。そしてウルトラガンの直撃を受けても傷つかない体。一撃で鉄柱を切断し、コンクリートの壁を粉碎する化け物相手に逃げ回るしかないシラガネ達。

「クッ……!!!」

ミズノもスパイダーを撃ち込むが火花を散らしながらよろけるだけで効果はあまりない。そんな中シラガネはハヤカワに

「ハヤカワ隊員！ポインターに一旦戻ってエレクトロHガンを持ってきてくれ!!」

と命じた。しかし豪島の前を通らなければ地表に出ることができず物陰から様子を伺っていると地表階への階段の出入り口からガッツライフルを構えたルイが入ってきて

「援護します！」

と言いながらレーザーを浴びせる。火花を散らしながら吹き飛ばされる豪島。辻野と同じ服を着ていることから仲間だと判断し、その間に階段に向かつて走ったハヤカワは地表階へと向かった。ルイの攻撃に激怒した豪島は両腕を振り回しながら襲い掛かってくる。火力を集中させるが火花を散らしながらよろめくだけであまり効果がない。それでも撃ち続ける三人。しかし豪島が反撃を始めると鋭利なカッターによる攻撃をかわすので精一杯になる。太い鉄パイプを一瞬で切断してしまったカッターの威力に思わず恐怖心を抱きつつも諦めず果敢に攻撃を仕掛けるシラガネ達だったが豪島に有効なダメージを与えることができず徐々に追い詰められ始める。もはやこれまでかと思われたそのとき、

「離れて!!」

というハヤカワの叫び声が部屋の中に反響する。それと同時に物陰に飛び込む三人。ゆっくりと声のした方向を向いた豪島が最後に見たものは大型速射口ケツト砲を構えたハヤカワの姿だった。

[illegible]

「デウアアアアッ!!!ドウアッ!!!」

空中で肉弾戦を繰り広げるティガとセブン。ティガが目にも留まらぬ速さで放った連続パンチを受けバランスを崩しながらも強力な蹴りをわき腹に見舞うセブン。お互いに吹っ飛ばされるが空中で体勢

を立て直し構える。

「ヘヤッ！！！！」

「デュアッ！！！！」

一気に近づきお互いにパンチやキックを叩き込む。マッハ7のスピードで繰り広げられる空中戦についていくことができないレイとシマ。

「シユアアアアッ！！！！！！」

「デアッ！！！！！！」

セブンはティガのキックを避け、パンチを入れようとするがかわされ、チョップを浴び、吹き飛ばされる。序盤は俊敏さに勝るティガが優勢だったものの攻撃力と防御力で勝るセブンの方が有利になりつつあった。次々に繰り出される技に苦戦するティガ。セブンの猛攻にキックで辛うじて反撃するティガだったが逆にパンチやキックを受け、さらにアイスラッガーの零距离射撃を食らい、火花を散らしながら建物が立ち並ぶ市街地へと墜落し大爆発を起こした。

「トアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！」

ピコン．．．ピコン．．．ピコン．．．ピコン．．．

ティガのカラータイマーが活動限界を知らせ始めたもののティガはピクリとも動かない。そんなティガの近くに着地したセブンはティガにゆっくりと近づいていく。シマとレイはセブンに対して集中砲火を浴びせるがセブンは止まらない。

ズン．．．ズン．．．ズン．．．

セブンの足音に気づき立ち上がろうとするが深いダメージを受けているため途中で力尽きてしまう。立ち上がるうともがき続けるティガの横に立ち、ワイドショットでティガを抹殺すべくプロテクターに太陽エネルギーを集中させ始める。そしてセブンが腕をL字型に組もうとしたそのとき、セブンの動きがぴたりと止まった。

「ッ．．．！！！」

急に動きを止めたことに驚きながらもその隙を突いて何とか立ち上がりマルチタイプに変身し、

「トアッ！テヤッ！ハッ！！」

パンチやキックをこれでもかと言うくらい食らわせるティガ。セブンは必死に体を動かそうともがくが動かない。レイとシマもセブンの様子がおかしいことを不思議に思う。

「一体．．．」

旧地球外生命体研究所の外では、シラガネ、ミズノ、ハヤカワ、ルイそして無事救出された本物のカザモリが戦いを見つめていた。一心不乱にセブンを見つめるカザモリを見てまさかと呟くシラガネ。そうカザモリはシラガネの予想通り、カザモリはウルトラ念力を用いてウルトラセブンの動きを封じていたのだ。カザモリはティガにテレパシーで語りかける。

『早く必殺技でこいつを倒すんだ!』

ティガはカザモリの方に顔を向け小さく頷くと一旦距離をとりセブンに向き直ると

「ハアッ! ! ! ! !」

エネルギーを集約しゼペリオン光線を放つ。呪詛のような断末魔を声を上げ、もがき苦しみながら光の粒子となつて消滅していくセブン。セブンが立っていた場所にはゴドラ星人の死体とウルトラアイが転がっていた。ウルトラ念力で体力を極度に消耗したため倒れるカザモリ。ティガは偽者のセブンを倒すことができたことを確認して空へと飛び立とうとするが、そのときティガの周りを赤いエネルギーフィールドが包み込みティガを捕らえてしまう。エネルギーがほとんど残っていないティガはフィールドを破って脱出することができない。

「よくも我が主様の計画を滅茶苦茶にしてくれたな! ! ! 貴様をここで始末してくれるわ! ! !」

何者かの低い声が無人となつた街に響き渡る。すると強烈な光と共にティガの目の前に奇妙に歪んだ人形の怪獣が現れる。それは時空侵略者によつて生み出された人工生命体の内の1体、コードネーム【フェイスレス】だ。その禍々しい姿を見て慄然とするウルトラ警備隊の面々。ティガを助けるべくシマとレイは謎の怪獣に攻撃を仕掛けるがまったく効果がない。

「グギヤアアアアオオオオオオオオオオ! ! ! ! ! ! ! ! !」

「ウワツ!!!」

吼えると同時にフェイスレスの顔がクリオネのように割れたのを見て嫌悪感を示すミズノ。そんな口から青白い光線を放ちティガを攻撃するフェイスレス。フェイスレスの攻撃はティガを覆うエネルギーフィールドを貫通するので為す術もなく痛めつけられるティガ。

「トウアアアアアアアア——ツ!!!!!!」

ピコンピコンピコンピコン・・・

カラータイマーの点滅が早くなる。その光景を目の当たりにした力ザモリは満身創痍の体を鞭打ちゆっくりと立ち上がりながら

「俺は行きます・・・」

とシラガネに告げる。何のことだか判らないハヤカワとミズノは不思議そうな顔をしているが力ザモリの正体が本物のウルトラセブンであると悟っていたシラガネは

「わかった・・・」

とだけ答え、偽者のウルトラセブンが消滅した場所に向かって走っていく力ザモリの背中を見つめていた。

## TIGAs vs SEVEN (後編)

(人工侵略生物フェイス)

### 次回予告

この世界の異変の元凶であるフェイスレスの卑劣な攻撃によって絶体絶命の危機に陥るティガ。その危機を救うカザモリはセブンに変身する。

次回、『終わりになき戦い』

乞う、ご期待ください！

終わりになき戦い

（人工侵略生物フェイスレス登場）（前書き）

更新が遅れて大変申し訳ありません！

学業のほうに忙しくて、忙しくて・・・。

これからも更新が遅れると思いますがよろしくお願いします！！

終わりになき戦い

（人工侵略生物フェイスレス登場）

ピコンピコンピコン・・・

「グギヤアアアアオオオオオオオオン！！！！！！！！！！」

「テアアアアアアアアアア——ッ！！！！！！！！！！」

体力の限界にもかかわらず立ち上がろうとするウルトラマンティガを青白い光線で徹底的に追い詰めるフェイスレス。声にならない悲鳴を上げてのたうちまわるしかないティガ。

ピピピコンピピピコンピピピコンピピコン・・・

カラータイマーの点滅がさらに早くなる。倒れたまま動かないティガを見てレイとルイが

「「ティガッ！！！！！！！！！！」」

と叫ぶがそんな二人の悲痛な絶叫にも応えることなく地面に横たわったまま動かない。ミスノやハヤカワも直面したことのない事態に

「そんな・・・！！！！」

と呆然としてしまう。シマとレイはレーザー砲で攻撃を仕掛けるがフェイスレスはティガの周りに張ったような赤いエネルギーフィールドをバリアーのように展開し防いでしまう。機体に搭載されてい

るありとあらゆる火器を使用するもバリヤーを突破することができず

「クソッ！！！！」

とシマは計器類に拳を叩き付けレイは

「チッ・・・」

と舌打ちする。フェイスレスはティガが戦闘不能になったのを確認するとティガの周りに張られたエネルギーフィールドを解除し、街を破壊すべく移動を開始した。

瓦礫に埋もれヒビだらけになった道をこけそうになりながら必死に走るカザモリ。十字路の真ん中に横たわっているゴドラ星人の亡骸を見つけるとさらに走るスピードを上げる。ゴドラ星人に駆け寄りウルトラ・アイを探していると死んでいたと思われていたゴドラ星人がカザモリの足首を掴む。ゴドラ星人を蹴り飛ばし距離を取るとクックククッ・・・と嘲笑いながら

「もはや世界は偉大なる支配者の物になる。お前のような者では防ぐことはできない」

そう言うだけ言ってカザモリを嘲笑する。ゴドラ星人の胸倉を掴み、

「どついうことだ！！支配者とは何者なんだっ！！！！答えろおっ！！！！」

と揺さぶりながら激しく詰問するがゴドラ星人はそのまま死んでし

まう。ゴドラ星人の死体を地面に置こうとしてウルトラ・アイを見  
つけ拾った。ふと戦いに目をやると

「テアアアアアアアア——ッ！！！！！！！！」

フェイスレスの猛攻を受け、崩れるように倒れるティガが目に入る。  
カザモリはウルトラ・アイを装着した。目の周りから体に変化して  
いくカザモリ。赤い光の柱が市街地から進りその中からウルトラセ  
ブンが現れる。

「デュアアッ！！！！」

両手を握り、ファイティングポーズをとるセブンに気が付いたフェ  
イスレスはセブンに向き直りセブンの周りにエネルギーフィールド  
を張ろうとするが

「グギヤアアアオオオオン！！！！」

「デアッ！！！！」

腕から放たれたウルトラスパイラルビームによって牽制される。セ  
ブンはフェイスレスに一気に近づき肉弾戦を仕掛ける。

「ドアッ！！デアッ！！！！ハアアアッ！！！！」

フェイスレスは強力なパンチやキックを受け、火花を散らし一本背  
負いで投げ飛ばされた。ふらつきながら立ち上がり光線を連射し、  
さらに左腕を伸縮自在なマジックハンドのような形状に変化させ、  
光線を避けるので精一杯だったセブンの首を絞める。マジックハン  
ドを両手で掴み引き剥がそうとするが逆に投げ飛ばされビルに突っ

込んでしまう。さらにセブンをマジックハンドごと猛スピードで引きずり回し次々と建物にぶつけるフェイスレス。

「ダアアアアア——ッ！！！！！！！！」

爆発に巻き込まれ、火花を散らし、土埃まみれになるセブン。空中に持ち上げられもかくセブんに光線が容赦なく浴びせられる。

「ドワアアアア——ッ！！！！！！」

さらに攻撃しようとしてフェイスレスが右腕を上げた瞬間、何者かが猛スピードで突っ込んでくる。それは瀕死のウルトラマンティガだった。

「タアアアア——ッ！！！！！！！！」

すれ違いざまに放たれたティガ渾身のスラップショットで左腕を切断され倒れるフェイスレス。ティガも力を使い果たし倒れる。セブンは首を挟んでいるマジックハンドの残骸を投げ捨てティガに駆け寄る。ぐったりとして動かないティガの額にあるティガクリスタルに向けてビームランプから金色の光線を放つ。セブンの光線を吸収したティガのプロテクターと額のクリスタルが白く光り、それと同時にカラータイマーが元通り青く輝き始める。セブンとティガはゆっくりと立ち上がり額き合つとフェイスレスに向き直り同時にファイティングポーズをとる。

「テアッ！！！！」

「ジュワッ！！！！」

ティガの体力が回復したことに驚きつつも

「グギヤアアアアアア——ッ！！！！！」

と2人のウルトラ戦士に吼え、切断された左腕を鎌状の新しい腕に再生して襲い掛かる。

「ダアッ！ドウアッ！！ダアアアッ！！！」

と自分目掛けて振り下ろされた鎌を右手で受け止め、胴体にパンチを叩き込むセブン。右手から放たれた光線を躲しながら接近し右手を捻り上げ

「トアアアッ！！！！ハアアッ！！！！！」

とチョップと膝蹴りを浴びせるティガ。フェイスレスはエネルギーフィールドを張ろうと試みるが

「喰らえっ！！！」

「あたれええええっ！！！！！」

ガッツウィング1号とウルトラホーク1号による支援攻撃に邪魔されてしまう。2人の拘束を振り解き光線を連射するもののセブンはカーテン状のウルトラバリアーを、ティガは円形のウルトラシールドを張り、攻撃を防ぐ。

「グギヤアアアアアアオオオオオオオン！！！！！！！」

防がれたことに激怒し吼えながら襲い掛かるフェイスレス。怒り狂

うフェイスレスの攻撃に怯むことなくパンチやキックで応戦するティガとセブン。

「ハアアアア——ッ、トアッ!!!!!!」

ティガは両腕を顔の前でクロスさせパワータイプに変身し、マルチタイプを凌駕する力でフェイスレスを圧倒する。

「ドウアアッ!!!!!!」

「トアアアアッ!!!!!!」

2人の攻撃を受けてふらつくフェイスレスがセブンのパンチを受けて前屈みになったところで頭部にウルトラかかと落としを炸裂させる。フェイスレスから十分な距離を取り、セブンとティガは頷き合う。太陽光を胸部のプロテクターで吸収し始めるセブンとマルチタイプに戻り、両腕を前方で交差させゆっくりと左右に広げていく。

「テユアッ!!!!!!」

「チュワッ!!!!!!」

フェイスレスが立ち上がった瞬間、ティガがL字型に腕を組んで必殺技であるゼペリオン光線を、セブンが同じくL字型に腕を組んでネオ・ワイドショットを放つ。2人の必殺技を喰らったフェイスレスは

「グギヤアアアアオオオオオオオ——...」

と断末魔をあげながら大爆発を起こし消滅した。構えを解き、お互

いに向き合いながら握手するセブんとティガ。そんな2人の真上をガッツウイング1号とウルトラホーク1号が通り過ぎる。2人の姿が徐々に光に包まれ消えていく。ウルトラセブんとウルトラマンティガが立っていた場所にはカザモリと辻野が立っていた。お互いに正体に気づいていたようで驚いていない。そんな2人に駆け寄るシラガネ、ミズノ、ハヤカワ、ルイ。辻野に説明を求めようとシラガネが口を開いた瞬間、ビデオシーバーに通信が入る。爆破した基地を調査していたサイジヨウ参謀からだった。

「シラガネ隊長。大変だ。マグネリウムエネルギー発生装置が爆破前に持ち去られている!!」

「何ですって!!!!」

セブンのエネルギー源である水素の核融合によって生み出されるマグネリウムエネルギー。あまりにも莫大なエネルギーを生み出すものだったので当時の地球防衛軍によって封印されたものだった。通信を終え辻野に無言で説明を求めるシラガネに頷き、時空侵略について話し始める。荒唐無稽と言われても仕方がない話を聞き唖然とするシラガネ達。しかしカザモリはなるほどと頷く。するとルイが

「そろそろです」

と告げる。訝しげな顔をするシラガネ達に時空転移のことを伝える。もう一度、握手するカザモリと辻野。

「この世界は私達に任せてください」

と力強く言うカザモリに笑顔で頷き返す辻野。そして強烈な光と共に辻野達は姿を消した。後に残ったカザモリやシラガネの表情は暗

い。もし彼らの言っていることが事実ならば戦いは始まったばかりにすぎないのだから・・・。

崩壊

（アンケート在中）

「今日も良い天気だなあ。絶好のお昼寝日和！」

学校の裏山での作業を終え、ゴロンと草むらに横たわる少年。すると右ポケットに入っている糸なし糸電話から

「のび太君、R地区のパトロールを頼む！」

という声が聞こえてくる。ドラえもんの指令を聞きながら左ポケットから取り出したタケコプターを頭につけて飛び立つ。非番だからせっかく寝ようと思っていたのに心の中で愚痴りながら家に向かって飛んでいるとパトロールしていたジャイアンとスネ夫が

「おい、のび太あー！」

とタケコプターのカタカタという独特な音と共に追いついてくる。辻野がこの世界を去ってから2ヶ月。あの後、超高速で人を襲う何体かの謎の怪生物が現れたがドラえもん達の必死の応戦によって被害は最小限に留められていた。

「D地区にはあの超高速の化け物はいなかったぞー！」

とジャイアンが報告してくる。担当地区に分かれたのび太達は引き続きパトロールを続けながら謎の怪生物について思い返していた。

辻野が別の世界へと旅立ってすぐにドラえもん達は来るべき日に備

えるべく行動を開始した。手持ちの武装を可能な限り強化し、タイムパトロールの特別機動部隊の出動を要請、学校の裏山や街の各箇所に風雲ドラえもん城並みの強固なシールドを装備したシエルターを極秘裏に設置、雲の王国や地底王国へも警報を送ったのだ。

「どれだけでもつだろうか・・・」

ドラえもんの不安そうな呟きはいつも通りの営みを繰り広げる街の喧騒の中に溶けていった。

それから2週間後の事だった。いつもと同じ授業を受けながら、いつもと違い居眠りをせず早撃ちのイメージトレーニングをしているのび太。すると街の方で大きな爆発音がする。窓に目を向けると黒煙がモクモクと上がっているのがわかる。ショックを受けるのび太。

「何事だ!?!」

先生が青ざめた顔で叫ぶ。

「まさか、怪獣!!!!????」

次の瞬間、クラス中がパニックに陥る。先生も大慌てで他の教室に向かおうとするが廊下は既に逃げ出そうとする生徒達でこった返していた。

「のび太さんっ!!!!」

静香の叱咤で正気に返ったのび太は静香、ジャイアン、スネ夫、出

木杉に生徒達を裏山のシェルターへと避難誘導するよう指示し、一人タケコプターで窓から飛び出し街へと向かう。全速力で街に向かってっているとポケットの中の糸なし糸電話に通信が入る。

「どうしたの、ドラえもん？」

「のび太君！僕が君と合流するまで現場に近付いちゃだめだ！！」

ドラえもんの半ば怒鳴り声のような声が耳に響き渡る。どういつことか訊ねるがドラえもんは既に通信を切っていた。身勝手な奴だなと心の中で毒づいていたがのび太はこの後、ドラえもんの警告が正しかったことを、身を持って実感することとなった。

「のび太クーン！！！」

タケコプターで飛んできたドラえもん。しかし彼の顔はいつもとは異なり焦燥していた。

「ドラえもん！！！！急にあんなこと言っただうしたんだよ！！」

そう問いかけるのび太にドラえもんは有無を言わず進化退化放射線銃の光線で強化したデンコーセツカを飲ませ

「敵は信じられない速さで移動しているんだ！」

と人工衛星からリアルタイムで送られてくる怪物の映像を見せる。その文字通り目にも止まらぬ速さに恐怖するのび太に体を強化させる強力ウルトラスーパーデラックス錠を服用させる。のび太は

「ドラえもん．．．」

とドラえもんに話しかけるがドラえもんは動かない。パニックに陥りそうになるのび太。しかし彼はドラえもんが身に着けているタケコプターを見て気が付く。時間が止まったのだ。しかしそれにもかかわらず怪人による破壊活動は続いていた。

「ありがとうドラえもん．．．」

動かなくなつた親友に礼を述べ、強力ウルトラスーパーデラックス錠のおかげでタケコプターなしで空を飛べるようになったのでタケコプターをしまい、怪人に急接近し思いっきり蹴り飛ばす。思わぬ方向から放たれた攻撃に吹き飛ばされてしまう怪人。

「貴様．．．！！なぜ普通に動けるのだ！？」

のび太を見て驚愕する怪人にパンチやキックを叩き込む。怪人の強力なパンチやキックによる反撃を受け苦痛に顔を歪める。普通の人間ならば即死しているはずにも拘らず自分と同じくらい強力な打撃技を繰り出すのび太の存在に混乱する。

「アアアアアアアアアアアッ！！！！！！」

咆哮する怪人のパンチを左腕で受け止め顔面にパンチを浴びせる。しかし怪人はのび太のパンチを受け止め、逆に顔面や腹に強烈なパンチと膝蹴りをお見舞いした後、投げ飛ばす。

「ウワッ、グハッ！！」

コンクリートの壁に叩き付けられる。よろめきながらも立ち上がる

のび太に止めを刺すべくゆつくりと近づく怪人。立ち上がるので精一杯ののび太はまともに動くことすらできない。これまでかと目を瞑るのび太。そんなのび太を救うべく同様にデンコーセツ力を飲んだドラえもんが

「危ない、のび太君!!!!」

と原子核破壊砲を連射し怪人を牽制する。その隙に怪人との距離を取り両ポケットから取り出した熱戦銃と光線銃を両手で構え、怪人に向かって連射する。火花を散らしながら後退する怪人に火力を集中させているとのび太やドラえもんのように加速したタイムパトロール特別機動部隊員達が怪人を取り囲み四方八方からライフル型の光線銃を発砲した。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア——ツ  
!!!!!!!!!!!!!!」

断末魔をあげながら大爆発を起こし粉々になる怪人。正体も目的も不明だったが怪人の破片を調べたドラえもんが怪人は別の世界から来たと断定したことから時空侵略者の手先だということが明らかになった。

過去の回想を終えたのび太は時空侵略戦争とは無縁であると強調しているのだろうかと思っているほど晴れ渡っている青空を見上げながら、今もどこかで戦い続けているのであろう辻野に思いを馳せていると

「のび太さん、辻野さんの事考えてるの?」

と後ろから静香に話しかけられる。うん、と頷き静香と一緒に空を見上げるのび太。

「辻野さんならきつと大丈夫よ．．．」

と笑顔で元気づけようとする静香に向き直り

「そっだよーね！」

と笑顔で自分に言い聞かせていると急にあたりが暗くなる。空を見上げると先程まで雲一つなかった青空が真っ黒な雲で覆い尽くされていた。

「何あれ．．．！！！！」

と静香が空を指差す。そこには黒い雲が渦のようなものを形成し、中から雷を放出していた。すると二人の糸なし糸電話からドラえものの切迫した声が聞こえてくる。

「大変だよ、のび太君！！何者かが時空に穴をあけようとしているんだ！！！！至急、のび太君の家に集まって！！」

ジャイアンとスネ夫の了解と言うのを聞きながらのび太と静香も了解と返事する。糸なし糸電話をポケットに戻しながらのび太は禍々しい雰囲気放つ渦を睨み付け呟かすにはいられなかった。

「一体、何が始まるんだ．．．！？」

T  
o  
  
B  
e  
  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.  
.  
.

崩壊

（アンケート在中）（後書き）

いきなりですが次の世界についてアンケートを取りたいと思います。  
文章化可能なほど脚本が出来上がっているのは

A ・ ウルトラマンガイアの世界

B ・ 仮面ライダーアギト&クウガの世界

C ・ とある魔術の禁書目録の世界

D ・ 仮面ライダーBLACK／BLACK RXの世界

です。読者様の投票をお待ちしています!!!!!!

## 始動（前書き）

大変ながらくお待たせいたしました。

『仮面ライダーアギトノクウガ』の世界です。  
ご意見、ご感想お待ちしています！

## 始動

「はぁ．．．」

「尾室君、さつきからため息ばかりついてどうしたの？」

コンピューターの前に座っている気の強そうな茶髪の女性が尾室と呼ばれた隣の平凡そうな見た目をした男性に話しかける。2人ともMPD・SAULと書かれたバッジを着け、少し変わった青い制服に身を包んでいる

「だってあと一週間でG3ユニットが解散するんですよ！小沢さんは西ロンドン大学に行っちゃうし氷川さんは捜査一課に転属しちゃうし．．．」

「尾室君、先週あれだけ『僕の時代が遂に来た！！』とか言ってるんでたじゃない」

と愚痴る尾室に半分呆れているのはMPD・SAUL（警視庁・未確認生命体対策班）、通称G3ユニットの指揮官でありSAULが運用する第3世代型対未確認生命体用特種強化装甲服、通称G3及びG3-Xの開発者でもある小沢澄子だ。

アンノウンとの戦いが終結して既に2か月が過ぎ、G3ユニットはG5ユニットとして拡大改組されることが発表されたのが今から約1週間前の事だった。

『東京、東京です。ご乗車ありがとうございました』

「未確認生命体事件の時以来か。久しぶりの東京だな．．．」

そう呟きながら20代後半くらいの男が灰色のトレンチコートを靡かせながら東京駅に降り立った。そんな男に後ろから声をかけるスーツ姿の2人組の男達。

「一条！」

「一条刑事！！」

「杉田刑事に桜井刑事！！」

と2人の顔を見て顔を綻ばせるのは一条薫。二年前の未確認生命体事件の際、長野県警代表として警視庁の合同捜査本部に送り込まれ未確認生命体第四号と共に事件を解決した凄腕の刑事だ。

「連続殺人事件の合同捜査本部にお前が来るって聞いて慌てて迎えに来たんだよ」

と笑顔で語る杉田刑事。三人がお互いの近況について話しながら駅の出口に向かおうとしたその時、爆発音が響いた。

「犯人の目的が何であろうと、尋常じゃないということは確かだな」  
「そうですか．．．」

9人目の被害者の検視に立ち会うべく刑事、氷川誠は関東医大病院を訪れていた。連続殺人の犠牲者は皆、体内の臓器と脳髓が抉られ持ち去られていた。検視を担当した医師、椿秀一も犯人の残虐な手口に氷川と同じように顔を顰めている。

「明日にでも詳しい報告書を提出しとくよ」

と言いながら机に向かう椿に一礼して病院を出ると携帯が鳴りだす。相手は小沢だった。

「もしもし」

「氷川君！大至急、Gトレーラーと合流して！！」

「どうしたんですか？…っ！！まさか…！！？」

「そのまさかよ！未確認生命体が東京駅に出現したのよ！！」

閑静な住宅街にあるごんまりとした喫茶店。

「そついや五代の奴、今日成田に着くとか言ってたよな？」

カウンターでラジオを聞きながらコーヒを淹れている40代ぐらいの男がキッチンで洗い物をしている女性に話しかける。

「12時30分に成田に着くって五代さん言うてはったよ」

とお皿を洗い終わった女性が答える。するとカランカランというベルの音と共にドアが開きガラスの悪そうな茶髪の青年が中に入ってくる。それは芦原涼だった。

「いらっしやい。何にしましょう?」

と男が訪ねると芦原は

「コーヒー、一杯」

と無愛想に注文する。変な人だなと思いつつコーヒーを淹れているとまたしてもカランカランというベルの音と共にドアが開き今度は高校の制服を着た女の子が入ってくる。それを見て洗い物をしていた女性が思わずといったように声を上げる。

「夏目ちゃん!!!」

「朝日奈さん、お久しぶりです!」

その声を聞きコーヒーを無愛想な芦原に出していた男も目を見開き

「夏目ちゃん! 一体どうして・・・!!」

と素っ頓狂な声を上げる。そんな男に夏目と呼ばれた女の子は

「学校が春休みで五代さんが久しぶりに日本に帰ってくるって聞いたんで来ちゃいました」

と笑顔で答える。そんな周りの人達のやり取りを見て一瞬、遠い目をしながら微笑む芦原。しかしそんな平穏なひと時もラジオの緊急

速報によって破られる。

『臨時ニュースをお伝えします！ＪＲ東京駅に未確認生命体が出現したとのニュースが入ってきました！はっきりとした情報はまだ入ってきていませんが．．．』

「おいっ．．．！！嘘だろ！！！」

そのニュースを聞きラジオに駆け寄る男。朝日奈と呼ばれた女性も夏目と呼ばれた女の子も恐怖で顔色を失っている。芦原はコーヒード代をカウンターに置き、走って外に止めてあるオフロードバイクに飛び乗る。芦原のただならぬ様子に外に出てきた男が

「あんた、どうするつもりだ！」

と芦原に話しかける。すると芦原は外にロープでつなげていた犬を指差し

「少しの間だけあいつの面倒見といってくれ！！！」

と言い残して走り去った。

「あっ．．．！バイク、ポレポレに置いてきちゃったんだ．．．」

と一人呟きながら３０代ぐらいの男が空港から出て来る。この男の名は五代雄介。２００の技を持ち、世界を股にかける冒険野郎だ。彼が２年前、未確認生命体から人々を護るべく超古代の民族、リントの戦士クウガとなって戦っていたことはあまり知られていない。

しかたなく電車で東京に行こうとＪＲの駅に向かうが、ＪＲ全線が運転を見合わせと電光掲示板に表示されている。何かと思い駅員に

「何かあったんですか？」

と訊ねてみると五代の想像を遥かに超える答えを駅員が返した。

「東京駅に未確認生命体が出現したんですよ！」

自分が打ち滅ぼしたはずの未確認生命体が復活したという駅員の言葉を聞いてシヨックのあまり呆然としてしまう五代だった。

「ありがとうございました！」

お客さんが笑顔で店を出るのを見送り、お店、レストラン『AGITO』のオーナー兼シェフである津上翔一は一旦、店を閉店すべく窓際に向かう。窓に吊るされたOPENと書かれた木の札をCLOSEDと書かれた裏側にひっくり返し、後ろを振り返るとそこには黒ずくめの青年が座っていた。

「お前は・・・！一体、何の用です！！」

津上は自分が倒してきた異形“アンノウン”にアギトになる人間を抹殺するように命じてきた張本人であり、この世界を作り上げた神にあたる青年に問いかける。すると青年は津上に頭を下げてこう言った。

「この世界を…破滅から救ってください」

「エッ．．．!!!!」

津上は困惑した。

## 始動（後書き）

### 次回予告

動き出す運命の歯車。安らぎを取り戻した男たちは再び立ち上がり、辻野は闇を食い止めるべくスパークレンスを掲げた。

次回、『膠着』

乞う、ご期待ください！

## 膠着（前書き）

更新遅れてすみません！  
ご意見、ご感想お待ちしています！！

## 膠着

辻野はルイから仮面ライダーと呼ばれるヒーローについての説明を受けて、仮面ライダーとの邂逅を心待ちにしながらパトロールしていた。

『警視庁より各局。警視庁より各局。JR東京駅に未確認生命体出現との入電中…』

「こりゃ、まずいな…」

警察無線を傍受しながら覆面車両で街中をパトロールしていた辻野はハンドルを切ってUターンした。

東京駅、1階。新幹線乗換改札口付近。

パン！パン！

「キヤアアアア——！！！！！！」

「助けてくれええええ——！！！！！！」

ズドンッ！ズドン——！！

「くそっ！！」

一条は未確認生命体特別合同捜査本部に在籍していたころから使っているコルト・パイソンを連射する。しかしコルト・パイソンから放たれたマグナム弾は怪人の胸部に命中したものの他の警官が発砲した銃弾と同様にダメージを与えることはできなかった。

「ウワアアアアアッ！！！！」

怪人に首をもがれ音もなく地面に倒れる制服警官の体。怪人の周りにはすでに死体の山ができている。それでも諦めず拳銃を撃ち続ける一条。すると遠くの方から

ヒューンヒューンヒューンヒューン…

というパトカーとは違う甲高いサイレンの音が聞こえてくる。

「来てくれたか…！！！！」

隣で安堵のため息をつく杉田に訝しむ視線を向けると同時に青と白で彩られたオンロード型の大型バイクが改札を飛び越えて怪人にそのまま体当たりする。堪らず吹き飛ばされコンクリートの壁を突き破る怪人。一条は初めて見る対未確認生命体特殊装甲強化服G3-Xを見て思わず

「凄い…！！」

と呟いた。

「氷川君、敵は生きてるわ。慎重に接敵して」

Gトレーラーに送られている映像を見ている小沢からの指示に従い、ガードチェイサーの後部に折りたたまれ固定されていたガトリング銃GX-05ケルベロスに暗証番号1・3・2を打ち込み素早く口ツクを解除する。するとコンクリートの壁にできた穴の反対側から

「キサマアアアアアアア！！！！」

という怒声が聞こえてくる。巨大な頭部に銀色の体には赤い筋が何本も浮かび上がっている怪人。氷川は知らないがこの怪人は世界征服を狙う秘密結社ゴルゴムが生み出したツノザメ怪人だ。今までに遭遇したアンノウンでも未確認生命体でもない何かにある種の恐怖感を抱く氷川。しかし怪人がコンクリートの穴から出てきたことによってその思考は中断される。恐ろしいスピードで襲い掛かってくる怪人に対してGX-05を地面に捨てて接近戦を挑む。

「クッ……！！！」

巨大な鉤爪による引つ掻き攻撃を受けて胸部の装甲から火花が散るがそれに構わず、がら空きの頭部にパンチを入れ、さらに腹部にキックを叩き込む。

「胸部装甲に軽度の損傷！バッテリー出力90%に低下！」

「その調子よ、氷川君！」

無線から聞こえてくる小沢と尾室の声に答えることなくさらに顎にアップパーを決め、ふらついた怪人の頭部に肘打ちを決め更に胴体にパンチを何発も叩き込む。苦しむ怪人に追い打ちをかけようと動い

たその時、

「ウワツッ!!」

背後から攻撃を受け吹き飛ばされた。振り返るとそこには以前倒したはずのスネークロード、アングイス・フェミニウスが鞭を持って立っていた。以前の戦闘ではG3の戦闘能力の低さもあって取り逃がしてしまった苦い経験がある。できることなら過去の雪辱を晴らしたいのだが2対1と不利な状況に置かれているので無理はできない。放たれる鞭を躲し、飛び掛かろうとしていたツノザメ怪人に向かって右大腿部のホルスターから引き抜いた専用拳銃GM-01スコーピオンを連射し牽制する。ツノザメ怪人がGM-01から撃ちだされた特殊弾を受けてもがき苦しんでいる間にスネークロードに向かって突進しようとするも、なかなか隙を見せないため、接近できない。ツノザメ怪人が体勢を立て直し、今度は噛み付いてくる。

「ゲワツッ!!!」

「バッテリー出力75%にダウン!!!」

「しっかりしなさい、氷川君!!」

頭部を？ぎ取ろうとしてくるツノザメ怪人を左腕から取り出した電磁コンバットナイフGK-06ユニコーンで顔面を切り付ける。

「グアアアアアアッ!!!」

顔を押さえながら後ずさるツノザメ怪人に蹴りを放ち、スネークロードにはGM-01を浴びせ距離を取る。圧倒的に不利な状況。それでも氷川はファイティングポーズをとり、怪人達に向かって突進

した。

東京駅は大混乱になっていた。

「急いで！早く避難して下さい！！」

制服警官の誘導に従い東京駅から次々と出てくる人々。その人々とは逆の方向に進んでいる人間が2人。それは辻野と葦原だ。どさくさに紛れて駅構内への侵入に成功する2人。角を曲がると2体に挟み撃ちにされ火花を散らしながら吹き飛ばされるG3-Xがいた。

「立て！氷川！！」

そう思わず叫んだ葦原の声を聞き、ハッとこちらに顔を向ける氷川。表情が見えないので何とも言えないのだが葦原の登場に驚いているようだ。

「変身！」

ポーズをとると同時に緑色の戦士、仮面ライダーギルスへと変身を遂げる。別方向から現場に到着した辻野はガッツハイパーガンを構えたまま凍りつく。

「何だ、あれは…！？」

「ラアアアアアアアアアアアアア——ツ！！！！！」

咆哮と共に圧倒的なスピードとパワーを持ってツノザメ怪人を追い

詰めていくギルス。約10トンの破壊力を持つパンチと約20トンの破壊力を持つキックのラッシュを受け行動不能に陥るツノザメ怪人。スネークロードの鞭を叩き落とし、左太腿に装着されていた特殊電磁警棒ガードアクセラーで的確にダメージを与えていくG3-X。すると二人の背後に灰色のオーロラが現れる。以前、アポロガイストが逃走するのに使用したのと同じものだ気づき、

「危ないッ!!!」

と叫ぶと同時にオーロラの中から黒い禍々しい雰囲気を漂わせた騎士のような恰好をした人間が現れる。間一髪でそのことに気が付き距離を取るギルスとG3-X。PDIを作動させ、謎の黒騎士の画像データをレイに転送する。するとんでもない答えが返ってきた。

「あれは……!!!別世界の悪の仮面ライダー、仮面ライダーリュウガです!!!!!!」

リュウガは躊躇いひとつ見せずにG3-Xとギルスに襲い掛かる。3対2と不利な戦いを強いられ苦戦する氷川と葦原。そんな二人を援護すべく周りに人がいないか確認し、スパークレンスを胸元に掲げた。

東京駅の外で出入り口を封鎖し監視している一条や他の警官たち。

「一条君!」

急に名前を呼ばれたので振り向くとそこには未確認生命体事件の時に世話になった榎田ひかりだった。

「榎田さん！どうして…！！！」

「科警研から車で直接、神経断裂弾を持ってきたのよ！一条君こそどうしてここに！？」

お互いに事情を話す。後ろには科警研のミニバンが止まっているのが見える。早速、渡してもらった神経断裂弾を愛用のコルト・パイソンに装填する。一条は杉田や桜井といった他の刑事たちと頷き合い、東京駅に突入した。

「ファイナル  
FINAL ベント  
VENT」

「グルルルッ」

「クツクツクツ」

リュウガとツノザメ怪人、スネークロードがフィニッシュを決めるべく一気に襲い掛かるうとしたその時、目がくらむほどの強烈な光が5人を包み込む。光が収まるとどめを刺そうとしていたリュウガとツノザメ怪人、スネークロードの前に立ちはだかる銀、赤、青紫の三色で彩られ、アギトともクウガとも違う、それでいて優しさや生命の輝きを思い起こさせるような白く輝く瞳。

「あれは…！！！」

「なっ…！！！」

初めてアギトに遭遇した時の事を思い出し、既視感<sup>デジャヴ</sup>を覚える氷川と自分の目が信じられず啞然とする葦原だった。

## 膠着（後書き）

### 次回予告

戦いが続く中、五代や津上もこの戦いに巻き込まれてゆく。

次回、『予兆』

乞う、ご期待ください！

## 予兆（前書き）

ご意見ご感想、クロスオーバーやコラボなど随時募集中です！

## 予兆

仮面ライダー。

バイクを駆って悪の組織や怪人たちと戦う異形が存在。各世界によって多少の違いがあるもののその世界を護るべく日夜戦い続ける守護者達。

「サイボーグとか超能力とか、何だか胡散臭いですね……。まあ、それを言ったらティガも十分胡散臭いですけど」

辻野がルイから説明を受けた時の感想だった。しかし実際に目の当たりにしてみると体の大きさや見た目以外は非常に似通っているということに気が付く。彼らの赤い瞳の輝きにティガの光と同じ優しさや暖かさを見出す辻野だった。

「一体……!!」

カメラから送られてくる映像に困惑する小沢と尾室。しかし態度から察するに敵ではないと判断した小沢は指示を出し始める。

「氷川君、敵ではなさそうだけど警戒して！尾室君！報告！……！」

「あつ……。！右肩装甲に重度の損傷！バッテリー62%！一応、戦闘は可能です……！」

我に返った尾室の報告を聞き満足げに頷いた。

「テアッ！」

3対1という不利な状況にもかかわらず怯むことなく怪人達に対してファイティングポーズを取るティガ。相手が困惑している間に立ち上がるうともがくギルスとG3-X。しかし2人とも深いダメージを受けていて戦闘ができるような状態ではない。

「ヘアッ！」

飛び掛かろうとしたツノザメ怪人にハンドスラッシュを撃ち込み、そのまま残りの2体に飛び掛かるティガ。

「ハッ！タアッ！！」

リュウガの頭部に光を纏わせたパンチを叩き込みその反動でそのまま背後を取ろうとしたスネークロードにバックキックを浴びせる。

「ギヤアアアアアッ！！！」

キックの勢いで振り返り引っ掻こうとしていたツノザメ怪人の体に当て身を喰らわせ、後方に宙返りして怪人達から距離を取り直す。

「テヤア！！」

ジリジリと迫る怪人達。先手を打ったのはリュウガだった。

「STRIKE VENT」  
ストライク ベント

ドラグクローを素早く装備し、ドラグクロー・ファイアーを放つ。側転や爆転で次々と躲していく。しかしスネークロードの鞭に絡め取られ、動きが鈍った隙を突いて放たれたドラグクロー・ファイアーの直撃を受けて吹き飛ばされてしまう。

「チュアアア——！！！」

コンクリート製の壁の向こう側に消えるティガ。しかし戦闘可能な状態にまで回復したギルスとG3-Xが追撃を阻む。

「ハッ！ウアアアアッ！！！！！」

スネークロードの鞭を蹴り飛ばし、その胴体にパンチやキックを叩き込んでいくG3-X。

「ラアアアアッ！！！」

その横ではギルスが触手状ムチ、ギルスファイラーでツノザメ怪人を拘束している間にリュウガに回し蹴りを浴びせる。リュウガが弾き飛ばされている間にツノザメ怪人を引き寄せ、顔面にパンチを叩き込んだ。何とか立ち上がりギルスを背後から倒そうと左腕に装着されているブラックドラグバイザーにファイナルベント用のカードを挿入しようとした瞬間、何者かからの蹴りを受けて吹き飛ばされる。

「ガッ……！！！」

呻き声と共にカードを手放してしまうリュウガ。慌てて振り向くとそこにはパワータイプにタイプチェンジしたティガが立っていた。

「チャッ！！ハッハッハッ！！！」

立ち上がるうともがくりユウガの顔面を蹴り上げ、無防備な胴体にパンチやキックをきめる。そして最後にきまったパンチがリュウガを吹き飛ばした。

「クッ．．．！！」

『バッテリー出力50％に低下！！』

『踏ん張りなさい、氷川君！！！』

「ハアッ！」

鞭を失ったスネークロードと壮絶な打撃戦を繰り広げるG3-X。お互いの体から凄まじい音と共に火花が散るがそれに構うことなく殴り合う。

「ハッ！ハアアアッ！！！」

スネークロードの右パンチを左腕で防ぎ、右アッパーで相手の体を浮かせたところに右キックを蹴り込む。堪らず廊下の反対側まで吹き飛ばされてしまうスネークロード。その隙に床に転がっているGX-05に向かって駆け寄り、拾い上げて構える。スネークロードが立ち上がった瞬間、

チャカッ

ババババババババババババババババババババババ

ハイメタル製特殊徹甲弾が秒間30発の連射速度で放たれる。火花と共に胴体を引き裂かれたスネークロードは

「ギヤアアアアアアアアアアア——ッ!!!!!!!!!!!!!!」

という断末魔と共に大爆発を起こした。

「彼らはこの世界を闇で覆おうとしています。私の眷属達や見たこともない化け物を使って……」

「彼らって一体誰なんです!」

人気がないレストラン。柔らかい雰囲気醸し出すための薄暗い照明が2人の奇妙な影を映し出す。

「この世界とは異なる世界の邪悪な闇の支配者の下僕。それを阻止できるのは光の使者とあなた方だけです」

「あなた方……って氷川さんや葦原さんも!というか光の使者って何なんです!?!」

その問いかけに答えることなくスウーと消えていく闇の青年。津上は青年が座っていた椅子を見つめたまま微動だにしなかった。

「ラアアアア——ウ!!!!!!」

ギルスは唸り声を上げながらツノザメ怪人の顔を殴り飛ばし、よろけて無防備なツノザメ怪人の胴体に前蹴りや回し蹴りと、次々とキックを浴びせる。文字通り手も足も出ないツノザメ怪人。

「ウラアアアアア——ッ!!!!ラアアッ!!!!ラアアアアッ!!!!!!」

獣じみた咆哮と共にパンチやキックでツノザメ怪人を圧倒するギルス。強力な前蹴りでツノザメ怪人を吹き飛ばし、それと同時に踵の部分にあるヒールクロウを伸ばしジャンプ、踵落としの要領で右足のヒールクロウを突き立て、ツノザメ怪人の体を左足で蹴りその反動で突き刺さったヒールクロウを引き抜きながら距離を取る。

「グギヤアアアアア——ッ!!!!!!」

ギルスの必殺技であるギルスヒールクロウを受けてツノザメ怪人は苦痛に満ちた断末魔を上げながら爆死した。

「あなた達は一体……!?!」

「五代雄介……貴様には死んでもらう!」

電車が止まっているので仕方なく空港からバスで都心に向かっていくと、バスが急ブレーキと同時に横転。他の乗客と共に命辛々脱出することに成功したものの今度はスーツ姿の男と全身黒タイツとい

う怪しい恰好をした男達に取り囲まれてしまったのだ。

「『『イーツ！』』」

という奇声を発しながら襲い掛かってくる黒タイツの男達を2000の技を持つ五代は軽々と退ける。それを見ていたスーツの男は

「この役立たず共めが！！！」

と叫ぶと同時に三つの頭を持つ黄色と緑色の謎の怪物に変身し五代に襲い掛かった。

「タアツ！ハツ！」

お互いのパンチやキックを防いでは反撃と一進一退の戦いが続いていた。

「トヤツ！ヘヤツ！！」

リュウガの飛び蹴りを側転で躲し、慌てて振り返ったリュウガの顔に蹴りをお見舞いする。リュウガもティガに蹴られ、よろけるがその後繰り出されたパンチを紙一重で避け、ティガの無防備な背中に蹴りを入れた。さらにリュウガはパンチを受けて怯んだ瞬間、投げ飛ばされるが空中で一回転して見事に着地しティガの腹部にパンチを叩き込んだ。しかしパワーで優位なティガに徐々に押され始めるリュウガ。ティガの顔面にパンチを放つたもののそれを右手で受け止められ逆に握りつぶされる。キックを放つことでティガの右手を振り払い距離を取ることに成功するが

「チュアッ!!」

体勢を崩しつつも放たれたハンドスラッシュがリュウガのカードデ  
ッキが装着されたベルトであるVバックルを掠る。掠った部分から  
青白い放電が放たれはじめ、それを見たリュウガは

「<sup>トラベル</sup>TRAVEL <sup>ベント</sup>VENT」

と慌てて左腕のブラックドラグバイザーにカードを挿入し背後に現  
れた灰色のオーロラの中に消え去る。追いかけようとするもあと一  
歩のところでオーロラが消滅してしまった。どうすることもできず  
そこに立っただけでいると

「動くなっ!!」

と背後から大声で叫ばれる。ゆっくりと振り返るとそこには物陰や  
機動隊用の楯の後ろでリボルバーやライフルといった(ティガの世  
界の基準で)旧式な銃を構えた警官達がいた。さらにほぼ同時にス  
ネークロードとツノザメ怪人を倒したG3-Xとギルスもティガに  
向かってファイティングポーズを取る。

「本部から各捜査員へ!発砲を許可する!繰り返す!発砲を許可す  
る!!」

その無線と同時に刑事達は拳銃の引き金を引いた。

## 予兆（後書き）

### 次回予告

敵と誤認され攻撃されるティガ。  
その一方で謎の怪物に襲われる五代。  
ティガと五代の運命やいかに！？

次回、『戦士の復活』

乞う、ご期待ください！

## 戦士の復活

「チャーツ!!!!」

ティガが横つ飛びすると同時にティガがいた場所に弾丸が殺到する。地面を転がり柱の陰に飛び込む。しかしホツとするのもつかの間、その柱を粉々に砕くギルスのパンチによって柱が破壊されてしまう。パンチが当たる寸前に柱ごと粉々にならないように柱の陰から飛び出るティガを警官とG3-Xの銃撃が追い立てる。

ギルスのパンチを受け止め、鎧迫り合いを利用してギルスの体を楯にする。ギルスが邪魔で銃を撃てない警官達。ギルスは何とか殴ろうと拳を振るうがすべて受け止められてしまう。圧倒的な戦力の差に手も足も出ない。するとギルスはティガの想像の斜め上を行くような攻撃を繰り返した。それはなんと、噛み付き攻撃だった。

「ラアアアアアッ!!!!」

ガブッ

「テアアアアアア——ッ!!!!!!」

首の付け根を噛み付かれてそこから血のごとく光が漏れ出る。ギルスを振り払ったティガはそのまま床に倒れ込んだ。

「おりやつ！」

頭部からの光線による攻撃を2000の技のうちの一つを使い、軽々と避けていく五代。その身軽さに怪人も唸るしかない。杖から連続して放たれる攻撃をすべて躲し、

「お前は何者だ？」

と五代は問いかけるがその問いに怪人は答えることなく光線を放つ。そのうちの1発が真横にあった花束に当たった。するとその花束のある花は瞬時に枯れ、もう1本の花は蕾の状態へと戻る。その光景を目の当たりにした五代は

「時間を操るのか！？」

と素早く相手の特徴を把握する。常人を遥かに超える文字通り超人的な反射神経と肉体をフルに使い光線を躲していくがやはり怪人相手にはやはり不利で、徐々に追い詰められていく。このままではやられる。でももう戦いたくない！戦いを、暴力を人一倍嫌悪する五代は反撃を躊躇する。

「止めだ！！」

その言葉と共に放たれた光線が五代に殺到する。上半身を捻り辛うじて躲すことに成功したかのように見えたが完全に躲しきることができなかつたらしく腰のあたりにこの世のものとは思えないほどの痛みが走る。

「グアアアアアッ！！！！！！」

あまりの激痛に地面で体を擦じらすしかできない五代。その光景を見て怪人が嘲笑う。

「レーザー一つ避けられないとは！この世界の救世主も所詮はこの程度か。ハッハッハッハッ！！」

「ウワアアアアアアッ！！！！」

怪人の嘲りにすら反応できないほどの激痛にただ悲鳴を上げることしかできない五代。調子に乗った怪人は

「キサマの体は身体の一部が劇的に老化し、逆にある部分は退化し胎児の状態になって死ぬことになる。クッククククッ！！！」

と説明するが五代は苦しむだけでその体には何の変化も見られない。

「どういうことだ！！まさかっ！！！！」

光線が完全に当たっておらず掠っただけなのではないか？その可能性に気が付いた怪人は地面に這いつくばりのた打ち回る五代に向かって光線を放つべく頭部にエネルギーを溜めはじめる。だが怪人がその光線を放つことはなかった。怪人が急に頭を押さえて苦しみ始めたのだ。

「あ、頭があああゝ！！！！」

その間に何とか立ち上がった五代は怪人に向かって手を突き出し一心不乱に思念を送っている大学生ぐらいの女性を見つける。その女性も五代に向かって

「今のうちに逃げて！」

と叫ぶ。五代がその女性の方に一步踏み出した瞬間、今度は女性が逆に怪人の放った衝撃波による反撃を受けて吹き飛ばされて気を失ってしまふ。

「大丈夫ですか!？」

慌てて女性に駆け寄り肩をゆするが完全に気を失っていてうんともすんとも言わない。

「ビ、ビームが出せない!小娘のくせに小癪な真似を！」

謎の女性にビーム攻撃を封じられたことを毒づきながらゆっくり立ち上がる怪人。またしても腰のあたりに激痛が走り、思わず腰に手をやる五代。しかし彼の手はそこに存在するはずがないものに触れてしまふ。埋め込まれた霊石“アマダム”の力によって装着者を古代民族リントの戦士、クウガへと変身させるベルト、アークル。究極の闇をもたらす者であるン・ダグバ・ゼバとの死闘の際に破損したはず……

怪人のビームを避けたにもかかわらず五代の腰に激痛が走ったのは怪人の光線が放射する時空エネルギーが偶然にも五代の体の中に残っていた霊石アマダムを破損前の状態に修復してしまったためだったのだがそのことを五代は知らない。

自分が誤ってクウガを復活させたことに気が付いていない怪人は

「ウラアアアッ!……!」

という咆哮と共に襲い掛かろうとするが、素早く両腕を体の前でクロスさせ

「超変身！」

と叫んだ五代は赤色のクウガ・マイティフォームへと変身した。

「ハッ！ハアッ！！」

怪人の右パンチをブロックし逆にパンチやキックを浴びせるクウガ。さらにクウガは怪人のパンチを掴み逆に一本背負いのように投げ飛ばす。起き上がりざまにキックを浴びせ反撃する怪人。ふらついたところにパンチで追撃しようとする怪人を躲し、強烈なローキックを見舞うクウガ。

「フンッ！」

バランスを崩す怪人。だが怪人もクウガの腹部に痛烈な頭突きを見舞うことでクウガの体勢を崩し、距離を取り直す。お互いに出方を窺いつつ半円を描くようにゆっくりと動く。そして、バスの残骸が爆発すると同時にお互いに向かって走り始めるクウガと怪人。

「ハアアアアッ！！！！！」

「グウオオオオオッ！！！！！」

クウガは途中で飛び上がり空中で回転し強化マイティキックを炸裂させる。怪人もそれに合わせて黒いオーラを纏わせた拳を突き出しカウンター狙いのパンチを放つ。

そして同時に着地するクウガと怪人。お互いに着地した姿勢のまま微動だにしない。怪人の体にクウガの封印エネルギーによる紋章が浮かび上がる。ゆっくり怪人の方へ振り返るクウガ。

「グウウウウウツ!!!」

しかし怪人は体に力を込めることによって紋章を無理矢理掻き消してしまう。その光景を目の当たりにしてもう一度構えるクウガ。しかし怪人もクウガも体力を限界まで消費しているため動くことができない。クウガはまだアマダムが本調子ではないらしくエネルギー不足のために赤色のマイティフォームから白色のグロウイングフォームへと強制的に変身させられる。怪人の方も地面に片膝をついてしまう。

「クツ…次会った時が貴様の死ぬ時だ!」

という捨て台詞を吐き急に背後に現れた灰色のオーロラの中に消えていく。クウガが怪人を追おうとした瞬間、地面が急に震えはじめる。

「これは地震!?!」

そしてその言葉が言い終えたのと同時に、近くのビルを突き破るような形で巨大な怪獣が現れる。五代は気を失ったままの女性をお姫様抱っこのような形で抱え上げ、その場を急いで離れた。

「荒川区の地下から巨大怪獣ですか!?!」

小沢からの緊急通信に思わず啞然としてしまう氷川。その言葉を聞いて、傷が癒えたのを確認して注意が少しそれた瞬間にティガはゆっくりと立ち上がる。

「ハッ！」

ギルスヒールクロウを転がることで躲しGX-05の弾丸や神経断裂弾を即座に張った円形のウルトラシールドで止める。そして地上階にあるホームへとつながる階段の前に来たティガは追撃しようとするG3-Xとギルスの相手をすることなくマルチタイプへと変身し

「チエアッ！！！」

ホームの屋根を突き破るような形で東京駅から飛び去った。

怪獣から少し離れることに成功したクウガは五代の姿に戻り近くの病院に女性を運び込んでいた。意識を取り戻したらしい女性に

「先程は本当にありがとうございます！助けていただいて！！」

とお礼を言う五代に女性は

「気にしないでください」

と微笑む。命の恩人の名前を知らないままではいけないと思い

「俺、五代雄介っていうんだけど、あのお名前を窺ってもいいですか？」

とおずおずと訊ねる五代に女性はこう答えた。

「風谷真魚っています」

## 戦士の復活（後書き）

### 次回予告

街を蹂躪する怪獣に戦いを挑むティガ。敵の時空侵略計画を知り戦いにもう一度身を投じる男達。しかし彼らの前に強敵が立ちふさが

る。

次回、『襲撃』

乞う、ご期待ください！

襲撃

(どくろ怪獣レッドキング登場)

「津上さん！今は忙しいんです！！また後で掛け直して……」

携帯電話を握りしめ電話の向こうから聞こえた言葉に凍りつく氷川。その様子を小沢と葦原は心配そうに、尾室は不思議そうに見つめる。

「わかりました。今からすぐそちらに向かいます」

そう言つて携帯電話を切つた氷川は小沢に向き直りこう告げた。

「今から急いで津上さんが経営しているレストラン・AGITOに向かつてください！！」

「グギヤオオオオオオ——ン！！！！！！！！！！」

「キヤアアアツ！！！！！！」

「避難してください！避難してください！！！！！！」

「こつ、こつちに来るぞ！！」

「イヤアアアア——ッ！！！！！！」

「助けてくれえっ！！！」

一度も怪獣が現れたことのないこの世界に巨大な怪獣が出現。人々はパニックに陥り、あちこちで混乱が起きていた。

「これは警察じゃだめだ。自衛隊を呼ぶ以外どうしようもないな……」

無線から聞こえてくる怪獣のサイズとその被害の大きさに思わず呟いてしまう一条。東京駅を包囲していた警官隊はティガが飛び去った後、避難誘導を行うべく怪獣の進行方向にある文京区及び新宿区に向かっていった。

『怪獣は現在、ＪＲ日暮里駅付近を南西方向に……』

無線からの報告が急に途絶える。いてもたってもいられなくなった一条は

「どうした！報告しろ！！！」

と無線機に向かって叫ぶ。すると無線機からとんでもない報告が入ってきた。

『銀、赤、青紫の三色の謎の巨人が出現！怪獣を攻撃し始めました！！！！』

まさか先程まで東京駅にいた謎の生命体？一条は車を運転している杉田と顔を見合わせた。

「グギヤオオオオ——ン!!!!!!!!!!」

全身が蛇腹のような凸凹に覆われた身長60メートルほどの巨大怪獣に首都を蹂躪されるも為す術がない警察。避難は依然として完了しておらず逃げ惑う市民達を怪獣は一方的に虐殺していく。しかしこの世界に滅びをもたらそうとする時空侵略者を阻止するべくウルトラマンティガが舞い降りる。

「テアッ！」

街から着地し構えるティガに目標を変更した怪獣はティガに向かって突進する。他の世界について勉強していた辻野はこの怪獣がレッドキングと呼ばれる凶暴な怪獣であると知っていたため

「ハッ！ハッ！！」

「グギヤオオオオ——ン!!!!!!!!!!」

ハンドスラッシュを2連射し、接近を阻もうと試みる。しかし体から火花を散らしながらもティガに肉薄するレッドキング。

「タアッ！！」

殴り掛かってくるレッドキングの両腕を両手で押さえ、その固い表皮に覆われた胴体に当て身を喰らわせ後ろへと押し戻す。そしてよろけている間に

「ヘアッ！トアッ！！チャア!!!!!!!!!!」

とワンツーパンチに一回転しながらの裏拳パンチを浴びせるティガ。

「グギャオオオオ——ン！！！」

と咆哮しながら少しずつ後退していくレッドキング。

「チャッ！チャアッ！！テュアッ！！！チュアッ！！！」

そんなレッドキングの脚部に左右一発ずつローキックを加え、さらに細長い首の左右にチョップを叩き込み確実に戦闘能力を削っていく。

「グギャオオオオオ——ン！グギャオオオオオ——ン！！！！！！！」

ティガの的確かつ強力な攻撃を受け、レッドキングはそのあまりの苦痛に咆哮しながら後退することしかできない。しかしティガが正拳突きを決めた直後にできた隙を突いてティガの側頭部に尻尾を叩き付ける。

「テアッ！！！」

ティガは堪らず吹き飛ばされビルに背中から突っ込んでしまった。

「おい、氷川。何があったんだ？」

「氷川君。どういふことが説明してくれない？」

葦原と小沢の問いかけに

「アンノウンを操っていた黒ずくめの青年が津上さんの前に現れて今回の未確認生命体出現に関する重要なことを語ったそうです。何者かが世界征服を狙っているのだとか…」

と答える氷川。それを聞いて2人は息を呑む。沈黙がGトレーラー内を支配する。もうそろそろ到着するであろうと考えていたその時、急ブレーキと共にトレーラーが停車する。

「小沢さんっ！！！」

尾室が車外を映すモニターを指差したまま凍りついている。そのモニターに全身黒タイツの男達がトレーラーを包囲している映像が映っていたからだ。

「葦原君！氷川君！」

「了解！」

「わかった！」

氷川はG3-Xを装着している間に葦原は一人後部ハッチから車外へと飛び出した。

「周辺住民の避難は完了しました！！」

制服警官からの報告を受けて自ら怪獣から距離を取るべく覆面パトカーに乗り込む一団達。

「あの巨人が何者かしらんがあいつが足止めしてくれたおかげで助かったな」

と誰にともなく呟く杉田に桜井と一条が頷く。すると無線機から

『百里基地から自衛隊の戦闘機が怪獣を攻撃すべく出撃した模様！直ちに退避せよ！！』

と驚愕の指示が出された。自衛隊は災害出動で内閣総理大臣の出動命令なしで百里基地より対地攻撃が可能なF-4EJ改を出撃させたのだ。避難誘導を行っていた警官達も退避し始めた。

「テヤッ！！！！」

「グギヤオオオオ——ン！！！！！」

立ち上がり構えなおしたティガに接近戦を挑んだレッドキングは強力なパンチを放つ。パンチを受けて怯みながらも果敢に反撃を試みるティガはパンチを両腕で受け止め膝蹴りをきめるが効果があまりなく逆に殴り飛ばされてしまう。

「タアアアアアッ！！！！！！！」

地面に倒れ込んだティガをキックと尻尾で痛めつけるレッドキング。立ち上がるうとする度に攻撃され地面に叩き付けられるティガ。とうとう胸部のカラータイマーが赤く点滅し始める。

ピコン…ピコン…ピコン…

地面を転がり何とかレッドキングから距離を取ったティガは攻撃を仕掛けようとして凍りつく。ビルの中に取り残されている男性を見つけ、それと同時にティガの鋭敏な聴覚は超音速で接近しつつある航空機の爆音を拾っていた。

「ン——、トアアッ！！！」

両腕を交差させてから前方に広げて光線、ハンドシューターを照射しレッドキングを吹き飛ばす。さらに

「ハッ、ハッ、ハッ！！！」

ハンドスラッシュを三連射し、立ち上がったレッドキングを更に押し戻す。

「グギヤオオオオ——ン！！！！」

怒涛の光線攻撃に激怒したレッドキングが咆哮したがそれに応えることなくビルを護るように立ちながら空を見上げた。そして

キュ——ン

という甲高い音が響き渡り、ティガとレッドキングは街ごと爆弾の爆風に包まれた。煙が晴れるとそこには立ち上がるうともかくレッドキングと着弾の瞬間にパワータイプへと変身しウルトラシールドを張ることでダメージを軽減したティガがいた。ビルの中に取り残されていた男性をテレポーターシヨン能力で戦闘地域外にテレポーターする。

「チャッ!」

構えるティガに爆弾で受けたダメージを引きずりつつも立ち上がり襲い掛かるレッドキング。レッドキングの突進を側転で回避し、後ろに回り込むと

「ハアアアア——ッ!!!テヤアッ!!!!!」

レッドキングの尻尾を掴みレッドキングの抵抗にてこずりつつもそのまま力で押し切り、ジャイアントスイングを炸裂させレッドキングを投げ飛ばす。

「グギヤオオオオオ——ン!!!!!!!」

という悲鳴のような鳴き声と共にビルに頭から突っ込んだレッドキングはふらつきながらも立ち上がりティガへと一歩ずつ近づいていく。

「テアッ!ハッ!ハッ!!!ハッ!!!トアッ!!!チエアッ!!!」

ティガは立ち上がるのもやっとなレッドキングにパンチやキックをこれでもかというほど連続で叩き込み、レッドキングをもはや立たまま動けない状況に追い込む。

ピコン・ピコン・ピコン・ピコン…

体力の限界に近付きつつあるティガのカラータイマーの点滅の間隔がかなり短くなっている。レッドキングから距離を取り

「ハアアアアアッ！トヤッ！！！」

両腕を左右から上にあげ両腕にエネルギーを溜め、デラシウム光流をレッドキングに向かって放った。デラシウム光流の直撃を受けたレッドキングは

「グギヤアア——ッ！！！！！」

という最後の咆哮と共に木端微塵になった。

ピコンピコンピコンピコン…

それを見届け大空へと飛び立つティガ。しかしティガはデラシウム交流を放つのに力を使い果たしてしまい東京の上空で消滅してしまう。

「目標が急に消えた…！？」

ティガが消えるのを直接目撃した航空自衛隊のパイロットはそれこそ無線の呼びかけにしばらく返事ができないほど驚いたらしい。

「イーツ！」

「イーツ！！！」

謎の奇声を発しながらGトレーラーを包囲している黒タイツ男達に一人立ち向かう葦原は男達の他にも蟹と蝙蝠と人間を足して3で割ったような怪人やシルクハットを被ったアリ人間が包囲網の中にい

ることに気づく。

「こいつら一体…」

と呟く葦原に一斉に襲い掛かろうと身構えたその時、

ブオオオオオオオオオオオオ

という爆音と共に銀色のバイクに乗った若い男が乱入してくる。ヘルメットのバイザーの奥にある素顔を見て葦原は

「津上か…!!」

と呟く。そんな葦原を見て

「お久しぶりです、葦原さん」

と周りの男達の殺気に構わず笑顔を向ける津上。2人は久々の再開に綻びかけた顔を引き締め、ポーズを取りながら

「「変身!」」

と叫ぶ。それと同時に2人は光に包まれ仮面ライダーアギト・グランドフォームと仮面ライダーギルスへと変身を遂げた。

「おい!生存者がいるぞ!!」

「はやく救急車を呼べ!!」

怪獣が消滅したのを確認し、生物兵器や化学兵器対策が専門の特殊部隊と現場に戻った一条達はそこで意識を失って倒れている一人の青年を発見し保護した。そして偶然にも風谷真魚が入院している病院に搬送されたのだった。

**襲撃**

**(どくろ怪獣レッドキング登場)(後書き)**

次回予告

津上・葦原・氷川が時空侵略者たちと戦っている間、入院を余儀なくされた辻野。そこで辻野は五代と一条、風谷真魚の3人に会おう。

次回、『出会い』

乞う、ご期待ください

## 出会い（前書き）

更新が遅くなつてすみません！！  
ご意見、ご感想を心よりお待ちしております！

## 出会い

「ハッ！」

「ラアアアアアアアアアアッ！！！」

群がってくる黒タイツの男達（彼らが別の世界から送り込まれたシヨッカーという世界征服を狙う組織の下級戦闘員であることを知らない）を叩きのめし蟹と蝙蝠と人間を足して3で割ったようなバケモノ（ゲルシヨッカーのガニコウモル）やシルクハットを被ったアリと人間のバケモノ（GOD秘密機関のアリカポネ）に向かって飛び掛かる2人。

ギルスの強烈なパンチを喰らって吹き飛ばされたアリカポネ。ガニコウモルはアギトのパンチを受け止めたものの即座に放たれた前蹴りを受け止めきれず背中からコンクリートの壁に突っ込んだ。

未確認生命体に襲撃されたいらしいバスの生存者である女性に話を聞くべく荒川市民病院に足を踏み入れた一条は受付でその女性のいる病室を訪ねながら辺りを見回し

「五代……か？」

病院の待合室に座っている五代を見てシヨックのあまり凍りつく。そんな凍りついている一条に気づき五代も驚きのあまりに笑顔を見ながら

「一条さん？」

と困惑気味に訊ねる。そして2人は久しぶりの再会を喜んだ。

「・・・ここは？」

意識を取り戻した辻野は着替えさせられた上にベッドに寝かされている現状に戸惑う。すると

「ここは荒川市民病院ですよ」

という女性の優しい声に状態を起こし右横に顔を向けるとそこには頭部に包帯を巻いた大学生くらいの可愛い女性がベッドの上で微笑んでいた。

「そうですか。どうもすみません」

と感謝の言葉を口にしつつベッドから出ようとしたその時、病室の扉が開き灰色のトレンチコートを着た若い男性とカラフルなシャツにジーンズというラフな格好の男性という珍妙な2人組が入ってくる。

「五代さん」

と女性が微笑む中、男は仏頂面を崩さずに

「警察の者です」

と名乗るトレンチコートの男。その男をフォローするように五代と呼ばれたもう一人に男が

「風谷さん、この人は一条さんっていつてすごく優秀な刑事さんなんですよ」

と紹介する。それに構うことなく

「では何があつたのか詳しくお聞かせ願いますか？」

と優しく質問する。それに対し

「私は旅行から帰ってきてバスに乗っていると…」

と何があつたのか話し始める。それに質問をしたり相槌を打ちつつ手帳にメモしていく。それに聞き耳を立てつつ事態を整理する辻野。しかし一条刑事の質問は窓ガラスの割れる音と悲鳴に遮られる。コルト・パイソンをホルスターから抜きつつ

「絶対にこの部屋から出ないように!!」

とだけ言つて病室から出ていく。そして鳴り響く銃声。銃声が鳴るのを聞いて

「ここにいてください!!」

と言つて五代も病室を出ていってしまう。辻野はベッドの横にある籠の中に折りたたまれて入っている服から黒光りするガッツハイパーガンを取り出し布団の下に隠した。

「ゾザゲ、クウガ!!」

と吼えながら病院の待合室を血の海に変えたのは以前、日本社会を恐怖に陥れた未確認生命体のうちの一人、バッタのような見た目の未確認生命体第6号ズ・バザー・バだ。

「第6号がどうして!?!」

死んだはずの敵を見て動揺するも即座に銃を構え連射する一条。未確認生命体を射殺できたはずの神経断裂弾が通用しない。それでもまだ生き残っている人達が逃げる時間を稼ぐべく連射する。ズ・バザー・バは銃弾を避けることすらせず一条へと近づいていく。ジリジリと後退するものの後ろは壁で追い詰められてしまう。首を掴まれ

「グッ…! ううつ…!!」

もがき苦しむ一条。だがズ・バザー・バは横っ腹に蹴りを入れられ建物の外へ弾き飛ばされてしまう。

「大丈夫ですか、一条さん!?!」

咳をしつつ見上げるとそこには五代が立っていた。

「五代!」

もうクウガではない五代に未確認生命体を倒す力はない。それでもズ・バザー・バへと向かっていく五代を止めるべくそう一条は叫ぶ

が五代は振り返り一条に向かってサムズアップのポーズを決めるとズ・バザー・バに向き直り腰に両手をあてる。

「そんな…バカな！」

一条は驚きのあまり叫んでしまったのも無理がない。なぜなら両手を腰に当てた瞬間、五代の腰に銀色に輝くクウガのベルトが現れたからだ。両腕を左右に動かし

「変身！」

と叫ぶ。すると五代は未確認生命体第4号、仮面ライダークウガへと変身を遂げた。

「ハッ！ハッハッハアッ！！」

「ウラアアッ！！ラアアアッ！！！！」

ガニコウモルのローキックを膝で受け止め、体にパンチを浴びせるアギト。ギルスはアリカポネに飛び掛かり両前腕部の巨大な鉤爪ギルスクロウで引き裂く。そんな2人後ろから戦闘員が襲い掛かる。人海戦術で押さえつけられそうになるが

ピキーンピキーンピキーン

という独特の発砲音と共に戦闘員たちの体が爆ぜる。振り向くとそこにはGM-01を構えたG3-Xが立っていた。

「こいつらは任せてください！」

と言ってそのまま戦闘員達を殴り、蹴り、駆逐していく氷川。ガニコウモルの巨大なハサミをチョップで破壊し、前蹴りで吹き飛ばすアギト。回し蹴り、後ろ蹴りと華麗に極め、アリカポネを投げ飛ばすギルス。しかし彼らが立ち上がると同時に灰色のオーロラが現れる。このオーロラが敵を呼び寄せると知っていた葦原は驚いている津上に向かって

「気をつける！敵が出てくる！！」

と注意する。そして灰色のオーロラから現れる人影。

「そんなっ！！」

戦闘員たちを殲滅し終えた氷川がそいつを見て叫ぶ。それは金色がメタリックブラックに変わり、赤い瞳は闇よりも黒い暗黒色となっている色違いのアギトだった。

「ッ……！！！」

思わぬ敵の出現に津上も動揺を隠せない。そして色違いのアギトはいきなり3人に襲い掛かった。

五代達が1階で戦っていた頃、辻野も病室の入り口でいきなり襲掛かってきた黒タイツ軍団と銃撃戦を繰り広げていた。

「イイイイイイイッ！！！！」

「イ——ッ！！！！」

「一体どれだけいるんだ？」

パシユン、パシユン、パシユン…

ハイパーガンを連射して倒していくものの次から次へと現れてきりがない。弾切れになったカートリッジをエジェクトして別のカートリッジを装填していると別の何かが近づいてくる音が聞こえる。ハイパーガンを構えながら廊下を見るとそこには見たこともない顔全体が巨大な口のバケモノ（ネオショッカーのクチュウレイ）がこちらに向かって歩いてくる。

「風谷さん、僕が時間を稼ぎます！その間に逃げてください！！」

パシユン、パシユン、パシユン…

そう言つてハイパーガンを化け物に向けて連射する辻野。赤色の光弾を体に浴びて多少怯みつつも近づいてくる化け物。多少よろけながらも階段にたどり着き1階に下りていくのを見届けた後、ジャケットのポケットからスパークレンスを抜こうとするが

スドン、ズドン

という重い銃声が廊下に木霊する。振り返るとそこには拳銃を構えた一条がいた。1階をクウガに任せた一条が風谷を避難させるべく来たのだ。

「何をやってる！早く逃げろ！！」

風谷を背中中で庇いつつクチユウレイに向かって神経断裂弾を連射する。弾丸はクチユウレイの体に命中するもののけ反る以外の効果は見られない。しかも他の階にいたと思われる全身黒タイツの男達に3人は取り囲まれてしまう。

「もう逃げられないぞ！」

自分の勝利を確信し優越感を滲ませたクチユウレイの言葉を聞いて齒をギシらせるしかない一条。そんな一条に辻野はハイパーガンを投げ渡し

「雑魚敵なら1発で倒せる光線銃です。風谷さんの事を頼みます」

と一条に言いながらスパークレンスを取り出す。スパークレンスを見た瞬間、瞬間的に赤・青紫・銀の3色の巨人の姿が脳裏によぎる。謎のフラッシュバック現象が起き戸惑う風谷。だがそんな彼女に気づくことなく一条は

「何を言っている！」

と言うが長年の刑事としての経験から彼が本気であることを読み取り愛用の拳銃をホルスターにしまい代わりにハイパーガンを構える。そして辻野はスパークレンスを胸元で掲げた。

ピカアアアアアアン

という音と共に放たれた強烈な輝きに包まれる辻野。一条と風谷はもちろんのこと、クチユウレイも戦闘員思わず目を覆う。そして輝

きが収まるとそこにはウルトラマンティガが立っていた。

「チャッ！」

「ハアッ！！」

「グヴオッ！！！！」

ローキック、ハイキックにワンツーパーンチ。肉弾戦を主体としたマイティフォームの攻撃を受けて怯むズ・バザー・バ。屋内での戦闘なので自慢のジャンプ力を十分に活かしきることができない。だがズ・バザー・バは割れた窓から病院の外に逃げ出してしまう。自分に有利な状況であることを自覚しているらしく、こちらを振り返り挑発してくる。五代は揉み合っていた際に外れた階段の手すりを掴み、青いドラゴンフォームに変身。それと同時に手すりにはドラゴンロッドへと変化する。

「ハッ！！！！！！」

ジャンプして距離を取ろうとするズ・バザー・バに空中で追いつきそのまま必殺技であるスプラッシュドラゴンを叩き込もうとするが逆にキックを受けて

「うわあああああっ！！！！！！！」

地面に墜落してしまうクウガだった。

G3-Xとギルスが他の2体の相手をしている間に黒アギトに戦いを挑むアギト。

「ハッ！ハッ！！」

アギトはパンチを放つが全て受け流し逆にその体に膝蹴りを見舞う黒アギト。強烈な一撃を受けてアギトは吹き飛ばされてしまう。

「ハッ、ハッ！ガアッ！！」

立ち上がるうともかくアギトに近づいていくのを目にしたG3-Xはアリカポネを逮捕術を応用した一本背負いで投げ飛ばした後、黒アギトにパンチやキックを見舞うも全く効果がなく逆に殴り飛ばされ、壁に叩き付けられる。

「ラアアアアッ！！！！」

ガニコウモルと戦っていたギルスも後ろから飛び掛かるが黒アギトは瞬時にクロスホーンを解放、振り返りざまにギルスの顔面にライダーパンチを極める。そのまま音もなく地面に沈むギルス。ダメージを引きずりつつも立ち上がったアギトは両手をベルトの横の部分に当てて、バーニングフォームへと変身し殴り掛かる。

「ハアアアアアアアアッ！！！！！！！！」

「ゴフッ！！」

その変化に驚いたらしい黒アギトは反応が遅れバーニングフォームの炎を纏わせたバーニングライダーパンチの直撃をを喰らってしまった

う。もがき苦しみながらもまたしても現れた灰色のオーロラの中に逃げ込もうとする黒アギト。それを阻止するべく

「フッ！！！」

G3-XがGX-05にGM-01を接続しロケット弾をノズルに装填したGXランチャーを黒アギトに向かって撃ち込むが、30トンの破壊力を持つ弾頭は黒アギトを護るべく弾道上に割って入ったガニコウモルに命中し、その体を木端微塵にする。黒アギトを追おうとしたアギトもアリカポネに行く手を阻まれる。

「ハアッ！！！」

殴り掛かるがその身軽な動きを前に空振りを強いられるアギトはG3-XがGX-05で牽制している間に左手をベルトに添え、ストームフォームへと変身する。ベルトから薙刀であるストームハルバードを取り出し構える。アリカポネはその素早さを武器に攻撃を仕掛けるも全て躲かれてしまう。フォームチェンジによって速力が上がったことに気づき距離を取り直すアリカポネ。アギトはストームハルバードを回転させ突風を巻き起こす。それに耐えきれなくなり襲い掛かってきたアリカポネの攻撃を躲し、真横を通り過ぎようとした瞬間、

「ハッ！」

その体を切り裂き、

「ハアッ！！！」

背後で振り返ったアリカポネの体に反対側の刃を突き立てる。ハル

バードブレイクを受けたアリカポネは断末魔を上げることすらなく大爆発を起こした。

「葦原さん！」

ライダーパンチを顔面に受けた葦原に駆け寄り、助け起こしているとGトレーラーから小沢が下りてきて叫ぶ。

「大変よ！荒川市民病院が無数の未確認生命体に襲われているらしいわー！」

それを聞いて津上と氷川、そして意識を取り戻した葦原は顔を見合わせた。

自分が東京駅で戦い、東京に現れた巨大怪獣を倒した巨人が立っていることに愕然とする一条。風谷はフラッシュバックに現れた巨人が目の前にいることにさほど驚きを感じていない。戦闘員たちの注意がティガに向いた隙にハイパーガンで戦闘員を射殺し包囲網から抜け出す一条と風谷。

「ハイッ！！！！」

「チュアッ！！！！」

急に現れた新たな敵に飛び掛かる戦闘員達。だが彼らは高速でスピンの回転して、敵を蹴散らすティガトルネードによって一瞬で返り討ちにされてしまう。それを見て不利だとクチュウレイは巨大な歯を取り外すとティガに向かって投げつける。ティガにあたると同時に

爆発する歯。避けることができず火花を散らしながら倒れるティガ。その隙に人魂になって飛び去ろうとするが、

「テヤッ！」

「ギヤアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

間一髪で放たれたハンドスラッシュをその背中に受けて窓から地面に転落してしまう。その後を追うべくティガも窓から飛び降りた。

「グッ…ウワッ！！！！」

以前対峙した時よりもスピードが増しているズ・バザー・バに苦戦するクウガ。ドラゴンロッドをキックで叩きおられてしまい地面を転がって逃げ回るしかないクウガ。防御力の低いドラゴンフォームの装甲はズ・バザー・バの度重なる執拗な攻撃によって既に傷だらけになっている。

「ゾンデギゾバ、ドゾレザクウガ！！！！」

そのまま得意の蹴りでフィニッシュに持ち込もうとするズ・バザー・バ。だがそれは彼の頭上からクチュウレイが落ちてきたことよって阻まれる。クチュウレイの下敷きになるズ・バザー・バ。その間に立ち上がるとうとするがダメージが思いのほか大きく動けない。だがそんなクウガの目の前に綺麗に着地したティガが手をクウガの前に突き出す。

「…ッ！！！！！！」

その手から放たれた金色の光線がクウガの体を包み込み、傷を癒すと同時に体力を回復させる。光線が終わるとティガは立ち上がるのを手助けしようと手を差し伸べる。ティガが何者であるか知らないクウガは戸惑いながらもその手を借りて立ち上がる。クウガとティガはお互いに頷き合い

「テアッ!!!」

「ハッ!!」

と立ち上がったズ・バザー・バとクチユウレイに向かって構えた。

## 出会い（後書き）

### 次回予告

次々に襲い掛かってくる怪人に怪獣。

見えない時空侵略者の目的。

被害だけが拡大し焦燥が募る男達。

そして時空侵略者達は目的のあるものを強奪すべく動き始めた。

次回、『共同戦線』

乞う、ご期待ください！

## 共同戦線（前書き）

更新が遅れてしまい、申し訳ございません!!  
地震や原発やらで更新する余裕がありませんでした・・・  
これからもよろしくお願いします！

## 共同戦線

ズ・バザー・バとクチユウレイに向かって構えるティガとクウガ。

「フーーン、ハッ!!」

「ハアッ!!」

身軽な動きで襲い掛かろうとするズ・バザー・バにティガは両腕を額の前で交差させ振り下ろすことでスカイタイプに変身し対応する。巨大な口で噛み付き攻撃を試みるクチユウレイにクウガはマイティ・フォームへと変身し肉弾戦を挑む。ジャンプで距離を取ろうとするズ・バザー・バに

「タアッ!!!!」

「グオオオオオッ!!!!!!!!」

高く飛び上がりティガスカイキックを浴びせる。ズ・バザー・バは地面に叩き落とされながらも即座に立ち上がり構える。その強靭さに驚きつつもティガは構えた。その一方、クウガはクチユウレイとの接近戦を行っていた。お互いの攻撃を躲しつつパンチやキックを放つ。徐々に肉弾戦に特化したクウガに戦況が傾き始めた。

「ハッ! トリヤッ!!」

前蹴り、ローキック、後ろ蹴りの3連発の後、渾身のパンチを食らいよろめきながら後ずさるクチュウレイ。歯を抜き、投げつけて爆発させることにより間合いを取り直そうとするが

「ハアアッ！！！！」

爆風を突っ切って殴り掛かってきたクウガにダメージを与えることができずそのまま殴り飛ばされた。

「チャッ！！テアッ！！…チュアアアアッ！！！！」

ズ・バザー・バのパンチを受け止め、胸部にチョップを入れて投げ飛ばすティガ。だが受け身を取って上手く着地したズ・バザー・バの強烈な後ろ蹴りを受けて、背中からコンクリートの壁に突っ込んでしまう。そこにゆっくりと近づくズ・バザー・バの体にハンドスラッシュが命中し、ズ・バザー・バはその体から火花を散らしながら反対側へと吹き飛ばされる。

「ゴプアッ！！！！」

「チャッ！！！！」

壁にできた穴から出てきたティガは何とか立ち上がったズ・バザー・バに向かって構えた。

「クッ…エイッ！！！！」

巨大な口で丸呑みにしようとしてくるクチュウレイの口を両手で受け止め、蹴り飛ばすことで距離を取るクウガ。蹴りが効いているように立ってはいるものの攻撃を仕掛けてこようとしな。絶好のチ

ヤンスにクウガは助走し飛び上がり空中で回転し、必殺技である強化マイティーキックを放つ。

「ハアアアアッ！！！！！」

だがクチユウレイが当たる瞬間に人魂へと姿を変えてキックを躲してしまう。

「グハッ！！！！！」

クウガの背後で実体化しパンチやキックを加え、反撃しようとする  
とまた人魂と化して飛び回る。為す術もなく翻弄されるクウガ。

「フンッ！！！」

裏拳で振り向きざまに一撃喰らわせようとするもそれを読んでいた  
クチユウレイは楽にそれを避け、蹴りを放つ。相手が何処にいるか  
つかめないと反撃できない。地面に倒されながらも打開策を練って  
いると

「五代ッ！！！！！」

という一条の声と共に何かが自分の目の前に滑ってくる。それは一  
条が愛用しているコルト・パイソン6インチリボルバーだった。そ  
れを掴み立ち上がると同時にクウガの体が緑色に変わる。視覚、聴  
覚といった感覚神経が極限まで研ぎ澄まされた形態であるペガサス  
フォームだ。リボルバーから変形したペガサスフォームの専用武器  
であるペガサスボウガンを構えながらクチユウレイの気配を探りは  
じめる。そして

「ハアアアアアアッ！！！！！！」

微かな気配を探し当てたクウガは振り返りざまにクチユウレイに向けて必殺技であるペガサスプラストを放った。

「タアッ！！！！」

「フンッ！！！！」

そのころティガはズ・バザー・バは死闘を繰り広げていた。ズ・バザー・バはティガの回し蹴りを受け止め、前蹴りを放つがティガはそれをジャンプで躲し飛び蹴りを浴びせる。ズ・バザー・バはそれを体を横にずらすことで回避し、ティガの側頭部にパンチを入れようとするが逆に回し蹴りを喰らってしまった。一旦、距離を取り直した後、猛スピードで飛び掛かってくるズ・バザー・バ。だが空中での一瞬の隙についてティガは右手をプロテクターに添えた後、

「ヘアアッ！！！！」

ティガフリーザーを放ちズ・バザー・バを凍らせる。そしてそのまま重力に引つ張られ落ちてくるズ・バザー・バに向かって

「ソーッ、トヤッ！！！！」

とランバルト光弾を放った。

「氷川君！津上君、葦原君！」

「了解！」

「わかりました！」

「わかった」

小沢の命令に三者三様の返事を返しながら病院へと向かう3人。だが角を曲がった3人の視界に入ってきて物は半ば廃墟と化した病院と炎の中にたたずむクウガとティガだった。

「だ、第4号……」

「これって……」

「なっ……」

3人ともいつでも攻撃できるように警戒しながらクウガとティガに近づいていく。2人が変身を解いたことを確認し、Gトレーラーへと護送していると一条と風谷が物陰から出てくる。

「あれは……」

「何でこんなところに？」

「真魚ちゃんっ！……！」

「翔一君！？氷川さんに葦原さんまで……！！！」

津上と風谷が抱き合っている間に一条がGトレーラーから降りてきた小沢に話しかける。

「長野県警の一条と申します。あなたが未確認生命体対策班の小沢澄子班長ですね」

「そうだけど…」

長野県警の一条薫の名は未確認生命体事件以来、警視庁内で伝説になっているほど有名でそんな“生ける伝説”と対面し珍しく緊張する小沢だった。

「……………時空侵略!?’……………」

Gトレーラー内に驚きの声が反響する。SFじみた、リアリティーゼロのほら話と言われても仕方がない衝撃の真実を告げられた人々が素っ頓狂な声を上げて驚くのも無理はない。信じると言う方が無理だ。

「バカらしい!信じれるわけねえだろ」

と葦原がぼやく横で

「時空の守護者…。なんかかつこいいですね、小沢さん!」

と感心したかのように小沢に同意を求める尾室。だが小沢はその問いに答えることなく腕を組んで、辻野の事を睨んでいる。氷川と一

糸も厳しい表情を崩さない。辻野が嘘を言っているようには見えないのだがそれは即ち、時空を超える力を持つ謎の敵と実質的には戦争状態にあることを示している。彼らにとってそれが一番の懸案事項だった。3人のそんな悩みをよそに津上と五代、風谷の3人は

「もう一人の僕が別の世界にいるかもしれないかと考えると…」

「翔一君はこの世界でもマイペースなんじゃない」

「厳しいなあ、真魚ちゃん」

「別の世界の俺もみんなの笑顔を守れてるんだろうか…」

と平行世界パラレルワールドが存在することについてはしゃいでいる。だがその賑やかな会話は小沢の真剣な声に止められる。

「で、その時空侵略者って何なのかしら？組織構成、規模、目的、戦術。何一つわかってないの？」

非情に警察官らしい正攻法による質問に辻野はポケットの中からGUTS COMを取り出し今までに遭遇した怪獣や怪人に関する情報とその行動パターンについて画像とスキャンデータを提示しつつ説明する。体長50メートルの化け物が頻出し跋扈する世界。TPC。ドラえもん。ウルトラセブン。そしてウルトラマンティガ。

「ユートピアとでも呼べばいいのかしら…。光線銃が実用化されているなんて…」

話を聞きながら没収されているガッツハイパーガンをいじくる小沢。オーバーテクノロジーの塊に技術者としての血が騒いでいるのである。

ろう小沢に代わって一条が尋問を続ける。

「このアポロガイストと呼称されている人物が黒幕なのか？」

「たぶん違うでしょう。ですが彼は幹部クラスの怪人ですから組織の全容や目的についての情報を握っていると見て間違いないと思います」

簡潔にかつ要点を押さえた辻野の返答を聞いて辻野に好感を抱く一条。するとGUTS COMのデータを閲覧していた五代が

「ここにあるレイビーク星人ってどんな宇宙人だったんですか？」

などと興味本位の質問をしてくる。さらに我慢できなくなった津上が

「光線技ってすごいなあ。変身してやってみて！」

「ちょっと！津上さん！！」

などと氷川の制止を無視してねだり始める。和気藹々とした雰囲気  
に表情を緩める辻野と一条、そして葦原。だがそんな平和なひと時は無線機のスピーカーから流れた通報によって打ち砕かれた。

『警視庁よりG3ユニット。アンノウン出現との入電中。警視庁よりG3ユニット……』

それから2週間が経過し東京は次々に出現する怪人達による攻撃によって大混乱に陥っていた。自衛隊による治安出動が行われたもの

の事態は一向に好転しない。東京は戦場と化していた。

「イイイイ——ッ——!!」

「撃てえええっ!!!!」

ズパパパパパン、パン、パパン

「キシヤアアアアッ!!!!!!」

「北條警部!!」

「怯むなッ!!」

パン、パンパン

「クソッ!!これじゃあキリがない!!」

「ギヤアアアアン!!!!!!」

「ハッ!!!!」

「ラアアアアッ!!!!!!」

「トリヤッ!!」

「テヤッ!!!!」

あちこちで怪人や戦闘員との戦闘が勃発し血で血を洗うような凄惨な戦いが繰り広げられていた。そんな中、白いスーツを着た青年が

人気のない公園のベンチに座り、その光景を遠くから見つめている。その隣には黒いドレスを着た女性が座っている。

「明日、作戦の最終段階を実行に移す。目標は警視庁だ。」

「フツ。リントの鎧がリントに牙を剥くのか」

人を護るべく造られた鎧が人を殺すために使われるということに可笑しさを隠せないらしい女は微かに笑みを浮かべた。

## 共同戦線（後書き）

### 次回予告

怪獣や怪人達の攻撃が首都警備の要である警視庁に向けられた時、男達は時空侵略者達の目的を知ると同時に想像をはるかに超えた戦場に直面する。

次回、『桜田門の戦い』

乞う、ご期待ください

## 桜田門の戦い（前書き）

ご意見、ご感想、お待ちしております！

## 桜田門の戦い

「キヤアアッ！！！！」

「たっ、助けてくれえっ！！！！」

「警視庁から各局！本庁に向かって未確認生命体が多数接近中！大至急……」

パン！パパン！！

町中のあちこちで銃撃戦が繰り広げられている中、時空侵略者たちはとうとう警視庁の庁舎内へと侵攻を開始した。

「『イーツ！！！！』」

町中に響き渡る戦闘員の鳴き声の大合唱。そしてその真ん中にいるのはゴ・ガドル・バ、アポロガイスト、そしてその2人を取り囲むように立っているグロンギのゴ集団とショツカーライダーという豪華なメンバー。張り巡らされた検問やバリケードを次々に突破していく。警察官や自衛官はもちろんのこと一般人も情け容赦なく虐殺されていく。警視庁庁舎はもう目前に迫っていた。

「数が多すぎる！」

ドラゴンロッドで無数の戦闘員達を薙ぎ払っていくドラゴンフォームのクウガ。その横ではストームフォームのアギトがやはり群がってくる戦闘員達を片っ端から倒していつている。

「クッ…!!」

「ラアアアアッ!!!!」

ギルスもバリケードに手をかけて乗り越えようとしてきたネオシヨツカーのサソランジンに必殺技であるギルスヒールクロウを放ち討ち滅ぼす。その頃ティガは道路の反対側で飛び掛かってきたファイヤーコングに向かって

「ハアアアッ、チャアアア——ッ!!!!」

とデラシウム光流を浴びせこれを消滅させる。その後ろにはティガに群がろうと突撃してくる戦闘員達の群衆に向かってGX-05を扇状にフルオートで放ち、屍の山を築いていた。だが彼らは小沢からの無線によって襲撃が囷であることを知らせる。

「大変よ！正反対の方向から敵の大部隊が警視庁に向けて接近してきているわ！！急いで戻ってきて！！！」

「早く戻らないと！」

「何だつて!?!」

「そんな!!」

「でも!!」

急いで警視庁に戻らないと取り返しのつかないことになるのは明白だったがこれも予断を許さぬ状況であるため5人は顔を見合わせる。だが彼らに対しここの警備責任者である北條が

「ここは我々に任せてあなた方は本庁の応援に向かってください」

と強い口調で言い放つ。頷きそれぞれ動き始める5人のヒーロー。だがそのうちの一人であるG3-Xこと氷川誠に北條は

「氷川さん。貴男は私から装着者である権利を奪いました。ですから約束してください。何があってもこの世界を守り抜くと」

と真剣な表情で問いかける。それな対して頷く氷川だった。アギトはスライダーモードに変化したマシントルネイダーに飛び乗り、ティガは空へと舞いあがる。クウガは科警研で保管されていたビートチェイサー2000、ギルスはギルスレイダー、そしてG3-Xはガードチェイサーにそれぞれ飛び乗り警視庁の方へと向かった。

「チツ!!」

一条は警察の特殊部隊である特殊急襲部隊<sup>SAT</sup>を率いて警視庁の前のバリケードでエンドレスに群がってくる戦闘員や怪人に向かって神経断裂弾を撃ちまくっていた。もはや地面が見えないほど戦闘員や怪人の死体が転がっているにもかかわらず敵の猛攻は止みそうない。

「ここは退くしかない!!総員、第3防衛線まで後退!!!」

近づいてきた先頭の頭部にマグナム弾を叩き込みつつ部下に命令を出す一条。だが彼は防衛来を迂回されていたことにはまだ気が付いていなかった。

「キヤアアアッ!!!!!!」

警備中だった婦警は悲鳴を上げることしかできなかった。グシャッ、という生理的嫌悪感を催すような音と共に頭部を粉碎させられてしまう。下水管から侵入してきた敵は外の警察官や自衛官に気が付かれないように目標の部屋へと近づいていく。

『電子資料室』

そこには警視庁のほとんどすべてがコンピューターファイルとして保存されているのだ。戦闘員の一人がその部屋に設置されているコンピューターを稼働させはじめる。パスワードやセキュリティを突破しとあるデータをあらかじめ接続しておいた機械にダウンロードしていく。その資料には

『G4システム』

『EPS能力者連動未来予知装置のデータと実況見分』

という題が書かれていた。ダウンロードが完了したことを確認した戦闘員達は警察官へと変装し部屋を後にした。そのまま喧騒にまぎれて正面エントランスから外に出ようとする戦闘員達。だが彼らは

「動くな！」

という声によって阻まれた。そこにはコルトパイソンを構えた一条が立っていた。

一条が弾薬補充を終えて配置に戻ろうとしたところに4人の警察官が目の前からやってくる。特に注意していたわけでは無かったがふと何か違和感を覚える。そして気が付いた。警棒の長さだ。自分の周りの警察官の者よりも若干長い。一条は即座にホルスターからコルトパイソンを引き抜き、構える。

「動くな！」

だが一条が4人を拘束しようと一歩踏み出した瞬間。大爆発と共に窓と言う窓が碎け爆風で一条は地面に叩き付けられてしまう。その隙に逃げ出そうとする偽警察官に向かって腹這いの姿勢のままで発砲する。

ズドン

最後尾を走っていた戦闘員は神経断裂弾によって心臓を射抜かれ血を吹き出しながら倒れた。さらにもう一発。

ズドン

その前を走っていたもう一人の戦闘員の左肩を貫く。こけながらも拳銃を抜こうとするその戦闘員は受付のデスクの後ろにいた桜井によって射殺された。だが残りの2人は外に逃げ出してしまふ。追い

かけようと立ち上がった一条や他の警察官の行く手を阻む複数の影シヨツカーのヒルゲリラとゲドンのカマキリ獣人だ。逃走する戦闘員を追跡しようとした警察官達を一方的に蹴り殺しにしていく。

「う、うわああああつ！！！！！」

パン、パンパン

「来るなああつ！！！！！！！！！！」

カマキリ獣人が腰を抜かして地面を這いずりながら逃げようとする警察官に向けて一歩踏み出した瞬間、

「トオリヤアアアアアアア——ツ！！！！！」

と言う声と共に何者かが飛び蹴りを放ちカマキリ獣人を建物の外へと吹き飛ばす。その反動を宙返りすることで殺し、一条の目の前に着地したのは仮面ライダーアギトだった。アギトに向かって突進してくるヒルゲリラ。

「フツ、ハツ！」

パンチを受け止め逆に腹部にパンチを叩き込んで後退させるアギト。外に吹き飛ばされたカマキリ獣人が立ち上がるうとする

「ラァアアアアアアアアアッ！！！！！」

という獣じみた咆哮が後ろから聞こえ、くるりと振り返るとそこには仮面ライダーギルスが立っていた。

「敵戦闘員は30メートル先の交差点を左に曲がったところよ!」

「了解!」

小沢からの指示に従いながら敵を追跡するクウガ、G3-X、ティガの3人。しかし彼らは交差点を曲がったところで待ち構えていたクライシス帝国のムンデガンデ、未確認生命体第21号メ・ギイガ・ギ、そしてメフィラス星人が行く手を阻む。クウガとG3-Xがバイクを降りたのを合図に戦闘が始まった。

「ハッ!ハッ!」

トライアクセラーを引き抜き紫色のタイタンフォームへと変身したクウガはタイタンソードを構え、メ・ギイガ・ギに突っ込んでいく。

「クッ、ンアッ!!!」

ムンデガンデに向かって太腿のホルスターからGM-01を引き抜き、発砲しようとしたがムンデガンデが弾き飛ばしてしまった。仕方なくそのまま接近してくるムンデガンデにパンチを浴びせる。

「フワッ!」

「チャッ!」

メフィラス星人の拳を合わせて発射する波状のペアハンド光線を回避したティガはハンドスラッシュを放つが躲かれてしまう。



「！！！」

助走をつけて放たれた2人の必殺技が怪人を打ち砕く。

「ギヤアアアアアツ！！！！！！！！！！」

という断末魔を上げながらヒルゲリラとカマキリ獣人は吹き飛んだ。

クウガとG3-Xに戦闘員の追跡を任せメフィラス星人と対峙する  
ティガ。

「味方がやられたか。ならば！」

「！？」

味方が死ぬのを感じ取ったらしいメフィラス星人は最後の手段と言  
わんばかりに巨大化し、街を手当たり次第破壊し始めたのだ。

## 桜田門の戦い（後書き）

### 次回予告

重要機密を手に逃亡を図る時空侵略者。巨大化したメフィラス星人。ヒーロー達は果たしてこの世界に平和をもたらすことができるのだろうか？

次回、『count zero』

乞う、ご期待ください！

c o u n t   z e r o

（悪質宇宙人メフィラス星人登場）（前書き

更新が遅れてしまい大変申し訳ございません！

これからも更新が不定期になりますがよろしく願います！！

count zero

(悪質宇宙人メフィラス星人登場)

「テアツ!!!」

巨大化したメフィラス星人の前に同じく巨大化して立ちはだかるティガ。

「フ————ンツ!!!!」

ファイティングポーズを取ったティガにも動じることなくメフィラス星人はファイティングポーズを取る。

「フーンツ!!!!」

「チエアツ!!!!」

メフィラス星人の両手から放たれた光線をティガスライサーをぶつけることで相殺したティガは光線が空中でぶつかり爆発したことによって生じた煙を目くらましに

「タアアアアツ!!!!」

メフィラス星人の顔面に飛び蹴りを放つ。吹き飛ばされ背後のビルに背中から倒れ込むがすぐに起き上がり振り返ったティガの腹部に強烈なバツキックを浴びせ、腹を押さえてよろけながら後ずさるティガに情け容赦なくパンチの洗礼を見舞うメフィラス星人。

「チュアアアアアツ!!!!!!」

メフィラス星人の猛攻に耐えきれずティガは火花を散らしながらビル街に頭から突っ込んでしまった。

無公害イオンエンジンの爆音を発しながら戦闘員を追うクウガが乗ったビートチェイサー。その少し後ろをけたたましいサイレンの音を響かせながら人っ子一人いない道路を駆け抜けていくG3-Xとガードチェイサー。G3-Xは両手をバイクから離すと右大腿部のGM-01を右手で引き抜き、両手で戦闘員に向かって構える。

パキイン！

甲高い音と共に放たれた特殊弾は戦闘員の右足を吹き飛ばし、戦闘員はコンクリート製の地面に頭から倒れ込む。その手に握られた監視庁の極秘資料がダウンロードされた機器は宙を舞い道路の脇に立っていた白いスーツの男の足元に落ちた。

「氷川さん…あれは人間じゃありません」

普通の人間よりもはるかに鋭い知覚力を持つクウガこと五代雄介は白いスーツの男が放つ殺気を感じ取り、機械を拾うべく一歩踏み出したG3-Xこと氷川誠を鋭い声で引き留める。ただならない様子に動きを止めクウガの横顔をまじまじと見返すG3-X。

「人間じゃない…？」

とG3-Xが聞き返そうとしたその時、

「アポロチェンジ!!!」

という掛け声と共に白いスーツの男は赤い仮面に白いマントを着け、右手に銃、左手に円形の楯を持ったアポロガイストへと変化する。相手が何者であるかクウガとG3-Xは知らないものの改造人間であり時空侵略者であることは一目でわかった2人は即座に構えた。

「タアツ!トアツ!!!」

メフィラス星人のパンチを受け止めたティガは頭頂部にチョップを決め、怯んだところに前蹴りを叩き込みさらに後退したところに

「ヘアツ!!!」

光を纏わした渾身のパンチを胸部に喰らわし相手を地面に打ち倒す。立ち上がるうともがくメフィラス星人に馬乗りになりパンチやチョップを放つティガであったが蹴り飛ばされ高層ビルに叩き付けられてしまう。ビルの残骸まみれになりながらも立ち上がるとするティガ。しかしそんなティガの頭部をメフィラス星人が掴むと辺りのビルに何度も叩き付ける。

「ン~~~~、チュアツ!!!」

額のクリスタルが赤く輝くと共にティガはパワータイプへと変身し、頭部を鷲掴みにしているメフィラス星人の手を掴み、引き剥がすとそのまま一本背負いのように投げ飛ばす。

「テアアアアツ!!!」

地面に背中から叩き付けられたメフィラス星人であったがそのまま飛び乗ろうとしてきたティガを機敏な動きで躲しビルを楯にしながら立ち上がった。片膝立ちのままファイティングポーズを取るティガ。お互いの動きを牽制し合いながら円を描くように動く両者。そして戦いで損傷を受けたビルがとうとう耐え切れずに崩落したその轟音が響き渡ると同時にティガとメフィラス星人はお互いに向かって走り出す。

「フ——ン!!!!!!!!!!」

「チャアアアアアツ!!!!!!!!!!」

お互いに放ったパンチが肩に当たり火花を散らす。それに構うことなく振り返り相手の攻撃を避けることなくお互いにパンチやキックを打ち込み合うティガとメフィラス星人だった。

Gトレイラーに乗った小沢からの報告を受けた一条とアギト、ギルス3人はそれぞれライチェイサー、マシントルネイダー、ギルスレイダーに飛び乗ってクウガとG3-Xの後を追っていた。しかし、彼らの行く手を阻むのようにお馴染みになった灰色のオーロラが現れ、中からアルティメットフォームのクウガが現れる。しかしその瞳は漆黒の闇よりも深い黒色であった。その体から発せられる禍々しい雰囲気のアギトとギルスはもちろん、特殊な能力を持たない一条も一歩下がる。マシントルネイダーから降りたアギトはベルトの両脇に触れて金色のグランドフォームから銀色と赤色に彩られたシャイニングフォームへと変身し、ギルスも体中から触手や棘を生やしエクシードギルスへと変身する。しかしそれでも相手が発す

る“気”に押されてなかなか攻撃を仕掛けられない2人。

「ラアアアアアッ！！！！！！」

「ハアッ！！！！」

ギルスはその強力なジャンプ力で殴り掛かり、アギトは頭上の虚空からシャイニングカリバーを取り出し斬りかかる。しかし2人の一撃を素手で受け止め2人の体をいとも簡単に投げ飛ばしてしまう。

「グハアアッ！！！！！！」

建物の壁に叩き付けられる2人。深いダメージを受けてなかなか立ち上がれない2人にゆっくりとした足取りで近づいていくクウガ。その瞳は地面に倒れているアギトとギルスを嘲笑うかのように鈍く輝く。しかしその間に神経断裂弾を装填したコルト・パイソンを構えた一条がアギトとギルスを庇うかのように割って入った。

「止まれ！止まらないと撃つぞ！！」

一条の警告を無視して近づいてくるクウガ。一条は顔を顰めながらクウガの力の源である霊石アマダムが設置されているベルトのバックル部分に狙いを定めると引き金を引く。瞳と同じ黒色に染まったバックルに神経断裂弾が吸い込まれていき、火花を散らす。最初の1発を受けたクウガは特に気にすることなく前進しようとしたが次々に放たれた弾丸がピキッという小さな音と共にベルトにひび割れを入れる。

「ッ・・・！？」

「ハアアアアアッ！！！！」

無言ではあるものの一瞬、クウガの注意が一条達から逸れる。その隙にシャイニングカリバーでクウガに斬りかかるアギト。クウガは即座にアギトの事を自然発火能力を用いて火だるまにしようとするが何事も起こらずその体を2本の白く輝く刃で切り裂かれた。

「クッ．．．！！」

「エイッ！！！！」

2人同時殴り掛かったG3-Xとクウガは逆にアポロガイストに殴り飛ばされてしまう。相手に1対2で戦いを挑んでいたもののその圧倒的な強さの前に格の違いというものを見せつけられていた。

「ハアッ！！！！」

ブーメランのように投げられたシールド、ガイストカッターを左大腿部に取り付けられていた特殊電磁警棒であるガードアクセラーで叩き落とし、そのまま殴り掛かるG3-X。マイティフォームに変身したクウガのパンチを右手で受け止め逆にクウガの腹部を蹴り飛ばし吹き飛ばしたアポロガイストはG3-Xの攻撃を避けて至近距離からアポロショットをG3-Xの胸部に撃ち込む。火花を散らしながら宙を舞う氷川の耳に通信機から尾室と小沢の悲鳴が聞こえてくる。

「グハッ！！！！！！」

『胸部装甲、強度が43%に低下！！バッテリー出力、52%にダウン！！！！』

『G3-Xではあいつには勝てないわ！！すぐに離脱しなさい！！』

それでも立ち上がるとするG3-Xにアポロガイストは苦々しげに

「タダの人間風情のくせに・・・。まるであのXライダーを見ているようだ・・・。」

と呻く。そんな小さな呟きを聞きながらも氷川はアポロガイストの左腰に戦闘員が持っていた機械があることを確認し近くに倒れているクウガに向かって

「五代さん・・・お願いしたいことがあります・・・。」

と囁くような声で語りかけた。

「タアッ！！チエアッ！！！！」

「フウウウウウウウ——ン！！！！！！！！」

パワータイプの強力なパンチを連続して腹部に受け、このまま接近戦を続けたら打ち負けると判断したメフィラス星人は距離を取り腕を突き出すことでグリップビームを放つ。マルチタイプよりも動きが鈍いパワータイプであるティガは両手を突き出してウルトラシールドを張ろうとするが間に合わず火花を散らしながら弾き飛ばされ

てしまう。

「トアアツ！タアツ！！！」

「フウウウウウン！！！！！！！」

しかしビームを体で受け止めながら空中で放たれたティガのハンドスラッシュがメフィラス星人の頭部に命中する。受け身を取ること  
でダメージを軽減し、

「フ——ン、チャツ！テヤツ！！！」

立ち上がったティガは両腕を顔の前で交差させ振り払うことでマル  
チタイプへと戻ると右手を前に出し左手で拳を作り胸元に添える  
という独特のファイティングポーズを取る。ハンドスラッシュによ  
つて右目を失いながらも立ち上がり構えるメフィラス星人。メ

「フ——ン！！！！！！！」

フィラス星人は拳を合わせてペアハンド光線をティガに向かって連  
射するがそれを爆転や側転で躲したティガは

「トアツ！！！」

胸のプロテクター部分から発するエネルギーを光の刃に変え、両腕  
を伸ばしてティガスライサーを放つがメフィラス星人はこれをジャ  
ンプすることで回避してしまう。しかしその瞬間にティガはメフィ  
ラス星人と空中で交差するように飛び上がり

「タアアアアアツ！！！！！」

すれ違いざまにウルトラブレーションチョップを放った。

シャイニングスラッシュで体の装甲を切り裂かれても何事もなかったかのように近くに転がっていた棒切れを拾い上げそれを黒色のドラゴンロッドへと変化させる。アギトとクウガはお互いに武器を構えたまま動かない。クウガは手を翳し自然発火能力によってアギトを燃やそうとするがやはり何事も起きない。

「あなたの超能力は私が封印しました．．．」

背後からの声にゆっくりと振り返るクウガ。クウガの背後にいる人物を見たアギトも驚愕する。それはアギトを殲滅するべく暗躍していた黒い服の青年であり、この世界を作り上げた神がそこに立っていた。

「私はアギトの力を．．．人間の無限の可能性を信じてはいませんが、今この究極の闇を倒すことができるのはあなただけです」

その言葉を聞いてシャイニングカリバーを収めたアギトが腰を低くすると同時にクウガの後ろとアギトの前に青白いアギトの紋章が現れる。それを感じてか振り返ろうとしたクウガの体に意識を取り戻したギルスの背面から伸びたギルスステインガーが絡み付き、一条が神経断裂弾をベルトに向かって連射することで動きを封じた。

「ラアアアアアッ！！！！！！！！！！」

「津上さん。今のうちに決めて！」

そしてアギトは空中に浮かび上がった紋章に向かって走り出す。助走で勢いをつけ飛び上がると同時に浮かび上がったアギトの紋章を突き破り、空中で加速しながらクウガに向かって飛んでいく。

「トオオオオリアアアアアアアア——アッ！！！！！！！！！！」

大気の壁を切り裂き雄叫びを挙げながらクウガに向かって一直線に必殺技であるシャイニングライダーキックを放つアギト。当たる瞬間にクウガの体に巻き付けていたギルススティングガーを解き、爆発に備えて一条を庇う。しかしキックを受けたクウガは吹き飛ばされたものの空中に現れた灰色のオーロラの中に消えてしまった。

「甘いっ！！！！」

「グハアッ！！！！！！！！！！」

左腕に装着されていた電磁コンバットナイフGK-06ユニコーンで斬りかかるがガイストカタールで受け止められ殴り飛ばされてしまふG3-X。しかし右肩の装甲をはぎ取られ、右胸部の装甲を削り取られ満身創痍であるにもかかわらず肩で息をし、体中に走る激痛を歯を食いしばって我慢しながら立ち上がる。何度倒しても立ち上がってくるG3-Xに一種の恐怖感を覚えるアポロガイスト。

「止めだっ！！！！！！！！！！」

怖れに似た感情に突き動かされアポロショットを構えるがその銃身

が切断されていた。G K - 0 6 で切断されたことに気がついたアポロガイストはアポロショットを投げ捨てガイストカッターを投擲するがその瞬間、G 3 - X が横飛びで建物の陰に隠れる。ガイストカッターは誰にも命中することなくコンクリートの壁に突き刺さったがアポロガイストはG 3 - X の陰で見えなかったクウガがG M - 0 1 を構えているのを見て凍りつく。クウガの体が赤から緑へと変わりG M - 0 1 はペガサスボウガンへと変化する。

「ナツ．．．！！！！！！」

ペガサスボウガンから放たれた空気の波動は丸腰のアポロガイストを貫いた。吹き飛ばされてぼろ人形のように地面に転がったのを確認したG 3 - X は力尽きて変身が解けた五代に駆け寄り抱き起す。

「大丈夫ですか、五代さん!?」

しかし意識を失わなかった五代は

「氷川さん！後ろ！！」

と叫ぶ。慌てて振り返るとそこにはペガサスボウガンが命中した部分を抑えながらヨロヨロと立ち上がる白いスーツの男の姿があった。近くに落ちていたG M - 0 1 を拾い上げるがそれを撃つ前にその男は背後に現れた灰色のオーロラの中へと消えてしまう。重要なデータが入った機械と共に。

着陸し振り返ったティガの視界にチョップが命中した脇腹を押さえ、地面に蹲っているメフィラス星人の姿が目に入る。必殺技である

ゼペリオン光線を放つべく両腕を腰に持っていくティガだったがメフィラス星人が言った言葉を聞いて動きを止める。

「フツフツフツ．．．。たとえ宇宙警備隊であるウルトラ一族であってもあの方の計画を止めることなどできない。貴様らは滅び去り新たな秩序と平和が世界にもたらされる．．．」

異様に興奮した声で吐かれた言葉に驚きを隠せないティガ。彼が動揺した隙にメフィラス星人はティガに向かって腕を突き出してグリッピースームを放とうとするが溜めの動作を省略したゼペリオン光線にその体を焼かれ消滅した。

「そうですか．．．」

辻野の呟きが水をうつたように静かなGトレーラー内に響き渡る。時空侵略者達の撃退には成功したものの重要な情報が盗まれてしまったのだ。今後の方針について質問するべく氷川が口を開こうとした瞬間、辻野の体が光に包まれ始める。

「そろそろお別れの時間みたいですな．．．」

そうつぶやいた辻野に小沢が

「別の世界へ転移するのね」

と質問し、それに頷くことで肯定の意を示す。

「これ、アフリカのとある部族の魔除けのお守りなんだそうです！持ってってください！」

と五代はカバンの中から奇妙な木製のお面を取り出して辻野に手渡す。それを見た津上は

「何もあげる物が無いんで、これ。氷川さんの分のお弁当です。持つてつちやってください！」

「ちょっと津上さん!？」

と中身がぎつしり詰まったお弁当箱を氷川からの抗議を無視して辻野に渡す。昼飯抜きが確定した氷川に

「諦める氷川」

と無情な言葉をぶつける葦原。そんな様子を小沢と一条、尾室の3人が苦笑いしながら見つめている。そんないつものやり取りを見ながら辻野はこの世界から姿を消した。

## バカと神童とガッツウイング

自宅が先日の戦いで焼失してしまった姫路とその家族が吉井の家に滞在する事になったのだが…

「こんにちは。姫路瑞希の父です」

「初めまして。姫路瑞穂です」

「ひ、姫路さんのお父さんと妹さん？」

折り目正しくキビキビしていて、いかにも仕事ができそうな男性と島田の妹の葉月より少し年上ぐらいの女の子を目にして混乱状態に陥る吉井。しかしここで姫路の父から放たれた

「私の妻だ」

という一言を聞いて凍りつく。あどけない表情に小柄な体躯、朗らかな雰囲気。瑞穂の姿と姫路の父の姿を交互に見やった吉井は1つの結論を出す。

「念のために110番通報を…」

姫路の父は電話に向かって駆けだそうとする吉井の腕を慣れた動きで掴み

「吉井君。私は世間一般でいう“ロリコン”や“幼女趣味”といった人間ではない。なぜなら…」

と空いている左手をポケットに突っ込み中から瑞穂の免許証を取り出す。もしその表記が正しければ瑞穂の年齢は

「41歳：そんなバカな!？」

驚愕の真実を目の当たりにし愕然とする吉井。（胸以外の）見た目と発育具合だけならどう見ても14歳と言われても不思議に思わないくらいのもなのだから彼が驚くのも無理のない話だった。そんな吉井の隣に座っている吉井の姉である玲はいつものような笑顔で

「初めまして。吉井明久の妻の玲です」

と嘘を平然と言つてのける。それを聞いた吉井が

「姉ですからね!？」

と慌てて訂正する。そんな彼が疲れたように見えるのも仕方のないことだ。吉井の抗議に玲はサラッと

「すみませんアキくん。つい流れで」

と言つてのける。どこからツツコミを入れようか吉井が頭を抱えて悩んでいるとポケットの中の携帯電話が着信音を発する。発信相手は先日の戦いの怪我から復帰した学園長だ。

「もしもし。何か用ですか、ババ：学園長」

姫路さんのご両親の前でみつともない真似をするわけにはいかないと口から出かかった言葉を抑えて礼儀正しい言葉で電話に出る。

『まったくこの糞ガキは…。一度この学園の最高権力者が誰か教えないといけないさね!』

と吉井の口調が気に入らない藤堂カヲル学園長は苦々しげに文句を言いつつも必要な事を伝える。

『緊急事態だよ。この街の近くで時空の歪みが観測されたさね。すぐにここに来な!』

一方的に電話を切られたが今はそれを気にしている場合ではない。

「ごめん姫路さん、姉さん。急用ができたから!!!」

姫路一家や玲に謝罪しつつ急いで椅子の背に掛けてあつたジャンパーを手にして玄関から飛び出す吉井だった。

「雄二!?!どうしてここに?」

学園長の部屋に入った吉井はそこにいた野性味あふれる悪友、坂本雄二を見て不思議そうに訊ねる。それに対して坂本は顎で椅子に座っている学園長を指示しながら

「このババアに呼ばれたんだ」

と簡潔に説明する。そんな坂本の説明に学園長は顔を顰めながらも無視して

「文月学園から西方に50キロの地点の上空に時空の裂け目が発生

して、そこから未確認飛行物体が多数出てきているさね」

机の上のパソコンの画面には見たこともないような戦闘機の実機分析データが表示されている。ここから先の言葉を聞くまでもないと部屋を出た吉井と坂本は文月学園の敷地の隣にある廃工場に向かって走り出した。

「ちゃんと操縦できるんだろうな!？」

「雄二こそちゃんと練習してきたの!？」

憎まれ口を叩き合いながらカードキーを通し工場の中に入り、小部屋の中のロッカーを開き、中に入っていたTPCと書かれた青色のパイロットスーツに着替える吉井と坂本。外から爆発音と悲鳴、緊急車両のサイレンと怒号が聞こえ始める。

「急げ、明久!!」

坂本の緊迫した声を聞きながら靴ひもを締め横に置いてあったパイロット用の白いヘルメットを被り、格納庫の方へと歩き出す。この廃工場は辻野が万が一の事に備えて準備しておいた戦闘機用の格納庫なのだ。彼らの視線の先には全長30メートルの赤いラインが入った黒い機体、ガッツウイングEX-エクストラジェットJがその翼を休ませていた。

「俺はβ号に乗り込む。明久はα号だ」

「了解!」

実戦でのガッツウイング2号機の操縦経験を持つ吉井を操縦特性の近いα号に乗せ、自身は吉井よりも高得点をシミュレーターで取る

ことができたβ号に乗り込んだ。

「「発進！！」」

廃工場の天井を突き破って時空の裂け目に向かって飛び立つ吉井と坂本。そんな2人に気がついた敵の戦闘機と思われる飛行物体が急速に近づいてくる。1対3であることをいいことに力任せな攻撃を仕掛けようと試みってくるがそんな攻撃が完璧なコンビネーションを誇る2人に通用するはずがない。

「明久！分離するぞ！！」

「よろしく！！」

連結装置が解除され坂本が操縦するβ号が機首に装備されているハイパーコールドビームと機関砲による先制攻撃を行い猛スピードで敵とすれ違い、そっちに気を取られたもう2機の敵機は吉井が乗ったα号の放ったニードルビームとハイパーメルトガンによって火達磨になる。

「「よっしゃあー！！」」

と2人は喜んだ後で吉井は

「って雄二！！なんで1機しか落とさなかったの！？僕が落とされていたらどうするつもり！？」

と文句を言うがさかもとはいつものように無視し

「気にするな明久。お前が俺の身代わりになるのはいつものことだ。

それより時空の歪みを調査するぞ!!」

と言って黒い雲が渦のようなものを形成し、中から雷を放出している時空の裂け目に向かう。

「雄二のポケエエエツ!!」

吉井はそんな坂本に咆哮しながらその後を追った。

T o B e C o n t i n u e d . . .

バカと神童とガッツウイング（後書き）

次の世界は  
・  
・  
・

「ん？どうかしたのかビリビリ中学生？」

「お姉さま……！！黒子は、黒子はああああ！！！！」

「ラブコメしたいぜい。新しい出会いがほしいにやー!」

## 破られし平穩（前書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

## 破られし平穩

学園都市。東京西部に位置する完全独立教育研究機関であり総人口は230万人。東京都のほか神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る円形の都市でその8割が学生と言う非常に特徴的な街だ。

「ここは・・・?」

窓から見えるあちこちに三枚プロペラの風力発電用の風車が建っている不思議な街並みを見て思わず呟く辻野。今まで青狸ロボット《ドラえもん》や試験召喚システムのように想像を超える代物に遭遇してきて特になんとも思わなかった辻野だったが何故かこの世界に来てから悪寒が止まらないのだ。

「パトロールにでも出よう!」

軽く車でドライブでもしたら悪寒も収まるであろうと思い、格納庫に向かう辻野。

が、彼はこの世界の歪んだ現実を目の当たりにすることになるとは思ってもいなかった。

「ねえ、とうま。お腹空いた!」

「あぁっ!? さっきファミレスで散々食っただろ! 俺の諭吉さんをなんだと思ってるんですか!? 不幸だぁゝゝ!!!!!!」

無駄に凝っている歩行者用信号機を眺めながら信号待ちをしている

間に開けた窓から風と共に聞こえてきた白い修道服を着た少女とハリネズミのような髪型の青年の微笑ましい会話に心を和ませながら車を走らせていると爆発音が響き渡り、車道が爆風と黒煙に包まれる。

「ウワッ！！！」

ブレーキをありったけの力で踏み込み急停車する。対向車線の車や後続車も甲高いブレーキの音を響かせながら止まった。

「おいっ！どうなってんだ！！」

「能力者よ！！<sup>ジャッジメント</sup>風紀委員を呼んで！！！！」

爆風の間聞こえてくる悲鳴と怒号。ダッシュボードの中から黒く光るガッツハイパーガンを取り出し、麻酔弾を装填し車から降りる。土埃のせいで視界が極めて悪い。車のボンネットの後ろから爆発があったところに向けて銃を構えながら目を凝らしていると徐々にあたりの様子が鮮明になっていく。そこには爆発物で吹き飛ばされたと思われる建物の残骸と大量の死傷者だった。

「なっ．．．！！！！」

そしてその惨状の中に一人立っている人影。即座にGUTSCOMでスキャンし、検索するとヒットした。能力者でも魔術師でもない。そう、それは別世界の怪物。

「ハイドロゾアロード．．．！！」

「お姉さま！ここは風紀委員であるワタクシに任せて避難してくださいですの！！いきますわよ、初春！！」

「はい！！佐天さんもここから逃げてください！！！」

「ちょっと、黒子！！」

「初春！？」

緑色の腕章をつけた少女2人が追いかけてやめようとするもう2人の少女に釘を刺した後現場に向かって走り始める。学園都市の警察機構であるジャッジメントの177支部に所属する白井黒子と初春 飾利だ。2人は偶然、友人達と買い物をしていたところ、この爆発騒ぎを目撃したのであった。だが2人は想定外の敵に動きが止まってしまう。

「あれは何なんですの！？」

「エエエツ！！！！」

能力者とはいえ所詮は人間しか相手をしたことがない2人は人外といても間違いではない怪人の相手をするには少し荷が重すぎた。ハイドロゾアロードの落雷攻撃を受けて吹き飛ばされたのだ。直撃は免れたものの碎けたコンクリート片で傷だらけになる。

「クツ！！」

自慢のレポートで初春と共に落雷を回避できたものの傷のせいで動きを封じられてしまう。だが怪人の追撃は別方向から放たれた謎

の光弾によって阻まれる。その方向を見るとそこには奇妙な形の銃を構えた青年が立っていた。

「おいおい！本当に子どもが治安維持業務をやってるなんて！！！」

至極真つ当な意見を呟きながら襲われそうになっている少女2人を助けるべく、ハイドロゾアロードに向かってハイパーガンを連射する辻野。赤色の光弾が着弾するたびに相手の体が爆ぜる。

パシユンパシユンパシユンパシユン・・・

「早くここから逃げろ！！！」

そう叫びながらハイパーガンを連射しハイドロゾアロードをギリギリと後退させていく。さらに車のダッシュボードの中から対人用のプラズマ手榴弾を取り出し安全装置を外してハイドロゾアロードに投げつける。手榴弾の直撃に耐え切れず道路の反対側まで吹っ飛ばされる相手から目を逸らすことなく未だモタモタしている2人に向かって

「早く！！！」

と吼える。よろけながら立ち上がるハイドロゾアロードに向かってさらに銃撃を加える。

「ここは警備員を・・・」  
アンチスキル

「そんな旧式な質量弾でどうにかなる相手じゃないんですよ！！！」

資料の記述が正しければたとえ科学技術が発展していると言っても小火器はやはり旧式な火薬の爆発によって質量のある徹甲弾頭を撃ち込む兵器類が主力である。そんな貧弱な武器で怪人を撃破することとはまず不可能だ。

「きゅ、旧式？アンチスキル警備員の装備は全て最新鋭の・・・」

状況をまだ呑み込めてない2人に思わず怒鳴ろうとしていつの間にか猛スピードで近づいてきていたハイドロゾアロードに首を掴まれ、締め上げられてしまう。

「クアッ・・・。グガッ・・・」

しかし辻野が能力者ではないと判断したハイドロゾアロードは辻野を軽々と投げ飛ばし、2人の少女の方へゆっくりと近づき始めた。

「レベル4とはいえ黒子は風紀委員の端くれ。民間人を置いて退く訳にはいきませんですの。初春は下がっていなさい！！」

「白井さん・・・」

初春を逃し、にじり寄ってくるクラゲ人間(?)と一定の距離を保ちつつ攻撃の機会を窺う白井。太腿のベルトに挿してある金属製の矢を取り出し、相手の体の中へとレポートさせるが何の効果も得られない。

「しかたありませんですの・・・！！」

白井は接近戦を覚悟するもハイドロゾアロードの連続落雷攻撃を受けて建物に叩き付けられてしまう。

「ガッ．．．!!」

気を失った白井に止めを刺すべく近づくハイドロゾアロード。それを止めるべく何とか立ち上がった辻野が走り出そうとした瞬間、金色の光跡がハイドロゾアロードを襲う。辻野が呆然とする中、

「アタシの友達に手を出してんじゃないわよ．．．」

体から青白い放電している少女が押し殺した低い声で呟くのを耳にする。その少女の顔を見て辻野は彼女の正体に気づく。超電磁砲レールガンと呼称される常盤台中学校のエースにして、学園都市に7人しかいないレベル5のうちの一人。

御坂美琴

「アンタが何者が知らないけど．．．絶対に許さない!!」

静かな、それでいて怒りに満ちた声。だが彼女のその怒りの感情は土埃が晴れると共に驚愕へと変わる。御坂の必殺技であるレールガンの直撃を受けても数歩後退しただけだった。

「そんな！なら．．．!!」

そんな動揺を隠して右手を突き出す御坂。その体から青白い放電が放たれそれは突き出された右手に集約されていく。それを見た辻野は

「やめろっ！！！」

と放電攻撃を阻止しようとするがそれは手遅れだった。

「アアアアアアアアアア——ッ！！！！！！」

御坂の咆哮と共に放たれる電撃。その電撃を浴びて大爆発を起こすハイドロゾアロード。しかし爆風の中から現れたのは電撃を受けて体を肥大化させているハイドロゾアロードのグロテスクな姿だった。

「何なのよ！？」

もう一度、電撃を放とうとする御坂に辻野は

「奴は電気エネルギーをエネルギー源として使ってるんだ！！放電攻撃は逆効果だ！！！」

と叫びながら後部座席に置いてあったガッツライフルを取り出し、ハイドロゾアロードの近くで気を失ったままの白井を助けるべく

「クソオオオオオ——ッ！！！！！」

とヤケクソ気味に叫びながら突撃を敢行する。次々に放たれる落雷攻撃を紙一重で躲しながら建物の残骸に寄りかかるようにして倒れている白井に近寄る。肥大化した体では小回りが利かず視界の死角で救助作業をしている辻野と要救助者白井の姿は見えない。

パパン、パパンパパンパパン、パパンパパン

「アンチスキル警備員つてやつか…？」

周りで聞こえる足音と銃声からジャッジメント風紀委員と同じく学園都市の治安維持を担当するアンチスキル警備員だと見当をつける。ハイドロゾアロードの目がそれた内に

「私の友達が！」

「民間人がまだいるなんて聞いてないじゃん！」

「エエッ…！」

などと御坂と会話しながらライフルを連射する女性のアンチスキル警備員の隊員2人のところまで白井を引きずって行こうとする。しかしハイドロゾアロードがなかなか隙を見せないため身動きが取れない。ポケットから救急セットを取り出し、白井に応急処置を施した後で地面に横たえて胸ポケットからスパークレンスを取り出した。

「黒子が……！！！」

「白井さんが……！！！」

「白井さん…！」

制止を振り切って怪物の方へと向かおうとする御坂達を

「ダメって言ったらダメじゃん！」

「死んじゃいますよ！！！」

と警備員スキルアウトの女性隊員が2人がかりで引き留めている。その間にもハイドロゾアロードは触手を振り回し、周りの人間を片っ端から殺し始める。御坂達を引き留めていた2人の女性隊員もライフルを撃ち始めるがハイドロゾアロードは徐々に5人に向かって移動し始める。御坂はせめて初春と佐天を逃すために

「初春さんと佐天さんは逃げて！！」

と言いつつ前に出て右手をポケットの中に突っ込む。そこで御坂は致命的と言っていていいほどの重大な事実に向面した。

（コインがない．．．！！！！！！！！）

今日はシステムスキャンが行われ御坂は大量のコインを消費していて、さつきハイドロゾアロードに撃ち込んだのが最後の1発だったのだ。落雷攻撃を行うべくエネルギーを溜めはじめのハイドロゾアロード。それを微かな磁場変動から感じ取りつつも強気の態度を崩さずハイドロゾアロードを睨み付ける御坂。電気エネルギーを操ることができる御坂なら落雷攻撃を切り抜けることができるかもしれないがそれ以外の4人はまず助からないだろう。

だが落雷が発生する瞬間、彼女達の視界は真っ白な光に包まれた。

「とうま、とうま！！銀色の巨人が現れたよ！！」

ベランダで涼んでいる白い修道服の少女が強烈な光と共に現れた巨人を指差す。

「おい、インデックス？一体、何を寝ぼけたことを言っているんですか？」

とぼやきながらベランダに出てきたハリネズミのような髪型の青年は巨人を見て開いた口が塞がらなくなった。

「何だあれ！？」

「「何なのよアレ！？」」

御坂と佐天涙子の2人は突然目の前に現れた巨人に愕然とし、初春や警備員の隊員達に至っては言葉すら発することができない。

「チュアッ！！！」

科学と魔術が交差する世界。そこに光の巨人、ウルトラマンティガが舞い降りたのであった。

## 破られし平穩（後書き）

### 次回予告

ウルトラマンティガと怪獣の出現に混乱に陥る学園都市。そんな中、時空侵略者の卑劣な計画は着々と進行していた。

次回、『闇の胎動』

乞う、ご期待ください

## 闇の胎動（前書き）

ご意見、ご感想お待ちしております!!

## 闇の胎動

「チュアツ!!」

光の柱が消え去ると共にそこには右手を突き出し左手の拳を金色のラインが入った銀色の胸のプロテクターに添えるという特有のファイティングポーズを取ったウルトラマンティガがいた。いきなり現れた巨人にハイドロゾアロードは狼狽えることなく呻き声を上げながら襲い掛かる。鋭い右パンチを左腕でブロックしたティガは

「ハッ!テアツ!!」

右ストレートをハイドロゾアロードの腹部に1発お見舞いした後、クラゲ型の顔面に流れるような動作で後ろ回り蹴りを喰らわす。数歩よろけながら後退したハイドロゾアロードも負けずと前蹴りを放ちティガを高層ビルの壁面に叩き付けた。

「デュアアアツ!!!!ハアツ!タアツ!!!!」

勢いよく放たれた追い打ちのパンチを躲したティガはつんのめって体勢を崩したハイドロゾアロードの背中にチョップを浴びせた後でその首を掴み投げ飛ばす。さらに飛び乗ろうとするティガを転がって避けたハイドロゾアロードはティガの顎に強烈なアッパーを決めてさらに空きだった腹部に前蹴りを見舞う。

「チャアアアツ!!!!!!」

乗用車などが乗り捨てられた大通りを転がるティガ。立ち上がろう

とするティガにハイドロゾアロードは何度も落雷攻撃を浴びせる。  
体から火花を散らし

「テアアアアッ！！チュアアアアッ！！！！」

と苦痛の叫びあげつつも立ち上がりファイティングポーズを取るティガ。ふとティガは背後から聞こえた音を聞いて振り返る。そこには中学校があり、まだ避難が完了していないらしいショッピングモールから多数の人がバラバラと出てくるのが見える。ズン、という大地を揺るがせる重苦しい音と共にこちらに向かつて歩いてくるハイドロゾアロード。ここから先は一步も通さないという覚悟を胸にティガはもう一度、構えなおした。

「まだ避難が済んでない！？E班とF班は一体何やってんじゃん！？」

巨人と怪物の間で戦闘が行われている場所から遠ざかりつつある移動指揮車両内に警備員アンチスキルの一員である黄泉川 愛穂の怒声が響き渡る。この近くに設置されていた大型ショッピングモールの避難に手間取りまだ多数の民間人が取り残されているらしい。

「すまないけど、ちょっと寄り道するじゃん」

黄泉川の声聞いた御坂、佐天、初春の3人は組み立て式のストレスチャーに寝かされている白井とその腕に巻かれている傷だらけの腕章に目をやり、決然とした表情で

「『手伝います！』」

と告げる。豆鉄砲を喰らったような表情をした黄泉川だったがすぐにいつもの笑顔で頷く。同僚の鉄装 綴里に白井の事を頼むように指示した黄泉川は車が急停車すると同時に御坂達を引き連れてドアから飛び降りた。

「早く避難して!!」

「こちらの非常口からも非難できます!!」

避難誘導を行っている他の警備員アンチスキルに混じって休日の人だかりを出口へと手際よく誘導していく。階段の前で避難路を示していた御坂は私服姿の女子高校生から

「妹を…赤いワンピースに白いカチューシャをした小学生くらいの女の子を見ませんでしたか!？」

と話しかけられる。そんな女の子を見ていない御坂は首を横に振りながらも

「他の避難口から出た可能性があるから…とにかくここから避難して!!」

と妹を探しに行こうとするその女子を無理矢理人ごみの中に押し込む。上の階で避難誘導をしていた初春と警備員アンチスキルの隊員が階段から降りてくるのを見て避難が無事完了したことを悟った御坂は自分も脱出するべく出口に向かって走り出した。

「トヤッ！ヘヤッ！！！」

ハンドスラッシュを2連射して動きが止まったハイドロゾアロードの顔面にパンチを入れ、額にチョップを叩き込んだティガはショッピングモールから人間が避難したのを確認したティガは一気に攻め立てる。

「シエアッ！テユアッ！！デアッ！！ハアッ！ハアッ！ハアッ！」

前蹴り、回し蹴り、後ろ蹴りと強烈なキックを3発きめ、

「タアアッ！！！！！」

怯んだところにパンチを放ちハイドロゾアロードの体を吹き飛ばした。よるよると立ち上がるハイドロゾアロードの頭をティガは両手で掴み膝蹴りを浴びせるがその手を振り払われ、逆に投げ飛ばされてしまう。ビルに頭から突っ込んだティガは体中に散らばったビルの破片を振り落としながら立ち上がり

「ハッ！ハッ！ハッ！トアッ！！！」

とハイドロゾアロードの胸部にパンチを連続して浴びせ、動きが鈍ったところに飛び蹴りを命中させる。ズーンという重苦しい音を発し、体から火花を散らしつつ仰向けに倒れ込んだハイドロゾアロードは近づいてきたティガの足を払った。

御坂がショッピングモールから離れるべく佐天と初春、黄泉川の3人が車に乗り込んだのを確認し自らも車に乗り込もうとしたその時、

彼女の耳に巨人と怪物の戦いの音に今にも掻き消されそうぐらい小さな声が入り込んでくる。たった今出てきたシヨッピングモールに振り返り、耳を澄ます御坂。

「……」

「どうしたんですか御坂さん!？」

と質問してきた佐天を左手で静かにするように合図する。すると微かに声が聞こえてきた。

「…お姉ちゃん…」

女の子の弱々しい声。そう気づいた瞬間、御坂はシヨッピングモールに向かって走り出す。何か大声で叫ぶ初春と佐天に

「まだ中に人がいる!!」

とだけ叫んで人気のないエントランスに飛び込んだ。散乱するガラス片などに注意しながらいつまにも消え入りそうな声を頼りに奥へと進んでいく御坂。

「上ね…!」

声は最上階から聞こえてくるのを確認し、動いていないエスカレーターを駆け上がる。最後の1段を上り、辺りを見回すと誰もいないお店の真ん中で蹲っている小学生くらいの女の子が目に入った。駆け寄ろうと御坂が一步踏み出した瞬間、建物が揺れる。窓の外に目をやるとそこには巨人が地面に引き摺り倒され、馬乗りになった怪物に翻られているのが視界に入りこむ。

「チュワアアアッ！！！！！！」

苦しみの声を上げる巨人を終始無言で殴り続ける怪物。一瞬、怪物の無慈悲な瞳と目線があつた気がした。が気のせいだと言ひ聞かせ、御坂は女の子の有無を言わずに抱きかかえる。茫然としている女の子に構わず地上階に降りようとするが建物が揺れ壁に叩き付けられました。

「グツ」

女の子を抱えたまま立ち上がろうとした御坂は自分の目の前の壁が崩れ、外から丸見えになっていることに気がつく。そして自分の目と鼻の先に怪物の巨大な顔が現れ悲鳴を上げる御坂。電撃の1つでも放ちたいところだが相手が電気エネルギーを吸収できるとなると迂闊に放つことができない。もう駄目だと思い、何故か黒いツンツンした髪の毛の高校生ソノを考える御坂。しかし怪物がその手をこちらに伸ばしかけたその時、

「タアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

という声と共に怪物は建物から引き離されたのだ。見ると巨人が怪物の両足を掴み、ジャイアントスイングの要領で投げ飛ばしていた。ふらつきながら立ち上がった怪物はそれに構わずこちらに向かつて近づいてくる。怪物がこちらに止めるのを阻止するべく真正面から掴みかかった巨人はこちらに視線を向けて頷く。まるで今のうちに逃げろと言わんばかりに。そしてその姿が何故か先程脳裏に浮かんだ高校生と重なる。

「わかつたわ……」

と呟いた御坂は女の子を抱えて再び走り出す。その言葉を理解したらしい巨人はもう1度頷くと自分と取っ組み合いをしている怪物に向き直った。

足を引っかけられこけたティガに馬乗りになったハイドロゾアロードはティガの顔面を容赦なく殴る。

「チュワアアアアッ！！！！！」

という声を上げながら必死に抵抗するティガ。そしてとうとう胸のカラータイマーが青色から赤色へと変わり

ピコン…ピコン…ピコン…

と点滅し始める。深いダメージを負って身動きが取れないティガはピクリとも動けない。ティガが戦闘不能になったことを確認したハイドロゾアロードはティガを殴っていた際に近くの建物内にいるのを見かけた制服姿の女の子を殺そうとするべく膝立ちの状態で前進し始めた。体が言うことを聞かず立ち上がることができないティガは辛うじて首を動かし、ハイドロゾアロードを目線で追う。その先に小学生くらいの女の子を抱きかかえた制服姿の女子中学生が目に入った。

倒れっぱなしになるわけにはいかない。

そう思ったティガは力を振り絞って立ち上がるとハイドロゾアロードの両足を掴みそのまま引き摺り、ジャイアントスイングを極める。

頭からシヨッピングモールとは正反対の位置にある高層ビルに頭から激突したハイドロゾアロードは立ち上がると再び女の子達がいるシヨッピングモールへと進み始めるがその間に割って入ったティガに真正面から押し返される。体から高圧電流を流し邪魔者を排除しようとするがティガは女の子に合図を送りそれが理解されたことを確かめると電流を浴びさせられているにもかかわらずそのまま持ち上げ投げ飛ばす。

ピコン・ピコン・ピコン・

カラータイマーの点滅する間隔が短くなっていることに気がついたティガは相手が立ち上がるうとしている隙に両手を腰に持つていき腰の前で交差するように突き出す。両腕を左右に動かすと両腕の間に青紫色のエネルギーの奔流が現れる。そしてその両腕をL字に組んだ瞬間、ティガの必殺技であるゼペリオン光線が放たれハイドロゾアロードは跡形もなく爆死した。

「…お姉さまに初春？佐天さんまで？」

白井が目を開けるとそこは『<sup>レムナント</sup>残骸』を巡る戦いでお世話になった力エル顔の医者のいる病院の病室だった。自分の顔を心配そうに覗き込んでいた御坂、初春、佐天の3人の顔を見て戸惑う。とりあえず自分が大丈夫であることを説明されたり、御坂にいつものように飛びつこうとして殴られたりするなどいつものような一悶着を終えた白井は

「あの後何があったのですの？」

と3人に訊ねた。その後3人の口から告げられた事実に呆然とする。御坂の命を救い、手から放った光線で怪物を消滅させた赤、青紫、銀の3色の敵か味方かさえない正体不明の巨人。撮影された映像を元に解析が試みられたが学園都市の最先端科学技術を持つてしても出てくる結果は全て支離滅裂という有様であった。

「まるで特撮に出てくるヒーローですわね…」

首を横に振った白井は初春に

「ところで例の事件について何か進展はありませんの？」

と訊ねる。

「例の事件って何なのよ、黒子？」

と不思議そうに質問した御坂。その横で

「白井さん、もしかして第2の幻想御手のことですか!？」  
セカンド・レベルアップ

と勢いよく問いかけた佐天に全員が目線が集中した。

「ローマ正教が学園都市内で拡大しつつありける宗教集団と手を組んだらしけるのよ」

ロンドン、セント聖ジョージ大聖堂。

赤い髪の神父、ステイル・マグヌスは目の前にいる簡素なベージュの修道服を着た黄金の髪の女性。アークヒショップイギリス清教の最大教主である口

ーラ・スチュアートの口から良い放たれた言葉に危うく、口にはくわえていた煙草を落としそうになる。

「何ですって!?!」

自分たちが世界の中心であると信じて疑わない頭の固い強硬派が実権を握っているはずのローマ正教が蔑視している科学サイドの総本山である学園都市内にできた新興宗教集団と手を組んだという情報に驚きを隠せないスタイルは自分が呼ばれた理由を即座に理解した。

「真相の究明とインデックスの護衛ですか」

質問ではなく確認するような口調のスタイルにローラは

「ええ。ローマ正教が手を組むのだから余程特別な何かがあるということよ。情報収集と禁書目録の護衛が主な任務になりけるのよ。でも戦闘になる可能性は無きにしも非ずなのよ」

いつものような笑顔を消した厳しい表情で告げる。自分がとんでもない事件に巻き込まれつつあることを自覚したスタイルの背筋に冷や汗が流れた。

「チャッ!?!」

ハイドロゾアロードと戦うティガの映像を見ているフードを被った男性と女性は停止ボタンを押して画面をポーズさせると

「なぜティガがこの世界にいるのよ!」

と女性の方がキツイ口調で男性に問いかける。その問いに対して男性は余裕の笑みを浮かべたまま

「心配ない。全ては計画通りに進んでいる。世界は闇に包まれる」

と答える。そんな返事に安心したらしい女性が笑い始め、男性もそれにうつられるかのように笑いだす。笑いが収まったところで男性は画面に映っているウルトラマンティガに向かってこう囁くように言った。

「私は言ったはずだ。この星の守護神になるなど君にはおこがましいと」

## 闇の胎動（後書き）

### 次回予告

学園都市で起こる数々の犯罪と怪現象。その両方の対応に追われる御坂達は辻野に出会う。その一方で魔術サイドからの連絡を受けた上条達も動き出した。

次回、『行動開始』

乞う、ご期待ください！

## 行動開始（前書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

## 行動開始

『先日第7学区内で発生した怪物と巨人の戦闘から2日経過しましたが<sup>ジャッジメント</sup><sup>アンチスキル</sup>風紀委員及び警備員からは鋭意捜査中という発表以外行われておらず…』

「お腹空いた…」

ニュースが流れているテレビ画面を見つめていたイギリス清教のシスターであり脳内に10万3000冊の魔導書の記憶を有しているインデックスが呟く。その呟きを聞いてなかったふりをしているのは神の奇跡ですら打ち消す右手を持った不幸な高校生。その名も上条当麻。彼は高校生らしく学校へ行こうと

「昼飯は冷蔵庫の中に入ってるからな！」

とだけ言ってインデックスが無視したなどと言って暴れ出す前に部屋を出ようとする。

「とうま、お腹空いたって言ったんだよ！」

「だから俺は今から学校に……っってお前……痛あ……？」

ガブリという音と共にインデックスが頭にかぶりつき上条は絶叫する。

「とうまはいつもいつも学校や補習で私をほっていく……！」

高校生の上条からしてみれば学校に行くのは当然の事なので理不尽

極まりない仕打ちだったのだが、これもまたいつものことであつた。とにかく学校に行かないといけないので

「ちゃんと留守番してろよ！」

と体中に齒型をつけた痛々しい姿の上条は靴を履いて部屋のドアを開ける。しかし彼はそこで凍り付いて動けなくなってしまった。彼の目の前には身長が2メートル程あり赤色の髪を持ったイギリス清教の不良神父こと、ステイル・マグヌスとへそ出しルックスの自称18歳で大天使と互角に戦うことができる聖人、神裂火織が立っていたのだ。

「緊急事態だ。中に入れてもらおう」

いつものような嫌味の応酬もない。2人のいつもとは違う固い表情を見た上条は頭を抱えて地面に向かって溜め息をつきながらお約束の言葉を呟いた。

「不幸だ……」

「ヒヤッハッハッ……！こいつはスゲー……！これも全て神様のおかげだな……！」

「本当だあ……！こいつはあとで感謝のお祈りにいかねえとな……！」

「グハッ……！ゲホッ……！グゲエッ……！」

乱立するビルとビルの間に来た暗くじめじめとした路地裏で制服

姿高校生が2人の男によってボロボロにされている。2人組の男の内1人は強力な電撃を放ちもう1人は見えない衝撃波を右掌から発射して高校生を痛めつける。

「グアアアアツ！！グヒイツ！！！」

高校生の誰にも届くことのない悲鳴が裏路地に響き渡った。

「「お邪魔します！」」

「お姉さま！？どうしてこのようなところに…？」

「この前の巨人と怪物の戦闘の時の事でちょっと思い出したことがあって…」

「佐天さん！どうしたんですか？」

「いや、なんか面白いことが無いかと思って」

「あのね…ここは風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>の支部でお喋りのための場所じゃないのよ。って聞いているの！？」

放課後に白井と初春の所属している風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>177支部を訪れた御坂と佐天は固法の注意を聞きつつ捜査の進展について質問したのだと思うようには進んでいないらしい。

「第7学区はここの管轄だからね…まあ、今日第22学区の生物化学研究所からこの手の生物の分析や調査のスペシャリストが派遣さ

れてくるって連絡があつたからどうにかなると思っけど」

心配そうに説明する固法を見ながら白井が

「ところでお姉さまが思い出したことって何なんですか？」

と訊ねてくる。さすがに聞き取り調査の際にはいつもの過剰なスキャンシップや悪ふざけも影を潜めている。初春と佐天も興味津々といった表情で御坂の事を見つめる。

「私が電撃を放とうとした時にそれが逆効果だと言って止めようとした人があの時いたの」

それを聞いた初春が

「あゝ！そういうえば白井さん！私達が警備員アンチスキルの応援を呼ぼうとした時にそれを旧式と言いつけてた人がいたじゃないですか！！！」

と思い出したことを大声で口にする。言われてからそのことを思い出した白井は

「そうでしたわ！！その後あつたことのせいですっかり忘れていましたわ。この黒子、一生の不覚！！！」

と言いながら初春と一緒にコンピューターに飛びついた。それを見ていた佐天が固法に

「ところで第2の幻想御手セカンド・レベルアップの方はどうなってるんですか？なんか噂によるとある宗教組織に加入したら強力な能力が使えるようになるとか？」

と訊ねる。都市伝説が好きな佐天はここ数週間、インターネットサイトを漁っていて能力を向上させる何かについての情報を入手していた。もちろんそんな眉唾物の情報を入手はしていても信じていない固法は

「確かにそんな噂があるのは知ってるけど、そんなのデタラメよ！そんな宗教に入っただけで能力が開花するわけじゃない！第一、ここは最先端の科学技術を持つ学園都市なのよ。そんなオカルトがあるわけないでしょ」

とあっさりと否定した。そんなやり取りをしているとドアがノックされる。

「どうぞ」

固法の声を聞いて10代後半から20代前半に見える青年が中に入ってくる。

「失礼します。第22学区の生物科学研究所から調査の支援のために派遣されてきました辻野雄弥です」

だがその顔を見た固法以外の人間全員が辻野を見て

「……………エエエエエ——ッ！！！！！！！！」

と叫んだ。

「やつ、やめてくれえっ！グホエ！！！」

血塗れになった制服姿の男子高校生が路地裏の地面を転げまわる。鼻は無惨にもへし折られ、顔の穴という穴から血が垂れ流されている。もちろん体中も生傷や打撲による内出血で肌の色が変色し肌色の部分がまったく無い。後ずさる青年に構うことなく右手を掲げたまま近づいていくのは制服姿の女子高校生だった。

「我々の神に敬意を示さない者には死の裁きを……」

「やめろ…安奈…！！！グヘエツ！！！ゴファツ！！！ゲフォツ！！！」

体が急に浮かび上がり左右のコンクリート製の壁に叩き付けられる。何回も。何回も。青年の体から滝のように血が出て、青年が意識を失い白目を剥きながら泡を吹いていたとしても。壁に叩き付ける。青年の心臓の鼓動が止まり、生命活動を停止するまで。執拗に。自分の幼馴染を殺すのは辛いことだが我々が信奉する神を否定し、さらに神の事を悪魔呼ばわりしたのだ。そのような愚かな人間の死は当然の結果でしかない。そのように結論づけた少女は死体に見向きすることなくその場から立ち去った。

「その宗教集団が何かをやらかそうとしているからカミジョーさんに手伝えということですか…？ なんとか不幸だ……」

いきなり魔術サイドの問題に足を突っ込むように要請された上条は今に始まったわけでは無い己の不運を嘆いていた。しかし嘆いたからといって目の前の2人が消えることも、2人が持ち込んだ問題が

勝手に解決するわけでもない。さらに

「ローマ正教のやり方は『法の書』事件の時がいい例だ。そんな奴らが学園都市内にあって能力者の信者が多数いると思われる新興宗教集団と手を組んでるんだ。まあ、ローマ正教の魔術師と一緒になつて暴動でも起こしたら被害は前方のヴェントが引き起こした事件が日曜学校でやるお遊戯に思えるほど甚大になるだろうな」

ステイルの言葉に上条もインデックスも二の句が継げない。さらに状況を説明した後は黙ってやり取りを聞いていた神裂が

「近々大きな動きがあるであろうとイギリス清教の上層部は踏んでいます。どのようなものであるかはつきりとはわかっていませんが、以前のローマ正教の動きから推測すると科学サイドとの全面戦争と  
学園都市いうことも…」

と追い討ちをかける。もはや協力する以外手はない。

「で、その新興宗教の名前はなんていうの？何教？？」

上条が質問する前にインデックスが問いかける。

「それはまだ…」

「固有名称は存在してないにゃー」

しかしその質問に答えようとした神裂を遮って放たれた言葉に全員が一斉に玄関の方へと頭を向ける。鍵をかけたはずなのに開け放たれた玄関のドアに寄りかかっているのは義妹に異常な愛情を持っている怪しい隣人、その実態は学園都市とイギリス清教の2重スパイ

である土御門元春だった。

「名前が無いのかよ!？」

ともつともなツツコミを入れる上条。しかし土御門はいつもの何を考えているのかわからない笑みを浮かべながら言った。

「でも奴ら崇めている神様の名前はわかったにゃー。その名前は…」

「『『『キリエル?』』』」

「そうです!」

「何なのよそれ?結局神様に祈って能力をもらってるの?」

「何か胡散臭いですわね」

「へー、そんな神様を信じてる人達が学園都市にいるんですか」

「まったく…子供だましにも程があるわ」

佐天から告げられた噂に出てくる崇めるべき神々の名前を聞いた御坂達はその言葉の意味について首を傾げる。しかし横で怪獣対策用に持ち込んだ高性能コンピューターを立ち上げていた辻野にはその言葉の、そして事態の重大さが衝撃となって心と頭を揺さぶった。

「キリエル…」

「ご存じなんですか!？」

佐天が勢いよく質問してる。ここで「はい」と答えるわけにもいかないので

「僕もそういう噂を聞いたことがあります」

とだけ答える。これからハイドロゾアロードとティガについて説明しないといけないのだが辻野の頭の中は別の事で一杯だった。キリエル人。超古代より地球に潜入していた精神生命体で過去2度にわたって守護神として崇められるべくティガに対して戦いを挑んだということはTPCの隊員であれば誰もが知っていることだ。辻野は怪獣の事について説明しながらどのように捜査を開始するべきか考えていた。

「これは酷いですね…」

「また殺人事件かよ…冗談じゃねえ!」

アンチスキル  
警備員が死体を運び出すのを眺めていた上条と神裂。2人は新興宗教のアジトを捜し出すべく調査を開始していた。ちなみにインデックスはステイルと、土御門は1人でそれぞれ別の場所を調査している。アンチスキル  
警備員に気づかれる前にそつと現場から離れた2人はこのような能力を利用した殺人事件が、新興宗教が広まると共に拡大しているということを確認し何らかの関連性があると確信する。

「それにしてもアジトが本当にあるのでしょうか？」

1日中探し回ったものの何の成果もなく上条と神裂は上条の通学ルートにある公園のベンチに座って休憩していた。すると話し声がだんだん近づいてくる。聞いたことがある声に思わず顔を上げる上条、彼の目の前には同じように殺人事件の様子を見に来た御坂と白井、そして御坂の友人2人と男性1人がいた。

「……あつ」「……」

「うえっ、ビリビリ中学生!？」

「だからあたしには御坂っていう名前があるって言うてんだろっが……!」

青白い放電が走り、太陽が沈み暗くなった公園を明るく照らす。もちろん上条はそれを幻想殺しである右手で防いだ。  
イマジンプレイカー

「あらところで殿方のお隣にいる女性はどちら様なのでしょうっか？」

そんな間にも上条に意地の悪い質問を繰り出す白井。その一方、初春と佐天、そして辻野は御坂の電撃を右手で受け止めた上条に驚き、どう反応していいか分からず固まっている。

「あ、あんた夜の公園で女性と2人きりって…何やってんのよ!!」  
「!」

「いや、だから違っつて!これは…まず電撃をやめろ!!!」

上条と御坂が言い争っているのを聞きつつも素性の知れない腰に日本刀をさした、見るからに怪しい女性である神裂に職務質問をかけようとする白井。しかし彼女が一步踏み出した瞬間、神裂は右手で

刀を握って立ち上がる。身構える白井とそれをいつでも支援できるようゆっくりと後ろに回り込もうとする初春。しかし神裂は御坂と喧嘩を続けていた上条に

「上条…敵が来ます」

と静かに告げる。何の事だかわかっていない御坂達は戸惑い上条は辺りに視線を巡らせる。

「危ない!!」

神裂と同じように敵の気配を感じていた辻野は誰よりも早く暗闇から飛来した青白い衝撃波に気がつき射線上にいた御坂と佐天を庇いながらガッツハイパーガンで反撃する。四方八方から飛来する衝撃波。更に衝撃波だけでなく能力で生み出されたと思われる火球なども飛び交い始める。辻野達は既に包囲されていたのであった。

## 行動開始（後書き）

### 次回予告

かろうじて包囲網から脱出した上条と辻野。しかし御坂と神裂、そしてインデックスが敵に寝返ってしまう。キリエル人達の目的とは何なのか？

次回、『離反』

乞う、ご期待ください！

## 離反（前書き）

少し長くなりそうなので話を2話に分割しました。

ご意見ご感想お待ちしております。

## 離反

「みんな伏せて！！！」

辻野の一言に全員が地面に伏せたり、ベンチの陰に隠れる。頭上を通り過ぎていく青白い衝撃波や電磁ビーム、そして真つ赤に燃える火球。辻野は脇の下のシヨルダーホルスターからガッツハイパーガンを引き抜き、神裂は鞘に納まっている七天七刀を引き抜こうとする。しかし彼らの顔は上条の

「こいつら能力者だ！！」

という怒鳴り声を聞いて動きが止まる。つまり相手は学園都市内のレベル3以上の高レベル能力者でありカリキュラムを受けている未成年の民間人ということだ。麻酔弾をガッツハイパーガンに装填した辻野は火球が飛んできた方向に向かって連射する。しかし外れたらしく火球による攻撃は続く。

「初春！アンチスキル警備員への連絡を急いでくださいな！！」

と初春に指示を出しながら大腿部に巻き付けられたベルトに挟んである金属製の矢を取り出す白井。レベル0の佐天は辻野が防衛しているベンチの陰で電話を掛けている初春と一緒に隠れている。いきなり攻撃を受けたことに怒りを覚えていた御坂、上条、神裂の3人はそれぞれ電磁ビーム、火球、衝撃波が飛んできた方向に向かって走り出した。

「いけません！お姉さま！！！」

白井の制止など動き出した3人の耳には入らない。しかしこれが更に事態を悪化させることとなった。

「ここも異常がないみたいだな……」

と呟くステイルだったがペアを組んでいるインデックスは神裂とペアを組んでいる上条の事が心配らしく携帯電話を見て電話を掛けようとしては我慢するということを繰り返す。その光景を見て上条に対して羨望と殺意を覚えつつもステイルは次の場所に移動しかけたその時、彼らの真後ろで道路を掃除していた掃除ロボットが青白い衝撃波を受けて吹き飛ばされた。

「ああっ！電動使い魔が！！」  
アガシオン

掃除ロボットがバラバラになったのを見て叫ぶインデックスの白い修道服を掴んだステイルは建物の陰に飛び込みながら

「Ash To Ash灰は灰に——塵は塵に《Dust To Dust》——  
一吸血殺しの紅十字《Squeamish Bloody Room

d》——！！」

と術を唱える。彼とて魔術師であり戦闘のプロフェッショナルである。先程から複数の人間から監視、尾行されてるということに気づいていていたため、彼らにばれないように調査をしているように見せつつルーン文字が描かれたカードを戦略的見地から一番襲撃され

やすい場所の周りに先に設置しておいたのだ。彼の右手に現れる炎剣。そしてこちらに向かって走ってきた人影に向かって振るった。

「何で俺達を攻撃してきた！」

目の前に立っている眼鏡を掛けた制服姿の男子中学生に詰問するが、その男はその質問に答えることなく右手を翳し火球を放ってくる。慌ててそれを躲した上条だったが公園内の植物に当たった火球の火が木などに引火し燃え始める。

「くっ…避けたら周りが火の海に」

燃え盛る背後の木々を見た上条は男と同じように右手を翳しながら走り出す。男に向かって真つすぐ。一直線に。こんなことに巻き込まれる我が身の不幸を今更ながら呪いつつ突っ込んでいく。男が自分に向かって放ったスイカ並みの大きさの火球に右手をぶつける。

パキン

割れるような音と共に火球が四散、消滅した。

「なっ…!？」

ここに来て目をカツと見開き、初めて動揺という名の反応を見せる。自分の能力によって作り出された火球が消滅したのだから無理もない。しかしその隙を数多くの魔術師との戦闘を繰り返してきた上条がその隙を見逃すわけがない。

「オラアアアアアアッ！！！！！！！！」

強烈なアッパーが男の顎を捉え、打ち据える。ゴスツという鈍い音と共に宙を舞った男の体は重力に引つ張られてやがて地面に叩き付けられた。近くにいた佐天と手錠を持った初春が駆けつけてくる。

「これを使ってください」

「ああ、どうも」

気を失っている男の両腕を電子ロック付きの高性能手錠で拘束する。しかし次の瞬間

「「キヤアアアアアッ！！！！」」

という御坂と神裂の絶叫が彼女らが戦っているであろう藪の向こう側から聞こえてきた。まさか……。あの2人の身に何かがあったのだろうか？今まで聞いたことが無い2人の尋常じゃない恐怖の籠った悲鳴に一瞬凍りつく上条。隣にいた初春と佐天も顔色が真っ青になつて小刻みに震えている。

「クッ……！！！」

体の強張りを、頭を振ることで振り払い悲鳴が聞こえた方向に向かって上条、初春、佐天の3人は走り出した。

複数の能力者に包囲され四方八方から攻撃を受けたスタイルにはもはやインデックスを護るためにも合流地点である公園に向かって逃

げるといふことしかできなかった。

「クソッ…この街の能力者とやらはどこまでしぶといんだ！」

執念深く追撃してくる能力者達についての個人的な感想を吐き捨てながら走るステイル。片手で担がれているインデックスも後ろからビュンビュンと空気を切り裂きながら飛来する殺意が込められた攻撃に文句ひとつ言わない。

「やっと公園が見えてきた！」

公園の生垣の中に飛び込み、夜闇に紛れることで追っ手をやり過ごした2人は（ロンドンのハイドパーク程ではないにせよ）そこそこ広い公園の中を歩き、先に到着しているはずの上条と神裂の姿探し始める。

「ねえねえ、とうまは本当にここにいるの？」

と辺りを不安げに見回しながらステイルに確認する。確かに辺りは街灯も少なくインデックスが不安に感じるのも無理はないが、それでもインデックスの口からこぼれ出た、とうまという言葉聞いて苦虫を潰したような顔をするステイル。しかし彼がその質問に答えるべく口を開こうとしたその時、公園内に2人の女性の悲鳴が響き渡った。

「短髪！？」

「神裂！？」

それぞれ声の主である人物が誰であるか知っているので2人とも声

が下方方向に向かって走り出す。芝生や石垣を越えた2人の目の前に飛び込んだのは1人の制服姿の女子中学生を目の前にして今まで味わったことない恐怖に直面しているような表情をしたまま固まっている御坂と神裂の姿だった。

「これは…一体!？」

あまりに異様な光景に言葉を失う2人。そして次の瞬間、御坂と神裂の2人が急にインデックスとステイルに襲い掛かってきたのであった。

辻野は強い力にはより大きな責任が伴うという原則を知らないもしくは理解できない人間、特に中学生や高校生のような未成年が強大な力を持つことに不安を覚えていたのだが能力者からの攻撃を受けてその不安は確信へと変わっていた。しかしその一方で、今隣で走っている白井のように己の力に溺れずに力を持つ者としての義務を果たしている人間を見て少し救われたような気がしていた。

「「キヤアアアアアッ!!!!!!」」

と言う悲鳴を聞いた白井が

「お姉さま!!!!」

と取り乱しテレポートしてしまう。このような時に単独行動は禁物なのだが風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>とは言っても所詮は中学生でしかないのだから仕方がないと言えは仕方がなかった。あまりに素人のような白井の行動に呆れつつも悲鳴があった方向に向かって走る辻野。しかしそん

な彼の目の前にステイルが吹き飛ばされて転がってきた。

「大丈夫ですか!？」

肩をゆするも返事がないため脈を図って生きていることを確認した辻野は立ち上がり彼が転がってきた方向に向かって走り出す。後ろから追いついてきた上条の

「おいっ！ステイル、大丈夫か!!!」

という声を聞いて上条と呼ばれる青年の友人であることを理解するが彼の思考はそこまでだった。彼に向かって黒い塊が飛んできて体に直撃したのだ。

「グハッ!!!」

地面に塊と一緒に叩き付けられた辻野はふらつきながらも立ち上がりその塊に触れる。しかしその塊が何であるか気がついたとき、辻野は言葉を失った。それは先程、レポートで御坂のところへ向かったはずの白井だった。服はあちこちが擦り切れたり焼け焦げたりしている。

「お姉…さま…ど…うし…て…」

白井が息絶え絶えに口にした言葉を聞いて体が硬直する。まさか…。彼女の命には別条がないことを確認した辻野は走り出す。頭の中に浮かび上がった疑念が正しくないことを祈りながら木々の向こう側に出るとそこには5人の制服姿の中学生や高校生達がついていた。そしてその真ん中に立っているのは御坂と神裂そして安全ピンだらけの白い修道服を着た少女の3人。

「動くな!!」

ガッツハイパーガンを構えて叫ぶ辻野。ステイルと白井の看病している初春と佐天を置いて後ろから追いついてきた上条は事態が呑み込めず

「おいビリビリ!っていうかインデックスと神裂!!お前らそこで何やってんでよ!!!」

と叫んで彼女らに向かって1歩踏み出す。しかしその瞬間、神裂は2メートル以上の長さの日本刀『七閃』を鞘から引き抜き、御坂の額から尋常じゃない量の電気が放電される。右手を掲げることすらできなかった上条の体は宙を舞い背後の木にぶつかった。隊員養成学校で血反吐を吐きたくなるような訓練を受けてきた辻野でさえ目で追えないほどの早業にガッツハイパーガンを持つ手が震える。

「とうま、とうま。私、これからキリエル様の教えに従うことにしたの」

「キリエル様のおかげでやっと本当の自分に気づいたの。地面に突っ伏したアンタとは違ってね」

「必要悪の教会では得ることができない安らぎと幸せ…まあ、あなたがそれを体感することはないでしょうが…」

収斂し膨れ上がっていく3人の殺意を感じ、蹲っている上条の首根っこを掴み走り出す。3人が何らかの力によって精神を操られていると見て間違いないであろう。しかし悔しいことに今の辻野と上条には撤退以外の選択肢はなかった。

「超電磁砲<sup>レールガン</sup>に聖人、そして禁書目録まで手に入れるとは…さすがですな」

首から十字架の形をしたペンダントを掛け黒い司祭服を着た男性がフードを着た男女に話しかける。それに対して男、イタハシ・ミツ才は笑顔で

「それほどでもありませんよ」

と答え、その隣にいる女、オオヌマ・ケイコは笑顔を浮かべつつも

「で第2段階の方はどうなっているのです？」

と質問する。それに対して司祭服を着た男は

「全て計画通りですよ」

と不気味な笑みを浮かべながら答え、そして自信たっぷりの態度で続けた。

「この術式によって世界はローマ正教とキリエルによって統治される世界へと生まれ変わります。そしてそれを止めることは誰にもできない」



## 離反（後書き）

### 次回予告

事実上誘拐された3人の行方を追う辻野達であつたが捜査は難航する。そんな中、キリエル人を信奉する能力者達による反乱が学園都市内で発生。事態は混迷を深めていく。

次回、『コードレッド』

乞う、ご期待ください！

## コードレッド

「どうするんだよ！！インデックスに御坂、神裂の3人が敵に操られてんだぞ！今すぐ助けに行くに決まってんだろう！！！」

「そうですね！愛しのお姉さまが不埒な輩に惑わされて犯罪行為に手を染めているのですのよ！今すぐ助けに行くべきですわ！！！」

「ですけど白井さんに上条さん…敵のアジトがわからない現状でそれは難しいですよ」

「仮にアジトがわかったとしても敵の戦力がわからないのにいきなり救出作戦なんて自殺行為です。しかも相手は学園都市に7人しかいないレベル5と高度な能力を持つ魔術師？を味方につけているんですよ…しかも本人らが何らかの洗脳状態である以上、たとえ彼らにたどり着いたとしても逆にこちらが攻撃されることになります」

傷を負ったものの幸い軽傷で済んだ白井とステイルを連れて風紀委員177支部に退避した辻野達は今後の動きについて話し合っていたのだが議論は紛糾していた。インデックス達の救出しに行くべきだと上条と白井が叫び、初春と辻野がそれに反対する。両者の意見を聞いていたステイルと佐天そして呼び出された固法の3人は黙って議論の行く末を見守っていた。

「まずは敵の潜伏先の発見と敵戦力の確認が第1です。白井さんと固法さんは風紀委員の資料をあたって第7、第8、第9学区内のアジトになりそうな場所を探してください。初春さんは学園都市内の

データベースから相手を洗脳することが出来る能力者をリストアップして対策方法についても検索してください」

反論できない上条と白井が黙ったのを確認して辻野はテキパキと指示を出す。佐天に向き直った辻野は

「佐天さんはキリエルと呼ばれる奴らについての情報を些細なものでもいいのでリストアップしてください」

とお願いした。するとステイルが

「で、僕達は何をすればいいのかな？」

と辻野に表情は暗いもののいつもの軽い口調で問いかける。それに対して辻野はシールの張られた地図を広げながらこう言った。

「僕達3人はこの地図にある通り最近多発している殺人事件が多発している第7学区と第8学区、第9学区を中心にパトロール活動を行います」

「その殺人事件と今回のキリエル事件とどう関係あるのかにゃー？」

いきなり声がしたので辻野は驚くが上条とステイルは特に驚かずに

「土御門か」

と事も無げに応じる。ホルスターに収まっているガッツハイパーガンに手をやったまま説明を求める視線を上条に送る辻野。その視線に気がついたステイルが彼の事を紹介する。胡散臭げな眼で土御門の事を眺めつつパトロールルートの説明を始めた。

「さあ！キリエルの神々に選ばれし子供達よ！！時は来た！！！」

薄暗い地下に建設された講堂の中には何百人もの制服姿の男女が異様な興奮と熱気に包まれながら壇上にいるフードを被ったイタハシの言葉に聞き入っている。その静けさはまるで嵐の予兆であるかのようだ。

「ここ、学園都市をキリエルの教えの総本山とし全世界をキリエルの神々の力によって救済する日が遂に来たのだ！！！！我々は神の教えを広める先兵として学園都市内の重要施設を制圧、破壊を行う！！！！行け！！！！神に選ばれし子どもらよ！！！！！！！！！！」

「「「おおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」」」

講堂に響き渡った大歓声が地面を揺らし、壁を震わせる。それはこれから学園都市で起きる悪夢の始まりを知らせる狼煙であった。キリエルの教えに心酔している能力者達はそれぞれ指定されたポイントに向かうべく動き始める。

「今日はどこ行くの？」

「第7学区の警備員アンチスキルの弾薬庫……」

「私は第22学区の細菌研究所……」

「いいな……俺なんか風紀委員ジャッジメントの180支部だぜ」

他愛のない会話をしているような口調だが内容は全て自分が何処を襲撃するかについてだ。常盤台中学校に霧が丘女学園、柵川中学など学園都市中の学校の生徒が街中に散らばっていく。破壊といった1つの目的を胸に秘めて。

「にしても本当に色々なお店があるんですね」

シャーロックやデラムでパトロールするわけにはいかず仕方なく通常の4WDジープに乗ってパトロールを行っていた辻野は油断なく視線を辺りに飛ばしながら助手席に座っている上条に話しかける。インデックスの救出に異を唱えたことに対して反感を覚えているらしい上条は

「そうか？」

と素っ気なく返す。記憶がなく学園都市の外についての知識が無いこともその言動に拍車をかけていた。そんなことを知らない辻野は先程の件で嫌われているのであると一人納得して苦笑いする。だが次の瞬間、目の前の建物が轟音と共に目の前のビルが崩れ落ちたのだ。

「「なっ!?!」」

悲鳴と絶叫がビル街に響き渡り、炎と煙が辺り一面を覆い尽くす。ガッツハイパーガンを抜いて車から降りた辻野だったが目の前で行われている破壊行為に驚きを隠せない。制服姿の能力者達が町を破壊しているのだ。続いて助手席から降りてきた上条もその考えすら

しなかった事態を目の当たりにし凍りつく。

「くそっ……！」

上条の右手は確かにありとあらゆる異能の力を打ち消すが四方八方から飛んでくる何十人も能力者の攻撃を防ぎきることなどできない。それでも上条は眼前で行われている虐殺から無辜の学生たちを救うべく走り出した。

「クッ……！！！」

少し遅れながらもガッツハイパーガンに麻酔弾を装填した辻野が上条の後を追うような形で駆ける。バズッ、という鈍い音と共に麻酔弾が体に突き刺さった能力者達は昏睡状態になって地面に倒れていく。

「早くここから逃げろ……！」

飛び交う電撃や衝撃波を右手で消しながら、何が起きたのかわからず呆然と立ち尽くしていた人に向かって叫ぶ上条。道路の反対側では辻野がガッツハイパーガンを撃ちながら避難を呼びかけている。しかし近くに止めてあったジープの無線機から傍受していた警備員アンチスキルの通信を聞いたとき、2人はついに最悪の事態になったことを理解した。

『学園都市内全ての学区の主要施設にて能力者による集団破壊活動が行われている模様！展開中の全要員はコードレッドへと態勢を移行せよ……！』

コードレッド。即ち能力者による反乱に対し、反乱に加担している

と思われる能力者への実弾の発砲を許可する命令だ。辻野と上条は血の気がサツと引き青白くなった顔を見合わせる。しかしこの注意が逸れた一瞬について建物の陰から飛び出てきた男子高校生が超強力な電撃を放った。

「上条さん、あぶない！！！」

「しまった……！！！」

辻野がGUTSの射撃の名手、シンジヨウ隊員でさえ唸るであろう程の速射で高校生に麻酔弾を叩き込んだが電撃は消滅せず真っ直ぐ上条に向かって飛んでいく。右手を出す時間すら与えられなかった上条はとっさに目を瞑る。しかしいつまで経っても衝撃が来ない。硬直した体の神経がバリバリと嫌な音を立てるのを無視してゆっくりと目を開けると倒れた高校生と上条の間に一人の少女が立っていた。見慣れた常盤台女子中学校の制服に身を包んだ少女は振り返ると

「怪我はありませんか、とミサカは問いかけます」

と感情が全くない顔と声で上条に話しかける。御坂御琴にそっくりな少女を見た辻野は呆然としたのもつかの間、ガッツハイパーガンを構えた。

「こいつは御坂妹だ」

「辻野雄弥です。御坂さんの妹さんですか……？」

「はい。私はミサカ10032号です、とミサカは懇切丁寧に自己

紹介します」

一応、比較的安全な場所に避難するということで辻野はジープで風ヤッジメント紀委員177支部に向かいながら後部座席に座っている軍用ゴーグルを額につけた御坂御琴のクローンと自己紹介をしていた。不思議なしゃべり方をする人だと上条が初めに抱いた考えと全く同じ感想を胸に抱きつつあちこちが能力者の反乱によって破壊されている人っ子一人いない街を通り抜ける。

「にしてもなんであんなところにいたんだ？」

という上条の質問に御坂妹が

「あの地区でオリジナルお姉さまの発した攻撃性電磁波を観測したので様子を

……」

と答えようとしたがその台詞を言い切る前に

「RPG!!!」

という辻野の絶叫と甲高いブレーキ音、そして爆発音が響くと同時に天地が逆さまになった。なんと学園都市のセキュリティが麻痺している間にネオショッカーのアリコマンドが侵入していたのだ。そのアリコマンドが放ったRPG（小型携帯ロケット砲）を躲そうとしたためジープは横転したのだ。

「ヘイイー!!!」

パシュン、パシュン

甲高い奇声を発しながら突撃してくるアリコマンドの群れに向かつて赤色の光弾を撃ち込みながら車から這い出た辻野は上条と御坂妹を車の残骸から引っ張り出し

「あと少しで風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>の支部につきます！ここは自分が食い止めますから行ってください！！！」

と叫ぶ。そんなことはできない、とバズーカの爆音に負けない声で怒鳴り返そうとした上条だったがビル陰から次々に湧き出てくるアリコマンドの大群を見て多勢に無勢であることを悟り、御坂妹の手を引っ張って走り出す。いくらお人よしの上条とは言っても自分が辻野の足手纏いになること自覚していた。

「あと少しだ！あの角を曲がれば……」

遠ざかるガッツハイパーガンの発砲音を聞きながら痛む体を鞭打って走る2人。しかし角を曲がると同時に2人の視界に滅茶苦茶に破壊された風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>177支部と大量に押し寄せてくるアリコマンド相手に戦う白井と警備員<sup>アンチスキル</sup>の姿が飛び込んできた。

「なんなんですよ……！この全身タイツの変質者たちは……！？」

と言いながら近づいてくるアリコマンドの体に鉄矢をテレポートで転移させながら叫んでいるのが見える。

「こんなところで一体……」

息を切らせながら追いついてきた辻野も目の前の光景に驚いたよう言葉が途中で途切れてしまう。しかし立ち止まったのもつかの間、

辻野はハイパーガンをアリコマンドに向けて連射しながら走り出した。

『現在、学園都市全域で非常警戒態勢が敷かれています。さらに、第1、2、7、11、19、22学区内にてコードレッドが発令されたということです』

「すべては計画通りだ…」

イタハシ・ミツオとオオヌマ・ケイコは薄暗いアジトの中でテレビ画面に映し出された映像を見ながらほくそ笑む。そこに映っているのは最先端科学技術を駆使した綺麗な街並みではなく文字通り戦場だった。

「これでこの世界は私達の物になるわ…」

テレビのチャンネルをリモコンで変えるとそこには虚空を見つめたまま糸の切れたマリオネットのように椅子に座っている御坂の姿が映し出された。

「すべてはこの小娘に掛かっているのだけど…先程の戦闘を見る限り大丈夫そうね」

「残る懸案はただ1つ…ウルトラマンティガ…」

オオヌマ・ケイコの楽観的な考えに釘を刺すイタハシ・ミツオ。その顔にはいつもの穏やかで不気味な笑みはなく、ティガに対する憎悪に満ちていた。



## コードレッド（後書き）

### 次回予告

誘拐されたインデックス、御坂、神裂の救出するべくキリエル教のアジトを急襲する辻野と上条達。しかし彼らの前に救出対象である御坂とインデックスが立ちふさがった。

次回、『悪魔の逆襲 パート1』

乞う、ご期待ください！

## 悪魔の逆襲 パート1（前書き）

更新が遅れて大変申し訳ありません!!!

受験やら試験やらでコンピューターを開く時間すらないというのが現状です。

更新頻度がかなり低いですがよろしくお願いします。

## 悪魔の逆襲 パート1

「ヘイイー！！！」

「ヘイイー！！！」

辻野達は独特の奇声を発しながら常人を遙かに上回る怪力で襲い掛かってくるアリコマンド相手に苦しい防戦を強いられていた。

バシユン、バシユン

ドスッ、ドゴッ

ガッツハイパーガンの発砲音と上条の拳が肉を穿つ鈍い音が響き渡る。辺り一面にアリコマンドが倒れているがそれでも次から次へと現れる敵を目にして上条が堪らず

「これじゃあキリがねえぞ！！！」

とアリコマンドの顔面に良いフックを叩き込みながら声を張り上げる。

「さすがに…疲れました…わね…」

「こんなに…敵を…倒したのに…」

「体力の…限界に…近づきつつあります…」とミサカは報告します…」

能力の連続使用で疲労が蓄積した白井と固法、そして御坂妹はゼエゼエハアハアと地面に崩れるように座り込みながら肩で息をしていた。しかし、ここで辻野達は困惑することになる。アリコマンドたちは勝利を目前に急に後退を開始したのだ。

「敵が退いていく…」

金属バット片手にアリコマンドに抵抗していた佐天が何があつたのかイマイチわかっていないらしく呆然としながら呟いたその時、猛烈な突風が街中に吹き荒れ、眩い、大気圏外まで貫いているとおもわせるぐらいの光の渦が隣の学区全体を覆い尽くした。

「これは…一体…なんなんだ!？」

これまでに遭遇したことのない現象を目の当たりにして身動き一つ取らずにその光の渦を見上げている辻野。巻き起こる風に飛ばされないように踏ん張りながら上条も

「おいおい…」

と呟きながら辻野の横で愕然と光の渦を凝視していた。誰もが言葉を失う中、御坂妹は目をカッと見開きその光の渦を凝視している。戸惑いと恐怖の入り混じったその表情に気がついた初春が

「あの…大丈夫ですか…?」

と恐る恐る話しかけた。その言葉が聞こえているのかどうか初春には判別できなかったが御坂妹は小さな、それでいて周りにはつきり

と聞こえる声で

「これは…お姉さまオリジナルの発した攻撃性電磁場ですとミサカは…」

と囁く。その言葉を耳にしてギョツと振り返る辻野と上条。その表情に嘘偽りがないと確信した二人は決然とした表情でお互いの顔を見合わせると頷き合い

「「その電磁波の発信源に案内してくれ!!!」」

と同時に叫んだ。

「今そつちに向かってます!エッ…敵のアジトに向かってる…!?!」

助手席で無線機に声を吹き込んでいたレイは聞こえてきた辻野の言葉に驚き、運転席でハンドルを握っていたルイも目を白黒させる。

『今、車で第4学区方面に移動中です!僕のPDI反応を追尾してください!…!』

切羽詰まった辻野の声にレイは

「了解!」

と返事をするのと同時にルイは急ブレーキを掛けながらハンドルを切った。

「すべては計画通りか…」

目の前のモニターに映し出されている機械に繋がれ放電中の御坂の姿を見つめながら感慨深げに呟くイタハシ。今一步のところで失敗してきた人類の神になるうという野望の実現を目の前にしていささかセンチメンタルな気分になっているらしい。

「まだ気を抜く訳にはいかないぞ、イタハシ君」

背後から掛けられた声にイタハシは微笑みながら振り返り、

「よくわかっていますよ、暗闇大使」

と視線の先にいる金と銀の縞で彩られ、腰にBDNと書かれた大きなベルトを巻いた初老の男性に向かって愛想よく返事する。別の時空の組織とはいえども、侮れないレベルの科学力を持つ、貴重な同盟相手である以上、多少の気に入らないことも我慢しなくてはならない。

「あのような小娘があれだけの力を出せるとは…」

改造人間の素体となりうる人間に並みならない興味を示す暗闇大使。しかしそんな会話は建物の外に配置されていたアリコマンドからの切羽詰った通信によって遮られた。

『イタハシ様！暗闇大使様！第2出入り口付近に敵が現れ…ゴブワアッ！！！！』

しかしその通信も鈍い衝撃音と断末魔を残して途切れてしまう。顔

を見合わせることにすらく暗闇大使は配下のアリコマンドとキリエル教に入信した能力者達に向かって

「侵入者を確認した！発見次第抹殺しろッ！！！」

と声を張り上げ、通信機を切った後で苦々しげに

「この世界には憎き仮面ライダーでもないはず。ならば一体何者だ…」

と呟く。イタハシはそんな暗闇大使に背を向けて部屋を静かに出た。侵入者の正体であろうウルトラマンティガに対する憎しみと闘争心を燃やししながら。

チユイイイイン

電子音と共にガッツライフルから迸ったビームの直撃を受けて、物陰から飛び掛かってきたアリコマンドの体が空中で一瞬硬直した後、だらんと弛緩し地面に頭から倒れる。それに構うことなく地下通路を進んでいく辻野と上条。レイとルイとは地下道の入り口で合流したのだが急に白目を剥き、体を痙攣させ、泡を吹きながら倒れた御坂妹の介抱と護衛の為に入り口で待機することになったのだ。

「一体、御坂さんの妹の身に何が…」

とガッツハイパーガンを片手に辺りを警戒しながら心配そうに呟く上条。ガッツライフルを構えながら通路の角を曲がった辻野は通路が二手に分かれているのを見て

「ここから二手に分かれましょう。上条さんは右を、僕は左を行います」

と言って別れた。そのまま薄暗い通路を進んでいるとだだっ広いドームのような場所に出る辻野。彼が中に足を踏み入れると同時に通路の扉が閉まり始める。そのことに気がつき慌てて振り返った辻野であつたが時すでに遅し。ズン、という重い金属音と共に分厚い金属製のドアが通路をふさいでしまった。

「しまった……!!」

そしてガッツライフルでドアを破壊しようとしたその時、

「君を待っていたのだよ、ウルトラマンティガ!」

という広いドームに反響した男の声が聞こえてきた。ライブラリー映像と音声資料で幾度となく耳にした男の声を聞いて体が凍りつく。

『さすがGUTSの隊長だ。ユーモアがある』

『キリエル人に敬意を表してください』

『君を待っていたのだよ、ウルトラマンティガ!』

声紋一致。キリエル人からの使者として地獄から送り込まれてきた死者、イタハシ・ミツオ。首筋に冷や汗が流れるのを感じながら振り返るとドームの反対側に余裕の笑みを浮かべたイタハシが立っていた。

「キリエル人……!？」

この時空に存在しない、いや、存在してはならない敵と相対し学園都市に来てから感じていた嫌な予感が確信へと変わる。驚きのあまり言葉を発せないのを見て、せせら笑ったイタハシは気取った口調で辻野に向かって声を張り上げた。

「私は君に言っただけだ！守護神になるにはおこがましいと！だが君は未だにそのことが理解できていないらしい！」

怪訝そうな顔をする辻野に構わずイタハシは続ける。

「君が人類の守護神なんてなるにはおこがましいということを理解させてあげよう！もし君が人類の守護神であるというのなら彼女を救って見せるがいい……！」

と宣言すると同時に消え去った。ガッツライフルを構えたまま周囲に油断なく目を走らせる辻野。しかし

バチッ

と背後で発せられた放電音とともに放たれた電磁ビームが辻野の体を捉え、ドームの壁へと叩き付けた。

「ゴホッ！ゴホッ……！」

咳ごみ、口から血を吐きながら立ち上がった辻野は、生気が全く感じられない目と感情が全くない顔を向けつつ全身から放電している御坂を睨みつける。御坂はそんな辻野に構うことなく親指の上のコインをピン、と弾いた。

「こいつら…洗脳されるのにもほどがあるだろう！てか何で俺がこんな戦いに巻き込まれてんだ！！不幸ダアアアアアッ！！！」

と愚痴を叫びながら不退転の決意を持ってゾンビのように襲い掛かってくる能力者達をパンチで沈め、物陰から飛び掛かってくるアリコマンドなる全身タイツ人間にハイパーガンをお見舞いする上条。辺りに充満した肉が焼け焦げる不快な臭いに顔を顰めていると

フウッ

という一陣の風が通路を吹き抜けると同時に周囲の雰囲気が一変する。背中にたくさんの小さな虫が這いまわるような感覚に襲われた上条はガッツハイパーガンを左手に持ち直し右手に拳を作る。魔力的な何かに遭遇した時に感じる気持ち悪い感覚に、いやな汗が毛穴からドツと噴き出すのを感じながら進んでいると

「どうしてとうまは邪魔ばかりするのかな…」

というインデックスの幼げな声が壁に反響音を残しながら聞こえていた。予測していたことだが改めてインデックスと戦わなければならぬという現実には怒りと悲しみ、そしてそれ以外選択肢がない自分に対する情けなさが湧きあがる。

「インデックス…聞いてくれ…！」

姿の見えないインデックスに向かって言葉を発した瞬間、

「　　。　　、　　」

「ッ……！！！！」

人の頭では理解できない歌のような何かが聞こえると同時にいきなり空中に現れた魔方阵が輝き、爆発した。上条を抹殺すべく放たれた魔法だったがそれは上条があらかじめ構えていた右手によって消滅する。

「聞けよ、インデックス……！！！！」

自分の後方10メートルあたりにインデックスがいることに気がついた上条はインデックスが正気に戻ることを祈って大声で叫ぶが彼女は返事の代わりに直径1メートルほどのレーザー兵器と形容できる『ドラゴン・プレス竜王の殺息』を一切の躊躇なく放った。

「御坂さ……」

辻野が目覚まさせようと話しかけるが御坂はそれに構わず、麻醉弾の軌道を体中に張り巡らした電磁フィールドで捻じ曲げ、砂鉄で形成された剣で斬りかかってくる。ブーンという音に戦慄しながら転げまわることで回避するしかない辻野。

「……ッ！！！！」

真横にあった鉄板が豆腐のようにあっさりと切断されるのを目の当たりにし、最悪の場合ミサカの命を奪わなければならないということについて真剣に考え始める。しかし彼は御坂の顔を見て凍りつい

た。なぜなら御坂の無表情な顔の頬を虚ろな瞳から零れた一筋の涙がつたつていくのを見たのだ。さらに御坂が微かに口を開き、体から発せられる放電音に掻き消されてしまうぐらいの小さな声で囁いた言葉を聞いて辻野は今度こそ言葉を失った。

「じ…ろ…し…て…」

## 悪魔の逆襲 パート1（後書き）

### 次回予告

御坂とインデックス相手に厳しい戦いを強いられる辻野と上条。卑劣な手段を使うキリエル人に2人の怒りが爆発する。果たして2人は時空侵略者の魔の手から御坂とインデックスを、そして学園都市を救うことができるのであろうか？

次回、『悪魔の逆襲 パート2』

乞う、ご期待ください！

## 悪魔の逆襲 パート2

バチバチバチッ

放電攻撃を行うために電力をチャージし始めたらしく、右手を辻野に向かって突き出した御坂の体から発せられる放電と放電音はどんどん大きくなりつつあった。しかし辻野はガッツハイパーガンを御坂に向かって構えているものの動くことができない。

殺して

確かに彼女はそう言った。キリエル人の洗脳をありったけの精神力で辛うじて打ち破り、涙を流しながら言った。自分がこれ以上他者を傷つけないために。キリエル人に操られていても、まだ御坂御琴という名の人格が彼女の中に存在しているのだ。きっと彼女は恐怖に震え、どうすることもできないまま、誰かを傷つけてしまうのではないかと不安におののいているのであろう。

殺して

その言葉が辻野の心を縛り付け、ガッツハイパーガンの引き金に掛かった人差し指を凍らせる。この中学生の少女は自分の頼んでいることを正確に理解している。他者の為に自分の命を犠牲にするという行為。GUTSやウルトラ警備隊、TPCに地球防衛軍などの隊員達でさえ躊躇する、非常に困難な決断を彼女はしたのだ。御坂の背後でイタハシが実体化し、

「ハハハッ！私は言ったはずだ！君は救世主になるにはおこがまし

いと。君がもし自分が救世主だと言っのなら彼女を救ってみたまえ  
！」

と嘲笑してくる。そんなイタハシに一瞥した後、辻野は覚悟を決めた。自分は救世主ではないし、崇め奉られるべき神でもない。自分は光であり人であるのだ。自分が今、人としてできることを為す。悲壮な決意を固めた目の前の少女を救うべく辻野は腰のポーチから針の無い注射器である皮下注射器を取り出した。

ピキッ…ピキピキッ…グキヤッ…メキヤッ…

「グアアアアアアアア————ッ！！！！！」

ドラゴン・プレス  
竜王の殺息の直撃を右手で受け止めた上条。しかし彼が記憶喪失となつて原因であるインデックスとの戦闘の時と同じようにそのあまりの破壊力に耐え切れなくなった右手がえげつない音を発し始める。あまりの激痛に上条は獣のような咆哮を上げた。しかし攻撃は止まない。

このままじゃ…やられる…！！

右手ごと吹き飛ばされてしまう。そんな危機感が脳裏によぎった上条は無理を承知でインデックスを正気に返らせるべく、激痛に耐えながら語り掛けた。

「人が…殺し合う…こんな…こんな哀しい現実が…お前の求めている…理想なのかよ…！！！！それじゃあ…俺達は何のために…」

しかし上条の言葉を遮ってインデックスが喋りはじめる。

「とうまは本当に救いようがない程のバカ『だね…』」

しかしその語尾が壊れかけたラジオの音声のように別の声が重なっているように聞こえた上条はカツと目を見開き、五感を研ぎ澄ましてビームの輝きの向こう側に微かに見えるインデックスに意識を集中させた。

「だからこの前とうまに言ったのに…『聞いてなかったんだ…』」

インデックスは気がついていないようだがエコーはどんどん酷くなっていく。そして上条は確信を抱く。

この声は…別人の声だ…!!

バリバリバチバチバチッ…

「クウッ…グッ…!!」

雷の最大電圧である10億ボルトに匹敵する電撃を体で受け止めた辻野の体中から激痛という名の悲鳴が発せられる。しかしそれを歯を食いしばって耐え、苦痛に満ちた呻き声を上げながらゆっくりとミサカに向かって一歩踏み出した。

「や…め…て…」

「ハッハッハッ！ウルトラマンティガに変身していない矮小で愚か

な人間でしかない君に一体何ができると言っただね!!」

イタハシに嘲りの言葉を浴びせられ、御坂には泣いて懇願されながらも徐々に御坂に近づいていく。常人なら死ぬか発狂するであろう激痛に意識が消し飛びそうになりながらもジリジリと距離を詰める。

「人間は…人間は…弱くなんかない!」

そう叫んだ辻野は御坂の動脈に皮下注射器を押し当て、薬品を注入した。  
ハイボスプレー

別の女性らしき声がインデックスの声と被さっているということに確信を持った上条は右手に添えていた左手をポケットの中に突っ込み、ガッツハイパーガンを取り出した。インデックスに気づかれないうちに目だけを動かして周囲に視線を走らせる。すると御坂の背後の闇が辺りを覆う闇よりも暗いことに気がつき、目を凝らした。

「この世界に救いなんてない。もうこの世界に存在しない優しい幻想なんて信じないことにしたの…」

必死に上条が逆転の糸口を探している間にもインデックスの独白は続く。しかし途方もない魔力が発散されているせいか声の分裂が拡大していつているがインデックスが気付いた様子はない。

「キリエルの神」に従う以外人間が救われることは不可能なんだよ…」

闇をじっと観察していた上条はビームによって発生した陽炎を通し

てインデックスの背後の暗闇を見たとき、それがフードつきローブを身に着けた人間の形であることを理解した。

「『だから…死んで…』」

ビキツ…メキヤツ…

インデックスに声をかぶせていた何者かの最後通牒が耳に届くと同時に右手が限界に近づきつつあることを悟った上条はガッツハイパーガンを構え

「<sup>てめえ</sup>キリエルが何者かは知らねえ。だがそんな世界は誰も望んじやいないんだ！それでもそんな現実<sup>せかい</sup>が良いってなら…まずはその幻想<sup>りそう</sup>をぶち殺す！！」

とこの世界に災厄を持ち込んだ全ての存在に怒りに満ちた宣戦布告を叩き付け、引き金を引いた。

「ここは…？」

御坂は気がつくとも一面真っ白の空間に一人で立っていた。記憶を手繰り寄せた御坂は自分に電撃を浴びながら近づいてきた辻野に薬品を注入されたことを思い出すがそこから先の事が思い出せない。だが次の瞬間、御坂は夜のように薄暗い人っ子一人いないビル街、正確に言えば廃墟になったビル街、の真ん中に立っていた。

「何なのよこれ…」

いきなりの事態に混乱する御坂。だが御坂は夜なのではなく真っ黒な雲によって日光が遮られているということに気がつく。さらに空を学園都市に出てきた巨人並みの大きさの怪鳥が口からビームを吐きながら通り過ぎ、ビームが当たった近くのビルが崩落した。

「一体どうなっているのよ…!？」

ハルマゲドン  
世界終末戦争の様相を呈している光景に呆然とするしかない。ここが一体どこなのか。一体なぜここにいいのか。すると真横を誰かが通り過ぎた。その顔を見て御坂は驚きを隠せない。TPCと書かれた制服を着た辻野だったのだ。

これって…まさか辻野さんの記憶の中…ってこと？

木山春生を気絶させた時のように他人の記憶を見ていることに気がつく。御坂が辻野の後を追うとそこは地下シェルターだった。多くの市民が床に座ったり蹲ったりしている。そんな中、辻野は知り合いらしい別のTPCと書かれた制服の男性に近づき壁に埋め込まれている画面を覗き込んだので御坂も一緒になって覗き込む。

「シュアッ!」

海上で何本もの触手を持った巨大なカタツムリ相手に巨人が戦いを挑んでいる映像が映し出されていた。

「ゴッドアイズの映像か…」

「ウルトラマンティガ!」

「ティガ!!!」

ティガと呼ばれた巨人が自分よりもはるかに大きな化け物にビームを放った後、殴り掛かった。事情を何も知らない御坂ですら圧倒的に不利だとわかる戦い。固唾を飲んで見守っていると

「ここまでにしておきましょう…」

と背後から声を掛けられる。振り返るとそこにはベージュ色のフードつきローブを着た白髪の老女、ユザレが立っていた。

「これは…一体どういうこと!？」

ティガが石造になり画面を指差しながら問いかける御坂にユザレは静かに答える。

「大いなる闇の支配者が世界を暗黒に塗りつぶそうとしているのです…」

「闇の支配者…」

「ティガ!」

「『ティガ!』!」

光に包まれていく子供達。溢れんばかりの黄金の輝きが大空へと解き放たれ、ティガの胸元へと集まっていく。しかしそこで周囲の光景が消え去り、また真っ白な空間へと戻っていた。まだ目の前に立っているユザレは

「すべてが暗黒に閉ざされたとしても光は必ず貴方の中にある…」。

そして光は希望を失わない者に必ず応える…必ず…」

と謎かけのような言葉を残して光の中に溶け込んでいく。

「どういうことよ！？つてか、あなたの名前すら知らないんですけど！？」

意味が理解できず叫ぶ御坂。しかしユザレはその質問に答えることなく消え去り、御坂の意識も光に包まれた。

「貴様アアアアアア——ッ！！！！！！！！！」

インデックスが意識を失って、糸の切れた人形のように地面に倒れ込むと共にビームの直撃を受けた闇が実体帯びて、キリエルの巫女であるオオヌマの姿へと変わった。形勢逆転かと思われたがオオヌマとその背後に現れた青白い影、キリエル人の衝撃波による猛攻を受けた上条は窮地に立たされていた。

「私に向かってよくも撃ってくれたわね、この糞ガキ！！」

「グアッ…！ゴハアッ…！！」

四方八方から放たれた衝撃波が上条を襲い、思いつきり壁に叩き付けられる。しかし上条は何度倒れてもオオヌマを睨み付けた目線を逸らすことなく立ち上がり続けた。そんな上条の姿を見て

「惨めねえ。その上、弱々しい…」

と嘲笑う。しかし上条は諦めず、降り注ぐ衝撃波に耐える。

「ヘッ…そんな奴の導きなんか願い下げだぜ…ッ！！！」

上条が目一杯の嫌味を言うと同時に衝撃波が上条を襲った。暴風の中で舞う木の葉のように吹き飛ばされた上条を見たオオヌマは勝利を確信したらしくゆっくりと上条に歩み寄っていく。

「口だけは達者なガキだね…。その無駄口を叩く前に殺<sup>や</sup>つてあげるわ…」

そして上条の右手を踏みつけて上条の頭に向かって手を翳す。右手が封じられ上条の命ももはやこれまでかと思われたその時。シュンッ、という音と共にインデックスの消え、

「一吸血殺しの紅十字《Squeamish Bloody Road》！」

という力ある言葉と同時にオオヌマを巨大な2本の炎剣が水平に襲った。上条と辻野が戦っている間に洗脳が解けたという合図を受けた白井が人質状態であるインデックスとミサ力を瞬間移動で助け出し、ルーン文字が書かれた紙を周囲に配置して終えたスタイルが突入してきたのだ。

「よくもあの子をここまで愚弄してくれたものだ…」

スタイルの静かなる怒りに満ちた声と共に炎剣が振るわれる。その刃を、体勢を崩しながらも両手からの衝撃波で弾き返したオオヌマだったが彼女は自分の足元にいたはずの人間が立ち上がっていることに気がつくのが一瞬遅れ、上条はその一瞬を逃さなかった。

ドゴッ！！

という壮絶な激突音。上条の右手が恐怖と驚愕によつて歪んだ才又マの顔を捉え、その肉に拳が突き刺さる。だがここで上条とステイルは想像を絶するものを目撃することとなった。なんと右手が当たっている部分から才又マの体が崩壊し始めたのだ。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア  
ツ!!!!!!!!」

耳をつんざくような絶叫が室内に木霊し、ボトボトという腐った血肉が床に落ちる音に上条達は目を背けるしかない。するとオオ又マの体の中から青白い影がするりと飛び出し通路の向こうへと飛び去っていく。

「待てッ!!!」

上条とステイルはそれを追うべく駆けだした。

「フツ…御坂さんの身柄を奪われたのは些か予想外ですが…まあ、計画に支障はありません」

「なんだと！」

そんな言葉を聞いた辻野は途方もない電撃を喰らって常人なら動けないであろう体を鞭打って立ち上がる。イタハシは不敵な笑みを浮かべたまま右手を辻野に向ける。衝撃波が飛んでくるといふことを



という野獣のような咆哮と共にイタハシが禍々しい紫色の光に包まれ巨大化する瞬間を見た辻野はすかさずスパークレンスを掲げた。

## 悪魔の逆襲 パート2（後書き）

### 次回予告

遂にその巨大で醜い姿を現したキリエルにウルトラマンティガは敢然と立ち向かっていく。だがその裏では科学・魔術両サイドを破滅に導こうとする計画が進んでいた。

次回、『悪魔の逆襲 パート3』

乞う、ご期待ください！

## 悪魔の逆襲 パート3

（炎魔戦士キリエロイド？登場）

「キイイイイイリキリキリキリ！！」

学園都市を焼き尽くしてしまうかのような禍々しい灼熱の炎に包まれながら目の前に現れた巨大な化け物、キリエロイド。何とか脱出してきた上条とステイル、そして待機していたレイとルイそして白井たちも慄然としながらそのおぞましい、まさに悪魔のようなという形容詞の似合う怪物を見上げる。

「何、アレ……？」

という御坂とインデックスを介抱しながら呟かれた佐天の言葉にレイが

「あれは……キリエル人の戦闘形態、キリエロイド……しかしあんなの見たこと無い……」

と答える。それもそのはずであつた。過去に出現したキリエロイド、キリエロイド？とは違い泣き顔でも笑い顔でもない、まるで怒っているかのような顔をしているのだ。まるで3度にわたる“布教”活動の失敗に対する憤怒を現しているかのように……。

「第3のキリエロイド……」  
キリエロイド？

ルイの恐怖に満ちた言葉を聞いた上条が説明を求めて口を開いた瞬間、

キュピイイイイイイン

という甲高い音と共に夜の闇を切り裂くような光の柱が現れ、それが収まるとそこにはウルトラマンティガが立っていた。

「テアッ！」

「キリイッ！」

ファイティングポーズを取ったティガとキリエロイド？は弧を描くように動き、お互いに距離を保ちながら攻撃する隙を見計らう。そして近くのビルが崩落し、辺りに轟音が響き渡ったのを合図に2者はお互いに向かって走り出した。

「キリエル人…中世頃に地球に現れはじめた異次元に生息していると思われる実体を持たない精神生命体です」

レイのジープで戦闘域から遠ざかりつつあった上条達はレイのキリエルに関する説明に耳を傾けていた。

「自分たちのことを神や悪魔などと思いこませ、人々が崇拝するように仕向けていたのですが自分が崇拝されなくなりつつあった中、ウルトラマンティガの出現を機に自分達を再び神として崇めるよう要求してきました…」

「自分たちのことを神として認めるよう迫った、か……。なんて奴らだ」

ステイルの呟く横で御坂を膝枕していた白井が

「ウルトラマンティガって何なんですか？」

と問いかけた。

「チャッ！！」

「キリイイイツ！！」

「タアアアアッ！！！！」

キリエロイド？が放った右パンチを左腕でブロックしたティガは空いている右手でキリエロイド？に向かってパンチを放つ。しかしそれは躲され、キリエロイド？の前蹴りを腹部に受けてビルに背中から激突してしまった。地面でもがいているティガに近づき

「キリイイイイツ！！！！」

と踵落としを浴びせるがティガは紙一重のタイミングで地面を転がることによって躲し、コンクリートに覆われた地面が踵落としによって陥没した。

「ハッ！」

その隙を突かれティガに足を払われたキリエロイド？は体勢を崩し、地面に叩き付けられる。そのまま追い討ちを掛けようとしたティガであっただが

「キリキリイッ」

「テヤアアアッ！！！」

キリエロイド？が放った火炎放射「獄炎弾」の直撃を受けて火花を散らしながら吹き飛ばされた。足の反動だけを使って即座に起き上がったキリエロイド？は辛うじて立ち上がったティガに連続パンチを浴びせ、ふらついたところにさらに後ろ回し蹴りを見舞う。マルチタイプでは力負けするとティガは額のティガクリスタルの前で両腕を交差、振り下ろしパワータイプへとタイプチェンジしてそのまま猛攻を続けようとしたキリエロイド？を迎え撃った。

「ハアッ！！！」

キリエロイド？の両腕を掴んだティガ。しかし新たなキリエロイド？の力はキリエロイド？ですら凌駕していた。振りほどかれそうになったティガはがら空きの胸部に渾身の頭突き、ウルトラダイナムパットを叩き込んだ。

「ウルトラマンティガ：東北地方にあるティガの地にて発見された3体の石像。そのうちの1つが復活した巨人の事です」

運転席と助手席の間に設置されたモニターに映し出されたティガの姿に釘付けになる一同。ゴルザやメルバといった怪獣に果敢に挑む

ティガ。それを見ていた上条は

「こんな巨人や怪獣が暴れてるなんて聞いたことが無えぞ」

という疑問を投げかける。我が意を得たりという表情をした白井達の死線が例に集中するがその問いに対する答えは意外なところから発せられた。

「そりゃあそうよ…。この世界で起きた出来事じゃあないんだから」

「お姉さま!？」

いつの間にか意識を取り戻していた御坂から放たれた言葉にその場にいた全員が驚く。どさくさに紛れて抱き着こうとする白井を取り押さえながら御坂は続けた。

「あなたたちは平行世界から来たんでしょ。闇の支配者。そして光の巨人…」

体が大丈夫かどうか聞くことすら忘れた上条が

「御坂…お前どうしてそんなことを…」

と訊ねると御坂は窓から見えるウルトラマンティガを見ながら答えた。

「辻野さんの記憶を見たのよ…」

「チュアアアアッ！！！」

側頭部にハイキックを喰らいビルに叩き付けられるティガ。しかし体勢を建て直し、キリエロイドの胸部にパンチを浴びせ、少し怯んだところに前蹴りを喰らわせる。そして相手の動きが止まった一瞬を見逃さず、ティガはすかさずウルトラ踵落としをキリエロイド？の頭頂部に極めた。

「タアッ！！！」

「キリイイイッ！！！」

「ハッ！？トウアアアッ！！！」

強力な一撃を受け、地面に頭から倒れ込んだキリエロイド？であったが足腰のバネを利用し、そのままティガに飛び掛かり押し倒すとそのまま馬乗りになってティガを殴打し始めた。

「テアアアアッ！！！」

ありったけの力でキリエロイド？を投げ飛ばし立ち上がるティガ。キリエロイド？も立ち上がりお互いにファイティングポーズを構えた。そして二者は

「ハッ！！！」

「キリイッ！！！」

同時に両手を左腰に持っていていきハンドスラッシュと獄炎弾を放ち、空中で衝突、轟音と共に爆発する。辺りのビルのガラスというガラ

スが割れ、車の残骸や机といった固定されていないものはすべて吹き飛ばされた。

「テアッ!!」

構え直すティガ。しかし

ピコン．．．ピコン．．．ピコン．．．

「ッ!!!!」

それと同時にカラータイマーが警告音と共に赤く点滅し始める。それに気を取られた瞬間、キリエロイド？がティガに向かって全速力で突っ込んできた。

「テユアアアアッ!!!」

キリエロイド？に一方的に蹂躪され地面で苦痛に満ちた声を上げながらのた打ち回るティガ。その姿を見ていたステイルが

「あの巨人の胸部で点滅しているのは何なんだ？」

とルイに質問する。ガッツライフルを助手席で組み立てていたルイが

「あれのことを私達はカラータイマーと呼んでいます。ティガのエネルギーが低下してくると青から赤に変わって点滅し始める一種の警報装置です」

と答えた。それを聞いた後部座席の上条が

「それってまさか……」

と身を乗り出す。その後続く言葉を口にすることはできなかったがルイの表情を見れば改めて訊く必要もない。ティガは負けかけていや、死にかけている。その事実を知り、車内が重苦しい雰囲気包まれ……。

キキイイイイ——ッ！！

急ブレーキと共にジープが止まってしまう。何かと思って前を見るとビルが崩落し道路を塞いでいたのだ。仕方なくジープから降りる一同。そのまま白井達を連れて避難しようとするレイとルイだったが上条はジープの横に立ったまま動かない。

「助けに行くべきじゃねえのかよ!？」

レイとルイに向かってきつい口調で訴える上条。しかしレイの返答は辛辣だった。

「体長50メートルで人間を遥かに超える身体能力と知能、そして特殊能力を持っているキリエロイドに生身でどうやって戦うつもり？ 策が無いなんて寝言は言わせないわよ!」

「でも……」

それでも何かできることがあるはずだと口を開こうとする上条だったが

「こっちは負傷者3名に民間人を4人の安全を確保しないといけないのよ。別にキリエロイドに真正面から突っ込んで死にたいって言うのなら構わないけど他の人の命まで危険に曝さないでちょうだい」

とガッツライフルを片手に敵がいそうな場所に視線を飛ばすルイに止めを刺され言葉を失った。もちろんレイとルイもこんなことを言いたくないのだが上条のあまりにも愚かしいセリフに口調が厳しくなる。怪獣と戦うということはたかが魔術師と戦うのとはわけが違  
うのだ。

「私が行くわ…」

その言葉を聞いた全員がレイの後ろで立っている人物に目を向ける。

「お姉さま!？」

「『御坂さん!？』」

「御坂…お前…」

確かな足取りでティガとキリエロイド?がいる方向へ歩き始めた御坂。白井が

「いけません、お姉さま!歩くのでも精一杯ですのに戦闘、しかも相手は怪獣…。そのようなことはわたくし黒子が許しませんのよ!」

と通せんぼしながら必死の形相で御坂を説得しようとする。そんな白井の肩に手を伸ばす御坂。電撃を浴びせられる、と思って目を思わず閉じた白井だったがポン、と肩に手を置かれただけだった。ヘツ、と気の抜けた声を出しながら目を開けると御坂が今まで見たこ

とが無いような優しげな笑みを浮かべていた。

「ごめんね、黒子。でもあの巨人には命を助けられたっていう借りがあるの。だからここで自分だけ逃げるわけにはいかないのよ」

ここまで言われた白井は渋々道をあける。もちろん彼女の言葉に納得したのではない。ここまで言うということは、彼女は決意を固めていて自分ではどうしようもないということ理解しているのだ。

「無茶だけはしないでくださいな」

とだけ言う。それ以外に言葉をかける必要が無い。なんせ相手は常盤台中学が誇る、学園都市に7人しかいないレベル5なのだから。負けるなんてことや死ぬなんてことは考えてないし、まずありえない。それだけ白井は御坂の事を信頼しているのだ。

「そこまでだ」

全員がその声が聞こえた方向に顔を向ける。するとそこには奇妙な格好をした男性が立っていた。

「チツ…やはりローマ正教か…」

ステイルが呟きながらゆっくりと構える。それを聞いた上条は

「御坂…ここは俺達に任せろ」

と近くまで来ていた御坂に話しかける。男にはばれない程度に驚きを表情で表す御坂。しかし相手が魔術師である以上ここは残念なことにその手の経験が豊富な自分とステイルが対処するしかない。

「その間に巨人…ティガを助ける」

その言葉を聞いた御坂は小さく頷くと

「黒子や初春さん、佐天さんに妹の事も頼んだわよ…」

とだけ言ってスツと上条から離れる。

「当たり前だ」

そんな上条の自信に満ちた返事を聞きながら御坂はゆっくりジープの陰に移動し、魔術師に見えないようにその場を急いで離れた。

「キリイイイイイ——ッ！……！！！」

「チャアアア——ッ！……！！！」

キリエロイド？の右足のハイキックを防いだティガだったがその反動を利用した左足のハイキックを喰らい、反動を殺しきれず吹き飛ばされる。さらに立ち上がったところに顔面パンチを受け、顔から火花を散らしながら地面に背中から倒れ込むティガ。

ピコン…ピコン…ピコン…

カラータイマーの音が響き渡る中、キリエロイド？はティガに向かってゆっくりと歩き始めた…。



## 悪魔の逆襲 パート3

（炎魔戦士キリエロイド？登場）（後書き）

### 次回予告

ローマ正教の魔術師と戦闘に突入する上条達。キリエロイドに痛めつけられるティガ。そしてティガを助けるべく奔る御坂。彼らが直面する事実とは！？

次回、『悪魔の逆襲 パート4』

乞う、ご期待ください！

## 悪魔の逆襲 パート4

（炎魔戦士キリエロイド？登場）（前書き）

ご意見、ご感想、クロスさせたい世界などの要望を随時募集します。

これからもよろしくお願いします。

## 悪魔の逆襲 パート4

（炎魔戦士キリエロイド？登場）

「貴様らのような下劣な存在に名乗る名はない！！！」

誰何してもそれに答えることなく次々に攻撃を繰り出してくる黒い司祭服を着たローマ正教の魔術師に上条とステイルは苦戦していた。

「、、！」

「チツ……！！灰は灰に——塵は塵に《Dust To Dust  
t》——」——吸血殺しの紅十字《Squeamish Blood  
y Road》！！！」

「うわっ！？」

理解できない悲鳴のような呪文を唱えると同時に魔方陣が道路やビルの壁といった至る所に出現し、そこから上条とステイルに向かって破壊光線のようなものが放たれる。一方から飛来したビームを屈んで躲し、もう一方から飛んできたビームを右手で消滅させる上条だったが白井やレイ、ルイの掩護を受けているにもかかわらず劣勢を強いられていた。

チユイイイイン、チユイイイイン

「白井さんとルイは佐天さんと初春さん、そして御坂さんの妹を連れてここから避難して！」

ガッツライフルを連射しながら叫ぶレイ。レポートで接近しようにも、近くに現れた瞬間、ビームで丸焼きにされてしまったためどうしようもない白井は下唇を噛みながら

「仕方ありませんの…。ルイさん、行きましょう!」

と言って佐天たちと共に現場を離れた。

「あと…もう少し…」

傷だらけの体を鞭打って廃墟の中を全力疾走する御坂。その視線の先には倒れて動くことができないティガとティガに止めを刺すべくゆっくりと近づくキリエロイド?の姿があった。巨大な怪獣にも効く一撃を与えられる距離まであと少し。

「クッ…」

体の節々があげる苦痛という名の悲鳴を無視して御坂は原形を留めていない繁華街だった道を一気に駆け抜けた。

そのころ避難が進められているとある学区。避難民でこった返した道路を、携帯電話で誰かと会話し杖を突きながら人の流れとは逆方向に向かって歩く白髪の少年がいた。

「おい土御門!それは一体どういうことだあ!?!」

『どうもこうもない。警備員と学級委員は避難誘導で手一杯だ。しかも交通網や監視網は機能不全に陥ってる。320万人の中から行方不明になっている子供1人を見つけ出すなんぞ不可能だ』

その少年の名は一方通行<sup>アクセラレータ</sup>。学園都市に7人しかいないレベル5の1人。そして電話の相手は土御門元春だ。一方通行<sup>アクセラレータ</sup>はいつもの不機嫌そうな表情と違い、若干焦っている。なぜなら、彼は10分前まで近くにいたはずの少女、打ち止めを見失ってしまったためだ。<sup>ラストオーダー</sup>

『しかもキリエルなる神を信奉するようになった能力者達や謎の全身タイツ人間の群れに各学区の重要防護施設が襲撃されていてそれどころじゃない』

『ったく…。こんなややこしい時に何が『ビルより大きな怪獣ってミサカはミサカは驚きながら見に行きたいとおねだりしてみたり？』だあ？チクシヨウが…』

そう悪態を吐きながらいつの間にか人気のなくなった学区の路地の闇に消えていった。

「あと少しで世界は変わる…。選ばれし者だけが生きること許される樂園に…！！」<sup>ユートピア</sup>

そう呟きながら今度は背中から装飾が施されたロングソードを抜く。何かの呪文を詠唱すると刃が青白く輝き始めた。

「それは…グラムか!？」

その剣を見た瞬間、ステイルの顔色が変わる。本来ならばバチカンの地下保管庫に厳重に封印されているはずの名剣グラム。ニーベルンゲン伝説の中でシグムンド王の息子、英雄シグルズの愛剣であり巨龍ファーフニルの心臓を刺し貫いたとされる魔術界ではその名を知らぬ者はいない剣だったのだ。

「気をつける！あれは一振りで固い竜の皮膚と心臓を貫いたことで有名な剣だ！」

ステイルの注意を聞いて驚く上条とレイ。しかし、魔術師はそんな隙を見逃すほど甘くはなかった。足腰を魔術で強化しているらしく距離を一気に詰めて斬りかかってきたのだ。

「上条さん、危ない！！」

「レイさん！！」

咄嗟に上条と魔術師の間に割って入るレイ。体を硬直させた上条の目の前で勢いを持った刃がガッツライフルごとレイの体を切り裂いた。宙に舞うレイの体と飛び散る血。

「レイさあアアアアア——ん！！！！！！」

上条の悲しみの絶叫が変わり果てた街に木霊した。

ピコン・・・ピコン・・・ピコン・・・ピコン・・・

『そう簡単に殺しはしない……。キリエルの神々を三度にわたって愚弄したのだからな。君には長く苦痛に満ちた最期を味あわせて見せよう』

今まで以上に嘲るような口調で死の宣告をしながら近づいてくるキリエロイド？。しかし体力を消耗したティガは立ち上がる事さえできない。キリエロイド？に向かって上げた顔を蹴り飛ばされ仰向けに倒される。何度も立ち上がるうとする度に蹴られ地面に叩き付けられるティガ。

「キリイイッ！……！」

徹底的にティガを一方的な攻撃で痛めつけたキリエロイド？はそろそろ止めだと言わんばかりに少しだけ距離を取って両腕に獄炎弾と同様の炎を両腕に纏わせ、エネルギーを溜めはじめた。しかしティガは地面に倒れたままピクリとも動かない。両腕を突き出すキリエロイド？。必殺が放たれかけたその時、

ズゴオオオオオオ——ン

という轟音と共に地面に積もっていた砂埃が舞い上がると共に金色の輝きを放つ光の筋がキリエロイド？の左側頭部へと伸びていく。思いもよらない攻撃に回避すらできなかったキリエロイド？は顔面から火花を散らしながら地面に倒れ込んだ。

「私の命の恩人に手を出してんじゃないわよ……！」

道路の真ん中に体から青白い電流を放電しながらたたずんでいるのは御坂美琴。そして先程の光の筋は最強の電撃使い御坂美琴の超電磁砲による渾身の一撃だった。

ズゴオオオオオ——ン

さらに1発の超電磁砲レールガンが御坂の右腕から放たれ、その直撃を受けた  
キリエロイド？はさらに数歩後退する。

さらに1発。

そしてさらにもう1発。

「アンタは英雄ヒーローなんですよ！なら立ち上がってよ！！こんな学ろくでもない園都  
場所市にも失いたくないものがあるのよ……！！」

コインを親指で跳ね上げた御坂の脳裏に今まで出会った人々の顔が  
走馬灯のように駆け巡った。白井。初春。佐天。寮長。土御門舞夏。  
クローンである妹達。そして上条。

「お願い…立ち上がって…」

空中でスピンしていた最後のコインが親指へと戻ってくる。これを  
放てばあとはどうしようもない。死という現実が待ち受けているだ  
けだ。こんなことを言うだけで本当に立ち上がるなんてこともない  
であろう。それでも御坂は言わずにはいられない。それはもはや願  
望や希望ではなく、もっと儚い、祈りだった。

「お願い……！！！」

そして唇から零れ落ちた祈りの言葉と耳をつんざくような爆音と共  
に最後の1撃が虚空を切り裂いた。

「レイさん！」

炎剣を持ったスタイルが戦っている間にレイの上半身を抱きかかえた上条は必死に呼びかける。すると薄っすらと目を開いたレイが弱々しい声で

「私は…大丈夫…だから…奴を…止めて…」

と途切れがちに言葉を紡ぐ。出血しているものの怪我は幸いにも浅いようだ。上条は力強く頷き、レイを地面に横たえたと決然とした表情で立ち上がる。魔術師に向き合った上条は

「テメエだけは絶対に許さねえ。そんな楽園ユートピアなんか誰も望んでなんかないんだ…。だから、テメエのそのふざけた幻想をぶち殺す！！」

と告げ、両手に拳を作るとあらん限りの力で敵に向かって一直線に走り出した。それを見て嘲笑のような表情を浮かべた魔術師もグラムを両手で構える。そして上条の体が剣で薙ぎ払える距離まで接近した時、

「オイオイ…僕の事も忘れてもらったら困るよ」

後ろに素早く回り込んだスタイルが炎剣を振るう。魔術師は上条のパンチを躲しながらグラムで炎剣を受け止めたが、ここである違和感を感じる。そしてその違和感の正体に気づいたとき、魔術師は初めて動揺を露わにした。

（さっきのパンチは…左のストレート！？）

そう上条が放ったパンチは左のストレートだったのだ。では幻想殺イマジンプレイカーイカーの異名を持つ右手は？その答えは

バキーン

という金属音によって明らかになった。右手はステイルの炎剣を受け止めていたグラムの鏢に触れていて、魔術的な力を失ったグラムの刃は炎剣によって簡単に折られてしまったのだ。

「なっ…！？」

驚愕と恐怖に支配され目をカッと見開く魔術師。その先には右手をグラムから離し、その手で拳を握る上条の姿があった。そして

ドゴッ

という鈍い打撃音が響き渡った。

最後の超電磁砲レールガンがキリエロイド？に命中し火花を上げる。背後のビルにぶち当たったキリエロイド？は御坂の方へと顔を向けた。

（殺やられる！）

そう思い目を閉じた瞬間、御坂を巨大な影が覆う。慌てて目を開き、見上げるとそこには先程まで倒れていたウルトラマンティガの姿があった。御坂はふとインデックスの言葉を思い出す。

『祈りは届く。人はそれで救われる』

その時は何を馬鹿げたことをと思ったが今なら彼女の言葉を素直に信じる事ができた。

「ンッ、ハアッ！」

両腕をティガクリスタルの前で交差させ、振り下ろしマルチタイプへと戻る。

「キリイイツ！！」

「ハッ！！」

ファイティングポーズを取ったティガとキリエロイド？はお互いに向かって同時に走り出した。

「トアッ！！チャアッ！！！！」

「キリイイイイツ！！！！！！！！！！」

パンチを放とうとしたキリエロイド？の胸部に前蹴りを打ち込み、吹き飛ばしたティガはそのままジャンプし、空中で一回転した後、キリエロイド？の頭部に飛び蹴りを命中させる。

「キリイツ！！」

「ハッ！ハッ！！ハッ！！！！テヤッ！！！！！！」

素早く立ち上がったキリエロイド？の左パンチを躲し右パンチを左

手で受け止めたティガは空いている右手でキリエロイドの胸部に何発ものパンチを叩き込み、顔を両手で持つとそのまま投げ飛ばした。

「キリイイイイイッ！！」

「ヘンッ！」

「キリイイイッ！！」

「トヤッ！！」

逆上したらしいキリエロイド？のパンチを躲し、勢い余ってティガを通り過ぎて背後にまわってしまったその背中にバックキックを浴びせる。振り返りざまの回し蹴りを放つが、それを受け止めたティガはキリエロイド？の両肩を掴むと顔面にウルトラヘッドパッドをお見舞いした。そして相手がグロッキーになっている間にティガはキリエロイド？を肩で担ぎ上げ、投げるウルトラホイッパーで投げ飛ばす。そして相手が辛うじて立ち上がったのを確認すると両腕を腰の前でクロスさせ左右へ伸ばしていき、

「チエアッ！！！！」

両腕をし字型に組んで必殺技のゼペリオン光線を放った。

「キリイイイイイッ——ッ！！！！！！！！！！」

炎に包まれ断末魔の絶叫を上げながら大爆発を起こすキリエロイド？。その姿はまるで地獄の炎に焼かれる悪魔そのものであった。

「神裂はどこだ」

上条が辛うじて使える携帯電話でルイと連絡を取り、レイに応急処置を施した上条が戻ると鼻から血を出して地面に倒れている魔術師の胸倉を掴んだステイルが尋問していた。

「神裂をどこだと聞いているんだ！」

その質問を聞いた魔術師は急に顔を歪めるとゲラゲラと笑いだす。上条と一瞬、顔を見合わせたステイルに魔術師は笑ったままステイルに向かって

「もう遅い！お前たちが戦っている間に暗闇大使殿が全ての準備を整えた！！この世界はキリエルとローマ正教が支配する世界へと生まれ変わる！お前達には止められん！！」

と言い捨てた。その言葉を聞いた上条が

「それはどういう……」

と掴みかかろうとした瞬間、凄まじい閃光が3人に襲い掛かった。それから少し遅れて音と衝撃が襲い掛かる。3人はもちろんの事、学園都市内のありとあらゆるものがその衝撃波に耐えられず吹き飛ばされた。

「これは…あの時の…！」

この現象に昔遭遇したことがある。この現象を目の当たりにしたことがある。

「そんな馬鹿な…!!」

その視線の先にある物に驚きを隠せないステイルは、口に咥えていたタバコが地面に落ちたがそれにも気がついていないようだ。

「虚数学区・五行機関…。風斬…」

上条の口から紡がれた魂が抜けたような呟きは雷光の爆音に掻き消された。

飛び去ろうとしたティガの目の前で放たれた光、爆音、そして衝撃波。手で御坂を包み込んで庇ったティガだったが無数の翼のような光が吹き荒れ、天へ逆らうように高く広がっていくと共に周りのビルが倒壊していくのを目の当たりにし、手の中の御坂を遠くヘレポートする。しかしエネルギーが限界に近づきつつあったため、ティガ自身も

ピコンピコンピコン

カラータイマーが消えると同時にスツと消え去ってしまった。

「……」

御坂は気がつくともティガとキリエロイド？が戦っていた場所から遠く離れた場所にいることに気がついた。そしてすぐ横に辻野が気絶しているのに気がつき慌てて駆け寄る。

「辻野さん！」

だが肩をゆすろうとした彼女の手は辻野の右手に握られている物を見て止まってしまう。

「これって…！？」

彼の手に握られていたスパークレンスを見て絶句する御坂。そのテイガにあまりにもよく似たデザインに

「辻野さんが…まさか…ウルトラマン…ティガ…！？」

と目を丸くし呟いた。

## 悪魔の逆襲 パート4

（炎魔戦士キリエロイド？登場）（後書き）

### 次回予告

学園都市に突如現れた天使こと『ヒューズIIカザキリ』。しかし彼女は、この世界の崩壊へと導く使者だった。その一方、辻野と一方通行<sup>イタ</sup>、そして上条達は神裂と打ち止め<sup>ラストオーダー</sup>、そして風斬氷華の救出を模索していた。

次回、『崩壊への使者』

乞う、ご期待ください！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3693m/>

---

光の巨人 ～時空侵略戦争～

2011年11月30日23時46分発行